

---

## ~ 魔法学園 ~

眼鏡 純

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「魔法学園」

### 【Nコード】

N9268T

### 【作者名】

眼鏡 純

### 【あらすじ】

この世界は魔法が使える人間がいる。その魔法を使える者達が集う学園に転校することになった少女と、その学園にいた少年と仲間達が描く、学園ファンタジーの物語である。

## キャラクター紹介（前書き）

初めまして！今回は本編に出てくる主なキャラクターを紹介します！

## キャラクター紹介

～主なキャラクター紹介～

シャイン・エメラルド（16歳）（身長：170cm）

この物語の主人公。

あまり感情を出さない性格。

刀と、魔法界でも珍しい‘閃風魔法’<sup>せんふう</sup>の使い手である。

（モデル：TOVのユーリ）

レビー・サファイア（16歳）（身長：167cm）

この物語のヒロイン。

正義感が強い性格。

ある日突然‘夜叉魔法’という魔法が使えるようになり、魔法学園に転校することになった。

（モデル：FTのレビー）

スノウ・シルバー（16歳）（身長：178cm）

気性が荒く戦闘好きな性格。

一言で言うところチャラ男。格闘を得意とし、拳や脚に魔力を溜めて攻撃できる。（モデル：FF13のスノウ）

エアル・ダイヤモンド（16歳）（身長：168cm）

元気で明るい性格。

見た目は少しギャルっぽいけど、別にギャルではない。治癒魔法と光

魔法の使い手である。

（モデル：FF13のヴァニラ）

サナ・クリスタル（16歳）（身長：158cm）

自分の興味のないことは一切しない性格。

少し小柄で子供っぽいが、頭は天才と言えるほどいい。攻撃系の魔法を得意とする。

（モデル：TOVのリタ）

ヒューズ・クォーツ（16歳）（身長：177cm）

いつも冷静で、落ち着いてる性格。

弓を得意とし、弓に魔力を溜めて射ぬく。何にでも冷静に対処するが、スイッチが入るとDSに豹変する。

（モデル：TOAのジェイド）

## キャラクター紹介（後書き）

次から本編頑張りますので、よろしくお願いします！

## 1話 転校先は魔法学園（前書き）

今回から本編入ります。

分かりにくいところもあるかもしれませんが、どうぞ見てください。

## 1話 転校先は魔法学園

「行つてきまーす。」

ある家の中に明るい声がこだまし、1人の少女がドアを開け外に出た。

この少女の名前はレビィ・サファイア。紺色のロングヘアに青色の瞳。新品のブレザーにスカートを身をまとして、首もとに赤色のリボンをつけている。

（少し緊張するな。）

そんなことを思いながら、カバンを前にして持ち、トコトコ歩く。それもそのはず、今日は初めて転校する高校に行く日なのである。

その行く高校の名前は‘龍空<sup>リウウウツ</sup>高校’と言う。大昔、この地域の空に龍が飛んでいたという伝説からこの名前が付いた。

この高校は‘魔法科’と言う科目がある。魔力が使える人が入れる枠である。その枠にレビィは入ることになった。

何故か。

それは、レビィの家系は先祖代々‘夜叉魔法’が使えたらしいが、ひいが80ぐらい並びそうなおじいちゃんぐらいで、その力はしだいに弱くなり、今は誰も使えないのだが、レビィが家の倉庫にたま<sup>たま</sup>あつた刀、‘夜桜<sup>ヨウオウ</sup>’に触れたら、眠っていた力がよみがえり、レビィは夜叉魔法が使えるようになったらしい。

（だからって5月に転校することないじゃん。私、受験した意味ないじゃないの。まあ、向こうの校長が来てくれって推薦してくれて受験がないからいいけど…）

そんなことを思いながら、レンガでできた壁の隣を歩いていたら、レンガが鉄の門になったので門の方を向くと、そこには立派な校舎があった。



「キレイ。」

思わず声が出た。

ここが龍空高校である。門があり、入ると校舎と門まで豪邸の庭みたいで、その真ん中に校舎までの道がある。右にはキレイな寮があり、左には体育館ともうひとつ寮がある。

レビイはキョロキョロしながら校舎の中に入っていった。

1 A。

ここがレビイのクラスになる。前と後ろにドアがあり、教卓があり、黒板があり、生徒たちの椅子と机がある普通の教室である。

「はい皆席についてー。」

1人の女性の先生が、ざわざわしていた生徒を座らせる。

この女性の名前はナナリー先生（28歳）（身長：167cm）。黒色のショートヘアに眼鏡をしていて、スーツ姿である。

「今日のHRは、転校生を紹介します。」

ナナリー先生がそう言うのと、教室がざわつく。

その声をレビイが教室の前の廊下で聞いていた。

「やっぱり緊張するな〜」

レビイがポツリと呟く。

「誰だお前？」

緊張をほぐそうと窓から中庭を見ていたら、いきなり声をかけられ、ビクツとしながら振り返る。そこには1人の男子生徒が立っていた。

この少年の名前はシャイン・エメラルド。首くらいに伸びた髪は黒色の髪と鮮やかな黄緑色の髪が7：3の割合で入り交じっていて、瞳の色も鮮やかな黄緑色である。服は、ブレザーを着ておらず、カッターシャツをズボンがから出していて、ネクタイをユルユルに結んでいる。

「わ、私？」

あまりにも突然だったので、レビイは少しあたふたする。

「お前以外誰がいるんだよ。」

眠たそうな目をしながらレビイを見る。

「私レビイ・サファイア。今日からこの高校に転校してきたの。」  
レビイが自己紹介する。

「ふ〜ん…」

興味がないのかあるのか分からない返事をする。

「もしかして転校生か？」

シャインが尋ねる。

「うん。」

レビイが頷く。

「ふ〜ん…俺はシャイン・エメラルド。この1 Aの生徒だ。」

シャインが自己紹介したところで、先生がレビイを呼ぶ。

「レビイさん入ってきた…あつ！シャイン君！また寝坊？」

先生がシャインに気が付き、シャインに怒る。

「よくわかりましたね先生。」

少しからかう声で言う。

「茶化さないで。先に入って。」

先生がレビイより先にシャインを教室に入れる。すると男子生徒の1人が「転校生ってお前かよ〜」と言い、笑いが起こり、「ちげーよ。」とシャインが言いながら自分の席に座る。

「では、本当の転校生を紹介します。」

先生がレビイをちよいちよいと手で来てと合図する。レビイはその合図に従い教卓の上に立つ。

「えっと、レビイ・サファイアです。よろしくお願いします。」  
自己紹介をしながら一礼する。

「はい！質問でーす！」

1人の男子生徒が立ち上がる。

「レヴィさんはどんな魔法が使えるんですか？」

「夜叉魔法と言う魔法が使えます。」

レヴィが答えた瞬間、生徒たちが驚く。ナナリー先生も何が使えるかは知らなかったらしく、生徒たちと一緒に驚いている。

「えええー！ー！」

「すげー！」

「絶滅したんじゃないの？」

いろんな声が飛び交う。

「あの、皆どうしたんですか？」

レヴィが先生に尋ねる。

「夜叉魔法はね、魔法界からなくなった『絶滅魔法』って言われているの。」

先生が自分を落ち着けながらレヴィに答える。

「そうなんですか！？」

レヴィも驚く。

「まさかうちのクラスに『二人』も絶滅魔法が使えるやつが入って来るなんてな。」

一番前の席の男子生徒が言った言葉にレヴィの耳が反応した。

「二人？」

男子生徒の顔の目の前で尋ねる。

「えっ、あ、あの、あいつも、なんです。」

完全に照れながら窓側の列から2番目の後ろから2番目にいるシャインのことを指す。

「シャインも？」

レヴィがシャインの方を見ると、シャインも椅子に深く座り、腕組みをしながらこつちを見ていた。

「そうだ。俺の魔法は『閃風魔法』っていう風魔法最強の魔法だ。」  
シャインが説明する。

「それも絶滅魔法なの？」

「ああそうだ。そしてお前の席はあつこだ。」

シャインが話を変えるようにシャインから左下の空いている席を指す。

「そう…」

レビイは皆が驚いている中自分の席に座った。

午前中の授業が終わり昼休みになった。珍しい魔法が使えるかわいい女子が転校してきたという情報がすぐに流れ、1年生から3年生までたくさん生徒が1 Aの教室に殺到している。

「すっかり有名人だな『夜叉女』。」

自分の机に座って、購買で買ってきた焼きそばパンをかぶりつきながらシャインが廊下を見る。

「何よ夜叉女って。」

レビイがお弁当を食べながらムツと怒る。

「夜叉魔法が使える女だから。」

「私はレビイよ。」

少し大きな声で言う。

「そんな風に言っていると女子に嫌われるよ。」

そこにシャインの後ろ、つまりレビイの隣の女子が話に入ってきた。

この女子の名前はエアル・ダイヤモンド。オレンジ色のショートヘアを首の後ろで小さく結んでいて、赤色の瞳をしている。服はこの高校の制服である。

「別に嫌われて結構。」

強がりのようなことを言い、焼きそばパンが入っていた袋を捨てにいった。

「ゴメンねレビイ。」

エアルが代わりに謝る。

「大丈夫。気にしてないから。」

レヴィが笑って見せる。

「あいつああ言ってるけど、多分レヴィのこと気になっているんだよ。」

エアルがレヴィの耳元で囁く。

「変なこと言うんじゃないよ。」

捨てにいったシャインがエアルに怒る。

「耳いいね」

エアルが茶化す。

「まあ、気になっていることはある。」

また机に座って腕組みをしながらシャインが言う。

「へえ、何なの？」

エアルが興味津々に聞く。

「お前、どうやって戦う？」

シャインの質問にレヴィが首を傾げる。

「どういうこと？」

「どうやって魔法を使うかってこと。」

エアルが説明を付け足す。

「うーん…刀かな？」

レヴィが答えると、シャインの眉がピクツと動いた。

「刀なの？じゃあシャインと一緒にだね。」

エアルが二人の顔を見ながら言う。

「うん。家の倉庫にあった夜桜っていう刀に触れたら力がよみがえったみたい。」

「ふーん。」

エアルが頷きながら聞く。

「その刀、すぐに取りに行けるか？」

「うん、徒歩20分ぐらいだから。」

一体何が言いたいんだろと思いつながらレヴィはシャインの質問に答えていく。シャインはあと2、3個質問して、あることを決定した。  
「よし、今日の放課後、刀を持ってグラウンドに来い。」

意味の分からないことを言われ、レヴィがきよとんとする。

「何あんだ、やっぱりレヴィのこと狙ってたの?」

エアルが驚きながらレヴィをシャインから遠避ける。

「ちげーよ、俺と勝負しろ。」

レヴィはもつときよとんとした。

放課後:

結局断ることができず、制服のレヴィはシャインに言われたグラウンドの真ん中らへんの場所に夜桜を持って立っていた。

「まだかな?」

レヴィがキョロキョロとシャインの姿を探す。

「女の子を待たせるなんて最低ね。」

突然エアルが横に立つ。

「そういえばシャインってどこに住んでいるの?」  
今思い付いたように聞く。

「あいつ寮だったと思うよ。」

エアルが門から見て右側にある建物を見る。

「ちなみに女子の寮は間反対のあれ。」

説明しながら反対側の建物を指す。

「怖じけずに来たか夜叉女。」

そこに腰に一本の刀、‘風碎牙’をぶら下げ、制服のまんまのシャインが男子寮の方から現れた。

「自分が呼んどいてその言い方はないでしょう。」  
ムツと怒る。

「ねーやっぱりやめない二人とも。仲良くいこうよ。」

エアルが二人にやめるように言う。

「別に夜叉女が嫌いだから戦うんじゃないやねえ。俺と同じ絶滅魔法が使える者がどんなものか試してえただけだ。」

シャインが今回呼び出した理由を話す。

「ふん…」

レヴィが興味がない返事をする。

「さて、さっさと始めるぞ。」

そう言いながら、シャインが刀に手をかける。

「待つて。」

レヴィがその行動を止める。

「何だよ？」

シャインが戦いたくてウズウズしながら聞く。

「ただ戦うだけじゃ嫌。条件を付けましょう。」

「条件？」

「そう。もし私が勝ったら私のことを夜叉女って呼ばないで。」

レヴィの真面目な顔に、

「いいだろ。」

シャインが承諾する。

「でも俺が勝ったらお前を夜叉女って呼ぶし、かつ、今月の寮代払いな。」

シャインも条件を付ける。

「寮代っていくらなの？」

レヴィがエアルに聞き、月1000とエアルが即答する。

「いいわよ。」

レヴィが承諾する。

「じゃあ…いくぞ。」

シャインが鞘から刀を抜き、馴れたようにスツと構える。だかレヴィは抜いた刀が小さく震えていた。

「？ どうしたの？」

エアルが震えていることに気が付き尋ねる。

「お前、まさか刀で戦ったことないのか？」

シャインの勘が当たり、レヴィがコクリと頷く。

「だって私魔法使えるようになったの1年前だよ。まあ、剣道は小さいころからしてたけど。」

言い訳のように話す。

「やつぱりやめようレビィ、あいつ一応魔法科の人の中でトップなんだよ。頭は残念だけど。」

エアルがシャインを指しながら説明する。

「頭は関係ないだろ。」

シャインが当たり前のようにそのフリーズに怒る。

「でも、ここまできたらもう引き下がれないよ。」

そう言つて、レビィはグッと両手で刀を握つて震えを止めた。

「話分かるじゃないか、いくぞ！」

シャインが刀を構える。

「うん！」

レビィが刀を剣道の持ち方で構えると、レビィの体と刀から黒いオーラが現れた。

（あれが、夜叉魔法…）

エアルがそう思った同時にぐらいにシャインが地面を蹴った。

（速い…）

レビィは最低限の動きでかわし、後ろから刀を上から振り落とした。だが、シャインは一瞬で振り向きレビィをガキンと受け止める。

「やるじゃねえか。」

シャインがニヤリと笑う。

「あんたこそ。」

対抗するようにレビィも笑う。

シャインはレビィの刀を振り払い、間合いをとる。

「これでも食らいな、せんぷうは「閃風波」！！」

シャインが三日月型の衝撃波をレビィに放つ。

「えっ！？」

レビィは驚きながらも横に飛びかわすが、転んでしまった。

「次は逃がさねえ。」

シャインは衝撃波を溜めて、転んだレビィに狙いをつける。  
「ヤバイ。」



さすがに諦めかけた瞬間、

「ダメー……！」

その声に二人は声の主を探すと、何処にあったのか知らないが、かわいいピンク色の杖を構えているエアルを見つけた。

「フェアリーライト」！！」

エアルが唱えると、数個の光の玉がシャインに向かって行き、目の前で弾けた。

「うつ……」

すさまじい閃光にシャインが目をつぶった。その瞬間を逃さず、レビイはすかさず立ち、シャインに向かって地面を蹴り、刀を吹っ飛ばして刀を眉間で止める。宙に舞った風砕牙が地面に突き刺さり、グラウンドに流れる風の音しか聞こえないほどしんと静かになった。

「勝負ありね。」

レビイがシャインに向けていた夜桜を鞘に入れる。

「ちっ、何すんだエアル！」

地面に刺さっている風砕牙を引っこ抜きながら睨んだ。

「だって、あのままにしてたらシャイン殺しそうだったんだもん。」

止めた理由を言ったエアルにシャインはため息をする。

「たく、別に殺しはしなねえよ。」

そこにつちりした体をした、体育の先生がこちらにやって来た。

「こらー何やってんだお前たち？」

すごく怒りながら、3人の顔を見る。

「ちっ、さすがにバレたか……」

シャインが舌打ちする。

「もしかしてシャイン、許可とってなかったの？」

レビイが聞くと、

「ああ。」

と、即答する。

「もっつ許可ぐらいとってよ？」

エアルが怒る。

「何でもいいから3人とも生徒指導室に来なさい。」

そのまま3人は先生に連れられ、こっぴどく叱られた

説教が終わったところには夕日がキレイに校舎などを照らしていた。

「もう、シャインが口答えしなかったらもうちょっと早く終わったのに。」

エアルがブー言う。

「終わったからいいじゃねえか。」

反省の色なしのシャイン。

「初日から怒られた。」

レビイがしよげる。

「気にすんな。」

他人事でシャインが言う。

「そういえばあの条件はどうなったの？」

エアルがふと気がつく。

「一応私が勝ったから、私の条件、聞いてもらっわよ。」

レビイがシャインに指を指す。

「あれはエアルが邪魔をしたから無効だ。」

そう言って寮に帰ろうとする。

「ちよっと！約束が違うじゃない！」

怒るレビイを尻目にヒラヒラと手を振る。

「なんて勝手なの。」

レビイがあきれる。

「ああいうやつなの。」

エアルも同意する。

「じゃあな、レビイ。」

そう言っつてまた手を振る。そのまま振り返らず寮に消えた。それから数秒後にレビイは気が付いた。

「今、シャイン私のことレビイって。」

「あっ！」

エアルも気が付く。

「ふふ。」

「あはは。」

二人はお互いに顔を見て笑った。

「これからよろしくねレビィ。」

「うん！こちらこそよろしくねエアル。」

二人とも挨拶をして、バイバイとエアルが寮に帰っていった。

（シャインもよろしくね。）

そう思いながらレビィも自分の家に帰っていった。

レビィの魔法学園の暮らしがこうして始まった。

## 1話 転校先は魔法学園（後書き）

### 龍空高校の説明

- ・校舎全体をレンガの壁で囲まれている。
- ・グラウンドはレビィたちがいた校舎の裏にある。
- ・龍空高校の広さは、東京ドーム3つ分の大きさ。

少しは分かってくれましたか？

次回を楽しみにしてください！

## 2話 学園の幽霊？（前書き）

今回の話は学園系のベタなものですが、どうぞ見てください。

## 2話 学園の幽霊？

ペタッペタッと上履きの音が響く暗い校舎の中を1人の男子生徒が歩いていった。寮暮らしの男子生徒は、教室に忘れ物をしたらしく、それを取りに行くために夜の学校に入った。

ビクビクしながら教室に入り、忘れ物を取って帰ろうと廊下を進んでいると、男子生徒の後ろから、ガシャツ、ガシャツと武士の鎧の音がしてきた。その音に気が付いた男子生徒がそくっと振り返ると、少し透けている鎧がこっちに向かって歩いて来ていた。

「うわあああー！」

男子生徒はその場から一目散に逃げ出した。

「ねえ聞いた？」

「聞いた聞いた。」

「なんか怖いな。」

そんな言葉がいろんなところで飛び交う学校に登校してきたレビイが首を傾げながら教室に入る。

「なんの騒ぎなのエアル？」

自分の席にカバンを置きながら隣に座っていたエアルに聞く。

「ついにこの学校に出たんだよ。」

少し怯えた口調でレビイの肩を持つ。

「何が出たの？」

レビイがさらに聞く。

「ゆ…幽霊が出たんだよー！」

エアルが叫ぶ。

「えーーーーー！」

それを聞き、レビイが驚く。

「どんな幽霊が出たの？」

まだ驚いているレヴィがさらに聞く。

「なんか戦国時代の武士の幽霊だって。」

エアルが説明する。

「そうなんだ。でも本当なの？」

少しレヴィが疑う。

「本当だって！ね、スノウ？」

エアルが自分の意見と一緒にの人を探すように、細い通路を挟んで、エアルの隣の席の男子生徒に話をふる。

「ん？俺は信じねえよ。」

足を机の上に置いて、PSPをしながら答える。

この男子生徒の名前はスノウ・シルバー。肩まで伸びた銀髪の無造作ヘアーに黒色の瞳。シャインと同様カッターシャツをズボンから出していて、ネクタイをユルユルにしている。手にはDAIGOのような指が出るグローブをはめている。

「えゝスノウも何で皆信じないの？」

エアルが文句を言いながら、信じている人を探す。そして見つけたのは、スノウの前の席、つまりシャインの隣の席にいる女子生徒に話しかける。

「ねえ、サナ、は信じるよね？」

話しかけられた女子生徒は、難しそうな本を読んでおり、その本をパタリと閉じてこちらを向いて、

「私が非科学なこと、信じるわけないでしょう。」

と答えてまた本を読み始めた。

この女子生徒の名前はサナ・クリスタル。金髪のショートヘアーに金色の瞳。制服をキツチリと着ていて、前髪が目に入らないように赤いヘアピンをしていて、赤い眼鏡をかけている。

「どうして皆信じないの？」

エアルが今にも泣き出しそうな顔で訴える。

「どうしたのですか皆さん？」

そこに、1人の男子生徒が割り込んできた。

「あつ！『ヒューズ』！ヒューズは信じるよね？」

この男子生徒の名前はヒューズ・クォーツ。肩まで伸びた茶髪のキレイなヘアーに茶色の瞳。サナ同様、制服をキツチリ着ていて、ごく普通の眼鏡をかけている。

「幽霊事件のことですか？」

エアルに聞き返しながら、スノウの隣の席に座る。

「そう！」

エアルが頷く。

「うーん…私はどっち付かずですね。」

ヒューズが答えると、エアルがため息をする。

「はあ…それは信じないってことね。何で私の周りは非現実のことを素直に信じないの？」

落ち込んでいるエアルを励まそうと、レビイは今までずっと寝ていたシャインに話をふる。

「ねえ、シャインは幽霊事件のこと信じているの？」

シャインの体を揺さぶり起こす。

「ん？信じてねえ。」

さらりと答える。

「やっぱり！」

エアルがさらに落ち込む。

「そんなに気になっているんだったら、実際に自分の目で確かめろよ。」

何にも考えずにさらりと言った提案にエアルが乗った。

「そうだよ！自分たちの目で見たらあんたたちも信じるでしょ？」



エアルが皆の顔を見る。

「いいよ、めんどくせえ。」

スノウが拒否る。

「あれゝもしかしてビビってるの?」

エアルが挑発のような口調で言う。

「はあ?ビビってねえし。」

簡単に乗せられたスノウ。

(ガキか…)

シャインがあきれる。

「じゃあ、今日の夜、昇降口に集合ね。」

エアルが言つと、チャイムがなり、授業が始まった。

その夜、誰もいない暗い校舎の昇降口に制服から私服になった6人が集合した。

「よーし、見つけるぞー!」

気合いの割にはスノウの後ろに隠れているエアルが小さく叫ぶ。

「ちよつと、何で私まで付き合わないきゃいけないのよ。」

文句を言っているのはサナである。

「別に私はかまいませんよ。」

少しわくわくしながら言うのはヒューズである。

「あんたは自主的に来たからいいけど、私は連れてこられたのよ。」

文句が止まらないサナ。

「たく、もう来たんだから、諦めろ。」

シャインがそう言い、ようやくサナが止まった。

「よし、行くぞー!」

シャインの言葉に他の皆がオーと言い、校舎に入っていくた。

校舎の中は予想通り暗く、明かりは窓から入ってきている月の光だけである。シャインたちは武士の鎧が目撃された廊下を歩いている。

「ど、どこだ〜?」

エアルが完全にビビってる声でレヴィにしがみついている。

「エアル、歩きにくい。」

レヴィが注意するがエアルは離れようとしなない。

「お前が一番ビビってんじゃない。」

スノウがエアルを見ながらあきれる。

「お前な。」

シャインがさらりと突っ込む。

スノウの顔は滝のように汗が流れている。

「だ、だってよ、本当に出たらさすがにヤバくないか?」

思わず本音が出る。

「はいはい。」

簡単に同意して、シャインは辺りを見渡す。

「いないな。」

「やっぱり勘違いだったのよ。」

まだ不機嫌なサナが言った瞬間、廊下のさきからガシャツガシャツと音が響いてきた。その音が聞こえた瞬間、さすがのシャインやサナも固まった。

「な、何!?!」

エアルがレヴィとしがみつき合いながら聞く。すると、自分達の前から鎧が歩いて来ていた。その鎧は大きくて赤く、顔の部分は鬼の仮面になっていた

「で、出たーーーー!!!」

エアル、レヴィ、スノウが一斉に叫ぶ。

「静かにしろ。」

叫ぶ3人に注意しながらシャインはそつと刀に手をやる。

「誰だ! 意思があるなら答えろ!」

その言葉に反応したのか、鎧から、渋いくていかにも武士らしい声がしてきた。

「我、戦国の時代から来たし武将。我を奮い立たせる侍を探してい

る。お主の力、試さしていただく。」

鎧武将は刀を抜き、刃先をシャインに向ける。

「面白れえ。」

シャインが少しニヤけて、刀を抜いた。

「ちよつと！もしかして1人で戦う気！」

サナが止めるがシャインは聞く耳をもたない。

「売られたケンカは買うまでだ。」

「もう勝手にして。」

サナがはあゝとため息をする。

「でもヤバくなったら助けるわ。」

その言葉に軽く頷いて、シャインは鎧武将に近づく。

「構えろ。」

鎧武将が命令する。

「言われなくても。」

そう言つて構える。次の瞬間、シャインが不意討ちをした。が、その不意討ちを刀で簡単に止めた。

「侍たるもの不意討ちとは情けない。」

鎧武将が少しバカにする。

「拍子抜けすんのはまだ早いぞ。」

ニヤツと笑い、間合いを開け、スツと力を抜いた。次の瞬間、一気に廊下を蹴った。

「「疾風斬」――！」

名前の通り、疾風のような速さで、鎧に強烈な一太刀をあびせ、後ろに回る。

「むっ……見事な技。だが、まだまだ。」

ぐるりとシャインの方を向く。

「さすがに怯みもしないのはショックだな。」

少し落ち込んだ顔になるシャインに鎧武将が刀を構える。

「次は私から行かせてもらうぞ。」

鎧武将がシャインに走り出し、隙のない動きで止まることなく刀を

振る。

（やべえ、防御するだけでやっただ…）

すごいラッシュにシャインはただ受けるだけである。そして、刀を払われ、腹がから空きになってしまった。

（しまっ…！）

次の瞬間、鎧武将は柄で腹を突き、吹っ飛ばす。吹っ飛ばされたシャインは廊下の端の壁に叩き付けられ、止まった。

この様子をシャインが今いる端の反対側であと5人が見ていた。

「ヤバくない、シャインの奴？」

エアルが心配そうに言う。

「助けに行く？」

レビイが刀に手をやる。

「ちょっと待って。」

レビイを止めるサナは顎に手をやり、何かを考えている。

「サナも気が付きましたか。」

ヒューズが聞く。

「ヒューズも？」

聞き返しにヒューズが頷く。

「何がだ？」

スノウが2人に尋ねる。

「あの鎧武将に‘触りすぎ’ではないですか？」

ヒューズの言葉に3人が首を傾げる。

「もしあの鎧武将が幽霊なら、基本的物理攻撃は効かないはず、なのにシャインの攻撃が普通にくらったし、シャインもあいつの刀を普通に受けていた。」

「実体がある幽霊とか？」

レビイの推理にサナが首を振る。

「幽霊に実体があればそれは幽霊じゃないわ。」

「じゃあ、あの鎧武将は何なんだよ？」

少し考え、サナがハッ！と思い付く。

「『召喚魔』！」

サナが言った言葉にヒューズ以外が頭の上にハテナマークを浮かべる。

「召喚魔っていうのは、召喚師が召喚できる魔物のこと。」

ヒューズが説明する。

「じゃああの鎧武将は誰かに召喚された魔物ってことか？」

スノウの質問にサナとヒューズが頷く。

「とりやえず話はここまで、今はシャインを助けるわよ。」

サナの言葉に4人が頷く。

そうこうしている内も、シャインは鎧武将と攻防していた。

「どうした、最初より刀に重みを感じないぞ。」

シャインの攻撃を受けながら鎧武将が挑発する。

「うるせえ…俺はまだまだいけるぜ…」

息を完全に切らしても、シャインは一步も引かずに笑って見せる。

「そうか、ならばこれで終わりだ。」

鎧武将はシャインから少し離れ、刀で円を描く。その瞬間、シャインが膝から崩れた。

（もう、ダメか…）

「『満月狩り』！！！」

鎧武将が強烈な横振りの一太刀をしようとしたが、鎧武将はしなかった。いや、できなかった。鎧武将の腕には一本の矢が突き刺さっていた。

「命中です。」

矢を放ったのは、ヒューズであつた。

「さすが弓道全国大会3連覇の腕前。」

スノウが誉めながら、鎧武将に走り出す。

「食らいやがれ！『フレイムナックル』！！！」

こちらに振り向いた瞬間を炎に包まれた拳で鬼の仮面を殴る。鎧武

将がグラリとよろける。

「今だレビィ！」

「うん！」

スノウの合図にレビィがシャインに近づく。

「行くよ！」

シャインの手首を掴み、スノウと共にサナがいる所に走り出す。

「むっ…逃がさん！」

鎧武将が後ろから追いかけて来たが、ヒューズが矢で足止めをする。その間にレビィ達がサナ達の所についた。

「大丈夫？」

エアルがいろんなところに切り傷があるシャインを治癒魔法をかける。

「矢がなくなった。」

ヒューズがそう言っていると、サナが魔法を唱え始めた。

「どれだけでもつか…「サンダーサークル」！！」

すると、鎧武将の足下に黄色の魔法陣が現れ、雷の牢で鎧武将を拘束する。

「まだ！」

サナがエアルに聞く。

「もう少し！」

それから数十秒たった時、サナの雷の牢が破られた。

「しまった！」

サナが半分あきらめた瞬間、サナの隣を何かが走って行った。

「サンキュー皆、あとは任せろ！」

それはシャインだった。シャインはそのまま鎧武将に向かって突進する。そして、鎧武将の目の前でシャインがフツとかがんだ。

「むっ…」

その動きに鎧武将が下を見た瞬間にシャインを飛び越えるように、後ろから刀を構えたレビィが飛び出してきた。

「何！？」

鎧武将が気が付いた時には、レビイは鎧武将の腹に強烈な一太刀を  
あびせた。

「これで終わりだ！『閃風波』！！」

ゼロ距離の斬撃を受けて、鎧武将の鎧が碎けた。

「見事なり！最後に我が心に火を付けてくれた。お主らは真の侍だ

……」

鬼の仮面なのだが、シャインは鎧武将が笑っているように見えた。

そして、鎧武将は消えてしまった。

消えるのを見届けると、シャインはバタリと倒れた。

「もう、まだ完治してないのに突っ込んで。」

エアルが怒りながらシャインに治療を再開した。そこに、この騒動  
に気が付いた先生達が駆けつけた。その中からナナリー先生が出て  
きた。

「あなた達何やってるの！」

ナナリー先生が6人に怒る。

「先生、これで幽霊騒動は終わりましたよ。」

シャインが少し微笑む。

「もう、とりやえず今は病院に行くわよ。あなた達の罰はそれから。」

「

ナナリー先生に連れられ、6人は病院を向かった。

この騒動を起こした犯人達の1人は双眼鏡で見ていた。

「ナハハハハ！やりますねーあいつら。特にあなたが言っていたシ  
ヤインってやつ？想像以上だぜ。」

少し小柄で桜色の髪をした男が言う。

「だが、私の召喚魔の中でも下に入る魔物ごときにあれほどやられ  
るとは、悲しい。」

眼鏡をかけた黒髪の男があきれる。

「クハハハハ！まだまだこんなもんじゃなねえさ。なあ、シャイン

？」

この3人のボスらしき、金色の短髪の男がニヤリと笑う。

「行くぞてめえら。」

3人は夜の闇に消えていった。



## 2話 学園の幽霊? (後書き)

>訂正<

1 A 1 1にします。

龍空高校の説明、その2

・クラスは10組まであり、1組〜5組までが魔法科、6組〜10組までが普通科である。

最後に出てきた男達は追々出して説明しますので待っていて下さい。

では、次回をお楽しみに！

### 3話 帰り道に気を付ける（前書き）

今回の話は女性には気を付けてほしい話です。  
では、どうぞ！

### 3話 帰り道に気を付ける

レビィが転校して来て1ヶ月が過ぎようとしていた。梅雨に入り、雨が途絶えることなく降っていた。今日もまた雨である。

傘をさしながら、普通に登校してきたレビィにエアルが近づく。

「おはよーレビィ！」

雨の日でも元気なエアルが挨拶する。

「おはよう。」

レビィが微笑んで挨拶する。だが、少し後ろを気にしている。それに気が付いたエアルが尋ねる。

「どうしたの？」

「え？ああ、うん、あとで教室で言うね。」

そう言つて2人は校舎に入つていった。

昼休み：

「ストーカー！？」

エアルが大声で驚くのをレビィが口に指をつけ、シーと言う。

「だってストーカーだよ！」

「まだそうとは決まってるけど、最近誰かに見られている感じなの。」

「それ確実じゃん！」

「そう、なのかな？」

「絶対そうだよ！」

そんな話をしていたら、チャイムが鳴り授業が始まった。

放課後：

「今日は私が一緒に帰ってあげる。」

廊下を歩きながらエアルが言う。

「ありがとう。」

「でも私だけじゃさすがに無理っぽいからもう1人ぐらい連れていこう。」

エアルがキョロキョロと連れていく人を探す。そこに、前を歩いていたシャインに声をかけた。

「ねえシャイン、今日一緒に帰って。」

突然の言葉にビックリしながら、

「はあ？何で俺と一緒に帰らなきゃ行けないんだよ？」

と理由を尋ねる。

「あのね……」

説明中……

「……と言う事なの。」

「ふん……ストーカーね、お前夜叉魔法使えるだろ。」

シャインがレヴィに言う。

「そうだけど、あんまり人前で使うなって言われているし。」

「だから、あんたには怪しい奴がいないか見張って欲しいの。」

エアルのお願いにシャインはまだノル気じゃない。

「嫌だよ。ダチと寮でティガレックス狩るんだよ。」

そう言っただけで帰ろうとするシャインの肩を持ち、止める。

「行くわよね？」

笑顔で聞く。

「いや、だから、」

「行・く・わ・よ・ね？」

次断ったら殺すという顔で再度聞く。

「だから、」

また断ろうとするシャインの肩がエアルの力によりメキメキと鳴る。

「行きます。」

さすがに折れたシャインだった。

「じゃあ早速出発！」

校舎から出たエアルが雨の中ズンズンと歩き出す。

「エアル、こっち。」

間違った方向に行くエアルを呼んで、2人で家に向かって歩き出す。シャインは2人から少し離れたところを歩きながら、レビイの帰り道にある交番の前を通った時に、横目でチラッと指名手配書を見ながら2人に付いていった。

別に変なことが起きるわけもなく、すんなりとレビイの家に到着した。白くて清潔感のある一軒家である。

「何にもなかったね。」

エアルが言う。

「うん。今日は視線感じなかったし。」

レビイがホツとする。

「勘違いだったのかな？」

「そうだといいんだけど…ねえシャインはどう思う？」

レビイは後ろにいたシャインに尋ねた。シャインは顎に手をやり何か考えていた。

「どうしたのシャイン？」

レビイが尋ねる。

「勘づかれたな。」

シャインの言葉に2人が首を傾げる。

「どういうこと？」

レビイが理由を聞き、シャインが話そうとするとエアルが割り込んできた。

「はいはいはい、別にこんな雨の中で話す必要ないじゃん。」

「そうだけど…」

「だ・か・ら、レビイの家の中で聞こう。」

エアルが何か企んでいる顔で提案する。

「ちょっ…」

レビイがシャインに聞こえないとこまでエアルを連れて行く。

「何でそうなるの!」

「私の予想だとレビイって家に男の子居れたことないでしょ?」

凶星だったレビイはただただ頷くだけだった。

「やっぱり、だったら練習がてらシャインでどうかな〜って思ってた。」

「え〜〜〜」

レビイの許可を聞く前にシャインのところに戻り、事情を話す。そしてたら意外と簡単に承諾した。いや、正式言つと承諾するしかなかった。

ここまでくるとレビイも断ることができなかった。レビイがインタフォンを押すと、扉が開き、中から1人の女性が出てきた。

「お帰りな…あら?お友達?」

女性はエアルとシャインに気が付きレビイに尋ねる。

「えっと、こっちがエアルであっちがシャイン。」

「そう、よろしくね。私はレビイの母のフィリアと言います。」

この女性の名前はフィリア・サファイア(38歳)(身長:166cm)。レビイにそっくり、いや、レビイがそっくり?どっちでもいいが、とにかく顔が似ていて、レビイと同じ紺色の髪で青色の瞳。髪は先の方がクルツとカールしている。

「エアル・ダイヤモンドです。」

エアルも自己紹介しながら一礼する。

「シャイン・エメラルド…です。」

シャインも自己紹介しながら軽く会釈する。

「さあ、どうぞ。」

フィリアさんの案内で2人とレビイは家に上がり、一直線に2階のレビイの部屋に入った。

レビイの部屋には勉強机があり、ベッドがあり、ぬいぐるみや本がある、いたって普通の部屋である。

「さて、さっきの話の続き話して。」

まるで我が家のようにベッドにダイブしながらエアルが聞く。

「ああ。」

シャインが勉強机の椅子に座って話始めた。

「勘づかれたのは俺の存在だ。」

「シャインの？」

地べたに体育座りしているレビイが言う。

「そう。お前からこんなことないか？いつもこの時間に出ると絶対見かける人や物があるっていう現象。」

「ある、私が登校する時にサラリーマンの人を見る。」

レビイが同意する。エアルもあると頷く。

「だろ？そのストーカーがお前の時間帯まで分かっていたら、その時にレビイの周りを歩いている人ぐらい覚えてはるはずだ。だけど今日は知らない2人がいた。エアルがいても友達か何かで終わるが見かけない男が後ろから付いてきていた。ちょこちょこ会話に参加していたから友達にしたんだろ。だから、今日はストーカーするのは止めた。警戒されていると思ったからだ。」

シャインの説明が終わり、2人はなるほどという顔でいる。

「じゃあ明日も付いてきてもらう？」

エアルが案を出す、シャインが否定する。

「いや、俺がいる限りそのストーカーは現れないし、俺が消えればまたストーカーをするだろ。」

「じゃあ、どうしよう？」

レビイが頭をかかえる。

「心配すんな。策はある。」

妙に自信のある顔でニヤける。

「どんなの？」

2人がハモる。

「普通は1ヶ月はかけた方が確実なんだが、そんな時間はないから2週間でケリをつける。」

そう言つて、シャインは2人に作戦を伝える。

そして作戦は次の日から実施された。1週間は前と同様3人で帰つてレビイの家に入り、少しして2人が帰る。変えたのは、いつもより警戒し、周りをキョロキョロする。これだけだ。そしてあつという間に1週間が過ぎ、レビイの部屋でシャインがまた作戦を言う。そしてあとの1週間はレビイだけで帰る。それだけだ。そしてまた1週間が過ぎた。

「これで本当に良かったの？」

今回もまた雨である。しかもどしゃ降りである。校舎でレビイが心配そうに聞く。

「大丈夫だ。犯人はもう分かった。」

シャインが言う。

「じゃあ、行くぞ！」

そう言つと、エアルとレビイがオー！と拳を上突き上げる。

そして作戦最終段階に入った。

レビイが1人だけで雨の中を歩き、特に特別のことをするわけもなく、普通に家に到着した。

そしてこの状況を電信柱から見ている20代ぐらいで雨でびしょ濡れの長い髪に眼鏡をしている怪しい男がいた。そいつはレビイが家に入るの見守ると、満足そうに帰ろうと振り返ると、

「よう、ストーカー行為は終了か？」

こちらを睨んでいるシャインが立っていた。

「ひっ！」



男はとつさに逃げだした。

「待ちやがれ！」

シャインが持つていた傘を投げ捨てあとを追う。

数分走ったところで、ついに男を建物と建物の間の行き止まりの狭い路地に追い詰めた。

「もう逃げ道はないな。」

シャインが勝利を確信したようにニヤける。

「どうして僕だと分かった！？」

男が聞く。

「大変だつたんだぞ2週間仕込むの。」

「2週間？」

「そう。この2週間はお前を捕まえるための罠だつたんだよ。」

「罠：だと？」

「最初の1週間は3人で帰る。そして必要以上にキョロキョロして警戒しているように思わせた。」

「そうだ！お前たちは僕を警戒して必死に探していたじゃないか！」

「それが罠だ。別に俺らはお前を探していたんじゃない、あるものの、覚えていたんだ。」

「あるもの？」

「それは、周りにいる人間、だ。」

「どうことだ？」

「レビイの家の前は人通りが少ないのに気が付いてな、これを利用したんだ。人通りが少ないということは、決まった人しかほぼ通らないということだ。」

「それと僕を見つけると、どう関係するんだよ？」

「簡単さ。1週間は周りの人覚え、あとの1週間で、答えあわせ、をするんだ。」

「答えあわせ？」

「そうだ。俺は校舎の屋上から双眼鏡で監視して、1週間で見なか

った人間を探したんだ。そしてドンピシャでお前を見つけたんだ。それが1週間全部見たからお前と確信できたって訳だ。」

シャインが説明を終えると、男はフフフと笑い始めた。

「フフフ、そうさ僕の名前はスティール。だが、1つだけ間違っているぞ。」

「何？」

思いがけないことにシャインの眉がピクツと動く。

「僕はストーカーなんかじゃない。誘拐犯だ！」

「何だと!？」

その時、シャインはハツと思い出す。

「お前、指名手配犯だな。交番のどこにお前の顔が貼ってあったぜ。」

「

「そうだ。そして僕の本当の正体を知っているのは君だけ。つまり君が消えれば知っている人間はいなくなるんだよ！」

スティールがシャインに殴りかかる。

「そんな動きで俺に勝てると思うなよ。」

シャインが簡単に避けた。そしたらスティールがニヤリと笑った。

「かかったな。」

「何!？」

すると、避けたはずなのにシャインの腹にスティールの拳が直撃した。

「な……」

何が起こったか分からない気持ちのままシャインが膝をつく。そこにスティールが蹴りをいれようとした。

「くらうか……」

シャインが避けたが、またしても腹に直撃し、骨がボキリとなり、吹っ飛んだ。

「がつ……」

壁に叩き付けられてたシャインはなかなか立てない。

「どうしたどうした最初の威勢はどこいった!」

スティールがバカにするように笑う。

（どうなっているだ…予測したとこに攻撃がこねえ…しかも絶対曲がらない方向に腕や足が曲がりやがった…）

そんなことを考えていたら、スティールがまた襲いかかる。

「オラア！」

キックを完全に避け、シャインがスティールに刀をあびせた。いや、正式に言うとおびせられなかった。スティールの体をスルリとすり抜けた。

「何だと！？」

さすがに驚いた。

「僕に攻撃はくらわないわ！！」

そのままスティールの拳がシャインの顔をとらえた。

「ぐっ…」

すぐに体制を立て直し、少し遠めに間合いをとる。

（マジで意味がわからねえ！いや、落ち着け、考えるんだ。攻撃が当たらないという事は…）

その時、シャインはあるものを見つけた。

（！そうか！分かったぞ！あいつのトリック！）

「どうした？もう終わりか？」

スティールがニヤニヤする。

「分かったぜ、お前のトリック。」

シャインに自信がもどる。

「トリックだあゝ？」

「そうだ、今それを証明してやる！」

シャインはスティールではなく、スティールの足下に刀を突き刺した。

「ぐは…」

すると何故かスティールが口から血を吐いた。

「これが、答えだ。それとも、まだ分からないか？」

シャインは再び刀を突き刺そうとした。

「やめる！」

ステイルが慌てて止める。

「これがお前のトリック、鏡魔法だ。ミラーマジック 鏡魔法（ミラーマジック）

はその名の通り鏡の力を使った魔法だ。お前の腕や足がおかしな方向に曲がるのは、鏡による屈折を利用したんだ。屈折する方向ならどんな方向にでも曲げられる。そしてお前に攻撃があたらないのはお前は一定時間だけ鏡に映る自分と入れ替われることができ、攻撃があたる瞬間だけ入れ替わっていた。だが、鏡魔法は自分の周りに鏡がないと使えない魔法だ。だから、俺は探したんだ鏡を。そしてらちゃんとあつたんだよ。雨の日にできる天然の鏡、水溜まりだ。だから俺はお前ではなく、お前の足下にある水溜まりに映っているお前を攻撃したんだ。俺の推理、間違ってるか？」

シャインの推理を聞き、ステイルが笑う。

「フフフ、ご名答。正解だよ。だが、タネが分かっても、僕に勝つことはできない！」

ステイルが殴りかかる。それを避けたシャインがステイルを殴ろうとした。

「僕に攻撃はあたらないぞ！」

「だから、俺はお前を狙ってない。」

シャインが殴ったのは、ステイルの足下の水溜まりだ。すると、やはりステイルにダメージがはいる。

「がはっ……」

ステイルが膝をつく。シャインはコンクリートを殴ったので、拳から血が垂れている。

「これで終わりだ！」「閃風拳」せんぷうけん「……」

シャインの全力の拳がステイルの顔をとらえ、吹っ飛ばした。吹っ飛んだステイルは壁に叩き付けられて、そのままバタリと倒れ、気を失った。

シャインが壁にもたれてみると、ようやく追い付いたエアルとレビ

イが来た。

「遅せえぞお前ら……」

「大丈夫…なわけないか、今治癒魔法かけるから。」

エアルが治療を始める。

「ゴメンねシャイン、変なことに巻き込んだじゃって…」

レビイが謝る。

「気にすんな。もう終わったんだ。せつかく勝ったのに謝れると、  
テンション下がるわ。」

「…そうだね、じゃあ…ありがとう！シャイン！」

謝る代わりに万年の笑みを浮かべお礼を言う。レビイの笑顔を見て  
シャインは、

「お、おお…」

照れて、レビイから目をそらした。

女性の皆さんはストーカーなどに気を付けて下さいね。

### 3話 帰り道に気を付ける（後書き）

シ「ん？何で俺らが後書きにいるんだ？」

レ「なんか私達が次回予告しろって筆者が。」

シ「勝手だな。」

レ「まあまあ、今回は龍空高校以外の魔法科がある高校を紹介だよ。」

シ「何校だっけ？」

レ「それも次回に分かるよ。じゃあ見てくれた皆さん、次までお楽しみに！」

シ「確か、じゅっ……」

レ「言わない！」

#### 4話 12校の魔法学園（1）（前書き）

シ「ついに前書きにも出てきたな。」

レ「まあまあ、さて突然ですが今から主力メンバーの名前の由来をご紹介します。」

シ「ほんと突然だな……」

レ「ではいっぺんに〜ドン！」

シャイン：名前を考えている時、たまたま「スーパーマリオサンシャイン」の攻略本があったから。

レビィ：モデルのFTのレビィ・マクガートンからいただきました。  
スノウ：これもモデルのFF13のスノウからいただきました。

エアル：どっかの回復技の名前だったかな？

サナ：名前を考えている時、たまたまのFTの本が前にあり、カナが載ってあったのでモジって。

ヒューズ：名前を考えている時、たまたま鋼の錬金術師の本があり、中をパツと開くとヒューズ中佐が載ってあったので、そのままいただきました。

シ「こう見ると案外適当だな……」

レ「そうだね…とにかく！見てください！」

シ「サンシャインって……」

#### 4話 12校の魔法学園（1）

「まだ退院できないのかなシャイン？」

教室の自分の席でレビイが心配そうに言う。

「大丈夫だよ、なんとたつてシャインだもん。」

エアルがレビイの肩をポンポンと叩く。

シャインはステイルの攻撃により骨折してしまい、入院していた。

「たく、何やってんだよお前ら。」

スノウがあきれる。

「そうですよ、私達にも相談してくれれば良かったのに。」

ヒューズが文句を言う。

「ゴメンね、あまり迷惑かけなくなかったの。」

レビイが謝る。

「ま、別に死んだんじゃないんだし、いいんじゃない。」

サナが本を読みながら言う。

「そうだね。今日お見舞いに行こう。」

レビイが決定する。

「誰が行く？」

レビイが他の4人に聞く。

「私今日用事あるから行けないや。」

エアルがゴメンねと謝る。

「俺はダチとリオレウスを狩るから無理。」

スノウが無理無理と手をヒラヒラさせる。

「私も弓道の方があるので行けませんね。」

ヒューズもすいませんねと謝る。

「そう、サナは…」

「行くわけないでしょ。」

レビイの声に被せるようにサナが答える。

「やっぱり…」



レヴィが当然かと思いながら苦笑いする。

結局1人で行くことになったレヴィは、手ぶらはダメかなと思い、お菓子屋でシュークリームを買ってシャインが入院している病院に向かっていた。そして少し大きな公園の中の道を歩いていたら、前から5人の不良が歩いてきた。(うわぁ、関わらないようにしよう。)

レヴィが無視して通ろうとすると、案の定絡まれた。

「よう、可愛いね君、どこの高校？」

片耳ピアスで5人の中のリーダーらしい男が話しかけてきた。

「龍空高校です。」

とりあえず答える。

「ああ、あの魔法科があるところね。」

片耳ピアスの男が思い出す。

「すいません、用事があるので」

レヴィが無理矢理通ろうとすると、片耳ピアスの男がレヴィの腕をガツと掴む。

「そんなこと言わずに、俺らと遊ぼうぜ。」

「離してください！」

レヴィがバツと振りほどく。それが男の感にさわったらしく、

「ああ！いいから一緒に来ればいいんだよ！」

あとの4人も一緒に無理矢理連れていこうした。

「やめてください！誰か！誰か助けてください！」

必死に助けを呼んだ。すると、1人の男が片耳ピアスを後ろから殴った。

「痛って、誰だ！」

片耳ピアスが振り向くと、

「俺のダチに何か用か？」

なんとそれは、入院していると思っていたシャインだった。

「シャイン!?」

レビイが驚く。

「たく、今日退院だつてメールしたぞ。」

シャインがあきれながら、レビイを男達から遠ざける。

「ちよつと待つてろ。」

シャインが男達の前に立つ。

「何だてめえ、あの女の彼氏か?」

「勝手に想像してろ。」

シャインが見下しの目で見える。

「なめやがつてゝやつちまえー!」

片耳ピアスの合図で一斉に襲いかかる。

数秒後:

5人はボコボコにされた。

「に、逃げるぞ!」

5人その場を急いで去った。

「口ほどにもない。」

シャインがレビイに近づく。

「ケガないか?」

「う、うん。ありがとう。」

レビイが大丈夫だよと笑つて見せる。

「ちよつと、どこに行くの?」

レビイが突然歩いていくシャインを慌てて追いかける。

「ねえ、何でここにいろの?」

「ずっと消毒臭いところに居たからな、外の空気を吸いたくてな。」

「ふゝん…」

すると、シャインが公園の中にある噴水の近くのベンチに腰かけた。レビイもシャインの隣にちよこんと座る。そして少しの間沈黙が流れる。(この状態、周りから見たらデートなの、かな?)

そんなことをしていると、レビイの顔が真っ赤になった。

「どうしたレビイ?」

シャインが聞くと、レビイがブンブンと顔を振り、  
「うっん、何でもない。」

と、誤魔化すように笑って見せた。

「そうか。」

「そうだ！シュークリーム食べる？」

レビイがシュークリームが入っている箱を開けたら、2個入っていたが、1つがさっきの騒動で潰れてしまっていた。

「あ…ゴメンね。」

空気が重くなる。それを察知したのか、シャインは潰れたシュークリームをひよいと掴んで、無言で食べる。レビイは嬉しくなった。

シュークリームを食べていると、

「あんた達こんなとこで何やってんの？」

と、眼鏡をかけていないサナが近づいてきた。

「退院祝いのシュークリーム食べてる。」

シャインが簡単に答える。

「あつそ…」

「サナはここで何やっているの？」

レビイが聞く。

「最近実験しっぱなしで疲れたから、気分変え。」

サナが答える。

「ところで、さっき『虎神<sup>こしかみ</sup>』の連中がボロボロで歩いてたけど、あんたじゃないでしょうね？」

サナがシャインを疑う。

「あいつら虎神の奴らだったのか。」

シャインがさらりと言う。

「知ってるってことは犯人はあんたね…」

サナがあきれる。

「虎神なんかにはケンカふっかけて、『あいつ』の耳に入らなきゃいいけど。」

「入るな、ほぼ間違いなく。」

シャインとサナの会話についていていないレヴィが話を中断する。

「あの、全然分かんないんだけど。」

「そうか、レヴィは分かんないか。」

シャインが気が付く。

「そうね、じゃあ説明するわ。」

こうしてサナの説明が始まった。

「最初に言つとね、魔法科がある高校はね、龍空高校だけじゃないの。」

「そうなの!」

レヴィが驚く。

「そう。この国には全部で、12校、魔法科がある高校があるの。」

「へえ」

「そして、この12校はキッチリと順位ができているの。」

「どうやって決めるの?」

「8月に開催される大会に1校から1人の代表者を選んで、その代表者が闘って順位を決めるの。」

「へえ」

「この順位は高校としても重要で、受験者の数が大きく変わる。」

「何で受験と関係あるの?」

「誰も12位になった高校に行きたくないだろ。」

シャインが言う。

「そう。シャインの言った通り、12位の高校に行くより1位の高校に行きたいでしょ?」

「うん。」

「だから代表者に選ばれた生徒はすごくプレッシャーがかかるわけ。」

「

なるほど。」

「去年の結果を12位から言つと、

- 12位：火兔<sup>ひうさぎ</sup>高校
- 11位：羊雲<sup>ひつじくも</sup>高校
- 10位：馬原<sup>うまはら</sup>高校
- 9位：犬白<sup>いぬしろ</sup>高校
- 8位：猿山<sup>さるやま</sup>高校
- 7位：牛島<sup>うしじま</sup>高校
- 6位：鳥崎<sup>とりさき</sup>高校
- 5位：猪里<sup>いのさと</sup>高校
- 4位：蛇帝<sup>じゃてい</sup>高校
- 3位：天鼠<sup>あまねずみ</sup>高校

そして2位と1位は引き分けになったらしく、その2校が、<sup>とらがみ</sup>虎神高校’と私達の高校、<sup>りゅうくうこう</sup>龍空高校’てなわけなの。分かった？」  
サナが説明を終了する。

「分かった。でも何で引き分けになったの？」

「そこまでは私も知らないわ。」

「ふん…」

「さて、説明も終わったし、寮に戻るか。」

シャインがどっこいしょと立ち上がる。

「うん。」

「そのね。私も戻る。」

3人は寮に戻り始めた。

サナが説明している時、ボコボコにされた5人は虎神高校に戻り、ある2人の前にいた。

「んで、要するにあんたら5人は一瞬で負けたわけだ。」

「申し訳ありません。」

片耳ピアスが深く頭を下げる。それに合わせてあとの4人も頭を下げる。

「ナハハハハ！謝ってももう遅い。制裁だ。」

3人の中の桜色の髪が5人を1人ずつ殴り飛ばす。

「何でもかんでも暴力で終わるのはやめるんだな、クラウド、悲しい。」

黒髪の男が眼鏡を上げながら注意する。

「ナハハハハ！お前は何でもかんでも静か過ぎだ、レイン、そして何で悲しいんだよ？」

「口癖だ。」

「あつそ…」

桜色の髪の少し小柄な男の名前はクラウド（16歳）（身長：165cm）。あの幽霊事件の犯人の1人。鋭い黒色の瞳で、背中には自分とほぼ同じぐらいの大きさの鎌<sup>カマ</sup>をせおっている。

黒髪的眼鏡をかけている男の名前はレイン（16歳）（171cm）。あの幽霊事件の犯人の1人で鎧武将を召喚した男。黒色の瞳で常に人を見下す目をしていて、腰には小さな箱がぶら下がっており、中にはたくさん紙が入っている。

そこにボスらしき金色の短髪が現れた。

「どうしますかコイツらの処分？」

クラウドが5人を見ながら聞く。

「お前ら…誰にやられたんだ？」ボスが5人に聞く。

「え、あ、えつと…黄緑色の髪をしたシャインっていう男です。」

片耳ピアスが慌てて答える。その答えを聞いたボスが笑い始めた。

「クハハハハ！あいつか、お前らがあいつに勝てるわけねえだろ！まあ、あいつだからな、いいよ、お前らの処分は免除してやる。」

「あ、ありがとうございます。」

5人が一斉に頭を下げる。

「さっさと帰りな。」

5人がいそいそと帰っていった。それを見届けたボスは何処かに行

こうとする。

「どちらに？」

レインが尋ねる。

「少し出かけてくる。てめえらは来るな、俺1人で行く。」

そう言つてボスは何処かに行つてしまった。

シャイン、レビィ、サナは龍空高校の近くまで帰つてきていた。すると、3人の前から1人の金髪の男が歩いてきた。それにレビィが気が付いた。

（あれ？あの制服：さっきの不良たちと一緒にの制服。てことは虎神高校の人：嫌だなあ〜）

前から歩いてきたのは、さっき何処かに行つてしまったボスだった。シャインとサナも気が付いて、サナは少し驚いた顔をしたが、すぐに普通の顔に戻った。シャインは無反応だった。

レビィはボスとすれ違う時に少し下を向いて通りすぎた。サナはそのまますれ違った。そしてシャインとすれ違った瞬間、

「よう、久しぶりだなあシャイン。」

ボスが囁くように言つた。それを聞いたシャインが足を止める。

「ああ。久しぶりだな。」

背中を向けたままシャインも囁くように言う。

「何だよ、2年ぶりだつてのに素っ気ないな。」

ボスがあきれる。シャインはゆっくりと振り返り、睨み付ける。

「そう睨むなよ。ただ近くを通つただけだ。」

「だったら、お帰り願おうか。」

敵意の目のままのシャイン。

「クハハハハ！昔と全然変わつてねえな。」

この様子をシャインの少し後ろから見ていたレビィがサナに小声で尋ねる。

「ねえ、あいつ何者なの？昔がどうか言つてるし。」

「あいつは私達と同じ高1で、たった3ヶ月で虎神高校の頂点に立った男。名前は‘バージェス・アルシオン’。そして、シャインの……幼馴染み’よ。」

「えっ……！」

サナの説明を聞いてレビィは驚いた。

風の音しか聞こえないくらい静けさの中でシャインとバージェスはにらみ合っている。



#### 4話 12校の魔法学園（1）（後書き）

レ「いっぱい高校の名前が出てきたね。」

シ「さて、読者は気が付いたかな？」

レ「何を？」

シ「お前、気が付いていないのか？」

レ「だから何を？」

シ「高校の名前には干支が入っているんだ。」

レ「ホントだ！」

シ「鳥崎とかの‘崎’とかは適当らしい。」

レ「犬白の‘白’とか？」

シ「そう。」

レ「よし！理解もできたし次回予告をしよう。次回はシャインとバ  
ージェスの過去の話だよ。」

シ「次回をお楽しみに。」

## 5話 2人の過去(2) (前書き)

シ「おっ！ついに初感想書いてくれたな。」

レ「うん！ちゃんとこの『魔法学園』を見てくれる人がいるんだよ！いろいろアドバイスしてくれたので、もっと面白くなっ  
ていなくなっちゃね。」

シ「そうだな。」

レ「じゃあ、今回は前の続きだよ。2人の過去が明らかに！では、  
どうぞ！」

シ「ちなみに説明すると、題名の(1)、(2)って続いているやつは、名前は違っけど話は続いているってことね。」

## 5話 2人の過去(2)

「あいつは私達と同じ高1で、たった3ヶ月で虎神高校の頂点に立った男。名前は『バージェス・アルシオン』そして、シャインの……『幼馴染み』よ。」

「えっ!？」

サナの説明を聞いてレビイが驚いた。

風の音しか聞こえないくらい静けさの中でシャインとバージェスはにらみ合っている。

この男の名前はバージェス・アルシオン。スノウくらいの背に、金色の短髪に金色の瞳。右の頬に『メ』の形をした傷があり、腰には一本の剣をさげている。(モデル：FTのラクサス)

すると突然バージェス剣を抜き、シャインに向かって振り下ろした。「シャイン!」レビイが叫んだ。だが、剣はシャインの数センチのところでピタリと止まった。

「何故避けなかった？」

バージェスが尋ねる。

「お前はが止めると知っていたからだ。」

シャインが睨みながら答えると、バージェスは剣を鞘に納める。

「昔から真っ向勝負が好きなお前は、無防備な奴や戦闘体勢に入っていない奴に攻撃はしない。つまり不意討ちはしないと知っていた。そして今の俺が風砕牙で止めていたら、戦闘体勢に入ったことになり、お前は攻撃してくる。違うか？」

シャインが説明する。

「クハハハ! 正解だ! さすがシャインだ。」

誉めているのかバカにしているのか分からない言葉で言う。

「今ここでお前と一戦やり合う気はねえ。さっさと帰ってくれ。」

「そうだな。帰るわ。」

バージェスがすんなり受け入れる。

「お前と闘うのはまだ早いからな。」

そう言い残してバージェスは帰っていった。

バージェスが見えなくなってから、3人は門をくぐり、寮の方に向かう途中、

「ねえ、バージェスってどんな人だったの？」

レビイがシャインに尋ねる。

「小さい時はあんなんじゃなかったんだ。」

シャインは大きな木の近くにあるベンチに座る。突然座ったので、レビイはシャインの隣に慌てて座る。その2人の前にサナが立った。

「あいつと俺は中1までずっと仲良しかった。だけど、中2からあいつの力は開花した。」

シャインは自分たちの過去を話し始めた。

10年前：

「早くこいよバージェス。」

「ま、待ってよ。」

10年前でもほとんど変わりなく、小さくなったただけのシャインと、まだ傷がなく、少し内気のバージェスが公園の中を走っていた。2人は物心がついたときから、ずっと一緒に遊んでいた。

「いっちばーん！」

シャインがジャングルジムにタッチする。

「はあ…はあ…は、早いよシャイン…」

バテバテのバージェスがようやくジャングルジムについた。

「遅いぞバージェス。」

ジャングルジムのてっぺんからシャインが言う。

「何でシャインはそんなに体力あるの？」

まだ少しバテているバージエスが尋ねる。

「うーん…分からない。」

シャインが首を傾げながら答える。

「ふーん…」

「とりやえず遊ぼうぜバージエス。」

シャインがニツコリ笑う。

「うん。」

バージエスが笑い返して、夕方まで2人は公園でおもいつきり遊んだ。

「ねえ、シャインは強くなりたい？」

ジャングルジムのてっぺんで沈んでいく夕日を眺めながらバージエスが尋ねる。

「いつも聞くけど、そんなに強くなりたいの？」

逆にシャインが尋ねる。

「僕は強くなりたい。強くなって僕のことをバカにした奴らを見返してやるんだ。」

バージエスが答える。

「そんなことして楽しい？」

「これは僕が決めた事だ。たとえシャインでも口出ししないですよ。で、シャインはどうなの？」

再度シャインに尋ねる。

「それは…強くなりたいよ。でも、僕はバージエスみたいな目標じゃない。」

「じゃあどんな目標？」

バージエスが聞いてから少し間が空き、ボソッとシャインが呟いた。それを聞いたバージエスが、

「ふーん…シャインらしいね。」

と、笑う。

「ずっと一緒に遊ぼうね。」

バージェスが小指を出す。

「何？」

「指きり！」

「うん。」

2人はジャングルジムのてっぺんで約束をした。

だが、そんな約束は成長していくにつれ、薄れていった。 2年前：

2人が中学二年になった時に、突然バージェスの力は開花した。

「ぐはっ……」

体育館の裏で不良たちが倒れている。

「なんだ、そんなもんか。」

成長したバージェスが不良たちを見下す。

「くっそ……」

不良たちが逃げていった。そして陰で見ていたシャインがバージェスに近づく。

「バージェスやり過ぎだろ。」

シャインが注意する。

「知らねえよ、あいつらからきたんだから。」

「でも……」

「弱い方が悪いんだよ。」

そういつてバージェスは教室に戻っていった。それをシャインは不安そうに見送る。

「ホントにいい加減にしろよバージェス！」

2人がいつも遊んでいた公園のジャングルジムのてっぺんに座っているバージェスにシャインがキレる。

「何だよ、こんなところに呼んどいて、そんなことかよ。」

バージェスがやれやれポーズをとる。

「つぶしてんのは全部不良どもだろが！」

バージェスが言い返す。

「それでもやり過ぎだ！」

シャインも引き下がらない。

「昔ここで言っただろうが、俺をバカにした奴らを見返してやるってな。」

「でもな……」

昔のことを持ち出され、少しつまるシャイン。

「だったら、一戦して決めるか？」

バージェスがジャングルジムから飛び下りる。

「何をだ？」

「ここはマズいから場所を移すが、一戦して、勝ったほうが言っ」と聞くつてのはどうだ？」

バージェスの提案に、少し考え、

「いいだろ。」

シャインがのる。

公園から10分ぐらい歩いたところに、十分戦える草原があり、そこで2人はにらみ合っていた。

「こいよ。」

「ああ。」

シャインとバージェスの戦闘が始まった。

結果は……シャインの完敗で終わった。

「弱くなったなシャイン……いや、俺が強くなったのか。」

バージェスは片膝についているシャインに背を向けて去っていく。

「バージェス……」

2人の顔にはもう昔のような笑顔はなかった。

そして、2人はそれから会うことはなかった。

「…これで話は終了だ。」

シャインが話終える。

「2人にそんな過去があつたなんて。」

レビイが驚いた顔になっている。

「さて、帰るか。」

シャインが立ち上がる。

「うん。」

レビイも立ち上がる。

「じゃあな2人とも。」

シャインが帰ろうとするが、寮の方には向かわず、正門の方に向かう。

「ちよつと、寮はあつちよ?」

サナが止める。

「ん?誰が寮暮らしだつて言つた。」

シャインの言葉に2人がキョトンとする。

「あんた寮暮らしじゃないの!？」

サナが驚く。

「ああ。小さいアパートで住んでんだ。レビイとは反対方向だけだな。」

「でもあんた、いつも寮の方から来るじゃない。」

「ずっとダチと狩ってたからな、帰るのは1ヶ月ぶりかな。」

「そうなんだ。」

「そう。じゃあな。」

そう言つてシャインは帰つていった。

「私も帰るわね。」

「うん。じゃあねサナ。」



サナは女子寮に帰っていった。

（何だか嫌な予感するな。）

そんなことを思いながら、レビィも自分の家に帰っていった。

このレビィの予感が追々現実になるなんて、まだ誰も知らない。

## 5話 2人の過去(2) (後書き)

レ「アドバイスの中に、『キャラの説明は自然に入れた方がいいよ』って言うのがあったよ。」

シ「すまないが、この説明型は筆者が気に入っているからこれだけは変えられないらしい。」

レ「ふ〜ん…でも、感想を書いてくださって本当にありがとうございます。」

シ「では次回予告を、次回はガラッと変わって、遠足の話だぜ。」

レ「たしかまだ6月だね…」

シ「理由は話の中で説明するらしい。」

レ「そう…では、次回をお楽しみに!」

## 6話 遠足がサバイバルに(1) (前書き)

レ「ねえ、最近思うんだけど、最初のキャラクター紹介に書かれて  
いる性格、無視してるよね？」

シ「ああ、あれな、ホントに最初の設定だからな…じゃあここで宣  
言しよう。最初の性格設定は無視してください！」

レ「えっ！？いいのそんなこと言って！？」

シ「いいんだ。筆者が考えた答えだ。」

レ「そう…なんだ…」

シ「では、見てください！」

## 6話 遠足がサバイバルに(1)

梅雨とは思えないほどの晴天の中に学校規定のジャージを着た魔法科の全員がグラウンドに集められていた。今日は遠足の日である。

「えー、今日の遠足のプランを説明するぞ。」  
前で体育の先生が話始める。それを上の空で聞くシャイン。

でも読者の皆さんは分らないと思うので、説明します。この遠足のプランは、天龍山てんりゅうざんという山に登山をしに行き、その山に流れているらしい魔力を高める水を飲みに行くというプランである。でもここで疑問が生まれる。何故『魔法科』の人だけなのか？それは天龍山には普通に登山ができる『セーフエリア』と、普通に魔物が生息している『アウトエリア』があり、たまに襲われる事件もあから魔法を使えない普通科の人は危険だと判断され、魔法を使える魔法科の人だけが行くことになったらい。て言うか、普通科の人に魔力を高める水を飲む意味もないんでね。分かってくれましたか？では、続きをどうぞ。

「続きをどうぞ。じゃねえよ！何だよ　の説明文！これで分かるのか？」

シャインが説明文にケチつける。

「いいんじゃない。こんな感じで。」

本を読みながらサナが言う。

「ダメだろ。普通に魔物が生息しているって…」

「魔法科の人間は自分の身ぐらいは自分で守れてことね。」

「身勝手な…」

シャインとサナが話していると、体育の先生の話が終わり、バスへ

と移動が開始した。すると、何故かレビイがムスツとなっているのにシャインが気が付いた。

「どうしたレビイ？」

「うるさい！」

シャインの耳元で怒鳴り、レビイはつかつかと歩いていった。

「何だよあいつ。」

「モテる男はいいね〜」

突然現れたスノウが茶化す。

「どういう意味だ？」

それを聞いてスノウがため息をつく。

「お前ホントに恋愛系にはダメダメだな。」

「だからどうということだ？」

「嫉妬してんのよ。お前とサナがずっと話していたことにな。」

「な、なんで私が出てくんよ！べ、別に私はそういう…」

サナが顔を赤くしてスノウを睨む。

「気にすんな、ただの推理さ。」

スノウ少し小バカにするように言う。

「たく…」

サナは本に目をもどすと、ある言葉を見て足を止めた。

（！ この本に書かれていることが本当なら、レビイの夜叉魔法は…）

「サナさん早く乗ってください。」

ナナリー先生がサナを呼ぶ。その声に気が付き、サナは急いでバスに乗った。こうして、龍空高校魔法科の御一行は天龍山に向かって出発した。このあと大変なことが起きるなんて知らずに。

2時間後、龍空高校御一行は天龍山のふもとに到着した。

「やっと着いたか。」

バスをおりたシャインが背伸びをする。

「これを登るのか、キツいな…」

スノウが山を見上げながら苦笑いする。それもそのはず、天龍山の頂上は雲で見えていない。

「頂上が見えない。」

レビイも見上げる。

「みんな行くよ!。」

ナナリー先生が先頭を歩き、登山が始まった。

半分くらい登ったくらいで、登山しながらでも本を読んでいるサナがレビイに近づく。

「ねえレビイ、1つ聞いていい?」

「うん。何?」

「今私あんたの夜叉魔法について調べているんだけど、その調査的なものだから、変なようにはとらえないでね。」

「わかった。」

レビイが頷く。

「その…あんたって、認めた人っている?」

サナの質問にレビイが首を傾げる。

「つまり…好きな人がいるの?ってこと。」

少し顔を赤くしてサナが再度聞く。それを聞いたレビイは、サナ以上に顔を赤くして、

「そ、そんな人、い、いるわけないじゃん!」必死に否定する。

「そう。わかった。」

そう言っただけで歩くスピードを速める。レビイはそのスピードに追いついて、逆にサナに尋ねる。

「ねえ、私に好きな人がいるのと、夜叉魔法がどんな関係があるの?」

「もしも、好きな人がいるんだったら、少し気を付けなさい。」

サナはそう答えて、レビイより先に歩いていった。

(気を付ける?)

サナの言葉に疑問を持ちながらレビイも歩いていく。

「ここで昼食しまーす。そっちの崖に気を付けなさいね。」

天龍山には半分ちよい越しぐらいに、大きな草原が広がっており、そこで昼食タイムとなった。いつもの6人は少し崖に近いところで昼食をとっている。

「なにもこんなところで食べなくても…」

レビイが崖の方を見て苦笑いする。

「崖ではなく前を見ましよう」

上品に弁当を食べているヒューズが崖の向こう側を指す。その方向には、町が一望でき、まさに絶景が広がっていた。

「たしかに。」

レビイが笑顔になる。

昼食を終えた6人は、崖から絶景を眺めていた。その後ろで2人の女子生徒が、草原に一本だけ咲いていた花を見ている。

「見てこの花。かわいい」

「ホントだ」

「水あげよつか？」

「そうだね。」

2人が花に水をあげようとするのをサナが気が付き、驚きながら止めようとする。

「！ ダメ2人とも！その花に水をあげちゃ…」

だが、すでに遅く、2人は水をあげてしまった。すると、花がみるみる大きくなり、花の真ん中から牙の生えた口が現れ、地面から何本も蔓が生えてきた。

「な、何だありやあああ！？」

この状況を見たシャインが叫ぶ。

「『ノウオターフラワー』よ！花のくせに水が大嫌いで、かけられると、こうやって狂暴化しちゃうの！」

サナが説明しながら構える。

「ノウオターフラワー？『ノウオターフラワー』 『ノーウオターフラワー』 『No・Water・flower』！」

レビィがボンと手を叩く。

「ああ〜」

シャイン、スノウ、エアルが納得する。

「感心してる場合か！」

サナが即座にツッコむ。

「そうですよ。この状況はさすがにヤバイですよ。」

ヒューズが空間から弓矢を出し、構える。

「だな。今はこいつをぶっ倒す！」

シャインとレビィが刀を抜き、スノウはグローブをはめ、エアルは空間からピンクの杖を出し、全員構える。

「閃風波」！！」

三日月型の衝撃波が蔓を何本か切る。

「私も！」

レビィが漆黒のオーラを纏う。

「夜刀」！！<sup>やとう</sup>」

レビィが華麗に宙を舞いながら、蔓を切っていく。

「くらいやがれ！『ロックナックル』！！」

スノウが地面を殴ると、フラワーの下から無数の岩が現れ、攻撃する。だが、フラワーは怯みもしない。

「ちっ！」

スノウが舌打ちをする。

「貫け、『雷の矢』<sup>サンダーアロー</sup>！！」

ヒューズが放った雷の矢が、フラワーを貫く。

「『ホーリーソード』！！」

エアルが唱えると、数十本の光の剣がフラワーに突き刺さる。そして、ようやく少し怯んだ。

「終わりよ！『フレイム・ガン』！！」



サナが唱えると、大きな炎の銃弾が、ノウウオターフラワーを燃やした。そのままノウウオターフラワーはくずれていく。

「やったー！」

エアルとレビィがハイタッチをする。

だが、この騒動の中でこぼれたお茶が崖をつたって流れていく。そして、一番かかってはいけな花にかかってしまった。6人が喜ぶ後ろに不気味な影が現れ、6人が一斉に見ると、2匹目のノウウオターフラワーだった。

「な……」

シャインたちが戦闘体勢に入る前に、フラワーが蔓で6人を掴み、崖の方に放り投げた。

「うわあああああ！」

「キヤアアアア！」

6人は崖の底へと消えていった。

崖から落ちた6人は、全員気絶していた。その中で、シャインが気が付いた。

「い、痛って〜」

シャインは痛めた右腕を押さえながら起き、辺りを見渡す。

「何処だここ？」

そこは森というよりジャングルに近いぐらい生い茂っている。

すると、シャインの隣でレビィが気が付いた。

「う……痛った〜」

「レビィ！」

「シャイン！無事だったのね。」

レビィが立ち上がる。

「何処なのここ？」

レビィが尋ねる。

「分からねえ、フラワーの野郎に投げ飛ばされたまでは覚えてるん

だが。」

シャインが頭をかきながら言う。

「どうやらあそこから落ちてきたらしいわね。」

いつの間にか起きていたサナが崖を指しながら状況を整理する。

「あんなところから落ちてよく平気だったな俺ら。」

シャインが感心する。

「あんたたちも起きなさい。」

サナの言葉に残りの3人が起き上がる。

「で、ここはどっちなのですか？」

ヒューズがサナに尋ねるが、スノウが割り込む。

「どっちってどういう意味だ？」「ここには『セーフエリア』と『

アウトエリア』があるんですよ。ここがアウトエリアなら……」

ヒューズが説明していると、バキバキバキと木が折れる音がし、4

メートルはあるうかという虎の魔物が現れた。

「魔物がいるんですよ。」

ヒューズが説明を続ける。

「冷静に言ってる場合か……！！」

6人は全力で逃げ出した。

「ガアアアア！」

虎の魔物が追いかけてくる。

「この、『アイシクル』……！！」

サナが地面を凍らした。すると、そのエリアを踏んだ虎の魔物が思いつきり滑り転倒した。

「今のうち！」

6人は虎の魔物から全力で逃げた。

「はあ……はあ……ここまでくれば大丈夫だろ……」

シャインたちは虎の魔物から逃げ切り、森の中に流れていた川の近くで休んでいた。

「この水飲めるのかな？」

レビィが川に近づく。エアルも一緒についていく。

「うわあ〜キレイ〜」

レビィが言った通り、川はすごく透き通っており、顔を近づけると鏡のように映るぐらいキレイである。

「これだけキレイだったらいいんじゃない？」

エアルが川の水を飲もうとする。

「待って！今調べるから。」

サナがどこからともなく調査道具を取りだし、調べだした。  
数分後：

「分かったわ。」

「どうだった？」

エアルが尋ねる。

「この水、飲まない方がいいわ。」

サナが調査結果を報告する。

「どうして？」

「この水は『魔高水』<sup>まこうみづ</sup>と言って、魔力を一時的に高める水よ。」

「だったらいいんじゃないかねえのか？」

スノウが割り込む。

「ドーピングにみたいなものよ。あとからの副作用が大変なの。」

「どんな副作用？」

「効力が切れた時に自分が高まった魔力分だけ魔力が下がるの。」

「ふ〜ん…じゃあ飲まない方がいいわね。」

レビィが飲むのを止める。

「それより、今は自分たちの状況を理解することね。」

「どういうことだ？」

サナの言葉にシャインが尋ねる。

「食料もない。人もいない。魔物しかいないこの森にいますよ。すぐに助けが来ると思えますか？」

ヒューズが代わりに説明する。

「思わねえな。」

シャインが首を振る。

「しかも、夜もふけてきたし、夜の森を動くのは危険よ。」  
サナも加わる。

「じゃあ今日は野宿だな。」

少し楽しそうなスノウが割り込む。

「の、野宿……!?」

エアルが叫ぶ。

「仕方がないだろ。こんなとこにすぐに助けなんか来ねえし。」  
スノウが言う。

「冗談じゃないわよ！そんなのできるわけないじゃない！ね、レビィ？」

エアルが訴えてからレビィに聞く。するとレビィがエアルの肩を持ち、

「仕方がないよエアル。しよ、野宿。」

レビィの答えにエアルが肩をおとす。

「もう勝手にして。」

エアルがしぶしぶ承諾する。

こうして、6人のサバイバル生活が始まった。

## 6話 遠足がサバイバルに(1) (後書き)

ス「おっ！ついに俺達も後書きに出れるようになったか！」

エ「うん！そうだね！では早速次回予告といきますか！」

ス「早いな…」

エ「スタッフさんが「押してるから早くして。」って。」

ス「何だよスタッフって…」

エ「では次回予告。次回はシャインとレビィが××しちゃうんだよ。」

ス「決してエロくはないぞ。」

エ「では次回をお楽しみに！」

スタッフ「はいオーケーです。」

ス「声入っちゃった！」

## 7話 契りのキス(2) (前書き)

レ「ねえ、気になったんだけど、どうして6月に遠足があるの？結局話の中で言わなかったし。」

シ「ああ、それはな、6月ぐらいに遠足すると、みんな仲良くなれるんじゃない？ってこの校長が計画したそうだ。」

レ「簡単ね……」

シ「それに魔力も上がれば一石二鳥じゃない？とも言っていたな。」

レ「ここの校長って適当ね……」

シ「ま、そんなことより見てくれ。」

## 7話 契りのキス(2)

サバイバル生活をするはめになったシャイン達は、とりやえず寝れる場所を探すために夜の森を歩いていた。

「キレイ」

レビイが星が輝く夜空を見上げる。

「ちゃんと探せよレビイ。」

シャインがレビイに注意する。

「ごめんね。」

レビイが素直に謝る。

「おっ！あそこ使えるんじゃない？」

スノウが少し先にあるけっこう大きな洞窟を指す。

「ああいう洞窟って、たいてい何かいるパターンよね。」

エアルが言う。すると、シャインとスノウが洞窟に近付き、中に入っていた。

数分後：

「別に何もいなかったぞ！」

スノウがそう言うので、あとの4人が洞窟に近づく。そして洞窟に入ると明らかに戦闘した形式があった。

(絶対何かいたわね…)

レビイが言おうとしたが口には出さなかった。

「さて、今日はここで寝るしかないか。」

「ちよつと布団は？」

エアルが文句を言う。

「この森には大きな葉があり助かりました。」

ヒューズがおもむろに葉っぱを下に敷く。

「岩の上よりマシですよ。」

ヒューズが敷いた葉っぱに寝転ぶ。そしてエアル以外も葉っぱに寝転ぶ。エアルも観念して葉っぱに寝転び、6人は眠りについた。

昨日とは違ってかわって、空は鉛色になっており、今にも雨が降りそうな天気である。

（ふわ、嫌な天気ね。）

一番に起きたレビイが洞窟から出て、空を見上げる。

（助け、来るかな。）

「早起きだな。」声をかけられ、レビイが振り返ると、シャインが立っていた。

「いけない？」

レビイが聞くと、レビイに近づきながら、

「いや、別に。」

と、答える。そのまま2人は少しの間何も喋らず、ただ並んで魔高水が流れるのを見ていた。

【その者がお前が認めた主か？】  
（あー、）

「えっ!？」

突然声がして、レビイが辺りを見渡す。

「どうしたレビイ？」

シャインが尋ねる。

「ううん。何でもない。」

首を振り、笑って見せる。

（気のせいだったのかな？）

すると、あとの4人が起きてきた。

「さて、全員起きたことだし、食料調達に行きますか。」

スノウが言う。

「でもここを離れたらヤバくない？」

エアルが言う。

「そうね。じゃあ役割を決めましょう。」



そして、スノウとエアルが食料調達、サナとヒューズがこの辺りの調査と水探し、シャインとレビイがこの洞窟の見張りになった。

見張りになったシャインとレビイは別にすることもなく、シャインは葉っぱの上で寝ている。レビイは葉っぱの上に座っていた。

（あの声、何だったんだろ？）

レビイがさっきの声を考えていた。

【その者がお前が認めた主か？】

（さっきの声！）

レビイが辺りを見渡す。

「ねえ！あなたは誰なの！姿を見せて！」

シャインを起こさないように小さな声で言う。

【やれやれ、お前が早く『契り』をすれば私が出てくることはなかったんだ。

】

「契り？」

【自分の魔法も把握しておらんのか。】

「ねえ、ホントにあなたは誰なの？どこから言っているの？」

レビイが困惑している。

【質問が多いな、まあいい、言わなければうるさいからな。私の名はレビイ、『レビイ・サファイア』だ。】

「わ、私……」

【そして私はお前の心の中だ。】

「心の中……」

レビイが自分の胸に手をあてる。

【さて、もういいだろ。少しの間お前の体を借りるぞ。】

「えっ！？あ、え、ちょ、どういうこと！」

すると、レビイは突然意識が遠のき、倒れてしまった。その音にシャインが起きた。

「おい、大丈夫か？」

シャインが倒れたレビィに近付く。すると、レビィが何事もなかったように起き上がる。

「大丈夫。」

笑顔で答える。

「そうか。」

シャインが元いた場所に戻ろうとするのを、レビィが腕を掴む。

「待って、シャイン。」

「な、何だよ。」

少しシャインが照れる。するとレビィが立っていたシャインを強引に倒し、上から四つん場に乗る。

「レ、レレレレ、レビィ!？」

シャインが困惑と興奮の狭間の気持ちで、今の状況を必死に整理しようとする。

「じつとして…」

レビィがシャインの顎をクツと上げる。

「レ、レビィ…」

何も抵抗できないシャインにレビィの顔、いや、正式に言う唇が近付いていく。そしてシャインとレビィの唇が間近になった瞬間、

「あれゝ2人とも何やってるの?」

エアルとスノウが帰ってきた。

「ちっ。」

レビィが舌打ちした瞬間に、フツと気を失い、シャインに倒れこむ。それをシャインが受け止める。その数秒後にレビィがハッと目を覚ました。そしてシャインの顔が目の前にあるのに気が付き、顔を真っ赤にして、

「な、何してんのよ!」

思いつきりビンタした。

「いつてー!ー!何すんだ!」

シャインが怒るのを無視して、レビィはシャインから離れる。

（ど、どうなってるの！なんで気が付いたら目の前にシャインがいるのよ！）

ドキドキしている胸を押さえながら、レビイがアワアワしている。

「おいおい、恋愛に興味ないと思ったら以外といけるじゃないか。」

スノウがシャインをバシバシ叩きながら茶化す。

「ち、ちげーよ！どう見たって俺が襲われていただろ！それより食料はどうなったんだ？」

シャインが話を変える。

「それは大丈夫だ。マンモスピッグがいてな、3匹ほど狩ってきた。」

スノウが指を指す方向に、3匹のマンモスピッグが倒れていた。

「あら、みんな帰ってきていたんですか。」

そこに、サナとヒューズが帰ってきた。

「これを、向こうに川が流れていたからくんできました。」

ヒューズが1人ずつに、水が入っている竹の水筒を渡していく。

「あれ？レビイどうしたんですか？」

ヒューズが洞窟の奥にいるレビイを見る。

「あー気にしないでくれ。」

シャインが言う。

「とりやえず、ご飯にしょ。私お腹へった」

エアルが言うので、6人はマンモスピッグの肉を焼いて、昼食を済ました。

そして別に何も起こることなく、夜になった。

5人が寝たのを確認してから、レビイは1人で魔高水の近くにあった少し大きい岩に座り、流れるのを眺める。

（私、どうしちゃったんだろ…）

レビイがため息をついていると、

【何をしている。早くあの主と契りを交わさないか。】

もう1人のレヴィが現れた。

「あんたでしょ、シャインに何しようとしたの？」

もう驚かなくなったレヴィが自分の心の中に尋ねる。

【お前が早く契りをせんから、私がしようとしたただけだ。】

「自分でやってよ。」

【言っただろ、私はお前だ。】

「私の体よ！私の許可とりなさいよ！」

2人（？）が言い合っていると、

「1人で何言ってるのよ？」

サナが近付いてきた。

「え、あ、別に何にもないよ。ただの独り言。」

レヴィが誤魔化す。

「ふーん…誰かと言い合っているとしか見えなかったけど？」

サナが茶化す。

「それは…」

レヴィが言い訳を考えていると、

「別に隠さなくてもいいわよ。」

「えっ？」

サナの言葉にレヴィがキョトンとする。

「出てきなさい、私はあんたと話したいの、レヴィのもう一つ的人格さん。」

サナの挑発ぎみの言葉で、レヴィの人格が変わり、さっきまでレヴィの心の中にいたレヴィになった。

「なぜこの女にもう一つ人格があると分かった？」

「本で読んだの。あと、悪いけどあんたがシャイン襲っているところ見ちゃったし。」

サナが理由を説明する。それを聞いたレヴィがニヤリと笑い、  
「なるほど、正解だ。だが、このことをあの男に言われると困るのだ。」

「言っわけないじゃない。さっさと契りなさいよね。」

サナが帰ろうとするとレヴィが後ろから、

「私も『言わない』方がいいか？」

と、耳元で囁く。

「な…あんだ…『気が付いた』わね。」

「大丈夫だ、お前達が知っているレヴィは知らない。知っているのはこの時のレヴィ、つまり私だけだ。」

レヴィが意味深な微笑をうかべる。

「言われたら困るわね。」

サナが微笑で返す。

「わかった。」

そう言つてレヴィは先に洞窟に戻った。サナも後を追うように洞窟に戻った。

サバイバル生活2日目、やっぱり最初に起きたのはレヴィであった。

（何で私…洞窟にいるんだろ？）

レヴィが洞窟を見渡す。

（！ またもう1人の私ね。）

【よく分かったな。】

（やっぱり、また何かしたんじゃないでしょうね？）

【また何かして欲しかったか？】

（やめて。）

2人が話していると、

「ガルルル…」

どこからか野獣の唸り声が聞こえてきた。その声にあとの5人が起きてきて、6人は警戒体勢にはいる。

「何だ今の唸り声？」

シャインが刀を抜きながら、洞窟の外に出る。それに続き、あとの5人も外に出る。すると、森の奥からバキバキと木が折れる音がし、

突然何かが飛び出してきた。そして、洞窟の入り口を破壊した。

「洞窟が！」

そして破壊された洞窟の前にいた黒く、赤い目をした魔物を見て、シャインとスノウがガクガクと震えていた。

「どうしたのシャイン、スノウ？」

エアルが尋ねる。

「な、何でこいつが現実世界にいるんだ？」

「俺こいつのG級で負けた。」

「だから何なのあの魔物！」

2人だけで話しているシャインとスノウにエアルがイライラする。

「あ、あいつはモンスターハンターに出てくるモンスター、『ナルガクルガ』！」

「ゲームのモンスターが何でここにいるのよ？」

エアルが尋ねる。

「さしずめ、このモンスターをモデルにしたんでしょ。」

サナが答える。

「しかしそっくりだな。」

シャインが感心する。

「で、こいつは強いんですか？」

ヒューズが尋ねる。

「まあな。」

すると突然ナルガクルガが襲いかかってきた。6人は紙一重でかわす。

「『爆風刃』<sup>ばくふうじん</sup>！！」

シャインが刀を振った瞬間、爆風がおこり、ナルガクルガを吹っ飛ばした。

「『ライトニング』！！」

サナが唱えると、ナルガクルガの頭上から一本の雷が落ちた。すると、ナルガクルガの目付きが変わった。

「キレた！」

ナルガクルガの尻尾がスノウに直撃し、吹っ飛んだ。

「スノウ！」

シャインがスノウを助けようとする、ナルガクルガの腕により地面に叩き付けられた。

「がっ……」

シャインの意識が飛びかける。

「シャイン！」

レビイが助けようすると、

【待て。】

もう1人のレビイが止める。

「何よ！早く助けないと……」

【落ち着け、この場面でナルガクルガを倒せるのはお前だけだ。】

「どういう意味？」

【私に体を貸せ！そうしたら6人とも助かる！】

「え、え、」

レビイの許可を待たずに、もう1人のレビイは体に乗っ取った。そしてレビイはシャインに近付いた。だが、ナルガクルガが2人に向かって突進していく。

「「ストライクアロー」！！」

ヒューズが放った矢が、ナルガクルガの足を射ぬいた。するとナルガクルガが標的をヒューズに変えた。

「大丈夫シャイン？」

その隙にレビイが尋ねる。

「あ、ああ……骨何本かやられたがな……」

シャインがヨロヨロと起き上がる。

「シャイン、ナルガクルガは私1人で倒す。」

「バカ言っつな……」

「そのためには、『本来の力』を目覚めさすしかない。」

「お前……何言っつてんだ？」

シャインが不振に思う。

「じつとして。」

レビィはシャインの顎をクツと上げる。

「レ、レビィ!？」

すると、シャインの唇に柔らかいレビィの唇があたった。両方のフアーストキスだった。その瞬間を見たあとの4人が戦闘中だが完全に固まった。

キスをした瞬間、レビィの体から今まで見たことない黒いオーラを纏っている。青空のような青い瞳は、薔薇のような赤い瞳となっており、髪も綺麗な紺から黒へと変化していた。

「さがっている。」

そう言うレビィの目は、獲物を狩る獣のような鋭い目付きになっていた。

「レ、レビィ…?」

シャインが困惑する。



## 7話 契りのキス(2) (後書き)

サ「あれ？今回は私達がやんの次回予告？」

ヒ「そのようですネ。」

サ「そう…じゃあさつさとしましょ。」

ヒ「そうですね。今回は覚醒したレビィの説明が中心ですね。戦闘

サ「次回をお楽しみに。」

ス（2人がやると静かだな）

## 8話 主と夜叉(3) (前書き)

ス「さて今回は遠足編最後だぜ。」

エ「ついにあの2人しちゃったね。」

ス「さすがにビビった。」

エ「じゃあ今回は説明が多いけど、分からないところがあったらごめんなさい。感想で質問してくれたら答えますよ。では、見てくださ  
い！」

## 8話 主と夜叉(3)

「さがっている。」

そう言うレビイの目は、獲物を狩る獣のような目付きになっていた。

「レ、レビイ…?」

シャインが困惑する。

「ガアアアア!」

そこにナルガクルガが襲いかかってきた。

「危ねえ!」

スノウ達がヘルプに入ろうとするが、もう間に合わない。するとレビイがおもむろに刀を抜く。

「夜刀、<sup>むげっ</sup>「無月」!」

目に見えないスピードで、ナルガクルガを切りつけた。そして、刀を鞘に納めた瞬間、ナルガクルガが真つ二つになり、消滅した。

「つ、強い…」

シャインが驚きを隠せない。

レビイはシャインに近付き、膝をつき、頭を下げた。

「無事でなによりです、我が主。」

「どうしたんだよレビイ…?」

シャインが不振に思う。

「頭を上げないレビイ。事情が分からないシャインにそんなことをしてもパニックになるだけよ。」

サナが間に入る。レビイが頭を上げ、立ち上がる。そこにあとの3人も集合する。

「事情ってどういうことだ?」

シャインが聞く。

「ちゃんと説明するわ。」

サナが説明を始めた。

「まず夜叉族について説明するわね。夜叉族は大昔にいた戦闘種族で、その圧倒的な力でほかの民族を支配していたんだけど、ある弱点があったの。」

「弱点？」

エアルが首を傾げる。

「主という存在がなければ我々夜叉族は本来の力を使うことができないのだ。」

レビィが代わりに答える。

「なんで？」

「我々夜叉族は主を守るのが使命なんだ。そしてその主と契り、つまりキスをすることで力が引き出せるのだ。」

「ふん…」

エアルが頷く。

「待て！じゃあ俺はレビィと…その…キ、キスしたから俺はレビィの主になった、てことか？」

少し顔を赤らめてシャインが聞く。

「そう言うことだ。」

レビィが頷く。

「うわゝ同級生が主って変な感じだね。」

エアルが苦笑いする。

「主になるためには3つの条件が必要なんだ。 1つ：自分が男なら女、女なら男と契る。 2つ：主が魔法が使える。 3つ：その主は自分が認めた男、女である。 の3つだ。」

レビィが説明する。

「待て、1つ目と2つ目の意味は分かるが3つ目ってどういう意味だ？」

シャインが尋ねる。

「つまり『好きな』人間であるということだ。」  
レビィの言葉に、

「つまり…」

「レビイは…」

「シャインのことが…」

「好きだったってこと！」

サナ、ヒューズ、スノウ、エアルの順に驚いていく。

「マ、マジかよレビイ…」

シャインが顔を真っ赤にしていると、

「知らんわ、私ではない。」

レビイがそっぽ向く。すると、今のレビイの言い方にエアルが疑問に思った。

「さっきからずっと気になっていたんだけど、今のレビイいつものレビイって、性格どころか人そのものが違うよね？」

「どういう意味だ？」

レビイが首を傾げる。

「だって今『私ではない』って言ったじゃん。ということとは今のレビイいつものレビイが別人だって言ってるもんじゃない。」

「まあな、今この会話はお前達が知っているレビイには聞こえてはいない。」

レビイが答える。

「つまり、私達が知っているレビイとあんたは体だけ一緒であとの思考や能力は全くの別人ってことね？」

サナの言葉にレビイが頷く。

「なんかややこしいね。話している時、いつものレビイや今のレビイって分けなきゃいけないし。」

エアルが言う。

「だが、レビイはレビイだ。レビイと呼べばいいんでないか？」

レビイの提案に、

「でも全くの別人なんでしょ？」

エアルが否定する。

「ではどうするんだ？」

「名前変えるってのはどうだ？」

シャインが突然提案する。

「それいいね！」

エアルが賛成する。

「では私達が知っているレビイはレビイでいいと思いますが、今の状態のレビイは何と呼ぶんですか？」

ヒューズがシャインに尋ねる。

「うーん……………！ 『ナイト』ってのはどうだ？」

「騎士という意味か？」

レビイが尋ねる。

「ちげえよ。『夜叉』『夜』『night』『ナイト』って

という意味だ。」

シャインが説明する。

「いいねそれ！それにしよ！」

エアルがノリノリだ。

「まあ、別に私はなんでもいいが。」レビイが承諾する。

「じゃあ決定ね。」

こうして夜叉モードの時のレビイはナイトと呼ぶことになった。

「話が少し脱線したけど分かった？」

サナが4人に尋ねる。

「夜叉族は自分で主を見つけ、その主に仕え、守るのが使命。」

「そしてその主と契り、つまりキスすることにより自分の力を解放できる。」

「そして主の条件は自分が好きな人。」

「そしてその主というのが、この俺……」

スノウ、ヒューズ、エアル、シャインの順にまとめていく。

「そう。」

サナが頷く。

「もう驚かないのシャイン？」

エアルが尋ねる。

「驚いてもなんもなんないだろ。」

シャインが頭をポリポリかく。

「じゃあ主になること受け入れんのね？」

サナが尋ねる。

「なっちまったのはしゃーないからな。」

シャインが承諾する。

「実はキスしたことまんざらでもなかったんだろ？」

スノウが茶化す。

「べ、別にそんなんじゃないねえよ。」

シャインが必死に言い訳する。

「さて、そろそろ魔力が切れそうだ。サファイアの方に戻るから説明しといてくれ。」

「消えちまうのか？」

「違う。心に戻るだけだ。」

そう言つてレビイはパツツと気を失い、髪が黒から紺に戻つた。

「う、うゝん…何がどうなつたの？」

レビイが気が付き目を開けると、瞳も赤から青に戻っていた。

「とりやえず説明するわ。」

サナは何がなんだか分かつていないレビイにさっきまでの出来事を説明した。

「わ、私とシャインがキ、キスをして主と夜叉で…」

レビイは完全パニック状態になつた。

「落ち着けよレビイ。」

シャインがおさめる。

「だ、だって私とシャインは主と夜叉の関係になつたのよ。ギクシヤクシちゃうじゃない。」

レビイがモジモジする。そんなレビイにシャインが手を差し出す。

「主と夜叉の関係になつても俺は俺、お前はお前のままだろ？それでいいんじゃないか？」

「う、うん！」

レビィが差し出された手を握る。

「さて、いろいろありました。今日で終了らしいですね。」

ヒューズがそう言いながら洞窟の外を見る。あとの5人も見ると、森の奥から先生達がこちらに向かって来ていた。

「みんな無事ですかー！」

その中からナナリー先生が叫ぶ。

そして6人は先生達に保護され、無事に龍空高校に帰ることができた。

次の日、レビィは何事もなかったように自分の席に座って、エアとサナと話していた。

「たく、好きな人がいるなら気を付けろって言ったのに。」

サナが怒る。

「そういう意味だったんだね。」

レビィが登山をしている時にサナに言われた言葉の意味を知って納得する。すると、

「だが私には早く契れと言ったではないか？」

突然レビィの人格が変わった。

「ナイト、学校では出てきちゃダメでしょ。」

エアルが注意する。

「少し気になっただけだ。聞いたら帰る。」

「いや、最初は面倒になりそうだなと思ったんだけど、後々考えれば契った方が強くなれるかなって思っただけ。」

サナが理由を答えると、

「そうか。」

そう言ってサファイアに戻った。

「また勝手に出てきたのね…」

レビィが呆れる。



「で、実際どうなの？」

ズイツとエアルがレビイの顔に近付ける。

「な、何が？」

「シャインのことだよ。好きなの？」

エアルの目がキラキラと輝いている。

「べ、別に好きって訳じゃなくて、あの、その…」

顔を真っ赤にしてレビイが言い訳する。

「でも好きじゃなきゃ、契った時に力なんか解放しないわよね。」

サナに言われ、レビイが諦める。

「でもホントに好きって訳じゃないのよ。何て言うか…守りたい人って感じ？」

レビイが最後の言い訳を言う。

「なにそれ？」

3人が笑っていると、

「朝っぱから元気だな。」

シャインが登校してきた。

「シャ、シャイン！あ、あのーお、おはよう。」

レビイが照れながら挨拶する。

「ああ。おはよう。」

シャインはいつもと変わらない感じで挨拶し、自分の席に座り、2秒で寝た。

「こ、こいつ学校に何しにきてんねよ…」

サナが呆れる。

「なんだかんだで意識してんじゃん。」

エアルがツンツンとつつきながら茶化す。

「う、うるさい！」

レビイが照れながら怒る。

レビイの高校生活は荒れていきそうです。

## 8話 主と夜叉(3) (後書き)

シ「……」

レ「……」

ス「何か喋るよ2人とも。」

エ「そうだよ。次回予告しなきゃ。」

シ「……」

レ「……」

ス「ダメだなこりゃ。」

エ「じゃあ私が代わりに、今回は迷子の子を助ける話だよ。」

ス「ガラツと話の感じが変わるな。」

エ「休憩話みたいなものだって。」

ス「ふん……」

エ「では、次回もお楽しみに！」

シ「おっしゃー俺の勝ち！」

レ「ま、負けた……」

ス「て、お前らただテトリスしてただけかよ！」

エ(テトリスってそんな無口になる……?)

## 9 話 迷子の家探し（前書き）

レ「ここで少しお詫びをしたいと思います。」

シ「投稿した話の中に行替えをミスっているのがあるのに気が付いたので、お詫びします。」

レ「さて、気分を変えて行きましょう!」

シ「今回は休憩話だけど、少し関わりのある話だぜ。」

レ「では見てください!」

## 9話 迷子の家探し

遠足事件から数日たった。期末テストも終わり、夏休みまでもうすぐの暑い日の話である。

「あつちい」

サウナのような暑い教室の中でシャインがダラダラと汗を流したがボヤク。

「もう7月だからね。」

レビィもさすがにバテている。

「さっさと掃除終わらして帰ろうぜ。」

「そうだね。」

2人は掃除当番をちゃっちゃと終わらして、教室を出た。

「あれ？寮じゃないの？」

レビィが正門から出ようとするシャインに尋ねる。

「ああ。久しぶりに帰ろうかなと思ってな。」

「ふん…あつ！シャインの帰る方向にコンビニない？」

レビィがもうひとつ尋ねる。

「あるけど、何か買うのか？」

「ちよつとコピーしたいものあるから。」

「ふん…」

2人はレビィのコピーのためにコンビニに向かった。

2人がコンビニに着いた時、しくしくと泣いている声が聞こえた。  
「どこだ？」

シャインが辺りを見渡す。

「あつ！あそこ！」

レビイがコンビニの隅っこを指すと、そこには泣いている6歳ぐらいの男の子がいた。

「どうしたの？」

レビイが近付き、同じ目線になるように屈む。だけど男の子は泣き止まない。

「大丈夫、私達は君の味方だよ。」

レビイがニッコリ微笑む。それを見た男の子が一瞬泣き止んだが、また泣いてしまった。

「どうしよう、泣き止んでくれない。」

レビイがシャインに助けを求める。

「たく……」

シャインはレビイをどけて男の子の前に屈むと、ガツと頭を掴んだ。男の子はビクツと怯える。

「ちよつとシャイン！」

シャインの行動にレビイが慌てる。

「泣くな、男だろ。」

シャインはその一言だけ言い、ジッと男の子の目を見る。すると、男の子は泣き止んだ。

「よし。」

シャインはニヤツと笑い立ち上がる。

「すごいねシャイン。」

レビイが耳元で囁く。

「こういうガキはテレビゲームとかのキャラに憧れるから、そいつらが言いそうなセリフが一番ガキに響くんだ。」

シャインが囁き返す。

「へえ」

レビイが感心する。

「おし、とりやえず泣き止んだから名前教えてくれ。」

シャインがまた屈む。

「リウド。」

男の子がボソツと呟く。

「リウドか、いい名前だ。俺はシャイン、こっちがレビィだ。」  
シャインが自己紹介する。

「シャインお兄ちゃん、レビィお姉ちゃん？」

リウドが繰り返す。

「そうだ、よろしくな。」

リウドがコクツと頷く。

「さてリウド、お前自分の家の場所分かるか？」

シャインの質問にリウドがフルフルと首を振る。

「黒い猫追いかけていたら、全然見たことない場所にいたの。」

リウドが事情を説明する。

「全く分からないの？」

レビィが尋ねると、リウドが頷く。

「そうか、じゃあこの周辺歩いてみるか。」

シャインがリウドを連れて歩きだしたが、レビィが止める。

「待って、コピーだけさせて。」

そう言っただけでレビィはコンビニに入ってしまった。残された2人はやることもないから素直に待つことにした。

数分後、コピーを終えたレビィがコンビニから出てくると、缶ジュースを片手に2人が待っていた。

「あ、ズルい2人とも、私だって喉乾いてるのに。」  
レビィがムツと怒る。

「そう言っと思って買っておいだ。」

シャインがホイとジュースを渡す。

「何よ、あるならあるって言いなさいよ。」

レビィが素直に受け取る。

「さて、じゃあ、行きますか。」

飲み干した缶ジュースを後ろに投げて見事にゴミ箱に入れ、歩き出す。

「うん。」

レビィとリウドがシャインに付いていく。

リウドの家を探すため、シャイン、レビィ、リウドは少しオシャレな住宅街を歩いていた。

「ここらへん見たことあるなと思ったなら言えよリウド。」

シャインが少し後ろをレビィと手を繋ぎながら歩いているリウドに忠告する。

「うん。」

リウドが頷く。

「ねえ、レビィお姉ちゃん、シャインお兄ちゃんとチューしたの？」  
ストレートな質問にレビィが顔を赤くする。

「ど、どうして、そ、そんなこと聞くの？」  
慌てふためくレビィ。

「だってレビィお姉ちゃん、シャインお兄ちゃんと仲良しだからしたのかなって思っで。」

レビィは無邪気な笑顔を見て、返す言葉を悩む。

「リウド！男なら察しろ。」

シャイン誤魔化すように注意する。

「わかった。」

リウドが素直に頷く。

「で、ここらへんは見たことあるか？」

シャインがリウドに聞くと、リウドは首を振る。

「そうか…場所変えるか。」

そう言っでシャイン達は場所を変えた。

次に向かったのは金八先生のオープニングに出てくるところにそっくりな土手を歩いていた。

「キレイな川ね。」



レビイが感動する。

「ここらへん見たことある。」

リウドが思い出す。

「ホントか！」

シャインが喜ぶ。

「うん。ここ学校に行くときに通る。」

リウドが説明する。

「そうか、じゃあ家は近くだな。」

3人が歩いていると、川から突然水柱が立った。

「な、何！？」

レビイとリウドが怯えていると、

「お前からここにいろ！」

そう言つてシャインは川に走り出す。川に近付いたシャインは川を覗く。

（別に何もいないな…）

シャインが調べていると、隣に土手で待っているはずのリウドがいた。

「リウド！待ってるって言っただろ！」

シャインが怒る。そこにレビイも来た。

「レビイ！ちゃんとリウドのこと見とけよ！」

シャインがレビイにも怒る。

「ゴメン。頑張つて止めたんだけど…」

レビイが謝る。

「まあいい。」

シャインが調査を再開する。

「それで何か分かった？」

レビイが尋ねると、シャインが首を振る。そしてレビイも加わり、2人で調べる。リウドも2人のマネをして調べていたら、川の中に何かウネウネ動いている物を見つけた。

「ねえシャインお兄ちゃん！ここに何か…」

リウドが2人に知らせようとした瞬間、川からウネウネ動いていた物がリウドを掴み、川に引きずり込んだ。落ちた音でシャインとレビイが気が付いた。

「リウド！」

シャインが靴を脱ぎ、急いで川に飛び込んだ。レビイは上で待つしかなかった。

飛び込んだシャインはリウドを掴んでいる物を見て驚いた。

（タコ！？）

その正体は、3メートルぐらいはあるかのタコだった。

（なんでタコが川に…）

そんなことを考えながら、シャインはタコに近付く。

（この野郎、リウドを離せ！）

シャインがタコからリウドを離そうとすると、タコがシャインを吹っ飛ばす。

（離せ！）

シャインは怯まず、リウドに絡まっている足をほどこうとする。だがなかなか取れない。

（離せって言ってんだろぅが！）

次の瞬間、シャインの目付きが変わり、レビイに似た、黄緑色のオーラが現れた。

（だから…離せって言ってんだろぅがー！）

そしてシャインがキレた瞬間、オーラが立ち上る。上にいたレビイが驚く。

（風の…柱？）

レビイが立ち上る風の柱を見ると、川からタコが飛び出してきた。

「『オクトパン』！？」

レビイが打ち上げられたタコを見て驚く。

「シャインとリウドは！？」

レヴィが慌てて川を覗いていると、

【今はこのタコを倒す方が先だ。】

「ナイト！？……でも、そうだね、頼むわ。」

そう言っていると、レヴィの髪が黒くなり、瞳が赤く染まった。

「行くぞ！オクトパン！」

レヴィ・ナイトは地面を蹴り、タコに突進する。

「<sup>げっ</sup>「月牙」……」

ナイトが一瞬でタコの後ろに回り込み、一太刀をあびせた。

「夜刀、「無月」……」

立て続けに、目に見えないスピードで強烈な一太刀をあびせた。そして、鞘に納めた瞬間、オクトパンは真つ二つになり、消滅した。

「終わったか。」

ナイトがふう〜と息をついていると、

「ブハア！……ゴホ……ゴホ……ハア……ハア……」

川からシャインがリウドを抱え上がってきた。

「我が主よ、無事であったか。」

ナイトがホツとする。

「リウドは無事か？」

ナイトが心配する。

「大丈夫だ。すぐ気を失ったらしく、あまり水を飲んでいねえ。」

シャインが説明しながら濡れた服を脱いで絞る。

「ん？サファイアに戻らないのか？」

シャインが尋ねる。

「やはり、サファイアの方がいいのか？」

意外な質問にシャインが少し驚く。

「いや、サファイアでもナイトでもレヴィはレヴィだからな、どっちがいいとかないけど。」

シャインがまだ少し湿っている服を着ながら答える。

「そうか、それならいい。」

そう言つて、ナイトとサファイアが入れ替わった。

「また変な質問して。」

レヴィ・サファイアがナイトにムツとする。

「聞いていたのか？」

「うん。ナイトがそうしてくれたの。」

2人が話しているとリウドが気が付いた。

「気が付いたかりウド。」

シャインがホツとする。

「シャインお兄ちゃん？」

リウドがシャインを見つめる。

「そうだ。」

そうしていると、1人の女性が近付いてきた。

「リウドー！」

その声にリウドはパツと明るくなり、すぐに立ち上がった。

「ママー！」

リウドが女性に走り出し、抱きついた。2人は母親を見た瞬間目を丸くした。

「ナナリー先生！？」

なんと母親の正体は自分達の担任、ナナリー先生だった。

「あなた達！」

ナナリー先生も2人の存在に気が付き驚く。

「リウド君ってナナリー先生の息子さんだったんですか。」

レヴィがナナリー先生に事情を説明する。

「そうだったの。ありがとう2人とも。」

ナナリー先生が頭を下げる。

「いやいや、国語の単位少し上げてくれればいいだけですよ。」  
シャインがニヤリとする。

「それとこれは別の話。」

ナナリー先生がキツパリと言い、シャインがしよげる。

「でも本当にありがとうね。ほら、リウドもお礼言いなさい。」

「ありがとう、シャインお兄ちゃん、レヴィお姉ちゃん！」

「うん。」

「もう迷子になるなよ。」

シャインとレビイは手を繋ぎながら帰っていく親子を見送った。

「さて、俺らも帰るか。」

シャインが帰ろうとするので、レビイが慌てて止める。

「待ってシャイン、あなたオクトパンをどうやって打ち上げたの？」

「オクトパン？」

「さっきのタコ。」

「あゝあいつか、それが俺にもよく分からねえんだ。いつの間にか目の前にいないから、とりやえず川から出ようと思って出てみたら、お前がタコを倒していたんだ。」

シャインが説明を聞いて、レビイは首を傾げた。

（あれ？シャイン、あの風の柱に気が付いていないの？じゃああれは無意識に放ったのかな？）

「どうしたレビイ？」

いきなり悩むレビイにシャインが尋ねる。

「ううん、なんでもない。」

レビイが笑って誤魔化す。

「そうか、じゃあ俺は帰るから気を付けて帰れよ。」

そう言い残して、シャインは自分の家に帰っていった。レビイもさっきの風の柱について考えながら自分の家に帰っていった。

そして、さっきの風の柱を見たのはもう1人いた。

「ナハハハハ、偶然通りかかったただけなのにいい収穫しちゃったぜ。」

それは桜色の髪のカラウドだった。

「これは面白くなりそうだ。」

カラウドは笑いながら何処かに行ってしまった。

## 9話 迷子の家探し（後書き）

ス「さて次回はいよいよ夏休みだぜ！」

エ「何しよっかな」

シ「俺はプールに行きたいな。」

ス「いいねプール！ビキニだろ、ビキニだろ、ビキニだろ…」

サ「変態。」

ス「ガーン…」

シ「で、次回は何なんだ？」

ヒ「次回はなんと、そのプールの話です。」

ス「マジ！？」

ヒ「女性人の水着姿を拝めますね。」

シ「活字だから読者には分らんがな。」

ス「俺達が拝めたらいいんだ。」

ヒ「そうですよ。」

レ「男の子って…」

ス・ヒ「では次回をお楽しみに！」

## 10話 夏休みいんプール（前書き）

シ「祝10話ー。」

ス「暗いわ！」

シ「だってお前、10話なのに別にメインの話に関係ない話ってどないよ。」

ス「それはそうだけど…」

ヒ「でも今回は女性人の水着が見れますよ。」

ス「そうだ！テンション上げて行こうぜ！」

ヒ「もしかしたらポロリがあるかもしれませんよ。」

ス「オォー！ポロリ！」

シ「！！」

ヒ「もしかしたら×××も見れるかも。」

ス「オォー！」

サ「「ライトニング」ー！」

ス・ヒ「ギャー！」

シ「……………では見てください。」

## 10話 夏休みinプール

「おめでとうございまーす!」

白いテントの下でベルがカランカランと響く。

「金賞は『ドリームプール』のペアチケットです。」

差し出されたチケットを見て、

「ペア…チケット…」

と、レビイが呟いた。

暑い日差しの中、新しくできたプール施設、『ドリームプール』の入口にシャインとレビイが立っていた。

「で、なんで俺なんだ?」

シャインが尋ねる。

「暇なんでしょ? だったらちよつとぐらい付き合つてよ。」

レビイが怒る。

「あのなレビイ、俺だって予定というものがあるんだ。誘うんだつた女友達を誘えよ。」

「男女ペアしか有効されないの。」

レビイがチケットを見せる。

「とにかく行きましょう。」

「まあ、来ちまったからには遊んでくか。」

シャインも観念して、2人は入場した。入った2人はそれぞれ更衣室に入って水着に着替える。レビイは水着に着替えながら内心ヤツタと思っていた。

（これって、デ、デートだね。わあ、なんか緊張してきた。でも、今日は2人で楽しむんだ!）

水色の白い水玉のビキニに着替えたレビイはルンルン気分で待ち合わせの場所に向かった。



今日は2人で楽しむんだというレビイの願いは待ち合わせの場所に着いたとたん、はかなく散った。

「お、きたかレビイ。」

待ち合わせの場所には普通はシャインしかないのだが、そこに2人追加されていた。

「レビイー！」

レビイに抱き付いてきたのは黒い大人びた水着を着けたエアルだった。

「な、なんでエアルがここにいるの？」

抱き付いているエアルに尋ねる。

「実は私達も当たったんだペアチケット。」

エアルがもう1人いた男、スノウを指しながら答える。

「私達じゃなくてお前が当てて、俺は無理矢理連れてこられたんだ。」

スノウが訂正する。

「俺と一緒にだな。」

シャインとスノウがガシツと握手をした。

「一緒に遊ぼうレビイ！」

エアルが提案したのでレビイは承諾したが、内心はすごく落ち込んでいた。しかも、

（改めて見ると、大きいな…）

体育の時とかに見ていたけど、水着になるとさらにわかるようになって、自分のと比べて余計落ち込んだ。

ちなみにレビイはBでエアルがDである。

レ・エ「言わない！」

失礼しました。

4人が普通のプールで遊んでいると、プールサイドに見たことある女子を見つけた。

「ねえあれ、サナじゃない？」

「サナだあ？」

レビィに言われシャインを見ると、確かにサナだった。

「ホントだ。」

「おーい、サーナー。」

エアルが手を振りながらサナを呼ぶ。サナは呼ばれた方を見ると、そこには会いたくなかったメンツがいてサナが驚く。

「な、なんであんだ達がいんのよ！？」

スクール水着型の青色の水着のサナが片手に浮き輪を持ちながら近付く。

「ペアチケットが当たったから。」

レビィが答える。それにスノウとエアルが同じくと手を上げる。

「サナはなんでいるの？」

当然のごとく聞かれる質問にサナが戸惑う。

「私は…ただ涼みにきただけよ。家に居ても暑いだけだし、宿題も終わっているし。」

「マジか…まだ夏休み始まって1週間だぞ…」

シャインとスノウが驚く。

「でも1人で？」

エアルが尋ねる。

「そ、そうよ。悪い？」

サナがムスツとする。

「別に悪くはないけど、じゃあサナも一緒に遊ぼう！」

エアルが誘うが、サナが断る。

「えゝなんで？」

エアルとサナが言い合っているの見ていたシャインが浮き輪に年が入っているのに気が付き、ピンと閃いた。

「ひょっとしてサナ…泳げないのか？」

図星だったサナは固まり、変な汗が出ている。

「ち、違うわよ！私はただ…あの、その…」

完全にテンパっているサナを見て、シャインがハアとため息をつく。  
「泳ぎは自分だけで身に付けれるわけないだろ。俺が教えてやる。」  
思いがけないシャインの言葉にサナが顔を真っ赤にする。

「ほら、早くプールに入ってこい。」

仕方がなくサナはプールに入ると、シャインの泳ぎ方講座が始まった。その光景を見て、レビイが完全に嫉妬している。それに気が付いたエアルが「あっちのウォータースライダーに行こ。」とレビイを連れていった。1人になったスノウは別にすることがないのでシャインの泳ぎ方講座を眺めていたら、

「あら、サナが来ていたのは知っていましたか、あなた達も来ていましたか。」

突然上から話しかけられたので見てみると、そこには水着のヒューズが立っていた。

「ヒューズ！お前も来ていたのか！……なんだそのＴシャツ？」  
スノウはヒューズが着ている『管理人』と書いてあるＴシャツを指す。

「見ての通り管理人のＴシャツです。」

「いやそんなでかどかどか管理人って書かれてもな…」

「私今このプールの管理人の短期バイト中です。」

「お前ここで働いているのか！？」

「ええ。」

「じゃあそのＴシャツはここのか。」

スノウが納得していると、

「いえ、これは自前です。」

と、ヒューズが訂正した瞬間、2人は数秒間見つめ合い、

「あつそ…」

スノウが呟いた。

エアルと嫉妬中のレビイはウォータースライダーの順番待ちをしていた。

「何よシャインの奴。」

レビイがブツブツと念仏のように愚痴っている。

「レビイ、そんなに気にしない方がいいって。ほら、シャインって恋愛に興味ないからさ。」

エアルがなだめる。

「でも事故だとしてもキ、キスしたんだよ。それなのになんで平然といられるのよ！」

レビイの嫉妬が徐々に怒りに変わっていく。

「なんだかんだでやっぱり好きなんだ。」

エアルが少し茶化すと、

「だから違うつて！好きとかそういうのじゃなくて、こっつ、守りたい、守ってあげたい人って感じなの！」

ほぼ八つ当たりになっている。

「その守ってあげたいってどういう意味？」

エアルが尋ねる。

「正直私だつて分からない。でもそう表現するのが一番かって。」

【夜叉の本能かもしれない。】

突然割り込んできたナイトに、

「うるさい！あなたは黙ってて！」

レビイがキレた。

（レビイ…私は知っているからいいけど、周り人から見ると危ない人だよ…）

エアルが心の中でツッコむ。

「でもそうかもしれないね。」

レビイが少し納得する。

「ナイトがなんて言ったか知らないけど、そうだよ。」

エアルが後押ししてレビイはようやく落ち着いた。

2人が待っていると、

「おゝ君は確か龍空高校の子じゃないのゝ」

チャラチャラしたしゃべり方で近付いてきたのは、いつかの片耳ピアスとほか4人だった。

「げっ！？あんだ達…」

レビイが警戒する。

「誰なのこいつら…？」

エアルがレビイに囁く。

「1回私をナンパしてきた奴ら。」

レビイが答える。

「ふゝん…」

エアルも警戒する。

「今回はあの黄緑の男はいないみたいだな。」

片耳ピアスがシャインがいないか辺りを見渡す。

「ええ、『ここ』にはいないわ。」

レビイが言う。

「そっぴやゝ前に名前言ってなかったか。俺は『ラーチャ』、よろしくね。」

ラーチャが握手を求めるが、レビイはしよつとしない。

「なんだよ、それにしても君も可愛いねゝ」

ラーチャが標的をレビイに変える。

「ありがとう、でもハッキリ言ってウザいからゴメンね。」

レビイがきつぱり言う。

「バツサリだねゝ おっ！ほら、君達の番だよ。」

言い争っている間にレビイとエアルの番が回ってきていた。ちなみに2人ずつ滑れる。

「次の人どうぞ。」

スタッフが呼ぶ。

「ほら、早く行きなよ。」

ラーチャがニヤニヤする。

「こいつら私達が滑った瞬間、後ろすぐに滑ってきて何かするつもりよ。」

エアルが囁く。

「どうする？」

レビイが聞く。

「……やるしかないわね。」

エアルが決心する。

「わかった。」

レビイが賛成する。

「おい早く滑れよ。」

「そんなに滑りたかったら…お先にどうぞ！」

5人の中の2人が近付いてきた瞬間、レビイとエアルはガツと掴み、入口に放り投げた。

投げられた2人はスライダーを滑っていった。

「てめえら！」

ラーチャ以外の2人が『魔法剣』を出した。

「剣だー！」

「刃物だー！」

周りの人がパニックになる。

「レビイ刀は？」

エアルが杖を取り出し、構える。

「更衣室。持っでいこうとしたら止められた。」

レビイが答える。

「持っでいこうとはしたんだ…」

エアルが苦笑いする。

「で、どうする？」

「私が仕掛けるからあとは合わせて。」

「わかった。」

「「フェアリーライト」！！」

光の玉が閃光を起こし、ラーチャ達が怯む。その瞬間にエアルとレビイはスライダーに乗り込んで滑り降りた。

「お前ら追え！」

ラーチャに命令され、魔法剣をしまい、2人もスライダーに乗り込んだ。ラーチャは順番待ちしていたところを逆戻りしていった。

この騒動はシャイン達も気が付いた。

「なんか騒がしいな。」

シャインとサナが水泳講座を中断する。

「スライダーの方ですね。」

ヒューズがスライダーに向かう。

「俺も行く。」

スノウがプールから上がり、ヒューズに付いていく。

「俺達も行く。」

シャインとサナも付いていく。

「てか、ヒューズいたのか!？」

シャインがヒューズが存在に気が付く。

「短期バイト中です。」

「ふ〜ん…」

シャインが興味ない感じで言う。

「私は別に広めたりしませんよ。」

ヒューズがサナに囁く。

「う、うるさい！」

サナとヒューズが言い合っていると、

「シャイン！」

「スノウ！」

聞き覚えのある声がスライダーから聞こえ、シャインとスノウが見ると、レビイとエアルが滑り降りてきていた。

「後ろの男お願い！」

レビイに言われ、2人の後ろを見てみると、男が追いかけてきた。シャインとスノウが察して、スライダーの出口付近に近づく。そして、レビイとエアルがプールに着水して、2人がプールサイドに上がるのを確認してから、腕を構え、数十秒後に滑り降りてきた男2人に思いっきりラリアットをかました。くらった2人は空中を後ろ一回転し、クレイに着水して気を失った。ちなみにエアルとレビイに落とされた2人は、シャイン達が到着する前に逃げていったらしい。

「げっ！？なんでてめえがいんだ！？」

ラーチャがシャインを見て驚く。

「なんか見たことあるなと思ったたらお前らだったか。」

シャインが睨み付ける。

「おいおい、『ここ』にはいないって言ったじゃないか。」

ラーチャがレビイに訴える。

「私が言った『ここ』はプールじゃなくて、スライダーにいないって意味よ。」

レビイが答える。

「ちっ、まあいい、今日はあるものを持ってきたからな。」

ラーチャは1枚の札を取り出した。

「俺だつて魔法科の人間だ！行け！『ブルースライム』！！」

ラーチャが札を下に叩きつけると、ボンといって1匹の青色のスライムが現れた。

「なんだあれ？」

「下級レベルの召喚魔、ブルースライムよ。」

サナが説明する。

「下級？だったら一瞬で倒してやる。」

シャインが戦闘体勢になる。

「たぶん無理よ。ブルースライムはある特殊能力を持っているの。」  
サナが言う。

「特殊能力？」



しが聞き返す。

「ブルースライムは自分の周りに水があれば、その水を吸収して…」  
サナが説明していると、ブルースライムがプールの水を吸ってどんどんと大きくなっていく。

「巨大化するの。」

サナが巨大化したブルースライムを見て唖然とする。

「でか…」

シャイン達も唖然とする。

「行け！ブルースライム！」

ラーチャの命令で、ブルースライムは無数の触手のようなものだしシャイン達に襲いかかってきた。

「シャイン！刀は？」

スノウが攻撃を避けながらシャインに尋ねる。

「更衣室だ、持っていこうとしたら止められた。」

シャインが答える。

（レビイと一緒にのこと言っているよ…）

エアルが苦笑いする。その時、サナがブルースライムの攻撃を喰らい、奥にあった2メートルプールに吹っ飛ばされ、真ん中ぐらいに落ちた。

「ヤバい！サナは泳げない！」

シャインが助けに行こうとしたら、触手に捕まった。

「しまった！」

手足を封じられたシャインは身動きがとれない。

「シャイン！」

レビイが助けに行こうとしたら、

「レビイ！刀です！」

ヒューズがレビイに向かって夜桜を投げた。受け取ったレビイはすぐに刀を抜き、シャインを捕まえている触手を切った。

「サンキューレビイ。」

シャインが礼を言う。

「シャイン、刀です！」

ヒューズはシャインに風砕牙を投げた。受け取ったシャインは刀を抜いた瞬間地面を蹴った。

「「疾風斬」！！」

シャインがブルースライムを斬ったが、斬られたところが再生した。

「効いてねえ。」

「俺もさっきから殴ってんだけど全然効かないんだ。」

スノウが言う。

「物理攻撃が…効かない…」

エアルが頭を抱える。

（どうする…）

シャインが考えていると、2メートルプールが突然渦を巻き始めた。

「な、なんだ！？」

全員がプールを見ると、渦により水が真ん中に寄っていき、水柱になり空へと上がっていく。水柱の前には飛ばされたサナが立っていた。

「私を…なめんじゃないわよー！」

水柱が八つに分かれ、蛇の形になっていく。

「「アクア・オロチ」！！」

蛇になった水がブルースライムにヒットし、どんどんブルースライムが大きくなっていき、破裂した。

「やったー！！」

エアルとレビィがハイタッチする。

「ブルースライムは水を吸った分だけ巨大化していく。でもそれにも限界はある。だから私は限界になるまで水を吸わしてやったのよ。」

プールの底からサナが説明する。

「さ、どうする片耳ピアス？」

シャインが刀を向ける。

「ひ、ひ~~~~~」

ラーチャが逃げようとすると、警察が来てラーチャを取り押さえた。

「お前ら覚えてろ！」

そう言い残し、ラーチャは警察に連れていかれた。

「はぁ〜終わった〜」

エアルが伸びをする。

「とんだ騒動だったな。」

スノウが言う。

「まあ、とりやえず解決してよかったですね。」

ヒューズがまとめる。

「もう、せつかくの休日が台無しになっちゃった。」

シャインが怒る。

「さて、帰るか。」

シャインの一言に4人は賛同し、帰っていく。そして4人がプールから帰ってから、

「ちよっと、私を忘れてんじゃないわよー！」

サナの言葉がむなしく響いた。

## 10話 夏休みいんぷる（後書き）

レ「ヒューズ一緒に帰ってよかったの？」

ヒ「ええ。交代だったんで。」

レ「大丈夫なの…？」

ヒ「いいえ。」

レ「平気なの…？」

ヒ「もうやめるつもりだったんで。」

レ「そう…」

ヒ「とりやえず次回予告をしましょう。」

レ「そうね。次回もメインの話に関係ない話だよ。」

ヒ「内容は夏の風物詩、夏祭りです。女性人の浴衣姿が見れますね。」

レ「活字だから読者の皆さんには分からないけどね。」

ヒ「では次回をお楽しみに。」

シ「ちなみにこの投稿は27時間テレビを見ながら投稿しました。」  
エ「……………言う必要あった？」

## 11話 夏の祭り（前書き）

シ「ヤバい、問題が発生した。」

レ「どうしたの？」

シ「この前書きで話す事がねえ。」

レ「言っちゃダメでしょ……」

シ「マジでないんだ。」

レ「うーん…どうしよう？」

エ「だったらさ、みんなのプロフィール紹介していったら？」

レ「いいの？ 筆者倒れちゃうよ。」

シ「おもしろそうじゃん。な、眼鏡純さんよ？」

眼「採用。」

レ「採用しちゃった！」

眼「じゃあ次回から前書きはプロフィールを書いていきたいと思います。」

シ「誰から？」

眼「じゃあ…レビィで。」

レ「ええー！」

ヒ「では見てください。ちなみに今回は戦闘はありません。」

## 11話 夏の祭り

ミンミンとセミが鳴く暑い中、キレイな一軒家の2階で、レビイが自分の部屋のベッドで起き上がった。

「ふわあ〜」

眠い目をこすりながら立ち上がり、パジャマから私服に着替える。

着替えたレビイは1階に降り、リビングに入って自分の朝食が置かれてある席に座る。目玉焼きを食べていると、

「ちよつとその醤油とつてくれ。」

と言われたので、

「ん。」

と言つて、醤油を渡した。そこでレビイがふと醤油を要求した人間を見たら、そこにはまるでずっとここに住んでいる人のように平然と朝食を食べていたシャインだった。それに気が付いたレビイはフツツと怒りが込み上がりシャインを殴った。

「痛つてーな。」

殴られ椅子から転げ落ちたシャインが怒る。

「怒りたいのはこつちよ！なに普通に朝食食べてんのよ！なんで普通に我が家に溶け込んでんのよ！」

レビイがものすごくツツコむ。

「ママ！なんで入れたの！」

怒りの矛先がキッチンで食器を洗っている母、フィリアになる。

「だってあなた、シャイン君が来たから呼びに行ったらまだ寝てたから上がったもらったの。」

のほほんと答える。

「それと朝食食べているのとどつという繋がりが？」

レビイが問う。

「朝食まだ食べてないって言うから〜」

またのほほんと答える。

「はあ」

レビイが呆れる。

「で、なんか用？」

自分を落ち着けながらシャインに聞く。

「朝食食べに来た。」

さらつと答える。

「ホントに朝食目的か！」

レビイがツツコむ。

「冗談だよ。ホントはこれの誘い。」

そう言つて一枚のチラシを差し出す。

「何これ？」

レビイはチラシを受け取る。そこにはでかかと『夏祭り案内』と書かれていた。

「夏祭り？」

「そ、電車で20分ぐらいにある神社で今年から始まるらしいんだ。それに行くため、エアルが俺にレビイ誘ってきてって恐喝したから来たんだ。」

シャインが今日来た理由を話す。

「あら、夏祭り？それなら良いのがあるわ。」

そう言つてフィリアが隣の和室の襖を開け、中から箱を取り出した。

「ママ、それ何？」

レビイも和室に入る。シャインも和室に入る。

「これはね、私が小さい時に着た浴衣。」

箱を開けると、中には可愛らしい花柄で青色の浴衣が入っていた。

「かわいい。」

レビイが手に取る。

「あつ……！」

浴衣を見ていると、下の方に少し目立つぐらい破れてあった。

「あら、ゴメンねレビイ。」

フィリアが謝る。

「縫ったら直るレベルですよ。」

シャイン言っと、フィリアが首を振る。

「私、裁縫だけはできないの。」

「そうなんですか。レビイは？」

次はレビイに尋ねるが、レビイも首を振る。

「私も裁縫だけは…」

「ゴメンねレビイ。」

フィリアが謝る。

「ううん、いいよ。夏祭りには違う服で行くから。」

レビイが笑って見せるが、やっぱりどこか悲しい感じだった。それに気が付いたシャインがレビイから浴衣を取り、畳に座り込む。

「フィリアさん、裁縫セットってありますか？」

シャインがフィリアに聞く。

「ええ。やらないけどあるわよ。」

「持ってきてくれませんか？」

シャインに頼まれ、フィリアは別の部屋に行き、裁縫セットを持ってきた。シャインはそれを受け取り、おもむろに準備する。

「何する気？」

「俺が直す。」

そう言ってシャインが着物を直し始めた。

「シャイン裁縫できるの!？」

レビイが驚く。

「ずっと1人で生きてきたからな。裁縫や料理、掃除とかの家事全般はできる。」

「へえ〜」

レビイが感心していると、ふとシャインの言葉が引つ掛かった。

（1人で生きてきた？）

その言葉の意味を聞こうとしたら、

「そういえば、お前の親父さん見てないけど、どこにいるんだ？」  
逆に聞かれビックリした。



「パパ？パパは仕事で年にちょっとだけしか帰ってこれないの。」  
レビイが答える。

「どんな仕事？」

「うーん…私もよくわからない。なんかすごい企業で働いているってことは分かる。」

「ふーん…よし、終わった。」

話していると、いつの間にか破れてあつたところがきれいになくなっていた。

「すごいシャイン君！」

フィリアがパチパチと拍手する。

「じゃあこれはボランティアでやったとして、朝食のお礼しますよ。」

そう言つてシャインは立ち上がる。

「「そよ風」。」

パチンと指を鳴らすと、家全体に心地い風が吹いた。そしてゴミが一カ所に集められ、ゴミ箱にシュートされた。

「す、すごい…」

レビイが驚く。

「じゃ、帰りますね。」

シャインが玄関に行く。

「あつ、シャイン、ありがとね。」

レビイは玄関にシャインを追いかけて、お礼を言う。

「レビイ、親父さんのこと…好きか？」

背を向けたまま突然の質問してきたからレビイはビックリした。

「えっ！うーん…まあ、好きっちゃ好きだけど…どうしたの急に？」  
逆に聞き返す。

「いや、別になんもないんだが…その気持ち、忘れんなよ。」

そう言い残して、シャインが帰っていった。1人玄関に立っているレビイがシャインの言葉に多少疑問を持ちながら、自分の部屋に戻っていった。

夜になり、浴衣を着たレビィは待ち合わせの駅へ向かっていた。そうしたら、前にサナが歩いていった。

「あっ！サナ！」

呼ばれたサナは振り返り、レビィだと分かったら速度をおとす。

「浴衣？」

追い付いたレビィに聞く。

「うん、ママが小さい時のだけだね。」

レビィが答える。

「ふ〜ん…あれ？あんたって髪、ポニーテールだったっけ？」

サナの言う通り、レビィはいつもはストレートで何もいじっていなかったが、今日はポニーテールにしている。

「ああこれ、遊ぶのに邪魔かな〜と思って、似合うかな？」

レビィがポニーテールを触りながら聞く。

「似合うんじゃない。」

サナが答える。

「そお？よかった〜……あれ？サナは浴衣じゃないの？」

サナは浴衣ではなく、普通の夏服である。

「私、浴衣持つてないの。」

「そうなんだ。」

レビィが納得する。だが、よく見ると、いつもの赤いヘアピンがピンクで先に花が付いているヘアピンになっていた。それに気が付いたレビィはサナにバレないぐらいでクスツと笑った。

2人が話していると、待ち合わせの駅に着いた。

「来たかレビィ。おっ、サナも一緒か。」

そこにはシャインがいて、スノウとヒューズと赤色の少し豪華な浴衣を着ているエアルがいた。

「エアルかわいいね。」

レビィが褒める。

「でしょ」

エアルがくるっと回って浴衣を見せる。

「さて、全員そろったな。行くぞ。」

6人は電車に乗って神社に向かった。

夏祭りに到着すると、いろんな屋台があり、上には夜を照らす提灯があり、人もたくさんいた。

「うわゝ多いね」

レビイが人混みの中でボヤク。

「夏祭りなのに人が全然いないよりマシだろ。」

「さてと、何やろうかな」

スノウが気合いを入れる。

「おっ！『ダーツ』だつてよ。」

6人が最初に足を止めたのは、ダーツ屋だった。

「いらつしゃい。真ん中に2回連続であてると、この中から1つ貰えるぞ。」

20代ぐらいの男が取り出してきたのは、PSP、3DS、PS3だった。

「PS3じゃん！」

スノウの目が輝く。

「よし！やれ！ヒューズ！」

スノウがビシッとヒューズを指す。

「なんで私なんですか？自分でやりなさい。」

ヒューズが拒否する。

「頼む！」

「はあ、分かりましたよ。」

「恩に着る！」

スノウがお金を払い、6本のダーツが出された。その時、店の男は内心バカめと思っていた。

（バカめ、この的の真ん中は2本刺さりそうで刺さらない大きなのだ。絶対にこの3つは取れん。）

そんなことを思っていると、

「6本ですか。じゃあ全部貰えますね。」

ヒューズの思いがけない言葉に店の男は動揺した。

（な、なんだと！いいいや、ありえん。この的は投げなくて普通に刺そうとしても刺さらないんだぞ！だ、大丈夫だ。この客どもはこのことを知らないんだ。絶対に無理だ。だがなんだあの茶髪の奴、すげー余裕な顔してやがる。何か策があるのか？いや、大丈夫だ。刺さるはずがない。）

店の男が平常心、平常心と思っていると、

「じゃ、いきますね。」

ヒューズがダーツを構える。店の男がゴクリと唾をのむ。そして、ヒュツとダーツを投げると、見事に真ん中に当たった。

「さすがヒューズ！でも、あの真ん中にあと5本なんて刺さるのか？意外と小さいぜ？」

スノウが尋ねる。それを聞いた店の男は心の中で頷く。

（あの銀髪の言う通りだ。もう、刺すところなんてないのにどうやって刺すつもりだ？）

店の男が考えていると、

「大丈夫です。」

ヒューズが余裕の顔で言う。

「では、いきます。」

ヒューズが5本全部持ち、構える。そして次の瞬間、5本のダーツが放れた。そして映った光景に店の男とスノウは啞然とした。

「では、3つとも頂きましょう。」

ヒューズがニツコリ笑う。その光景とは、ダーツの後ろにダーツが刺さり、またその後ろにダーツ刺さっているという光景だった。ヒューズがPSPと3DSを持ち、スノウはPSS3を抱える。そして2人がダーツを終えた時に、他の4人が来た。

「お、終わったか。」

シャインは右手に持っているとつもりこしをかじりながら言う。

「あ、お前らだけセコいぞ。」

スノウが怒る。

「まあまあ、ちゃんと2人の分もあるから。」

わたあめを食べながらエアルが焼きそばを渡す。

「おお！なんだよ、あるならあるって言えばよ。」

スノウが機嫌を直す。

「花火ってまだなの？」

エアルがたこ焼きを食べているレビィに聞く。

「ほ〜ん…ほのひらしらどほつひよつとはひゃ？（訳：う〜ん…このチラシだともうちよつとかな？）」

ハフハフしながらレビィが答える。

「いや、なんて言ってるか分からないよ。」

エアルがツツコむ。

「だったらここよりあっちの神社までの石段に行きましょう。あっちの方が見やすいらしいから。」

リンゴ飴を持っているサナが石段を指す。

「分かつちやったよ！」

エアルが驚く。

「そんなこと誰から聞いたんだ？」

シャインが尋ねる。

「周りの人間がチラホラ言ってるのを聴いただけ。」

サナが答える。

「ふ〜ん…じゃ、サナの意見を採用。移動するぞ。」

6人が石段に移動し、数分後に、夜空を焦がすようにたくさんの花火が咲き乱れ始めた。

「綺麗〜」

花火を見ながらレビィがピュアに感動する。

「そうだな。」

シャインが同意する。

「髪、変えたのか？」

シャインがレビィに尋ねる。

「え！？う、うん。似合う？」突然聞かれたのでビックリしたが、似合うかどうか逆に聞き返す。

「……似合うぞ。」

少し照れながらポツリと褒めた。

「ありがとうシャイン。」

レビィが微笑みながらお礼を言う。

花火が上がってから数分たち、石段も人がいっぱいになった時、シャインの隣を1人の男がすれ違う時に、

「1人で神社の裏に來い。『バージエス』が呼んでいる。」

と、耳元で囁いた。それを聴いたシャインは、バツとすれ違った男を見ると、それは黒髪のレインだった。

「どうしたのシャイン？」

レビィが突然不振な動きをしたシャインに尋ねる。

「ある奴に呼ばれたからちよつと行ってくる。」

「誰に？」

「帰ってから言う。」

「うん、わかった。」

レビィは頷いて、また花火を眺める。そのレビィを残して、シャインは神社の裏に向かった。

シャインが神社の裏に來たら、そこにはレインとクラウドがいた。

「來たかシャイン。」

そして暗闇からバージエスが現れた。

「なんか用か？」

少し睨みながらシャインが尋ねる。

「1つだけ聞いておこうと思ってな。」

バージェスが呼んだ理由を話す。

「聞いておくこと？」

シャインが何のことか分からない。

「クハハハハ、ホントに何も覚えていないようだな。」

バージェスが笑い出す。

「何のことだ！」

シャインがイライラする。

「いや、覚えていないならそれでいい。帰っていいぞ。」

バージェスが手をヒラヒラさせる。

「なんなんだよテメエ！呼んどいて！」

シャインがキレる。

「次会う時は『闘う』時だ。その時に教えてやるよ。」

それを聴いたシャインは、

「ちつ。」

舌打ちをしてレビイ達のところに戻っていった。

「あの様子だと、自分の力が『解放』しかけているのに気が付いて  
いませんね。」

シャインが見えなくなってからクラウドがバージェスに言う。

「ホントに見たんだなクラウド？」

バージェスが尋ねる。

「ええ。あの時、川であいつが使ったあの力、あの一瞬だけ確実に  
バージェスさんを上回っていました。」

クラウドが説明する。

「そうか、クハハハハ、『大会』が楽しみだ。」

その時にちょうど花火が終了した。

「あ、お帰りシャイン。」

レビイが迎える。

「誰に呼ばれたんだ？」

スノウが尋ねる。

「バージェス。」

シャインが簡単に答える。

「バージェス！？何言われたんだ？」

スノウがまた尋ねる。

「特に何もなかった。気にしないでくれ。」

「わかった。」

スノウが頷く。

「もしかして『あれ』のこと？」

サナがシャインに聞く。

「少し違うが、まあ、そんなところだ。」

シャインが頭をかきながら答える。

「『あれ』？」

レビイが尋ねる。

「前に話したでしょ。魔法科がある高校が集結する大会があるって。」

サナが少し見下す言い方で言う。

「あつ！」

レビイが思い出す。

「その大会は8月の初めにあるの。」

「それって1週間後じゃない！」

レビイが驚く。

「そう、そして今回はかなり注目されているの。」

「なんでだ？」

スノウが尋ねる。

「普通大会出るのは2年や3年なんだけど、今大会は2人も1年が  
出場するの。」

「どこなの？」

エアルが尋ねる。

「1人目は虎神高校、バージェス・アルシオン。そして2人目は私  
達の高校、龍空高校からよ。」



それを聴いたシャイン以外が驚く。

「一体誰なの？」

レビイが聞くと、

「誰って、ここにいるじゃない、龍空高校1年魔法力トップ兼絶滅魔法の使い手が。」

サナがシャインを見る。

「うつそー！」

またシャイン以外が驚いた。

「ホントだ。」

シャインが頷く。

「てか、なんでそんなこと知ってただよ？」

スノウがサナに聞く。

「私の情報網なめんじゃないわよ。」

サナが自慢する。

「さすがに俺もサナに言われた時はビビった。」

シャインが言う。

「そうだったんだ、頑張ってたねシャイン。」

レビイがシャインの手を握る。

「おう。」

シャインは少し笑い返事をする。

「さて、帰るか。」

6人は祭りを後にした。

1週間後、魔法学園最大の闘いが始まる。

## 11話 夏の祭り（後書き）

レ「さて次回は、いよいよ大会が始まります。」

ス「お前が代表なんて聞いてないぞ。」

シ「だって言ってねえもん。」

ス「腹立つな。」

エ「次からけっこう長編になるらしいよ。」

サ「大丈夫なの筆者？なんか前書きでプロフィール書くって言って、長編始めようとしてるけど？」

ヒ「本人に聞いてみましょう。どうですか眼鏡純さん？」

眼「頑張ります。もし分からなかった場合は感想に質問書いてくれたら答えますので。」

シ「だそうです。」

レ「では、次回から『大会偏』スタートです！楽しみにしてください。」

## 12話 開幕！！（1）（前書き）

眼「今回からプロフィール書いていきます。最初はレビィです。」  
レ「なんで私から……」

名前：レビィ・サファイア

年齢：16歳

誕生日：9月9日

魔法：夜叉魔法

戦闘タイプ：刀（夜桜）

髪：紺色でストレートのロングヘア

瞳の色：青

好きな食べ物：ママが作ったオムライス

嫌いな食べ物：キュウリ

平均睡眠時間：6時間

好きな漫画のジャンル：恋愛／ファンタジー

好きなゲーム：ポケモン

好きな季節：春

平均ケータイいじり時間：約8時間

好きなキャラクター：チョッパー／ピカチュウ

バストカップ：……………B

好きなタイプ：言えないみたいです

眼「こんな感じで勘弁してください。」

レ「十分暴露されてるわよ……」

エ「落ち込まない、落ち込まない。で、次は誰なの？」

眼「さすがにシャインで。」

シ「俺かよ……」

眼「プロフィールの中身は多少変わる可能性があるかもしれませんが」

が、楽しみにしてください。」  
シ「今回から『大会偏』スタート。では、見てください。」

## 12話 開幕!!(1)

1週間が経ち、大会当日を迎えた。レビイは制服を着て、学校に向かった。

「おはようエアル。」

教室に入ったレビイは席に座っていたエアルに挨拶する。

「おはようレビイ、いよいよだね。」

エアルが挨拶する。

「うん。」

レビイが頷く。

教室はどこか緊張している感じである。

「別に俺らが緊張しても意味ないぞ。」

いつもと変わらない感じでPSPをしているスノウが言う。

「そうですよ。緊張するのは出場する人達ですよ。」

ヒューズもいつもと変わらない。

「そうだ。なんで出場俺よりも緊張してるんだよ。」

そこに今回の大会に出場するシャインが入ってきた。

「シャイン!……何その格好?」

レビイの言う通り、シャインは制服ではなく、黒い布できていて胸元がけっこう開いている服を着ている。(テイルズオブヴェスペリアのユーリの服を想像してください。形は少し違います。)

「これか?これは俺の戦闘服だ。動きやすいし、鎧とかより頑丈なんだ。」

シャインが説明する。

「へえ」

レビイが納得する。

「お前、後ろすごいな!」

スノウがシャインを後ろから見て驚く。それもそのはず、シャインの背中にはすごい迫力のドラゴンの絵が描かれていた。

「あーこれなー、別に意味はない。」

シャインが答える。

「ふーん…てか、なんで俺らは学校に集められたんだ？」

スノウが話を変える。

「さあ？」

その場にいる全員がハモる。

「あんたたち、調べるとかしないの？」

サナが呆れながら、話に加わる。

「しない。」

また全員がハモる。またサナが呆れる。

「あんたたち、大会の会場どこにあると思っている？」

サナが全員に尋ねる。

「えっ、それは…ここから電車とかで行けるとこ…だと思っけど？」

レヴィが代表して答える。それにあと4人が頷く。

「違うわよ。」

サナがズバツと言う。

「じゃあどこなんだよ？」

シャインが尋ねる。

「はあ、あんた出場者なんだから知つときなさいよ…いい？この世界は魔法が使えるのよ。魔法があれば別に『この次元』に建てる必要なんてないのよ。」

「ま、まさか…」

「そう、『異次元』に建てたのよ。会場を。」

それを聴いたシャイン達が驚く。

「じゃあその会場にはどうやって行くんだ？」

スノウが尋ねる。

「魔法科がある12校にはそこに行くための転送装置があるから、私達は学校に集められたの。」

サナが説明を終える。

「へえ」

シャイン達が納得していると、

「はい、みんな席についてー。」

ナナリー先生が教室に入ってきて生徒を座らせる。

「さて、いよいよ大会が始まります。今回の大会にはなんと、1

1からシャイン君が龍空高校代表で出場します。みんな精一杯応援をしましょう。そしてシャイン君、頑張ってください。」

「ああ。」

シャインが返事をする。その目はいつにもまして真剣な目だった。

「では、時間になったので転送装置に移動します。」

生徒とナナリー先生は転送装置のある場所に向かう。

「意外だな」

移動中にレビイがシャインに話し掛ける。

「何がだ？」

「シャインがこういうイベントを真剣にしようとしてるなんて。」

「この高校に入学した身だ。自分の高校を誇りに思っ、て、高校のために闘うさ。」

意外とまともな返事が返ってきて、レビイは返す言葉が見つからない。

「あともう1つ……」

「もう1つ？」

「さすがに真剣にやらないきゃ……俺は奴に潰される。」

「奴ってバージェスの事？」

シャインが頷く。

「あいつは昔から力が全てだと思ってやがる。たぶんあいつの周りにはあいつに匹敵する奴なんていない。だからあいつは唯一自分が本気で闘える俺を潰しにくるだろう。」

「大丈夫なの？」

レビイが心配した顔で見る。シャインはボンとレビイの頭を叩くと、

「大丈夫だ。」

そう言つて、少し微笑んだ。2人が話していると、転送装置のある建物についた。

「改めて思ふけど…この高校やつぱりでかいな…」

スノウの言つ通り、自分達の教室から、転送装置のある建物まで、徒歩20分はあった。

「あれ？1年生つてこんだけだっけ？」

エアルが周りを見ながら言う。

「魔法科は1〜5組。普通科の人が来る意味はないからね。」

サナが答える。

「1組です。」

ナナリー先生が扉の前で言うと、ウィンという音を出しながら扉が開いた。その中に入ると、数人の白衣をきた先生達がいた。

「転送はもうできますので、台の上が上がってください。」

言われた通りに、1組のみんなとナナリー先生が乗れるくらいの部屋屋の中心にある台に乗る。

「では、転送開始。」

白衣の先生がボタンを押すと、キュイイインという音がして、1組とナナリー先生は転送された。

転送された先は、精神と時の部屋のような、何もない白い空間だった。

「な、なんだここはー！」

スノウが叫ぶ。

「さすがの私もこの空間には入った事はないわ。」

さすがのサナも驚いている。

そして1組一同の目の前には、東京ドームみたいな形をしていて、大きさは東京ドームの2倍ぐらいの建物があった。



建物に入ると、中はかなりキレイで、いろんなところにロボットがいる。

「オハヨウゴサイマス。ドコノコウコウデスカ？」

受け付けにいるロボットが尋ねる。

「龍空高校です。」

ナナリー先生が答える。

「コノカナニシュツジョウスルヒトハイマスカ？」

「あ、それ俺だ。」

列の後ろらへんにいたシャインが前に出る。

「『サポーター』ハダレデスカ？」

「サポーター？」

「客席からのアドバイスは禁止だから、出場者にアドバイスできるのはサポーターだけなの。」

ナナリー先生が説明する。

「ふゝん…別に誰でもいいけど。」

「サポーターの選択は出場者が決めるの。」

「ふゝん…」

「普通は先生や魔法とかに詳しい人が入るけど…」

「ふゝん…じゃあ、レビィで頼むわ。」

シャインがロボットに言うと、

「ちよつ、なんで私なの!？」

レビィがとんで出てきた。

「別に誰でもいいんだろ。」

「コノヒトデイデスカ？」

「ああ。」

「………トウロクカンリヨウ。デハ、シュツジョウシャトサポーターノヒトハコチラヘドウゾ。」

ロボットに連れられ、シャインとレビィは控え室と向かった。

「デハ、オウエンノヒトタチハコチラヘ。」

別のロボットが現れ、1組のみんなは付いていった。

「ねえ、ホントに私でよかったの？」

控え室に向かっている途中、レビイがシャインに尋ねる。

「別に誰でもよかったからな。」

「ふん…」

レビイが（なんだ、本当にそんだけか）と思いながら返事をする。

「コチラデス。」

ロボットに言われた扉を開けると、そこは普通の部屋みたいな控え室だった。

「すごい。ベッドまである。」

レビイが驚く。

「カイカイシキマデシバラクオマチクダサイ。」

そう言っつてロボットはどこかに行ってしまった。

「さて、開会式まで寝るか。」

そう言っつてシャインはベッドに寝転んで、2秒で寝た。

「はや！」

レビイがツツコむ。だが、むなしくなり、控え室にあったソファ―に座り、本を読みながら開会式を待った。

1組の一同はロボットに連れられ、応援席に案内された。

「ココデカイカイシキマデシバラクオマチクダサイ。」

そう言っつてロボットはどこかに行ってしまった。

「うほーでけー！」

スノウが飛び回る。

「こらスノウ君。」

ナナリー先生に叱られ、スノウがしよげる。

「ガラス張りなのね。」

エアルがガラスを触りながら言う。そこからは大きな土のフィールドが見えた。

「『マジックウォール』ね。片方から見るとガラス張りだけど、違う方から見るとただの壁にしか見えない。その強度はかなりのもの。」

サナが淡々と説明する。

「でも、ここに全員入るのか？」

スノウの言う通り、応援席はデカイはデカイだが、どう見ても龍空高校しか入れるスペースしかない。

「大丈夫よ。ここはここで異次元の中なの。」

ナナリー先生が説明し始める。

「ここは龍空高校のための空間で、あとの高校は高校で空間があるの。」

「でも見える光景は一緒ですよね？」

エアルが質問する。

「そうよ。」

「ややこしいな。」

スノウが頭を抱える。

「つまり、一緒の場所にいるけど、応援席は別の空間にあって、けれど、そこから一緒の光景が見れるわけ。」

サナがまとめる。それを聴いたスノウが納得する。

「読者のみなさんの中で、もしも分かりにくいと思った人は感想で質問してください。答えますので。」

エアルが言う。

「何をしていますかエアル？」

ヒューズが壁に向かって話しているエアルに聞く。

「ううん。何でもない。」

エアルが笑顔で答える。

「さて、開会式まで自由にしといてください。他の高校に迷惑をかけるないように。」

1組一同は開会式まで自由時間になった。

他の高校も続々と入ってきて、全部の高校が集結した。

「これより、開会式を行いますので、選手の皆さん、及びサポーターの皆さんはフィールドに集まって下さい。」

アナウンズが響き渡り、選手とサポーターの人はフィールドの中央に集まり始めた。

「いた！シャインとレビィだ！」

エアルが指を指す方向に2人がいた。

「頑張れ！」

「負けんなよー！」

そんな言葉が飛び交う。だが、フィールドにいる2人からはマジックウォールにより、みんなの姿は見えず、声だけが聴こえる。

「すっごい不気味なんだけど……」

レビィが少し引く。

「あの壁の向こうだな。」

シャインが言う。

「マジックウォールか……」

レビィが気が付く。

そして、大きなフィールドに選手12人、サポーター12人、計24人が集まった。すると、目の前に学校の朝礼台みたいなものが現れ、そのサイドに数人ついた。そして、その中の1人の男が台の上上がった。

「これより、『BOM』、『バトル・オブ・マジック』を開幕する!!!」

その一言に会場が、

「ワアアアア——！！！！！」

と言う歓声が響き渡った。

## 12話 開幕!!(1)(後書き)

エ「ついに始まったよバトル・オブ・マジック!」

ヒ「battle・of・magicの頭文字をとって、『BOM』  
とも言いますよ。」

ス「この『大会偏』ってどれくらい続くんのだ?」

シ「さあ?」

レ「筆者はとりやえず『遠足偏』よりは長くしたいんだって。」

シ「つまり、どこまで続くかは筆者も分かっていないんだな?」

レ「簡単に言うとな。」

ス「とにかく、次回からトーナメントが始まるんだな!」

サ「違うわよ。最初は予選からよ。まあ、ルール等は次回で説明されるわ。」

シ「では、次回を楽しみに。」

### 13話 予選リーグ(2) (前書き)

レ「今回はシャインのプロフィールだよ。」

シ「なんか嬉しそうだな。」

眼「では、シャインのプロフィールです。」

名前：シャイン・エメラルド

年齢：16歳

誕生日：5月5日

魔法：閃風魔法

戦闘タイプ：刀(風碎牙)

髪：首まで伸びていて、黒と黄緑が7：3の割合の色

瞳の色：黄緑色

好きな食べ物：焼きそば

嫌いな食べ物：レバー

好きな漫画のジャンル：SF/戦闘系/コメディ

好きなゲーム：テイルズオブシリーズ

好きな四字熟語：一刀両断

得意な料理：だいたいできる

持っているゲーム本体：PS3/DSライト/Wii/PSP

好きな映画：トランスフォーマー

好きなタイプ：興味がない

眼「こんな感じで。」

シ「以外と恥ずかしいな。」

レ「でしょ！」

シ「次は誰なんだ？」

眼「うーん…じゃあエアルで。」

エ「私ー！？」

シ「では、見てください。」

眼「まだプロフィールを知りたい人は感想に書いてください。」  
レ「ああ…プライベートがなくなっていく…」

### 13話 予選リーグ(2)

「これより、『BOM』、battle・of・magic<sup>バトル オフ マジック</sup>を開幕する!!!」

その一言に会場が、

「ワアアアアー!!!!!!」

と言う歓声が上がった。

「それではルールを説明します。」

台の隣にいた進行役の女性がルール説明を始めた。

「今から選手の皆さんにくじを引いてもらい、Aブロック、Bブロック、Cブロック、Dブロックに3人ずつ別れていただき、『予選リーグ』をしてもらいます。その中で1位の人1位トーナメント、2位の人2位トーナメント、3位の人3位トーナメントに出場してもらいます。だけど、この大会はハッキリと順位を出すので、何位タイなどはありません。例えば、1位トーナメントの1試合目に負けてしまった場合、もう1人の1試合目に負けた人と闘ってもらいます。それで勝った方が3位、負けた方が4位となります。これはどのトーナメントでも同じルールです。これでルール説明を終わります。」

説明していた女性が一礼をする。

「では、次にサポーターの説明をします。」

説明していた女性の隣の女性がまた説明を始める。

「応援席からのアドバイスは禁止となっておりますので、選手にアドバイスができるのはサポーターのみです。そして、戦闘中でも今から配るものを耳に装着しているといつでもアドバイスが聞けます。」

そう言った時に、選手達とサポーター達に、耳に簡単に入る小さな通信機が配られた。

「戦闘中にアドバイスしていいんだ。」



レヴィがビツクリする。

「てことは、闘っているのは選手だけだが、実質はサポーターも間接的に戦闘に参加してる訳だな。」

シャインがまとめる。

「では、次に闘いのルールを説明します。」

その女性の隣にいた男性が説明を始めた。

「まず、選手の皆さんに『これ』を渡します。」

男性が何かを持って、皆に見えるように手を上げる。そして、男性が持っているのと同じのが選手達に渡された。

「なんだこれ？」

「さあ？」

シャインとレヴィが首をかしげる。それは1円玉ぐらいの大きさの正方形のバッチみたいなものだった。

「『フィルムバリア』ね。」

応援席から双眼鏡を覗きながらサナが言う。

「なんだフィルムバリアって？」

スノウがサナに尋ねる。

「あのバッチを体のどこかに付けると、体を包むようにバリアの膜がはられるの。そのバリアは、『感覚』は通すんだけど、『外傷』はできないっていう特徴があるの。」

サナが説明するが、スノウの顔はポカンとしている。

「はあ、ホントにバカね。」

サナが呆れる。

「うるさいな。」

スノウが怒る。

「例えば、フィルムバリアをしたあんたが刀で切られたとする。その時、切られた痛みは感じるんだけど、体には切り傷は残らないの。わかった？」

サナが例えながら説明して、ようやくスノウは理解した。

「…これでフィルムバリアの説明を終わります。」フィールドでも同じ説明がされていて、その説明が終わった。

「最後に勝敗のつけ方を説明します。この大会に使われるフィルムバリアには特殊な装置が付いており、攻撃をうけると皆さんのHPが減っていく、0になると負けになります。HPは1000です。」そして最後の説明も終わり、開会式が終了した。

「では、このままブロックを別けますので、選手の皆さんは台に集まって下さい。」

そのアナウンスで選手達は台に集まった。そして、ブロック別けが始まった。

「よう。」

くじの順番を待っているシャインに、今大会のもう1人の1年、バージェスが近付いてきた。バージェスも制服ではなく、戦闘用の服である。（読者の皆さんの想像にお任せします。）

「なんか用か？」

シャインは敵意むき出しの目で尋ねる。その目を見てバージェスはニヤリと笑う。

「いや、その目を見れて安心したよ。てっきり怖じ氣ついていると思ってたな。」

「大丈夫だ。お前なんかに手を抜くなんざしねえよ。」

「そらありがてえ。俺も手を抜くなんざ最初っから思ってたねえ。なんせ…俺が本気で潰せる相手だからな。」

その目は、対戦相手を倒すやるといふ闘志の目ではなく、こいつを殺してやるという殺意の目であった。

「龍空高校代表、シャイン・エメラルド君。」

2人がにらみ合っていると、アナウンスでシャインが呼ばれた。シャインはバージェスをおいて台に近付いた。台の上には箱があり、手を突っ込んでとるタイプのものだった。

（ここらへんは原始的だな…）

シャインは心の中で苦笑いしながら箱に手を入れ、中にあった紙を

1枚に掴み取り出した。

「Aブロック。」

シャインは紙に書いてあったアルファベットを進行役の人に伝え、元の場所に戻った。すると、会場にあった大きなモニターに記入された。

（あと残ってるのがAブロックに1つと、Dブロックに1つか…正直予選からバージェスと闘うのはさすがにキツいな…）

シャインがモニターを見ながら思っていると、

「虎神高校代表、バージェス・アルシオン君。」

バージェスが呼ばれた。そしてバージェスはくじを引いた。場所は…Dブロックだった。そして最後に残った高校がAブロックに入り、予選の組み合わせが決定した。組み合わせは次のようになった。

#### Aブロック

- ・ 龍空高校
- ・ 牛島高校
- ・ 天鼠高校

#### Bブロック

- ・ 蛇帝高校
- ・ 火兎高校
- ・ 猿山高校

#### Cブロック

- ・ 羊雲高校
- ・ 馬原高校
- ・ 犬白高校

#### Dブロック

- ・ 鳥崎高校

- ・猪里高校
- ・虎神高校

という組み合わせである。

シャインが組み合わせを見ていると、

「よかったな、予選であたらなくて。」

バージェスが近付いてきた。

「ああ。さすがにお前と予選であたるのだけはゴメンだったぜ。」

2人が話していると、

「シャイン、そろそろAブロックの会場に行かなきゃ…あつ…」

レビイがシャインを呼びに来たが、バージェスがいるのに気が付いて少し警戒する。

「ん？ここは選手とサポーターしかいてはならないはず…なるほど、お前のサポーターはこの女か。」

「そうだ。」

「クハハハハ、必要なさそうで意外と必要なのがサポーターだ。それをまだ魔法が使えて少ししか経っていない女にやらすとは。」

バカにした言い方にレビイはムツと怒る。そして言い返そうと口を開こうとした瞬間にレビイの前にスツとシャインが立った。

「俺はずっと1人で生きてきたから人を信じることがなかった。だがな、レビイは違う。レビイは俺が一番信用できる人間なんだ。だからサポーターについてもらったんだ。」

シャインはバージェスの目をまっすぐ見る。

「シャイン…！」

レビイは喜びと驚きと恥ずかしさが入り交じっている気持ちになっていた。

「そうか。すまなかったな。」

バージェスは反省の色なしで謝りながらシャインに顔を近付け、

「惚れたか？この女に？」

レビイに聴こえないトーンで囁く。

「残念だが、俺はそういうのに興味はない。」

と、シャインが囁く返す。

「そうか。」

バージエスはニヤツと笑い、フィールドを後にした。

「なんて言われたの？」

レビイが尋ねる。

「いや、気にすんな。」

シャインはそう言ってAブロックの会場に向かおうとすると、レビイが腕を掴む。

「どうしたレビイ？」

「ね、ねえ…さっき言ってたのって…ホント？」

モジモジしながらレビイが尋ねる。

「なんであの場面であんな嘘つかなきゃいけないんだ？」

逆に聞き返して、レビイの腕をほどき、Aブロックの会場に向かった。それを聞いたレビイはすごく嬉しくなったが、逆にモヤモヤが増した。

（さっきの言葉が本当なら『1人で生きてきた』っていうのも本当になるんだよね？）

レビイはモヤモヤを抱えたまま、シャインの後を追った。2人はメイン会場の出入口付近で4、5人の蛇帝高校の女子グループとすれ違った。その中の青色のポニーテールをした女子が振り返ってメイン会場を出ていくシャインの背中を見つめながら、

「へえ、名前が同じだからもしかしたらって思ってたけど…本物じゃない。」

と、呟いた。

メイン会場を出た2人は驚いた。さっきまで真っ白い世界にメイン会場しかなかったのに、いつの間にかメイン会場より少し小さい4つの会場が出現していた。その中のAブロック会場に2人は入っ

ていった。

入った瞬間、2人に1体のロボットが近付いてきた。

「シャイン・エメラルドサント、レビィ・サファイアデスカ？」

「ああ。」

「モウスコシデシアイデスノデ、ヒカエシツデジュンビヲオネガイシマス。」

「わかった。」

2人は言われた通り控え室に向かおうとすると、

「まだいたのかよ。」

と、後ろから声をかけられた。振り返ると、そこにはスノウとエアールとサナとヒューズが立っていた。

「お前ら……！」

シャインが少し驚く。レビィはシャインの顔が少し嬉しそうに見えた。

「頑張つてねシャイン。」

エアールが微笑む。

「負けないでくださいよ。」

ヒューズが応援する。

「ま、どうせだったらいい成績残しなさいよね。」

サナが興味なさそうに応援する。

「全員応援してるぜ。」

スノウがニヤツと笑う。

「みんなありがとな。」

シャインは礼を言って控え室に向かった。レビィも皆にお礼を言ってシャインの後を追った。すると、いきなりシャインが振り返った。「あっ！お前ら、俺の最初の試合が終わったらまたここに集まってくれ。」

「なんでだ？」

スノウが理由を聞く。

「たぶんすぐ騒ぎになると思うが、お前らには先に見せておく。」  
「何を？」

「バージェスの魔法を見せておく。」  
そう言い残してシャインは控え室に向かった。

「ねえ、どんな魔法なのバージェスのって？」

メイン会場とあまり変わりがない控え室に入ったレビィが椅子に座っているシャインに尋ねる。

「見ればわかる。」

シャインが答える。

「間に合うの？」

「確かあいつは2、3回戦だから俺が今から闘う奴を一瞬で倒したら間に合う。」

「できるのそんなこと？」

2人が話していると、

「モウスグシアイデス。」

ロボットが呼びに来た。

「わかった。」

シャインは椅子から立ち、フィールド入り口に向かう。

「ねえ、ホントにできるの！」

レビィがもう一度聞くと、

「できるさ。」

と、シャインがニヤリと笑った。

シャインがいなくなりレビィ1人になった控え室がゴゴゴゴと鳴ってシャッターが開くように開き始めた。そこからはメイン会場より少し小さいが、同じ土のフィールドが見える。

（ここから見てアドバイスしろってことね。）

レビィはすぐに理解して通信機を耳に装着しようとしたが、自分の通信機の隣もう1つ通信機があった。

「あのバカ……」

レイビイは呆れた。

シャインがフィールドに出ると、反対側の控え室から対戦相手が現れた。その瞬間、龍空高校、牛島高校、天鼠高校の応援席が盛り上がる。

「さーAブロック最初の試合は、龍空高校VS牛島高校だー！！」  
実況者にも熱が入る。

「さて、初戦の対戦フィールドは…」  
次の瞬間、土のフィールドから木や草などが生い茂り始め、あたり一面林のようになった。

「おっと、これはまだ読者の皆さんに説明していませんね。予選リーグは普通のフィールドではせず、いろんな属性のフィールドに変化するんです。フィールドの属性も利用して闘うのも戦略の内なんです。」

実況者が説明する。

「フフフ、なんて俺にあったフィールド。」

ものすごくフェアリーテイルのドロイに似ている対戦相手とシャインがフィールドの端同士でにらみ合う。

「俺の名前は『リグーン』！1年がでしゃばんなよ！」

対戦相手のリグーンが叫ぶ。

「わかったから、さっさと始めようぜ。」

シャインがはあとため息をつく。

「さー両選手がフィルムバリアを装着した3秒後に試合開始だー！」  
シャインとリグーンは体にフィルムバリアを装着した。次の瞬間、大きなモニターに『3、2、1、ファイト』と出され、試合が開始した。

「俺の植物魔法を喰らいやがれ！」  
「プラントマジックプラントパンチ」！！  
リグーンの周りにあった植物が拳に変化してシャインに向かってくる。

「はあ、さっさと終わらしてやる。」



シャインが足にグツと力をいれると風が足に纏った。

「隼」はやぶさ！！」

地面を蹴った瞬間、すごいスピードで走りながらプラントパンチを簡単に避け、あっという間にリグーンの目の前についた。

「閃風拳」！！」

シャインのパンチがリグーンの顔をとらえ、吹っ飛ばした。モニターのリグーンのHPが減る。

「この野郎！もう怒ったぞ！俺の最強の魔法で潰してやる！」

リグーンを中心に緑色の魔方陣が現れ、フィールドにある植物が大きな8匹の蛇に変化した。

「喰らえ！「プラント・オロチ」！！」

8匹の蛇がシャインに向かってくる。

「この技、サナのと似てるなあ。ま、関係ないけどな！」

シャインが刀を構えた。

「獅子閃風牙」ししせんふうが！！」

刀を振った瞬間に光る風でできた獅子が8匹の蛇を破り、そのままリグーンにヒットした。モニターのリグーンのHPが0になり試合が終了した。

「アーツと開始数分で決着がついてしまったー！」

実況者が驚く。応援席もザワザワしている。その中をシャインは控え室に戻った。

「ホントにしてきちゃった…」

控え室にいたレビィが驚いていた。

「すぐに行くぞ。」

そう言って2人は急いで控え室を出た。6人がさっきいた場所に行くと4人が集合していた。

「よし、行くか。」

合流した6人はDブロック会場に向かった。

Dブロック会場に入った6人は応援席に入ると、氷属性のワールドに猪里高校の代表とバージエスが闘っていた。

「おーやってるねー。」

スノウが言う。

「HPは：1000と300ですか。」

ヒューズがモニターを見る。

「もう終わりそうね。」

レビイがシャインを見ると、シャインは何か考えていた。

（おかしい、あいつがこんなに時間かかるわけがない。何を考えてやがる…）

「シャイン？」

レビイがもう一度聞くと、

「ん？なんだ？」

と、シャインが反応した。

「だから、もう終わりそうねって。」

「ああ。」

すると、6人同時に、

【やはり来たかお前たち。】

頭の中にバージエスの声が聴こえた。

「な、何！？」

エアルが慌てる。

「テレパシーね。」

サナが冷静に言う。

「バージエス、お前何たくらんでやがる？」

シャインが聞く。

【せっかくお前らを待ってやったのにその言い方はないだろ。まあいい、どうせ俺の魔法を見に来たんだろ？そこで見ておけ。俺の『真の魔法』の初公開だ。】

そう言い残してテレパシーが切れた。

「どういう意味なのシャイン？」

サナが聞く。

「あいつの魔法は見た目は火魔法なんだが、一部の人間は知っていたんだ。あいつの魔法はただの火魔法なんかじゃないって。」

シャインが説明していると、バージエスを中心にフィールドを半分埋め尽くす魔法陣が現れた。

「な、なんだありやー!？」

スノウが驚く。ほかのシャイン以外の4人も驚く。

「あいつの魔法は絶滅魔法の中でトップに立つ、『神魔法』<sup>ゴッドマジック</sup>。その中の1つの…『神炎魔法』<sup>しんえん</sup>だ。」

シャインが説明を終えた時にバージエスは剣を抜いた。すると、剣が炎を纏い、バージエスの髪が金色から真っ赤に染まっていった。

### 13話 予選リーグ(2) (後書き)

シ「さて、大会のルールを理解してくれたかな？」

エ「大丈夫でしょ。」

ス「お前、第一回戦終わるの早すぎだろ……」

ヒ「約2分。」

レ「はやっ！」

サ「そんなことより、なんなのあのバージェスの魔法？」

ス「確か…神炎魔法だっけ？」

シ「そういうのは次回でわかる。」

レ「待ってってことね。」

シ「では、次回をお楽しみに。」

## 14話 神の力とポニーテール(3) (前書き)

シ「確か今回はエアルだっけ？」

眼「そうです。」

エ「人を見るのは楽しいけど自分のはなんか恥ずかしいな…」  
眼「では、エアルのプロフィールです。」

名前：エアル・ダイヤモンド

年齢：16歳

誕生日：4月15日

魔法：光魔法/治癒魔法

戦闘タイプ：杖/詠唱

髪：オレンジ色のショートヘアを首の後ろで少し結んでいる

瞳：赤色

好きな食べ物：フルーツ全般

嫌いな食べ物：トマト

よく読む雑誌：ファッション誌/少年ジャンプ

バスト：Dカップ

得意な料理：えっと…料理の域を越えている(つまりできない)

好きな場所：カラオケ

好きなゲーム：ぷよぷよ

好きな番組：しゃべくり7

好きなタイプ：元気な人/友達想いの人/やっぱりカッコいい人

眼「こんな感じで。」

エ「超恥ずかしい。」

シ「次は誰だ？」

眼「では…スノウで。」

ス「ついにきたか。」

「では、本編をどうぞ！」

## 14話 神の力とポニーテール(3)

「こ、これは一体：火魔法：いや、何かが違う。」

実況者が戸惑っている。大会関係者も総立ちになり、生徒たちもざわめいていた。

「見る！これが俺の魔法、神炎魔法だ！絶滅魔法『ゴッドマジック神魔法』の1つだ！」

バージエスが叫ぶ。それを聞いた大会関係者、生徒のざわめきがさらに増した。

「よかったな。お前が最初の犠牲者だ。」

バージエスは対戦相手を睨む。

「ひっ！」

対戦相手が逃げ出そうとしたが、

「しんえんじゆばくじん「神炎呪縛陣」！！」

足下から炎のロープのようなものが出てきて身動きを封じられた。

「心配するな。フィルムバリアが装着していれば死ぬことはない。

ただ、病院送りだ。」

バージエスが呪文を唱え始めた。

「紅蓮の炎に宿りし神よ、我が意思に答え、我に力を：「イフリート」！！」

バージエスが剣を振り下ろすと、巨大な炎の斬撃が地面を斬りながら対戦相手に迫る。そして対戦相手はまともに喰らいフィルムバリアが砕け、試合が終了した。

「しょ、勝者、虎神高校バージエス・アルシオン君：」

会場全体が何が起こったのかわかっていない中、バージエスは控え室に戻った。

「な、なんだ今の…」

スノウが啞然とする。

「あれが神の力だ。」

シャインが言う。

「<sup>ゴッドマジック</sup>神魔法……」

「さすがの私も本でしか見たことなかったわ……」

さすがのサナとヒューズも驚いている。

「さて、説明は俺の天鼠戦が終わってからする。少し待っててくれ。」

6人はAブロック会場に戻っていった。

Aブロック会場最終戦の龍空高校VS天鼠高校は40秒という最短記録を叩き出し幕を閉じた。そして6人は<sup>ひとけ</sup>人気の少ない通路に集まっていた。

「とりあえず俺の知っていることを話しておこう。」

シャインが話始める。

「あいつの魔法を知っていたのが一部の人間だって言ったと思うが、俺はその一部の人間だ。」

「マジか!？」

スノウが驚く。

「あとは誰が知っているの？」

レビイが尋ねる。

「バージエスの親と俺と、幼馴染みの女だ。」

「幼馴染み？あんたとバージエスは幼馴染みは知ってるけどもう1人いたの？」

サナが尋ねる。

「ああ。時々遊んでいたし、偶然なのか小学校の間、ずっと一緒にクラスだったんだ。」

「ふん……」

サナが興味ない感じで返事をする。

「名前と特徴は？」

ヒューズが興味津々で尋ねる。



「名前は…」

シャインが言いかけた瞬間ものすごい殺気を感じた。その方向を向くとレビイが睨み付けていた。それを見たシャインは、

「ま、また今度な。今は神炎魔法について話そう。」

即座に話をもとに戻す。

「親はすぐ気が付けると思っけど、シャインとその幼馴染みはどうやって気が付いたの？」

エアルが質問をする。

「最初に神炎魔法だっけ気が付いたのはバージェスの親じゃなくて、俺と幼馴染みだ。」

「そっなの！？」

「まあ、神炎魔法って発見したのはバージェスを調べた科学者どもだ。俺達が気が付いたのはバージェスの炎はなんか特殊だったことだけ。」

「でもそんなのどうやって見つけたの？」

サナが珍しく興味津々で聞く。

「小さい時に俺とバージェスが修行していたらバージェスの炎が周りの草木などに引火しちゃって、鎮火しようと近くの川の水をかけたんだが全然消える気配がしなかったんだ。そして消防車がきて鎮火作業をしたんだが、どんだけ水を大量にかけても鎮火しなかったんだ。最終的に周りの草木を全部燃やしておさまったんだ。」

「ふーん…でもそれは炎の力が強かっただけじゃなかったの？」

サナがまた聞く。

「俺達もそうかなって思ったから実験してみたんだ。ロウソクにバージェスが火を灯して、それにバケツいっぱいの水をかけてみたんだ。けど火は消えなかったんだ。5回もかけたのに全く消せなかったんだ。」

「なんで？」

レビイが首をかしげる。

「一回引火したらその引火したものが燃え尽きるか、バージェスが

自分で消滅させないと消せない。これが神炎魔法の特徴だ。」

「絶対に消せないんですか？」

ヒューズが尋ねる。

「いや、一部の魔法だったら消せるみたいだ。俺は知らないが。」

「そうですか。」

「俺が知ってるのはこれくらいだ。」

シャインが話終える。

「ねえ、神炎魔法って神魔法の1つなんだよね。あとは何があるのかな？」

レヴィがあとの5人に尋ねる。

「本でしか読んでないけど確か炎や水、雷や風の源魔法には基本神魔法はあるわ。」

サナが答える。

「源魔法？」

「炎、水、雷、風、氷、地、光、闇の8つが源魔法と言われているの。」

「へえ〜」

「さて、話も済んだしそろそろ帰るか。」

シャインが帰ろうとすると、

「待ってください。その幼馴染みの名前と特徴は？」

ヒューズがズイツと近付く。

「わかったわかった。そいつの名前は『ミリア・ガーネット』。レヴィぐらいの背で、特徴は背中まで伸びた青色の髪をポニーテールにしている。ま、小学生までの特徴だからな、今は知らねえ。」

「そうですか…」

ヒューズが少しガツカリする。

「てか、なんでそんなに知りたがるんだよ？」

シャインが聞くと、ヒューズはシャインに肩を組んで、

「あなたの周りにはレヴィやエアル、サナなど基本可愛い人が集ま

りやすいようですからね。その幼馴染みさんもさぞかし可愛いのか  
と思ひまして。」

と、周りに聞こえない音量で言う。

「お前ってそんなに女好きだったか？」

「健康な男子ですから。」

「あつそ……」

「ねえ、何2人でヒソヒソ話してるの？」

2人にレビィが聞く。

「男の話です。」

ヒューズがサラッと流す。

「お前ら帰らねえのか？」

スノウが聞く。

「そうだな。帰るか。」

シャインが言い、6人が帰ろうとすると、遠くから誰かが手を振り  
ながらこつちに走ってくる。

「誰だ？」

スノウが気が付きその方向を向く。それにつられてあとの5人も向  
く。遠目から確認できるのは女子であることぐらいだった。どんど  
ん近付いて、その姿がハッキリと見えた瞬間、その女子は、

「シャーーーーー！！！！」

と、言いながらシャインに飛び付いた。そのひょうしに、シャイン  
が下になるように2人とも倒れてしまった。

「いつてー……」

シャインが目を開けると目の前に、白というより銀色の瞳があった。

「シャン！」

女子がニッコリ微笑む。

「青色のポニーテールに銀色の瞳、そして俺のことを『シャン』と  
呼ぶ。」

シャインが頭の中で整理していくと1つの答えにたどり着いた。

「お前、ミリアか？」

「うん！久しぶりだねシャン！」

ミリアが元気よく頷く。

「とりあえず俺から下りろ。重いし暑い。」

「え〜〜〜私はこのままがいい〜〜〜」

ミリアがペツタリとシャインに引ッ付く。

「バカ、離れる。たく、性格は変わってないようだな。」

シャインが呆れる。

「そういうシャンだって私が好きなシャンのまま〜〜〜」

甘えた言い方でシャインの胸あたりを頬擦りする。その光景を見ているレビイがワナワナし始めた。

「ヤバツ…」

それに気が付いたエアルがレビイの怒りをおさえる。

「離れる。」

シャインがミリアをポカツと殴る。

「きやう！痛った〜い。何すんの？」

ようやくミリアが下り、2人が立った。

「ちよつと！」

エアルが怒りをおさえていたがついにレビイの怒りが爆発した。

「誰あんだ？」

さっきまでの甘えた感じがなくなり、見下した言い方に変わった。

「私はレビイ・サファイア。」

「ふ〜ん…そのレビイさんが私になんかよう？」

「いきなり現れて何やってるの！」

「何って、甘えてたの。あんたシャンの何なの？」

ミリアに聞かれ、

「わ、私はシャインの…と、友達よ、友達。」

少しおどおどしながら答える。

「あつそ…私はミリア・ガーネット。シャンの幼馴染みで将来を誓った中よ。」

ミリアが言つと、シャインがポカツと殴る。

「ハッキリ言うわ。幼馴染みだとしてもベタベタし過ぎじゃない？」  
「いいじゃない別に、初対面じゃないんだし。もしかしてあんた、私とシャンがイチヤイチャしてるのに嫉妬してんの？」

（俺はイチヤイチャした覚えはないんだがな…）  
シャインが心の中で呟く。

「ち、違うわよ！それにその『シャン』って何？」

「シャンってのは私とシャインが友達以上の関係になるために私がつけたの。」

ミリアがシャインと腕組みをしようとするとシャインがヒョイと回避する。ミリアがぷくく口を尖らして怒る。

「でも…！」

「彼女じゃないのに私とシャンの間に入ってこないで。」  
止まる気配のない2人の間に、

「2人ともそこまでだ。」

シャインが入り、ようやくおさまった。

「はあ、せつかくの再会が台無し。」

「もうなんも言うなミリア。」

「は…い。？　そういえばバージエスは？」

「…あいつは今虎神高校にいる。」

ミリアの質問に一瞬シャインが答えるのに戸惑った。

「それは知ってるけど、なんで一緒にいないのかなって？」

「それは…」

「それはいいとして、そろそろトーナメント始まるわよ。」  
話を断ち切るようにサナが割り込む。

「そうね。じゃあまたねシャン。次は『1位トーナメント』で。」  
「どういうことだ？」

シャインが尋ねる。

「知らないの？1位トーナメントに出場したのは龍空高校、馬原高校、虎神高校、蛇帝高校の4校。そして私は今蛇帝高校にいるの。しかも、蛇帝高校代表者のサポーターなの。」

「そうなのか。」

「そして1位トーナメント第一回戦は…龍空高校VS蛇帝高校。だから、1位トーナメントで会おうねシャン。」

そう言ってミリアが戻ろうとサナの隣を横切る瞬間、

「あんた…なんか隠してる」わね？」

サナが囁く。ミリアは一瞬止まって何も言わずに立ち去った。

「何言っただサナ？」

「別に。それより、敵が誰であれ、負けんじゃないわよ。」

「わかってる。」

（ミリアがサポーターか…少し不利か…）

6人は1位トーナメントが始まるメイン会場に向かった。

数時間後、ついにトーナメントが幕をあける。

#### 14話 神の力とポニーテール(3) (後書き)

レ「なんなのミリアの奴……」

エ「まあまあ落ち着いて。」

ス「えらいキレイてるなレビイ。」

ヒ「ああいう性格の人は女性から嫌われるタイプなのでしょう。」

ス「しかしまたお前の幼馴染みか。」

シ「そう言われてもな……」

ヒ「ホント、シャインは勝手に周りに可愛い人が集まるからいいですよ。」

シ「や、だから、そう言われても……」

ス「少しは俺ら2人に誰か紹介しろ!」

ヒ「そうですよ!」

シ「紹介しろって言われてもな……」

ス「俺は知ってたぞ。7組のマドンナにラブレター貰ってたの!」

シ「あ、あれはだな……」

ヒ「な、何ですって!?あのマドンナからラブレター……どれだけでもれば気が済むんだ!」

シ「うわっ!待て、はやまるな!」

ス「問答無用!」

レ「うるさい!」無月「!」

ス・ヒ「ぐわああああ!」

シ「この光景前にも見たような……」

サ「今回は1位トーナメント第一回戦スタート。お楽しみに。」

## 15話 VS 蛇帝高校(4) (前書き)

眼「今回はスノウのプロフィールです。特にないのでちゃちゃっと行きましょう。」

ス「適當すぎない?」

名前：スノウ・シルバー

年齢：16歳

誕生日10月10日

魔法：格闘魔法  
スカフルマジック

戦闘タイプ：ナックル

髪：肩まで伸びた銀髪の無造作ヘア

瞳：黒色

好きな食べ物：肉全般

嫌いな食べ物：特になし

好きなゲーム：ストリートファイター

休日の過ごし方：友達と遊ぶノ鍛練

好きな四字熟語：一拳入魂 いつけんにゅうこん そんな四字熟語ありません

自慢できること：27時間テレビを全部見た

AKB推しメン：まゆゆ

好きなタイプ：元気な奴

眼「こんな感じで。」

シ「なんか少くないか?」

サ「そんなことより、何よ一拳入魂って、バカ丸出しじゃない。」

ス「う、うるせえな...」

シ「次は誰だ?」

眼「じゃあ...サナで。」

サ「私!？」



「では本編をどうぞ。」

## 15話 VS 蛇帝高校（4）

数時間経ち、予定会場がなくなり、2つの会場がメイン会場の隣に現れ、その2つの会場の中では2位トーナメントと3位トーナメントが行われている。そして中心のメイン会場では龍空高校、馬原高校、蛇帝高校、虎神高校の1位トーナメントが行われようとしていた。第一回戦は龍空高校VS蛇帝高校である。

「いよいよ1位トーナメントだね。」

控え室で待機しているレビィがベッドで寝転んでいるシャインに話しかける。

「ああ。」

「一応サポーターの仕事をしたんだけど…」

レビィがポケットから1枚の紙を取り出した。

「なんだそれ？」

シャインがむくりと体を起こす。

「相手が使う魔法を調べたの。」

「さすが。」

「相手が使う魔法は2つあるの。」

「2つも？」

「うん。1つは『氷魔法』<sup>アイスマジック</sup>。これはサブ的なもの。メインで使うのは『動物魔法』<sup>アニマルマジック</sup>。」

「アニマル？なんか強そうには聞こえないな。」

「動物魔法はいろんな種類があつて、その中の1つ、『モデル：狼』<sup>ウルフ</sup>が相手の魔法よ。」

「狼か…そう聞いたら強そうだな。」

シャインがニヤリと笑う。

「そろそろ試合が始まります。選手の人はフィールドにお願いしま

す。」

アナウンスが聞こえ、シャインはベッドから下り、通信機をつけて控え室のドアを開け、フィールドに向かった。レビイはそれを見送った。

「頑張ってください。ルーク先輩。」

シャイン達の反対側の控え室でミリアが先輩のルークを応援する。

「分かっているさ。」

シャインより背が少し高く、白色の髪に水色の瞳のルークが微笑む。  
「あなたが推しているシャインという人は俺を楽しませてくれるんだよね？」

ルークがクールに尋ねる。

「はい。あいつは私が認めた男ですから。」

シャインと話している時と間反対の上品な口調で答える。

「あと、ひとつだけ聞いていいかな？」

「何でしょう？」

「俺との約束、忘れてないよね？」

「優勝したら付き合うですよ。覚えていますよ。」

「覚えているならそれでいい。では、応援よろしく頼むよ。」

「はい。」

ルークは控え室を出てフィールドに向かった。ミリアはルークが出ていったのを確認してから、

「ま、相手がシャインだからそう簡単にはいかないでしょうね。」  
と、呟いた。

「さー1位トーナメント第一回戦、龍空高校のシャイン・エメラルド君VS蛇帝高校のルーク・バリユウ君の試合がいよいよ開戦だー！」

実況者が会場を盛り上げる。それにより会場のテンションが上がる。その中を2人の選手が20メートルぐら間を開けてフィールドに立

った。

「よろしくな。」

「楽しましてくれよ。」

シャインとルークが睨み合う。そして2人がフィルムバリアを起動した。『3、2、1、ファイト』とモニターに出て、試合が開始した。

「まずは俺の魔法を見せてやろう。」

ルークがグツと力を入れると、鋭い牙と爪、体から狼の毛が生え、獲物を狩る目に変わり、まるで人獣のような姿になった。

「これが『動物魔法』……」

「知っていたのか。」

「うちのサポーターが調べたんでね。」

シャインが刀を抜いたら光る風が立ち上る。

「それが閃風魔法か。」

「あれ？お前も知ってんじゃないん。」

シャインがわざとらしく驚く。

「うちのサポーターが調べたからな。」

「両方いいサポーター持ったな。」

シャインがニヤリと笑うと、ルークが笑い返した。

「行くぞ！」

ルークが構えると、シャインも構える。そして数秒間シンとした空気が流れ、2人が同時に地面を蹴った。

「『疾風斬』……」

「『狼爪斬』……」

2人の技がぶつかり合い、2人ともHPが減る。そして、普通の人には見えないスピードでシャインの刀とルークの鋭い爪がぶつかり合い、会場には刀と爪が当たる音が響き渡るだけであった。そのスピードについていけているのはミリアとバージェスと大会関係者の数人だけである。

「すごい…全く追い付けない。」

控え室にいるレヴィがキョロキョロとフィールドを見るが、なかなか見えない。

【私なら見る事ができるがどうする？】

突然声がしてレヴィがビクツとするが、すぐに声の主がわかった。

「ナイト！」

【私ならまだ追い付けるが、お前が見れるようになるわけじゃない。

」  
「でも見えるのね？」

【まあな。】

「じゃあお願い。その方がいいアドバイスできそうだから。」

【承知した。】

そう言つて髪が黒くなり、瞳が赤になった。

その間もシャインとルークはハイスピードの攻防を繰り広げていた。

「このままではシャインはやばいな。」

応援席でバージエスが呟く。

「何ですか？」

隣にいたクラウドが尋ねる。

「シャインとルークのスピードはほぼ互角。力はどちらかというとシャインの方が上だ。」

「だったらシャインの方が有利じゃないですか。」

「だがシャインは力の使い方をわかっていない。シャインはかなり力を使っているが、ルークはまだ力に余裕がある。だからこのハイスピード攻防をしていると確実にシャインは負ける。」

バージエスの言う通り、少しだけルークが押し始めた。それにナイトも気が付き、

「我が主よ、このハイスピードの攻防を止める。このまま続けければ主の方が不利だ。」

的確な指示をする。シャインは素直に従い間合いあけ、ハイスピード攻防を止める。攻防が終わった瞬間、会場の盛り上がりがMAXになる。

「的確な指示がきたな。」

ルークが言う。

「よくわかったな。」

「今の俺は狼だ。聴覚はお前より上だ。」

「あつそ」

そう言つてシャインは通信機に触れて、

「ありがとなナイト。」

通信先のナイトに礼を言う。

「気付いたのか。」

「俺のことシャインと呼ばず、我が主つて呼んだからな。」

「そうか。」

「話は済んだか？さて、俺のサブ魔法も解放するか。」

すると、ルークからひんやりする風が流れてきた。

「サブ魔法は予選では使わなかったからな。お前が初めてだ。」

ルークが力を入れた瞬間、ルークの周りが凍った。そして、世にも珍しい氷の人狼に変化した。

「さあ、第2ラウンドだ。」

ルークがスツと鋭い爪を構える。

「「氷狼連爪斬」！！」

次の瞬間、無数の氷の斬撃がシャインに向かって飛んできた。シャインは回避するためフィールド中を走る。だが、かなりの多さに時々足や肩にかする。

「「閃風乱舞」！！」

シャインも閃風の斬撃で対抗する。

「やるねえ、だったらこれはどうか？」「氷撃狼波」！！」

氷の狼の波動がシャインに向かってくる。

「「獅子閃風牙」！！」

シャインは閃風の獅子で対抗する。そして2つはぶつかり、獅子も狼も消えた。

「これは大変な盛り上がりです！まだ第一回戦とは思いません！」  
実況者にも熱が入る。

「やるなシャイン君、ここまでとは思わなかったよ。」

ルークが褒める。

「そりやどうも。」

シャインは横目でモニターを見る。

（あいつが780で俺が680…100の差がついたか…このままやっても負けるだけだ…さてどうする…）

シャインが考えていると、

「では、少しサブ魔法をメインにしてみようかな。」

ルークは氷魔法アイスマジックの魔法を高めた。

「「絶対零度」！！」

ルークが唱えると、フィールド全体が氷河期のようになり一気に気温が下がった。

「ものすごい魔力だー！会場の熱気が下がっていくー！」

実況者がガチガチしながら言う。

「おいおい、サブ魔法だろ？もうちょい弱くてもよくないか？」

シャインが言う。

「さあ、第3ラウンドだ。」

（マジでヤバいな…）

シャインが何かないかと服の中を探る。

（なんだこれ？）

内ポケットに入っていた物をルークに見えないように見る。

（これは…なるほど…よし！）

シャインはルークに向かって走り出した。

「「氷狼連爪斬」！！」

ルークは氷の斬撃で応戦する。

「「隼」！！」

シャインは足に風を纏って斬撃の中を走る。そしてルークの目の前にきた瞬間、ポケットにあった『あるもの』を取り出し、ルークに何かを吹きかけた。

「がっ……!!」

吹きかけられたルークは鼻を押さえよるける。

「何をした!？」

「これだよ。」

シャインが持っていたのは『香水』だった。

「香水だと……!？」

「お前今狼だからな、嗅覚は人以上だろ？」

そう言っただけでシャインはルークを蹴り飛ばした。

「『獅子閃風牙』……!」

吹き飛んだルークに閃風の獅子が追い打ちをかける。まともに喰らったルークのHPが大幅に減った。

「くっ……」

ルークがよろよろと立ち上がる。

「あんなもののいつの間に……」

控え室にいるナイトが驚く。

【もしかして香水使った?】

心の中のサファイアが尋ねる。

「お前か、主に香水を持したのは?」

【持たしたって言うより忍ばしといたの。だって相手は狼だから嗅覚がすごいでしょ? だから一応私が持っている中で一番強い香水を忍ばしといたの。】

「ほう……やるではないか。」

【サポーターだし。】

「さて、どうなるかな……」

ナイトとサファイアは静かに見守る。



「そろそろ終わりにしようぜ。」

シャインが勝利をほぼ確信する。

「これだけは使いたくなかったが…」

ルークは人獣から戻り、何か唱え始めた。

（何する気だ？）

シャインが警戒する。

「「氷縛」——！」

ルークが唱えた瞬間、シャインの足下から氷の竜巻が現れ、シャインを囲んだ。次の瞬間、シャインの足から氷始めた。

「しまっ…！！」

氷の竜巻が消え、会場がシャインの姿が見てた時、シャインは氷の中に閉じ込められていた。

「氷縛はそう簡単には壊せない。「大氷槍」。」

ルークは右手に氷の槍を持ち、シャインに向ける。

「終わりなのは…君だ——！」

ルークがシャインに向かって槍を投げた。

（ヤベエ……！）

万事休すのシャイン。

つづく…

15話 VS 蛇帝高校(4) (後書き)

ス「おいおい続いちゃったぞ。」

エ「そんなことよりシャインピンチじゃん!」

サ「さすがにヤバいわね…」

ヒ「どうするんでしょうか?」

ス「どうなるんだ眼鏡純!」

眼「え〜っと…予定しているのは…」

エ「言っているの!」

眼「冗談です。次回で決着するのは言っておきます。」

エ「あ〜〜次回が待てない!」

眼「待って下さい。」

ヒ「じゃあ次回をお楽…」

エ「待って!」

ヒ「何ですか?」

エ「その言葉みんなで言おうよ。」

ヒ「別にいいですけど…」

エ「じゃあ、せ〜の…」

ス・エ・サ・ヒ・眼「次回をお楽しみ!」

サ(意味……………あつたの?)

## 16話 解放した力(5) (前書き)

眼「今回はサナのプロフィールです。」

サ「許可してないわよ。」

眼「強制です。ではどうぞ。」

名前：サナ・クリスタル

年齢：16歳

誕生日：不明

魔法：攻撃魔法  
アタックマジック

戦闘タイプ：詠唱

髪：金髪のショートヘアー（赤色のヘアピンをしている）

瞳：金色

好きな食べ物：メロンパン

嫌いな食べ物：トマト

最近読んでいる本：絶滅魔法についての本

好きな動物：ホワイト家族のお父さん

好きなタイプ：興味ゼロ

シ「おい、少なすぎないか？」

眼「サナが全然提供してくれまなかったんです。ヒューズは全く提供してくれませんでした。」

シ「おいヒューズちゃんと提供しろよ。」

ヒ「分かりましたよ。少しは書いたんで次回に。」

レ「では本編をどうぞ。」

エ「予想だけど、確実に眼鏡さんプロフィール書くのに疲れたよね

「？」

ス「なるほど。」

眼「図星なんでやめてください。」

## 16話 解放した力(5)

「主!!!」

ナイトが叫ぶ。

「終わったな…シャイン。」

バージェスが冷静に言う。

(もう…ここまでか…)

シャインも半ば諦めていた。その時、

「シャイン!!」

誰かが自分の名前を呼ぶ。

(レビイ…)

その正体は通信機から聞こえるレビイだった。

「シャイン…勝って!」

レビイはそれだけ伝え、通信機を切った。それを聞いたシャインは、目付きが変わり、体が黄緑色に光り魔力が上がった。その瞬間、氷縛にヒビが入った。

「あの氷縛にヒビが!?だが…遅い!!」

次の瞬間、シャインが入っていた氷縛に氷の槍が直撃した。あたたか威力により、砂ぼこりが立ち、シャインが見えなくなった。

「決まったー!!」

会場全体がルークの勝利を確信した。だが、不自然な光景に会場がざわめく。その光景とは…

「HPが…減っていない…」

ルークの言った通り、ルークの技を喰らったシャインのHPは普通は減らなければならない。しかし、モニターのHP表示は全く減っていないかった。

「どういうことだ?」

ルークがシャインの方を見る。会場も注目していると、砂ぼこりの中から、

「お前：第3ラウンドだつて言つてたよな…」

という声が聞こえた。砂ぼこりが消え、起きた光景を見た会場やルークは驚いた。なんと、シャインが両手で槍を掴んで止めていた。

「なんだと!？」

ルークがまさかのことに驚く。

「シャインすごい！」

さすがのミリアも驚く。

「よかつた…」

レビイがホツとする。

「これが…最終ラウンドだ!！」

すると突然シャインの姿が消え、氷の槍がゴトンと落ちる。

「こつちだ!」

シャインはルークの背後をとつた。

(速い…)

ルークが反応した時にはシャインの拳が目の前にあつた。

「「閃風拳」!！」

シャインの拳がルークをとらえ、吹き飛ばした。その時、会場全体がシャインの異変に気が付いた。

「シャインの髪が黄緑一色になつて…」

レビイの言う通り、シャインの髪は黒と黄緑が7：3の割合だったが、今のシャインは黄緑一色に変わっていた。そして体からはレビイのオーラのように黄緑色のオーラ（超サイヤ人を想像してください）が放たれていた。

「こ、これは…」

応援席でクラウドが立ち上がる。

「ついに能力が『解放』されたか。」

バージエスがニヤリと笑う。

「すげえ、力が溢れ出てくる。」

シャインが感動する。

「まさか戦いの中で成長するとは…俺も全力でやろう!！」

ルークが人狼になり、魔力を高める。

「行くぞシャイン!!」

「来いルーク!!」

シャインとルークが両方走り出す。そして、ルークの氷の爪とシャインの閃風の刀がぶつかり合った音が響き、背中を向けたまま2人とも動かなくなった。数秒間シンとした空気が流れた後、シャインが刀を鞘に納めた瞬間、ルークがバタリとつつ伏せに倒れ、モニターのHP表示が0になり、決着がついた。

「試合終了ー!! 勝者、龍空高校シャイン・エメラルド君!!!」  
実況者が試合終了を告げた。それを聞いたシャインはルークと同じようにバタリとつつ伏せに倒れてしまった。その時に髪の色がもとに戻った。

「シャイン!!」

レビィが控え室からフィールドに出てきた。

「大丈夫シャイン?」

レビィが心配した顔で見る。

「馴れないことはするんじゃないな…」

そう言つてグツと体を起こし、座り込む。

「ルークは?」

「ルークさんはさっき医務室に運ばれた。」

「そうか。」

シャインがヨロツとしながら立ち上がる。

「シャインは医務室行かなくていいの?」

「俺は控え室で休めば大丈夫だ。」

そう言つてシャインは控え室に戻り、レビィも一緒に戻った。

控え室に戻ったシャインはベッドで休憩しているとルークが入ってきた。

「もう大丈夫なのか?」

シャインがルークに尋ねながら起き上がる。

「おかげさまで。そっちは？」

「こつちもおかげさまだ。」

「シヤン、さっきの力何なの？」

ルークの後ろからミリアが出てきて尋ねる。

「それが俺も分からないんだ。突然だったから。」

「そう…」

その時、ドアがコンコンとノックされた。

「どうぞ。」

レビイが言うと、ドアが開いて桜色の髪のクラウドが入ってきた。

「お前は確かバージェスの手下。」

「次からはクラウドと呼んでほしいね。」

「何の用だ？」

少し警戒しながら尋ねる。

「バージェスさんとレインは試合だから俺が代理人で…」

「だから何の用だ？」

シヤインが少しイラツとしながら尋ねる。

「もうちょい聞こうよ…用は、お前の能力解放についてだ。」

「それについては俺はさっぱり分からねえ。」

シヤインが答える。

「だけど俺は知ってただよ。」

「何だと!？」

シヤインが驚く。

「! あなたまさか、『あの時』のこと、見てたわね。」

レビイが思い出す。

「あの時？」

シヤイが首をかしげる。

「リウド君の家を探したことあるでしょ？」

「ああ。」

「あの時にあなたは1回能力を解放しているの。」

「だからあのタコを上げたのか。」



シャインが頭で結び付いた。

「そう、その時俺も見てたんだ。まあ、前とさっきのもまだ完全な解放ではないがな。」

クラウドが控え室を出ようとした時、何かを思い出したように立ち止まる。

「あー、バージェスさんの伝言忘れてた。『俺に勝ちたかったら完全な解放をするんだな。』だってさ。」

「じゃあこう伝える。『俺は絶対お前に勝つ。』ってな。」

「了解。」

そう言つてクラウドは控え室を出ていった。

「2人とも仲良かったのにどうしちゃったの?」

ミリアが尋ねる。

「関係ないだろ。」

シャインが少し怒りながら言つたのでミリアはそれ以上聞かなかつた。

「では、俺達はこれで失礼するよ。」

「またねシャン。」

ルークとミリアが控え室を出ていった。

「もしかして君はこうなるのを予想して俺の条件にのつたな?」

通路を歩きながらルークがミリアに尋ねる。

「ええ、そうですよ。」

ミリアが素直に答える。

「悪い子だ。」

その時フィールドの方から、

「試合終了ー! 勝者、虎神高校バージェス・アルシオン君!」

実況者の声が聞こえた。

「終わったようだね。」

「そのようですね。」

その時ミリアがフィールドと通路をつなぐ扉の前で立ち止まった。

「すいません、さきに控え室に戻っててくれませんか?」

「どうした？」

「少し昔からの友人とお話しをしたくて。」

ミリアが扉を見る。そこから試合を終えたバージェスとレインが出てきた。察したルークは「わかった。」と言って先に控え室に戻っていた。

「レイン、先に行ってる。」

「了解しました。」

バージェスも先にレインを戻らせ、バージェスとミリアの2人だけになった。

「久しぶりだね、バージェス。」

「そうだな、じゃじゃ馬ミリア。」

あまりよくない空気が漂う。

「じゃじゃ馬って言わないで。」

ミリアがムツと怒る。

「じゃじゃ馬はじゃじゃ馬だ。で、なんか用か？」

「聞きたいのは1つだけ。シャンと何があったの？」

真面目な顔で聞く。

「シャン？あーシャインの奴か。そんなことあいつに聞きな。」

バージェスが控え室に戻ろうとする。

「待てよバージェス。」

そこにシャインも参加した。レビイもいるがさすがに入りづらい状態である。

「シャン…」

「何かようかシャイン？」

バージェスとミリアがシャインを見る。

「お前のとこの桜髪に伝えろと言ったが今言っておく。俺は絶対お前に勝つ。」

シャインの真剣な顔を見てバージェスがあとため息をつく。

「寝言は寝て言え。30分後、俺とお前の力の差を思い知らせてやる。」

バージェスはシャインとミリアを睨んで控え室に戻っていった。

「バージェス…ホントに変わっちゃったね。」

「あいつは力が全てだと思ってやがる。だから俺はあいつに教えてやる。力が全てじゃないとな。」

シャインはミリアとレビイの前で宣言した。

「じゃ、行ってくる。」

30分経ち、シャインが控え室を出ようとする。

「シャイン！」

レビイが不安を抱いている顔でシャインを見る。

「シャイン…大丈夫だね？」

その言葉を聞いたシャインがレビイに近付き、

「大丈夫だ。心配すんな。」

ポンと優しく頭を叩いてレビイを安心させる。

「行ってくるな。」

シャインが控え室を後にした。外の通路に出るとミリアが柱にもたれて待っていた。

「シャン。」

「ミリア…」

「私はシャンの味方に付くね。今のバージェスはなんだか…嫌だから…」

「そうか、じゃあ応援頼むぞ。」

「うん。」

シャインはミリアを残してフィールドに入るための扉に向かう。そして扉の前に立ったシャインは、

（バージェスを止めれるのは俺だけだ。だから、負けるわけには…いかない！）

心の中で決意をして、扉を開けた。フィールドに立つと会場の歓声が耳に響く。シャインが反対側の扉を見るとバージェスが入ってきた。

「さーついに、ついに始まります！BOM決勝戦！この舞台に立つたは、龍空高校シャイン・エメラルド君と虎神高校バージェス・アルシオン君！2人とも1年でありながらも素晴らしい闘いを見せてくれました！この決勝戦ではどんな闘いを見せてくれるんでしょうか？」

実況者もここ一番の盛り上がりである。

「この時を待っていたぜ。シャイン。」

「ああ、俺もだ。」

次回、ついにシャインとバージェスが激突する。

つづく...

## 16話 解放した力(5) (後書き)

エ「ねえ、私達全然出てこないんだけど。」

サ「今はいらないんですよ。」

ヒ「また出れますよ。ですよね眼鏡さん？」

眼「笑顔で矢を向けるのを止めてください。」

ス「だったからもうちょっと出してくれないかな？」

眼「炎の拳を向けないでください。」

エ「次回ついにシャインとバージェスが激突するよ。」

サ「波乱が予想されるわね。」

エ「次回をお楽しみに！」

## 17話 閃風VS炎神（6）（前書き）

眼「ここで緊急な変更があります。絶対ここは読んでください。バ  
ージェスの魔法を『神炎魔法』から『炎神魔法』に変更となります。  
本当にすいません。」

ス「じゃあ気を取り直してヒューズのプロフィールにいきましょう  
！」

ヒ「少ししか書いていません。」

名前：ヒューズ・クオーツ

年齢：16歳

誕生日：4月2日

魔法：武器魔法  
ウェポンマジック

戦闘タイプ：弓矢

好きなタイプ：素直で落ち着いた人

ス「マジで少なー！」

エ「もうちょっと書きなさいよ。」

サ「それより、次から前書き何書くわけ？」

眼「考え中です。」

エ「まだ決まってるないのね。」

眼「決まりました。」

ス「はやっ！」

眼「『魔法学園』Q&A』をします。」

ヒ「何ですかそれは？」

眼「読者の人、もしくは私が考えた質問に6人が答えてもらうとい  
うものです。」

エ「へーなんか面白そう！」

サ「ま、基本は眼鏡純の質問だろうけどね。」

ス「例えば？」

眼「今回後書きで言うことがないので後書きで例をします。」

エ「その前に本編をどうぞ！」

## 17話 閃風VS炎神（6）

「さー2人がフィルムバリアを装着した3秒後に試合開始だー！」  
シャインとバージェスがフィルムバリアを装着した。『3、2、1、  
ファイト』とモニターに出て、決勝戦が開始した。開始した直後バージェスが剣を抜きながらシャインに向かう。シャインも刀を抜いて構える。

「くれんけん紅蓮剣」！！」

炎の剣がシャインにふりかかる。シャインはそれをギリギリで回避した。

「「疾風斬」！！」

そのまま攻撃に入ったが、簡単にバージェスが回避する。2人は間合いをとって、そのままルーク戦のようなハイスピード攻防が始まった。

「まずい！あまり長い時間しないで！」  
レビイが通信機で指示する。

（さすがに前の試合で学んだぜ。）  
シャインが間合いをとろうとするが、バージェスがなかなか間合いを明けさせてくれない。

（くそ…全然開かねえ…）  
次の瞬間、突然バージェスが間合いをとり、ハイスピード攻防が終了した。

「何の真似だ？」

シャインがバージェスを睨みながら尋ねる。

「やはり、俺らの闘いにこれはいらないな…」

するとバージェスがフィルムバリアに手をかけ、そのまま握り潰した。それによりモニターのHP表示が消えた。

「なっ…！？」

バージェスの行動にシャインは理解ができない。



「あーと、バージェス君フィルムバリアを潰してしまった。どうしたんでしょう？」

実況者が驚く。いや、実況者だけでなく会場の全員が驚いた。

「どういうことだ？」

「俺はお前と真っ向勝負がしてえ。だからあんなバリアは必要ない。」

「つまり、この俺にもフィルムバリアを破壊しろと？」

「察しがいいな。だがお前は通信機もだ。」

「お前は通信機どうするんだ？」

「俺はもともと付けていない。」

バージェスが耳を見せる。確かに付いていない。

「完全なタイマンか…」

シャインがどうするか考えていると、

「シャインどうしたの？」

通信機からレビイの声が聞こえてきた。シャインはレビイの声を聞いてある決心をした。

「レビイ…」

「ん？」

「絶対勝つから…心配すんなよ。」

「えっ…？」

そう言い残してシャインは耳から通信機を、腰につけていたフィルムバリアを取って右手に持ち、握り潰した。

「ちよつとシャイン!？」

レビイが自分の通信機にシャインを呼ぶが返事が返ってくるはずもなかった。

「こんなことしたから教師や大会関係者がここに来るぞ。」

「それを今から阻止する。」

バージェスが右手を上げると、そこから波紋のように赤い円の魔法陣がフィールドの端まで広がっていく。

「「炎神城壁」えんじんじょうへき」!！」

次の瞬間、魔法陣から炎が立ち上り、一瞬でフィールドを包み込んだ。応援席や大会関係者がいたところ、控え室からはシャインとバージェスの姿は全く見えなくなった。

「な、何これ!？」

レビイが突然の炎の壁に戸惑っている。

「シャインは応答しないし、どうしよう…」

この状況が分かりそうな人物を頭の中で探す。そしたら1人の女子を見つけた。

「サナなら分かるかも!」

すぐに控え室を出てサナ達がいる応援席に向かった。

「おいおい何だよこの状況!」

応援席でスノウが叫んでいる。

「試合はどうなっているんだろ?」

心配そうにエアルがマジックウォールから見える炎の壁を見ながら呟く。

「サナ!」

そこに控え室を飛び出したレビイが応援席に到着した。

「レビイ!？何であんたがここに?」

普通はこんなところにはいない人物なので当たり前のように驚く。

「サナ、この状況なんなの?」

「私が聞きたいぐらいよ。あんた通信機でシャインと話せるでしょう?それで中の様子を聞いてよ。」

サナが言うがレビイが首を振る。

「あのバカ通信機を壊したの。」

「何考えてるのあいつは!」

サナが舌打ち混じりに怒る。

「しかもモニターから見てシャインもフィルムバリアを破壊していますね。このままだとダメージがそのまま蓄積されますよ。」

冷静に座りながらヒューズが応援席に付いている少し小さいモニタ

ーを見る。

「何のつもりなの2人とも……」

サナが炎の壁を眺めながら4人に尋ねるが、誰も答える人はいなかった。

炎の壁の中ではシャインとバージェスが死闘を繰り広げていた。

（くそ……！マジで強え……）

刀と剣が踊る中でシャインはどうしたらバージェスに勝てるか考えている。

「クハハハ！いいぞ！さすがは俺が認めた男！だが……まだ甘い！」  
バージェスがシャインの風砕牙を上高くはね飛ばした。シャインが刀に気をとられた瞬間、バージェスの強烈な蹴りが腹をとらえ、吹き飛ばされた。

「ぐっ……！！」

地面を滑り、炎の壁ギリギリで停止した。意識がもうろうしながらヨロヨロと立ち上がり、近付いてくるバージェスを今の限界の力で睨む。

「まだ自分で能力解放を制御できないみたいだな。」

バージェスがシャインの首を掴んで持ち上げる。シャインもバージェスの腕を両手で掴んで抵抗するが、さっきのダメージで力が入らない。

「では俺が解放さしてやろう！」

バージェスがシャインを炎の壁に押し付けた。

「あああああ……！！」

シャインに炎が襲う。

「どうした！さっさと能力を解放しないと死んでしまうぞ！」

次の瞬間、シャインの体が黄緑色に光り、目付きが変わった。バージェスの腕を両手でグツ！と握るとメキリと骨がきしむ音がした。その痛みでバージェスがシャインを離れた。シャインは炎の壁から脱出した。

「なるほど、自分の命に危機が迫った時に解放されるか。」  
バージェスが髪が黄緑一色になっているシャインを見ながらニヤリと笑う。

（解放状態にはなったが、まだ馴れていないからどれだけ続くか分からねえ…ただとなったからには無駄にはしない！）

シャインは地面を蹴った。バージェスの顔を殴った。よろめいたバージェスにラッシュを喰らわす。そして上に蹴りあげ自分も飛び上がり、下に向かって蹴り飛ばした。バージェスは地面ギリギリで体制を戻し、ダンツ！と音をたてて地面に着地した。

「そうだ、それでこそシャイン・エメラルドだ。」

着地するシャインを見ながら口から流れる血をグイッと拭き取る。

「はあ…はあ…はあ…」

シャインは試合が始まった時より息切れが激しくなっている。

（刀まで10メートルぐらいか…）

シャインが地面に刺さっている風砕牙の位置を確認する。

「刀を取れ。」

バージェスが思いがけない言葉を口にした。

「普通なら刀を持っていない今がチャンスだろ？」

シャインは理由を尋ねながら、従うように少しずつ刀に近付いていく。

「お前は体術より剣術の方が強いからな。」

「あくまでも全力で闘いたいから…」

「そういうことだ。」

シャインが地面から風砕牙を抜き取る。

「そろそろ本気で行くぞ！」

バージェスの目付きが変わり、魔力が高まった瞬間に体から炎が上がる。その炎が剣にも伝わり炎の剣とかす。シャインも魔力を高めた瞬間に黄緑色のオーラが強くなり、刀に伝わり閃風の刀とかした。  
「行くぞシャイン！殺してやる！」

「勝つ！絶対！」

2人の全開バトルが始まった。ハイスピードの攻防の中で、

「えんじんは炎神波」！！」

「閃風波」！！」

三日月型の黄緑色の衝撃波と火炎の衝撃波がぶつかり合った。その時の衝撃により砂が立ち、バージエスの姿が見えなくなった。

「どこにいる？」

シャインが砂ぼこりの中を目をこらして探す。次の瞬間砂の中から剣が現れた。シャインは反応したが肩をかすめた。

「よくかわしたな。」

「今のかわしてなかったから致命傷だ。マジで殺す気か？」

「今さら気が付いたか！」

刀と剣が攻防する中で話す。

「1つだけ聞きたい。なんでお前は俺を殺したい？」

「簡単なこと、俺にとってキサマが一番邪魔なだけだ！」

「邪魔？」

そこで攻防が一旦終了する。

「そうだ！俺が生まれた場所は昔から身分は低かった。分かりやすい言い方をすれば『部落差別』ってやつだ。それにより周りの人間は俺のこといつも見下してやがった。いいように使われまるで奴隷だ。抵抗すれば権力という見えない力でねじ伏せられる。俺はそんな生き方はまっぴらごめんだった。だが自分には権力がない。俺を見下してやがる奴らをどうやって見返すか！簡単なことだった。人間すべてが平等に持っているもの！『力』だ！力なら奴らを支配できる！なのに…何をしようにもキサマがすべて邪魔をする！キサマさえいなかったら俺は奴らを支配できるんだ！だからここで消えてもらうぞ！シャイン・エメラルド！」

バージエスが剣先をシャインを向ける。

「邪魔していたのはお前のやり方がやり過ぎだからだ！それと、俺はただお前に…」

ドシュツ！！

「キサマの話には興味はない。ただ…消えてくれればいいだけだ。」  
シャインは数秒間何が起きたか分からなかった。すると口から血が流れ始め、脇腹ぐらいに違和感を感じた。見ると何かが刺さっていた。剣だった。バージエスの剣が刺さっていた。

「がっ……………！！」

バージエスが剣をシャインから抜いた。意識がもうろうつとしてうつ伏せに倒れた。背中の龍が赤く染まっていた。

## 17話 閃風VS炎神（6）（後書き）

眼「では今から『魔法学園』Q&A』の練習をします。」

ス「おし！」

エ「OK！」

レ「はい。」

シ「ああ。」

ヒ「了解。」

サ「……。」

眼「皆さん一緒に返事をして下さい。打つのが大変です。」

シ「早くやろうぜ。」

眼「では今回は練習なので1つだけです。」

Q：6人のテストの平均点はなんぼですか？

眼「では皆さん答えてください。」

A：サ：95

レ：90

ヒ：82

エ：50

ス：40

シ：39

サ「ヒューズから下が酷すぎない？」

ス「シャインと一緒にするな！」

シ「何だと！！お前と俺、そんなに差ないだろ！」

ス「俺は欠点ギリギリと欠点は違う！」

シ「これはあくまで平均点だ！いいときは50くらいある！」

ヒ「これをどぐりの背比べと言っているんですね。」  
サ「呆れた…」



## 18話 決着（7）（前書き）

眼鏡「『魔法学園』Q&A」のコーナー。」

エ「あれ？眼鏡さんの書き方が『眼』から『眼鏡』に変わってる。」  
ス「気分変えか？」

眼鏡「いえ、そうではないんですけど、『眼』だけでは何か気持ち悪い感じがしたので『鏡』を付けたんです。」

エ・ス「へへへ」

シ「そんなことよりさっさとしようぜ。」

眼鏡「そうですね。では記念すべき最初の質問はこちらです。」

Q：6人はそれぞれ何の委員会に入っているんですか？

眼鏡「ではお答えください。」

A：シ…入っていない

レ…風紀委員

ス…体育委員

エ…保険委員

サ…図書委員

ヒ…生徒会（書記）

エ「なんかすごくイメージに合っているような…」

ス「てかレビイって転校生なのによく風紀委員に入れたな。4月に決まっていたろ。」

レ「あつ、それはね、風紀委員の先生が「お願い、風紀委員に入ってくれ。」ってせがまれたの。」

エ「ふ〜ん…まあ、レビイみたいな子は合ってるからね。」

レ「ずっと断っていたんだけど、うるさいから仕方がなく入ったの。」

「エへ」

レ「私はさておき、シャインって何にも入っていなかったの？」

シ「面倒いからな。」

サ「でも確か絶対何かしなきゃいけなかったでしょ？何やってんの？」

シ「戸締まり係。」

エ・ス・サ・レ・ヒ「……………」

ヒ「確か戸締まり係は2人。シャインが閉めているところを見たことがないからすると…もう1人に押し付けていますね…」

## 18話 決着(7)

ドキン!!

応援席で対策を考えていたレビィが突然炎の壁の方をバツと見た。

「どうしたのレビィ?」

いきなりのレビィの行動にビックリしながらエアルが尋ねる。

「胸騒ぎがする。」

レビィが自分の胸をおさえる。

「胸騒ぎ?」

「うん。」

「彼女の勘ってやつね。」

そのままスルーしかけたが、

「彼女じゃない!」

レビィが気が付いてツツコむ。

「でもそれが本当なら中はヤバそうだな。」

スノウが珍しく心配そうにしている。

「でもこの炎の壁をどうしますか?

ヒューズがサナに尋ねる。サナは顎に手をやりながら考える。そし

て1つの作戦を思い付いた。

「1つだけあるわ。」

「どんな作戦だ?」

スノウがやる気満々で尋ねる。

「この作戦は私とレビィしかできないわ。」

「そ、そうか…」

スノウがガクツと肩を落とす。

「サナと私だけ?」

レビィが自分を指で指す。サナは頷いてからマジックウォールへ近付き、作戦内容を話始めた。

「私がこのマジックウォールに穴を開け、その穴からレビィは夜叉

魔法で、私は封印魔法で強引に突破する。って作戦。」

「それって…危険じゃない？」

レヴィイが恐る恐る尋ねると、サナが頷く。

「ええ、かなりね。今はマジックウォールのおかげでこっちに炎が入ってきていないけど、そこに穴を開けるとなると炎がこっちに入ってくる可能性がある。」

「じゃあ俺ら焼け死ぬじゃないか！」

スノウが慌てる。

「だから危険だって言ってるのよ。」

サナが冷やややか言い方で返す。

「でもなんで私なの？」

レヴィイが自分が選ばれたのに疑問をもつ。

「夜叉魔法はどんな魔法でも斬れるという能力があったはず。だから私の予想だと、この炎の壁を斬れる。」

「そうなのナイト？」

レヴィイが心の中のレヴィイに尋ねる。

【まあな。夜叉魔法に耐性も弱点もない。可能だと思っぞ。】

「ナイトが可能だって。」

ナイトが言ったことを皆に伝える。

「わかったわ。すぐに取りかかるわよ。今から使う魔法は詠唱できないものだから魔法陣を書かなきゃいけない。その分かなり時間がかかるの。」

説明しながらもサナが魔法陣を書き始めていた。

「ちよつとあなた達！さっきから聞いてたら何しようとしているの！」

ずっと5人の話を聞いていたナナリー先生が怒り始めた。

「何しようとして…閃風バ力を助けに行くんです。」

魔法陣を書きながらサナが答える。

「シャイン君を助けるのは大会関係者の人が何とかしてくるからあなた達が別に危険な目にあわなくてもいいのよ！」

それを聞いたサナが魔法陣を書くのを止めてナナリー先生を見る。

「何とかしてくるから？先生ならわかっているはずですよ？この会場にもう関係者は誰一人いないって。」

「そ、それは…」

凶星だったらしくナナリー先生が戸惑う。

「なんでそんなことわかるの？」

レヴィがサナに尋ねる。

「教師のほとんどが『魔力察知』ができるはず。まあ、私もできるけど。」

「魔力察知？」

「魔力察知というのは魔法が使える人の魔力を感じ取ってその人の力や位置がわかる技術よ。」

「マンガ、ドラゴンボールでいう、気を感じるみたいなものだな？」  
スノウが割り込んできた。

「そのマンガを知らないからなんとも言えないけど、そんな感じ。」  
サナが頷く。

「そ、それはそうだけど…もしかしたら外に応援を呼びにいったのかも…」

「無いわね。」

ナナリー先生の予想をサナが一言で否定する。

「大人は不都合なことが起きるとそれをどうしようともせず、どう隠そうしか考えない。どうせこの大会ことも隠すつもりでしょうね。」

「

「だから…」

「先生ならわかってはいるはずですよ！どんどんシャインの魔力が減少していることに！このままほっていたらシャインは死にます！」

「お願いです！私達に行かせてください！」

サナとレヴィのまっすぐな目にナナリー先生は返す言葉が見つからず、はあとため息をついて、

「わかったわ。でも、無茶だけはしないで！」

忠告をいって突入を許可した。

「ありがとうございます！」

レヴィが頭を下げる。サナは許可をもらった瞬間から魔法陣の続きを書き始めていた。

「ありがとねサナ。シャインのために。」

魔法陣を書いているサナにレヴィがお礼を言う。

「勘違いしないで。私はただすぐ逃げる大人にはなりたくないだけ。別にシャインのためじゃいわよ。」

「うん。わかってる。」

レヴィはサナの言葉に微笑んで返す。そして魔法陣が完成するのを黙って待つ。

「クハハハハハハ！流石はシャイン。まだかろうじて生きてやがる。まあ、放っていても死ぬか。」

倒れているシャインをバージエスが見下ろす。

【俺はただお前に…】

するとバージエスの頭の中にシャインの言葉がよぎる。

「何を言いたかった知らないが、俺の力に対する気持ちは変わらない。俺を見下してきた野郎どもを見返すために強くなる…これは昔から同じだ。」

バージエスはシャインを置いてフィールドを去ろうと背を向けた時、シャインの指がピクツと動き、

「お前が…昔から…同じ気持ちなら…俺だって…昔から変わっちゃ…いない…」

両手で鉄のように重くなった上半身をグツと上げて、バージエスを睨み付けながら立ち上がるうとする。

「もう立つな。死が近付くだけだ。」

バージエスがバカにしながら振り返る。

「支配するために、その想いがお前を強くした。だったら、俺も…」

その時シャインの脳裏にジャングルジムで話した記憶が甦る。

「『信じれる人間を守る』、この想いが俺を強くした！」

それを聞いたバージエスがニヤツと笑う。

「あの時と一緒にの言いやがって。」

バージエスもシャインと同じ記憶が甦っていた。シャインが立ち上がるが、流血が多いせいかな足はガクガクと震えている。

「お前は…俺が倒す！」

次の瞬間、シャインから風の柱が立ち上る。オーラも激しくなり、左目の瞳が火の玉が燃えているようになっていく。目付きもよりきびしくなる。

「ついに完全な解放をしたか。」

バージエスがスツと剣を構える。

「来いよ。」

シャインが挑発する。

「なるほど、自分の命に危機が迫るほど強くなるのは本当か。」

「少し違うな。自分だけじゃないくて、自分の周りで命に危機が迫ってもなる。じゃなきゃリウド助ける時に解放しないもんな。」

「クハハハハ！面白い！最終バトルだ！」

シャインとバージエスの最後の闘いが始まった。

シャインが能力が完全に解放したことは応援席にいるサナも気が付いた。この時ナナリー先生やスノウ達は避難しており、応援席にいるのはサナとレヴィイだけである。

「魔力が上がった！」

突然声を上げたからレヴィイがビツクリする。

「どうしたの？」

「さっきまで下がり続けていたシャインの魔力が急激に上がったの。」

「そうなの！よかった！」

レヴィイがホッとする。

「けど、どうして？」

「たぶんシャインの能力が完全解放したのよ。」

「あれの完全……」

レヴィイが能力解放したシャインを思い浮かべる。

「あいつの命に危機が迫った時に解放する傾向があるらしいから完全な解放したってことは命に危機が迫ったらしいわね。」

「大丈夫かな？」

心配するレヴィイに、

「大丈夫よ。」

とサナが励ます。

「よし、書けたわ。」

書き始めて1時間ぐらいたってようやく魔法陣が完成した。

「いよいよ突入するのだな。」

レヴィイがサファイアからナイトに変わる。

「行くわよ。」

サナが魔法を発動しようとした時、ふいにナイトが止める。

「1つ聞きたい。私は夜叉魔法で突入できるが、お前はどうかやって突入するのだ？」

少しの間沈黙が流れてから、サナが口を開く。

「『あっち』の魔法を使う。」

その言葉にレヴィイがさらに聞く。

「大丈夫なのか？」

「大丈夫も何も、あんたは私のこと見抜いちゃったから隠す意味もないし、サファイアには見えていないんでしょう？」

「まあな。」

「なら使っわ。」

「そうか。」

会話が終わると、サナは魔法を発動しようとする。次の瞬間、



「待つて！私も行かして！」

またしても誰かが止める。サナは少しイラッとしながら振り返る。扉の近くには青色のポニーテールの女性が立っていた。

「ミリア・ガーネット。」

サナが少し驚く。

「私も連れていつて。」

ミリアが走ってきたせい少し息が切れながらお願いする。

「何故だ？」

ナイトが尋ねる。

「私もシャンが気になるし、今のバージェスには一発お仕置きが必要だと思つてね。」

レビィの雰囲気が変わっていることに多少疑問を持ちながら理由を言う。

「そうか。入れる魔法はあるのか？」

レビィがさらに聞く。

「私は水魔法が使えるから大丈夫！」

ミリアが手でオーケーを作る。

「でもこれは炎神の炎よ？」

サナが大丈夫が聞く。

「大丈夫！」

ミリアが元気よく答える。

「そうじゃあ、行くわよ！」

「承知。」

「オーケー！」

サナが魔法を発動させる。

「破壊の陣」ブレイクサークル！！」

マジックウォールにピキピキとヒビが入り、きれいに円の形に割れる。そこから予想したように神の炎が流れ入ってきた。

「加護かご閻」！！」

「アクアバリア」！！」

「<sup>ふうまてん</sup>封魔天光」！」

それぞれ防御系魔法を使い、炎の中に突入した。

時は少々遡り、まだサナが魔法陣を書き終えていない時、炎の中では今回最大の闘いが繰り広げていた。

「はあ…はあ…はあ…！」

シャインは馴れていない力を使っているので消耗が激しい。

「はあ…はあ…ここまでとはな…」

流石のバージェスもかなり力を消耗している。

「やめだバージェス、もう闘うのは。」

シャインの思いがけない言葉にバージェスが激怒する。

「ふざけるな！！俺はお前を潰すまでやめる気はねえからな！」

バージェスの反論にシャインが少し呆れる。

「勝敗は見えている。自分でも気が付いているはずだ。もう魔力がギリギリなことに。このまま闘っても今のお前は今の俺に勝てねえ。それだけだ。」

シャインは少し魔力を下げる。

「黙れ！！お前さえいなければ俺を見下した奴らを支配できるんだ！だからここで死んでもらうぞ！！」

全く聞き耳を持たないバージェスを見たシャインは、

「バカやろうっ！」

と呟いてから、下げていた魔力を一気に上げる。

「だったら…決着つけようぜ！」

シャインの提案にバージェスはニヤリと笑い、

「いいだろ！この一撃で決めてやる！」

バージェスは提案に乗り、間合いを開ける。そして予選で見せたフールド半分を埋める赤い魔法陣を作る。

「俺もこの一撃に賭ける！」

シャインは風砕牙を両手で掴み、バージェスに刃先を向けると、足

下に黄緑色の魔法陣が現れる。

「紅蓮の炎に宿りし神よ、我が意思に答え、我に力を…」

バージェスが詠唱し始める。それに合わせてシャインも詠唱し始めた。

「吹け、閃空の風。その形、不死の鳥となり、無限の闇を切り裂ける！」

その瞬間、シャインの背中に閃風の羽が生えた。

「イフリート」！！！！

バージェスが剣を降り下ろすと、紅蓮の炎の斬撃が地面を切り裂きながらシャインに向かっていく。

「閃風鳳凰斬」！！！！  
せんふうほうおうざん

シャインは刃先を向けたまま紅蓮の斬撃に突進する。そして衝突した瞬間、紅蓮の斬撃を切り裂いた。

「何！？」

「終わりだ！バージェス！！」

シャインの閃風の刀がバージェスに現最強の一太刀をあびせた。バージェスはまともに喰らい、仰向けに倒れた。赤い魔法陣はバージェスが倒れた時に消滅した。

「俺の勝ちだ！バージェス。」

シャインがバージェスに背を向けたまま、自分の勝利を告げた。

## 18話 決着(7) (後書き)

エ「ついに決着がついたよう！」

ス「ま、俺達は見えてないけどな。」

ヒ「何もできないですからね。」

エ「これで『大会編』終了だね。」

サ「残念。あと1話残ってるわ。」

レ「次回は私達3人が参戦。」

ス「でも闘いは終わっただろ？」

レ「それはお楽しみ。次回も見てください。」

## 19話 もう1人の神(8) (前書き)

眼鏡「『魔法学園』Q&A」のコーナー!」

シ・レ・ス・エ・サ・ヒ「イエーイ!」

眼鏡「では早速いつてみましょう!」

Q:放課後は何をやっていますか?

眼鏡「ではお答え下さい!」

A:シ:修行/友達とモーハン

レ:友達と遊ぶ/剣道をする

ス:修行/友達と遊ぶ

エ:カラオケ

サ:研究/実験

ヒ:修行/弓道をする

シ「基本ダチと遊んでんな。みんな。」

レ「サナやシャイン、エアルやスノウは部活入ってないもんね。」

エ「てか、いつの間にレヴィ部活に入ってたの?」

レ「夏休み入ってすぐだったかな?でもたまにしか行かないよ。」

エ「ふん…あとサナ。」

サ「ん?」

エ「いつも何の研究しているの?」

サ「ネタバレになるけど言っているの?」

エ「いいよ。」

眼鏡「やめてください。」

レ「では『大会編』最後の話、見てください！」

## 19話 もう1人の神(8)

「俺の勝ちだ：バージェス。」

バージェスに背を向けたまま、シャインは自分の勝利を告げる。その瞬間、刺された傷の痛みがシャインを襲う。

「いって~~~~」

シャインはドクドクと血が流れている傷を押さえながらバタリと倒れる。両方とも喋らず、炎の壁が燃える音しか聞こえなかった。その時間が少し流れてからシャインが口を開く。

「おいバージェス：まだ意識あんだろ？もう俺もギリギリだから、手短に言うぞ。」

シャインはバージェスに話かけるが別に反応はない。それでもシャインは話を続ける。

「俺がお前を止めていたのはやり過ぎだったのもあるが、それ以上に、俺はただお前に：昔の性格に戻ってほしいだけだったんだ。ま、それを言おうとしたらお前に刺されたがな。」

シャインが少し笑い、よろよると傷を押さえながら立ち上がる。

「あともう1つ、ただ支配してるだけだったらな、いずれ独りになるぞ。だけど、信じれる人間を守るとな、いいものを手に入れれる

..... 『仲間』つつうものをな。」

シャインがフィールドを去ろうとバージェスに背を向けた。その瞬間、

「ふざけるな！」

バージェスが叫んだ。シャインは驚いて後ろを振り返ると、フラフラとバージェスが立ち上がった。いた。

「綺麗事ばかり並べやがつて！俺はまだ負けちゃいねえ！！」

次の瞬間、バージェスの体が炎神に包まれた。そしてバージェスの頭から角が生え、鋭い牙が生える。筋肉も膨れ上がり、その姿はまるで魔獣のようになった。

「バ、バージェス…！」

シャインは何が起きているかさっぱり分かっていない状態である。

「ガアアアアア…！！」

獣の雄叫びを上げ、剛腕の腕でシャインを殴り付けた。シャインは吹き飛び、炎の壁ギリギリで止まる。

（くそ…！もう魔力がないってえのに！）

シャインが左腰の鞘から刀を抜こうした瞬間に右腕に激痛が走った。

（右腕…折れてやがる…）

シャインが左腕で右腕を押さえる。

「ガアアアアア…！！」

そこに魔獣バージェスが襲いかかってきた。

（もう…ダメか…）

シャインが諦めかけた。

この時、前話のサナ達の突入する話と時<sup>とき</sup>が重なる。

ガシャアアアン…！

シャインとバージェスの真上でガラスが割れる音がして、炎の壁から3人の女子が飛び出してきた。

「夜刀、<sup>かげどり</sup>「影鳥」…！！」

先頭で落ちてくる黒髪の女子が刀をふると、そこからマシンガンのような無数の小さい影の鳥が飛ぶ。それをバージェスはバックステップで回避する。

「ちっ…」

黒髪の女子が舌打ちをしながらシャインの近くに着地する。そしてあとの金髪と青色のポニーテールの女子も着地する。

「「スプラッシュ」…！！」

金髪の女子が詠唱すると、バージェスの足下から水柱が立ち上る。まともに喰らったバージェスは怯み方膝をつく。

「レ、レビィにサナ…」意識がもうろうとする中でシャインが2人を見て驚く。

「私もいるよシャン。」



青色のポニーテールの子がシャインを見てウィンクする。

「ミリアまで…」

シャインがまた驚く。

「大丈夫か？」

レビイが尋ねる。

「お前…ナイトか…」

ナイトが黙って頷く。

「大丈夫って言ったら嘘になる。」

シャインが答える。

「あれがバージエス？」

サナがバージエスを見ながら尋ねる。

「ああ、一応な。」

シャインが頷く。

「レビイ、サナ、シャンをお願い。」

ミリアが3人の前に立った。

「何する気だ？」

シャインが尋ねる。

「私がバージエスを止める。」

シャインに背を向けたまま答える。その目は珍しく真剣な眼差しだった。

「水魔法が使えるのは知ってるが、あれは神の炎だ。普通じゃ勝ち目はないぞ。」

シャインの忠告にミリアは振り返って、

「『普通じゃ』、でしょ？」

意味深なことを言って微笑んだ。

「あんだ、やっぱり何か隠してたわね？」

シャインの隣にいるサナが眉をピクツと動かしてから尋ねる。

「向こうが神の炎なら、こっちは…『神の水』で行くしかないでしょう。」

そう言ってバージエスに近付いていく。

「グア？」

魔獣バージェスがミリアに気が付き、戦闘体勢に入る。

「コノケハイ、『ウンディーネ』力？」

「あなた、『イフリート』ね。」

ミリアが構えると体の一部が水に変化していく。

「バージェスの体、返してもらわよ！」

ミリアとバージェスのバトルが始まった。

「ガアアアア！！！」

バージェスが攻撃するが、ミリアが簡単に避ける。

「もう魔力がないのに……」

ミリアが飛び上がり、

すいじんかれんきやく  
「『水神華麗脚』……！！」

見事に回し蹴りが顔にきまった。その瞬間に綺麗な水しぶきが弾けとんだ。バージェスはよろよろとよろけ、バタンと倒れた。すると、魔獣からいつもの人間のバージェスに戻った。

「す、すごい……」

ナイトが驚きを隠せない。

「あの魔法って……」

シャインがサナに尋ねる。

「ええ。あれは『神魔法』ゴッドマジックの1つ、『水神魔法』すいじんよ。」

サナがこちらに戻ってくるミリアを見ながら答える。

「大丈夫シャイン？」

心配している顔でシャインを見つめる。

「お前、いつから神魔法ゴッドマジックを使えるようになった？」

ミリアの質問を無視してシャインが逆に尋ねる。ミリアは少しの間黙ってから口を開く。

「その話はあと、今はここからでましよう。暑くて死にそう。」

ミリアがパタパタと手であおぎながら何処かに行こうとする。

「おいミリア！」

シャインが呼び止めようとした時、後ろで炎の壁が変化し始めた。

「なんだ…！？」

シャインが驚く。

「いけない！急いで中央に！」

サナが叫びながら中央に走る。シャインはレビィに肩を借りながら中央に向かう。ミリアもバージェスを引きずりながら中央に向かう。5人が中央に集まると、サナは封魔天光を使い5人を包む。

「何なのこれ！？」

レビィが怯える。それもそのはず、自分達の周りで炎が踊るように飛び回っている。

「バージェスが倒れたから炎が暴走したのよ。」

サナが冷静に説明する。

（どうする…）

サナがフル回転で考える。すると、またミリアが3人の前に立った。

「そのまま防御しといて。」

そう言い残して封魔天光から出る。

「ちよっ…」

サナが止めようとしたが、止められなかった。そしてミリアが手のひらを上に向ける。そこからバージェスと同じ魔法陣が現れ、会場を囲んだ。そこで詠唱を始めた。

「青き壮大な海に宿りし神よ、我が意思に答え、我に力を…」  
「ウン  
ディーネ」！！」

次の瞬間、会場を包むように巨大な水柱が出現した。その水柱がなくなつた時には、あれだけ燃えていた炎が消えてなくなっていた。

「終わったよ。」

ミリアがシャイン達のとこに戻って微笑む。サナが封魔天光を解除する。

「あんたそんなに強かつたのね。」

サナが感心する。

「へっへっん、見直した？」

ミリアがエッヘンとする。

「少しね。」

サナが少し微笑む。そこに先生達と救助隊が数人駆け付けた。バージエスがタンカで運ばれる。シャインもタンカに乘せられ運ばれる。

「あ、私も一緒に……」

レヴィと一緒に行動しようとすると、

「待つてレヴィ。」

いつの間にかいたナナリー先生が止める。

「ここで起きた事はシャインとバージエス君に聞いわ。あなた達に聞きたいのはさっきの水魔法、誰が使ったの？」

「あ、それは……」

サナが答えようとすると、ミリアが口を塞いで、サナにしか聞こえない声で囁く。

「私に合わして。」

「えっ？」

サナが聞き返す。

「いいから。」

「わかった。」

サナが承諾する。

「えっと……あなたは？」

ナナリー先生が尋ねる。

「あ、申し遅れました。私蛇帝高校1年4組ミリア・ガーネットです。」

ミリアが頭を下げる。

「なんで蛇帝高校の生徒がここに？」

「それは後からお話します。」

「……そうね、じゃあ本題に入るわ。さっきの魔法誰の？」

ナナリー先生が再度尋ねる。

「あれはですね、簡単に言いますと私とサナの魔法が合体してできたんです。」

ミリアが説明する。

「合体魔法ってこと？」  
ユニゾンマジック

「はい、そんなところです。だからもう一度やれと言われても私達もどうやったのかわからないので出来ません。」

サナが説明する。

「でもそんな簡単に合体魔法が出来るとは思えないけど……」  
ユニゾンマジック

ナナリー先生が怪しむから、

「しかしさっきの魔法を1人で発動できる方が思えません。」

ミリアがうまく後押しした。それによりナナリー先生は一応納得して3人を置いてその場から去った。ナナリー先生が見えなくなってからミリアがはあと安心したため息をつく。

「なんで隠したりしたのよ？」

サナが尋ねる。

「私、バージエスみたいにあまり公開したくないの。だって公開したら大騒ぎになるでしょう、そうなったら面倒くさいじゃん。」

ミリアがいつもの調子で答える。

「私、シャインが心配だから病院行ってくるね。」

そう言っレビィが病院に向かう。

「待つて、私も行く！」

ミリアがレビィを追いかけて、一緒に病院に向かおうとした時、

「ミリアくん。」

扉の近くでレビィが知らない人がミリアを呼び止めた。

「げっ……先生……」

それはミリアの担任の男の先生だった。

「話を聞こうか。」

「うきや~~~~~」

ミリアは担任の先生に掴まれ、ズルズルと何処かに連れていかれた。それをレビィは苦笑いしながら見送った。そこにサナが近付いて、

「私は後からエアル達連れて病院に向かうわ。」

そう言って先に会場を出た。1人になったレビィはいそいそと会場を出て、シャインがいる病院に向かった。

どこかの病院の病室でシャインが目を開いた。

「ん…ここは？」

シャインが辺りを見渡す。その時、病室の扉が開いてレビイが入ってきた。

「あ、シャイン気が付いた？よかった」

レビイがホッとした顔をしてベッドの隣にある椅子に座る。

「俺、どうなった？」

シャインが天井を見たまま尋ねる。

「シャインはミリアが封魔天光から出た時ぐらいから気を失ったの。原因は大量出血らしいわよ。」

レビイが答える。

「バージェスは？」

シャインが次の質問をする。

「この病室より遠いところ。また問題起こさないように先生達がそうしたの。」

レビイがちゃんと答える。

「そうか」

シャインが起き上がろうとするのをレビイが慌てて止める。

「ダメだよシャイン！傷口が開いちゃう！」

レビイがゆっくりシャインを寝かす。

「あれ？骨折が治ってる。」

シャインが自分の右腕を動かしながら驚く。

「それは医師達もビックリだったらしいわよ。治癒魔法をかけたらすぐに骨が再生したらしいの。」

「俺の体って一体…」

シャインが自分自身に少し引く。その時、病室の扉が開いてサナ達が入ってきた。

「お前ら…」

シャインは少し驚く。

「気が付いたのね。」

サナがシャインの前に立つ。

「まあな。」

シャインが頷く。

「じゃあ早速だけど、私達が入る前、中で何が起きてたか教えてちょうだい。」

サナの目が真剣になる。シャインは少し黙り、

「……そうだな。スノウ達も聞いたといってくれ。」

と、中で何が起きてたか話始めた。

説明中……………

「……てなわけだ。」

説明が終わると、少し空気が重く感じられた。誰も喋らない中、レビイが口を開く。

「ねえ、『信じれる人を守る』ってどういうことなの？」

「あーそれが…まず話したことがないと思うから俺の昔話を話そう。」

「

シャインは自分の昔の話始めた。

「俺は１１年前に母親を病で亡くしているんだ。オヤジは母親が病で死ぬ前に、俺達を置いてどこかに消えやがった。母親も父親もいない、親戚がどこにいるかも知らない俺は途方にくれているいるなとこを歩き回った。それが一年ぐらいたった頃に、１つの家族が俺を養子として預かったんだ。まあ、今考えればただの労働力が欲しかっただけだったんだろうな。俺は家に自分の居場所はなく、どんな人を信じれなくなっていた。だけど小学校には行かしてくれていた。その小学校で出会ったのが、バージエスとミリアだ。２人だけはまだ他の人より信じれた。だけど中学に入った時、ミリアは転校して、バージエスには裏切られ、ますます人を信じれなくなつた。そしてそのまま高校に入って、お前らに会った。だけどお前からはバージエスやミリアと同じ感じがしたんだ。俺はお前らを信

じれる。だから守る。これは小さい時と変わらない誓いだ。」

シャインの長い昔話が終了した。

「お前にそんな過去があったなんて……」

スノウが呟く。それから誰も話さなくなり、重い空気が流れる。この空気を打ち切ったのはこの6人ではなく、以外な人間だった。

「えらく重い空気だなここは。」

それはなんとバージエスだった。まだ包帯などの巻いていて歩くのがやっとの状態である。

「何の用だ？」

シャインが尋ねる。

「特に用はない。1つだけ忠告しにきたただけだ。」

「忠告？」

「レインの情報によるとそろそろ教師どもが来るはずだ。いいな、面倒いことにはしたくない。中で起きたこと一切話すな。」

「わかった。」

シャインが素直に頷く。

「あと1つ……」

バージエスがシャインを指し、

「次は絶対殺してやる。」

そう言い残して自分の病室に戻っていった。

「なんだよあいつ。」

スノウがイラッとする。

「そういうな。俺には「次は絶対勝つ。」って聞こえたけどな。」

シャインが笑う。

「そういうとこは素直じゃないってことね。」

レビイも笑う。

「そういうこと。」

シャインとレビイが笑うのであとの4人も笑った。



「ターゲット発見。」

6人がいる病室を監視していた黒スーツの男が呟いた。そしてポケットからケータイを取り出し、誰かにかける。

「どうした？」

相手は声からすると男のようだった。

「社長、ターゲットを発見しました。」

「そうか。引き続き監視を頼む。」

「了解しました。」

短い会話をし、ケータイを切った。

## 19話 もう1人の神（8）（後書き）

シ「バージェスの技といい、ミリアの技といい…どこかで聞いたことがある名前だな。」

レ「『イフリート』や『ウンディーネ』のこと？」

シ「それだ。」

眼鏡「その説明は私から。えっとですね、イフリートやウンディーネという名前は『テイルズオブシリーズ』に出てくる精霊の名前で。勝手に使つてすいません。」

サ「私が使ったスプラッシュとかも？」

眼鏡「はい。テイルズオブシリーズの技名です。」

ヒ「なぜそんなにテイルズばかり？」

眼鏡「好きなんです、テイルズ。」

ス「理由簡単だな…」

エ「そんなことより、ついに『大会編』終了したよ。」

ス「長かったな。」

レ「最後の黒スーツの男、誰なんだろう…？」

眼鏡「それは秘密です。」

シ「次からは違う話だ。少し投稿が遅れてすまなかったな。次回はもう少し早く投稿するから楽しみにしといてくれ。」

## 20話 レビイの父（前書き）

ス「はい注目」

エ「どうしたの？」

ス「重大発表がある。」

シ「なんだよ、早く言えよ。」

ス「『魔法学園Q&A』のコーナーが終わったらしい。」

エ「はやっ!？」

レ「じゃあ前書きで何するの？」

ス「前みたいにくっちゃべるだけ。」

サ「何よ、後書きと変わりないじゃない。」

ヒ「疲れたんでしょうね。」

サ「だったら最初からやるんじゃないわよ。」

ス「とにかく、この前書きもただ話すだけになったが、本編は頑張るらしいぜ。」

シ「じゃなきゃ困る。」

レ「では、どうぞ!」

## 20話 レビイの父

シャインはバージエスの忠告通り教師達に中で何が起こったか全く話さなかった。バージエスも全く話さなかった。2人が全く話さないので教師達も諦め、この大会の決勝戦だけ隠ぺいされ、引き分けという形にされた。

そしてあの激闘の戦いから約2週間が経った。夏休みもほぼ終わりに近付いている中でようやくシャインは消毒臭い病院という牢獄から釈放された。

「あー、久々の外だー」

シャインが病院から出て背伸びをする。

「ホント治るの早かったわね。」

レビイが隣で呆れる。

「バージエスもだろ。」

「あなた達の体ってどうなってるのよ…」

「うーん…わかんね。」

シャインがさつと流して別の話題にする。

「さーてと、今から何しようかな？」

シャインが歩きながら考える。

「宿題も終わってたしね。」

シャインの隣を歩きながら言う。

「あれは地獄だった…」

シャインは中で何が起こったか言わない代わりに、入院生活はずっとナナリー先生に付きつきりで宿題をさせられていた。それを思い出したシャインはうつ…となりながらも話をする。

「最近体動かしてなかったからな、レビイ、少し鍛練に付き合え。」  
シャインが刀に手をやりながらレビイに向く。

「えーイヤだよ」

レヴィが拒む。

「じゃあ頼む相手を変えよう。鍛練に付き合ってくれ『ナイト』。」  
その言葉を聞いて、レヴィの髪が黒、瞳が赤に変わり、  
「心得た。」

と言っ て頷いた。

【コラ！ナイトー！】

レヴィの叫びもむなしく、シャインとナイトは鍛練できそうな場所を探した。

シャインとレヴィはちょうどいい空き地を見つけて、そこで2時間ほど鍛練をし、今はベンチで休憩している。

「はあ…はあ…つ、疲れた」

レヴィがスポーツドリンクを飲む。

「もうちょっと加減してよナイト。」

レヴィがナイトに怒る。

【仕方がない。主には本気で、と言われたからな。】

「もう、私の体なんだからね。」

レヴィが怒るのを諦める。

「あれ？レヴィにシャイン君？」

そこにスーパーの帰りだろうか、両手に食材を入れた袋を持ったフィリアが現れた。

「ママ！？何でここに？」

レヴィが驚きながら尋ねる。

「何でって、そこ、あなたの家。」

フィリアが指を指す方向をシャインとレヴィが向くと、そこにはレヴィの家が建っていた。

「ここって家の近くだったの…」

レヴィが苦笑いする。

「ちようどいいから昼食食べていく？」

今の時刻は午後12時である。

「そうですね、いただきます。」

シャインがベンチを立ってレビイの家にフィリアと行こうとする。レビイが止めようとしたが、自分の母とシャインがノリノリなので止めようにも止められなかった。

昼食のオムライスを食べ終えて、お腹がいっぱいの状態では帰れないので、少しの間シャインはレビイの部屋にすることになった。

「もう、ママったらすっかりシャインのこと気に入って。」

レビイがプンプンと怒りながらベッドに座る。

「それのおかげで俺は食事代とか電気代が浮くからいいけどな。」  
椅子に座り、マンガを読んでいるシャインが言う。

「もう…あつ！そうだ。シャインに少し聞きたいことがあるの。」

その言葉を聞いて、シャインはマンガを机に置いてレビイを見る。

「大会の時、ナイトとサナが話していたんだけど…」

レビイは突入の際、心の中で話を聞いていたらしい。その話をシャインに説明する。

「『あつち』の魔法か…」

シャインが腕組みをしながら考える。

「ナイトは私は聞こえていないことにしたんだけど、ねえ、どういうことかな？」

「ナイトが何かを見抜いているってことにも気になる…」

「私も気になって聞いたんだけど全く言ってくれないの。」

「じゃあ俺から聞いてみるから、ナイト呼んでくれ。」

シャインが頼むがレビイが首を振る。

「魔力が限界だって言っ出てくれない。」

「ホントにお前とナイトって別人だな。」

「うん。体以外は基本違うかな。」

「魔力や思考も？」

「うん。だってナイトは魔力察知ができるけど、私は出来ないもん。」

ここで少し沈黙になった。そして数秒たってからシャインが「あー」と声をあげ、頭をかきながら椅子から立つ。

「なんかややこしくなってきた。どっかでナイトも言ってくれんだろ。」

そう言つてレビイの部屋の扉を開けた。

「帰るの?」

レビイもベッドから立つ。

「ああ。」

シャインが返事をして廊下に出た時、ピンポン

と、家の中に響いた。フィリアが「はい。」と玄関を開けた。それを階段の上からシャインとレビイが見ている。そして玄関を開けた時、レビイとフィリアが驚いた。

「あなた!?!」

「パパ!?!」

玄関に立っていたのは長身のスーツ姿の男であつた。

「ただいま。」

黒い瞳に黒い髪の方が微笑む。

「どうしたのあなた? 電話もなしに。」

フィリアが驚きながら尋ねる。

「うむ。俺も突然とれた休みだからな、少しサプライズをしてやろうと思つてな。」

家に入りながら持っていたカバンをフィリアに渡す。フィリアは手慣れたようにそれを受け取り、2人ともリビングに入る。

「誰だあれ?」

階段の上にいるシャインがレビイに尋ねる。

「パパ。」

「へえ、確か、かなりの企業に務めてるって言つてたな。」

「うん。だから休みなんてほとんど取れないの。」

レビイが説明する。その時、突然はっ！と何かを思い出したようにシャインを見つめる。

「な、何だよ…？」

いきなりジツと見るレビイにシャインが少し照れる。

「ヤバイ…」

そう呟くレビイにシャインは首を傾げるだけだった。

「そういえばレビイはどこにいる？2階か？」

その時リビングからパパが出てきて、2階へ来ようとしていた。それをフィリアがなぜか必死に止めていた。

「ヤバイパパが来る。とりやえずシャイン、私の部屋に戻つてい

」

「何だよ突然？」

「いいから！」

シャインは訳もわからないまま、部屋へ押し戻された。シャインを部屋に入れて、はあとため息をしていると、階段を上がる音がしてきた。レビイは急いで階段に走り、パパの前に立ち、

「お帰りなさいパパ。」

今作れる最高の微笑みを見せた。

「おお！俺の最愛の愛娘レビイ！」

いきなりデレデレの声を出しながらレビイに抱き付く。

「やめてよパパ、もう高校生だよ。」

レビイがパパから離れて約20？を見上げて注意する。

「ねえ、話なら1階でしょっ。」

レビイが提案すると、パパは素直に頷きリビングに戻った。それを見たレビイは一安心する。

「シャイン君、どこにいるの？」

フィリアも一安心しながらレビイに近付いて囁く。

「私の部屋、どうしよう？」

レビイとフィリアが話していると、パパが戻ってきた。



「どうしたんだ2人とも？」

「ううん！なんでもない！」

レビィが笑って誤魔化す。

「さっきメールきてたから、それ送ってからリビングに行くね。」  
そう言ってレビィは急いで部屋に戻った。

「何の騒ぎだレビィ？」

椅子に座っているシャインが少しイラッとしながら尋ねる。

「えっと…何から話したらいいかな…」

レビィが困る。

「まず、パパの名前は『スタン・サファイア』。」

「名前とかいいから、なんで俺がここに戻されたか説明してくれ。」  
シャインが要求する。

「あつ、ごめん…えっと、単刀直入に言うと、自分で言うのもなんだけど、パパは私のこと…大好きなの。だから私に近づく男がいるんだったら多分半殺しですまなくなる。だからパパがシャインの存在を知ったから…」

そこでシャインが手をバツと出して、レビィの話を止めた。

「わかった。つまり、俺とスタンさんを会わせないためにここに戻したんだな？」

「そういうこと。会ったらすぐ面倒くさくなるから。」

レビィが大きく頷く。

「だけどなレビィ…」

シャインがレビィの後ろのドアを指さす。レビィが首を傾げてから後ろを振り向く。そこにはリビングにいるはずのスタンが激怒ギリギリの顔で立っていた。

「もう、無駄のようだ。」

「パ、パパ…」

レビィが困惑している顔になりながらスタンの後ろにいるフィリアを見る。フィリアはダメだった…と首をふった。

シャインは静かに椅子から立ち、スタンの前に立った。

「だ、誰だね君は？」

今にも殴りかかりそうな状態でスタンが尋ねる。

「初めまして、俺の名前はシャイン・エメラルドといいます。以後、お見知り置きを。」

シャインが丁寧にあやまる。

「君はレビイとどういう関係だ？」

スタンがまた尋ねる。

「付き合っている。って言うたら？」

少しシャインがからかう。

「何だと！？」

スタンがシャインを殴りかかる。それをシャインは簡単に受け止める。

「冗談ですよ。ただの友達です。」

シャインがスタンの拳を放しながら本当のことを話す。

「友達のシャインがなぜここにいる？」

少し怒りが弱まったスタンが尋ねる。

「あなたの奥様が昼食をご馳走してくれると言ってくれたので。それを聞いてスタンがフィリアを見る。」

「2人で鍛練していて……」

フィリアが説明をした。その説明の中で1つのワードに引っ掛かった。

「鍛練？」

スタンがシャインに向き戻る。

「あゝ俺の鍛練に少し付き合ってもらってたんです。」

「なぜレビイだ？」

「主と夜叉の関係なんで。」

「主？夜叉？」

スタンが首を傾げる。

「あっ！ママとパパには私の魔法のこと話してなかった。」

レビイが思い出す。

「お前ちゃんと話しとけよ。」

シャインが呆れてから、フィリアとスタンに主と夜叉の関係について話した。それを聞いたスタンは、

「キ、キスだとー！ー！？？」

と、激怒した。まあ、当然である。

「キサマ！よくも俺の愛娘のファーストキスを！」

「俺がしたんじゃないくて、向こうがしてきたんですけどね。」

シャインが訂正するが、今のスタンには届かない。

「君、体は丈夫か？」

スタンが突然変な質問をする。

「？まあ、丈夫ですけど……」

シャインが一応答える。すると、スタンがいきなりシャインの腕を掴み、窓に向かって放り投げた。あまりにも突然だったので、シャインは抵抗できずそのまま窓の外に消えていった。

「シャイン！？」

レビイが慌てて外に向かった。

「あなた、そこまでしなくても……」

フィリアが注意するが、スタンは聞く耳を持たなかった。

外に放り投げられたシャインは、空中で1回転してキレイにレビイの家の前の道に着地した。

「大企業の人だから力とかはないと思ったが、まさか投げられるとはな……」

服のホコリをパンパンと払いながらシャインが呟く。

「シャイン！」

そこに家から出てきたレビイが近付いてきた。

「大丈夫？」

「ああ。どうやらスタンさんにとって俺は邪魔のようだな。」

「ゴメンね。私からパパに言っとくから。」

レビイが謝ると、シャインは黙ったままどこかに行こうとする。

「どこに行くの？」

「家に帰るんだ。あと、スタンさんがいるまで俺はお前の前に現れねえから。」

「なんで!？」

「それの方がいいだろ。」

シャインは背を向け、ヒラヒラと手を振りながら家に帰っていった。レビイはそれを黙って見送るしかなかった。

それからスタンがいる間、本当に現れることはなかった。その間はレビイは心なしに元気がなかった。そしてスタンが仕事に行く日になった。

「次に帰ってこれるのは年末かな。」

靴を履きながらスタンが伝える。

「わかったわ。」

フィリアが頷く。その隣でレビイが不機嫌な顔をしている。

「あの男のことか？」

レビイは黙ったままである。

「あんな奴をレビイの近くに置いとくわけにはいかん。」

「あなた、あなたが思っているほどシャイン君は悪い子じゃないのよ。」

フィリアが言う。

「髪が黄緑色の奴を信じれるか。」

スタンの言葉を聞いたレビイが口を開いた。

「外見だけで決めないで! シャインはチャラくも悪くもない! 私の大切な友達よ!」

レビイの訴えを聞いたスタンがはあとため息をする。

「お前は騙されている。」

「そんなこと言うパパなんて嫌いよ!」

レビイは涙目になりながら走って自分の部屋に入っていた。

「……………なんでわかってくれないんだ。」

スタンが呟く。

「えっ？」

フィリアが首を傾げる。

「いや、じゃあ、行ってくる。」

「行つてらっしゃい。」

スタンはフィリアに見送られ、ドアを開けて外に出た。そして家から少し行つたところの電信柱にシャインがスタンを待っていた。

「お前……」

スタンが足を止める。

「俺は別にレビイを束縛したいわけじゃない。ただレビイを悪から守りたいだけなんだ。」

シャインが突然言つた言葉がスタンの胸に刺さつた。

「凶星、ですよね？」

シャインがニヤツと笑う。

「よくわかつたな。」

スタンも素直に認める。

「ほぼ勘ですけどね。」

「何のようだ？早く行かなければ電車が出発してしまう。」

「じゃあ要件だけ……等価交換しませんか？」

シャインの提案にスタンがんととなる。

「等価交換？何と何をだ？」

「別に物々交換じゃないです。男同士の約束をしてもらいます。」

「約束？」

「あなたにしてもらふ約束は、レビイの恋愛や男関係に対する口出しを最小限してもらいます。」

「……………お前の約束は？」

「俺の約束は……あんたに変わつてレビイを守つてやる。」

「お前がレビイを？」

「『信じれる人を守る』。それが俺の小さい時からの誓いだ。俺は

この誓いをレビイに使う。まあ、あと数人いるけどな。だからあんたも約束を守ってほしい。」

「信じれるかそんなこと。」

「夜叉は主を守るのが使命。だけどそれは女に守られてるってことだ。それは男のプライドが許せねえ。だから、どんなことがあってもレビイを守ってやる。」

シャインのまっすぐスタンを見る。その目にスタンは何かを感じ、「信じていいんだな？」

と、尋ねる。

「ああ。」

シャインが頷く。それを見たスタンは歩き始め、シャインの横でもう一回止まる。

「お前からは俺と同じ想いがあると感じた。だから信じる。けど、もし破ったら…どうなるかわかっているだろうな？」

「わかっていますよ。」

それだけを話して、スタンは駅へ向かった。その背中をシャインは見送り、見えなくなったところでレビイの家に向かった。

レビイの家に入ったシャインはレビイの部屋のドアを開けた。中に入るとレビイがベッドで寝転んでいた。

「シャイン…」

「あんたのパパは俺を認めてくれてたよ。」

「えっ！？パパが？」

「ああ。」

「どうやって？」

「男同士の約束をもらった。」

シャインがニヤツと笑う。それを見たレビイが安心した顔になった。

「約束ってどんな？」

「ん？教えねえよ。」

「ケチ～～」

2人が笑いながらはしゃいでいるのを聞いたフィリアはニコツと微笑んだ。

## 20話 レビイの父（後書き）

エ「レビイの父親って親バカだったんだ…」

レ「あははは…否定できないよ。」

シ「ん？」

ス「どしたシャイン？」

シ「今スタッフから言われたんだけど、今回はそんなに尺ないつてよ。」

レ「本編が6ページいっちゃったからね。」

エ「じゃあ早く次回予告しよっ！」

レ「今回は2学期スタート！」

シ「ネタバレするんだったら、新キャラが登場だ。」

エ「では、次回をお楽しみに！」

眼鏡「学校の方が忙しくてなかなか投稿できなくてすいません。なるべく早く投稿しますので待っていてください。」



## 21話 2学期の転校生（前書き）

ス「いつの間にか20話越えてたな。」

エ「いろいろあったからね。」

シ「てか、夏休み終わるの早くないか？」

レ「大会が長すぎたね。」

シ「そのせいでもう2学期始まったし……」

レ「あはは。」

サ「なんか題名を見たら転校生が来るらしいわね。」

ヒ「この転校生が前に言った新キャラですかね？」

シ「さあな、見てもらったら早いだろ。」

レ「じゃあ、見てください！」

## 21話 2学期の転校生

暑さはまだ残っているが、色々あった夏休みが終了した。

「だり〜」

シャインがグチグチ言いながら学校の門をくぐると、

「ほら、シャキツとする!」

後ろからレビイがポンと肩を叩く。

「元気だなレビイ…」

「2学期早々だれてたらいけないよ。」

レビイが注意する。

「わかったよ。」

シャインはとりあえず言われた通りシャキツとする。

2人が話しながら歩いていると、

「あの〜」

2人の後ろから誰かが声をかけてきた。立ち止まり、振り返るとそこに1人の男子生徒が立っていた。

「なんか用か?」

シャインが尋ねる。

「あの、職員室ってどこですか?」

うなじ以上に伸びているキレイな緋色の髪を半分くらい三つ編みにしている（ハガレンのエドを想像してください）男子生徒が聞く。  
「職員室?それなら昇降口に入って左曲がって右曲がったらあるぞ。」

「シャインが普通に答える。」

「ありがとうございます。」

緋色髪の男子生徒がお辞儀をして、職員室に走っていった。

「あんな奴いたか?」

シャインが走っていく緋色髪を見ながらレビイに尋ねる。

「ううん。見たことない。」

レビイも緋色髪を見ながら答える。

「妙に制服が新品だったな。」

「転校生かも。」

2人がいろいろ予想しているとチャイムが鳴り、2人は急いで教室に向かった。

「ふ〜ん…緋色髪の男子生徒ね〜」

エアルが興味津々に聞く。

「そう。なんか知らない？」

レビイがエアルに聞くが、エアルは首を振った。スノウもヒューズもサナも同じく首を振った。

6人が話していると、

「はい皆座って〜」

ナナリー先生が入ってきて、生徒達を着席させた。

「今日は転校生を紹介します。」

クラスがざわめく。ナナリー先生は廊下にいる転校生をちよいちよいと呼ぶ。それにより1人の男子生徒が入ってきた。その男子生徒を見たレビイとシャインがギョツとした。

「初めまして。『アレン・ルビー』です。よろしくお願いします。」

キレイなお辞儀をしたのはなんとあの緋色髪の男子生徒だった。背はエアルより少し大きく、黒色の瞳をしていた。

「キャー……!!」

アレンの顔を見たクラスの女子達が声を上げる。

「かわいい!」

「美男子ってやつだよね?」

「子犬みたい。」

いろいろな感想が飛び交う。それもそのはず、アレンの顔はすごく

かわいらしく、女子の格好をすると女子に見えそうな甘い顔をしている。

「ねえ、緋色髪だけど…もしかしてさっき話してた子？」

エアルが隣のレビィに尋ねる。

「うん。ホントに転校生だったんだ…」

レビィはまだ驚いている。そんなレビィにアレンが気が付き、アレンも驚いた顔になる。

「じゃあ席は…シャイン君の隣に座って。」

「はい。」

アレンはトコトコと向かい、自分の席に座って、

「よろしくね。」

アレンがシャインに微笑む。

「ああ。」

シャインは生返事で答えた。

昼休みに入り、1 1 いろいろなクラス的女子が殺到していた。

「どこの高校から来たの？」

「キレイな髪だね。」

「ホントに男の子？」

質問も殺到していた。

「一瞬で女子からの人気が上がり、モテない男子からの殺意も上がったな。」

女子に囲まれているアレンと、それを隅で殺意の目をおくっている男子を見ながらシャインが苦笑いする。

「でもホントにかわいい顔しているね。」

エアルが改めて感心する。

「何の魔法使うんだろ？」

エアルが首を傾げる。

「聞いてきたらいいじゃないか？」

シャインがエアルに提案する。

「えゝあの中に入るのやだ。シャインが聞いてきてよ。」  
その提案をバットで打ち返した。

「……仕方がない、あのままじゃ俺が座れねえしな。」

提案を受け止め、シャインは女子が群がっているアレンの席に近付いた。

「おいアレン。」

シャインが女子サークルの外から呼ぶ。

「あ、シャイン君助けて！」

アレンが困り果てた状態で助けてを求める。シャインはサークルを強引に抜け、アレンの腕を掴み、

「逃げるぞ。」

そう呟いて、足に風を纏った。

「「隼」!!!」

2人はすごい速さでサークルをすり抜け、屋上に向かった。

「あ、ありがとうシャイン君……」

アレンがお辞儀をする。

「気にすんな。」

シャインがヒラヒラと手を振る。

「あつ、いた！」

エアル達が2人に追い付いた。

「もゝ2人とも速すぎ。」

エアルがムツと怒る。

「わりいわりい。」

シャインが平謝りする。

「まあいいや、アレンに聞きたいことあったし。」

エアルがアレンの方を見る。

「何ですか？」

「アレンってどんな魔法使うの？」

「結局お前が聞いてんじゃん……」

シャインが呟くが誰も反応せず、話は続く。

「僕の魔法ですか？」

「うん。」

その時、スノウの周りにハエが飛び始めた。

「うつとうしいな。」

スノウが追い払うが、ハエはしつこく周りを飛ぶ。

「えらく好かれましたね」

ヒューズが茶化す。

「ハエに好かれても意味ないんだよ……」

スノウがイライラしながらヒューズを睨む。

「そういえば自己紹介の時に言い忘れましたね。」

アレンがチラツとスノウを見てから自分の腰に手をもっていく。

「僕の魔法は……これです！」

次の瞬間、ダンッ！という音がして、スノウの周りを飛んでいた

ハエが撃ち抜かれていた。

「なっ……………！？」

突然の出来事にシャイン、レビィ、エアル、スノウ、ヒューズが啞

然とする。

「拳銃……？」

シャインの言う通り、アレンの手には1丁の拳銃が握られていた。

「『ガンマジック銃魔法』ね。」

そこにサナが現れて冷静に分析する。

「よく知ってますね。珍しい魔法なのに。」

アレンはクルクルと拳銃を回してから腰の拳銃入れにしまう。

「ウェボンマジック武器魔法の一種よね？」

サナが尋ねると、アレンが少し驚きながら頷く。

「そうです。ホントによく知っています。」

アレンが褒める。

「頭いいから。」

サナが少し自慢する。

「なんなの銃魔法って？」

ガンマジック

エアルがアレンに尋ねる。

「ガンマジックというのは、1つの銃でいろんな属性の弾が打てたり、違う種類の銃を使うことができる魔法です。」

アレンが説明するが、エアル、シャイン、スノウの上には？が浮かぶ。

「まあ、実際に見てもらった方がわかりますかね。」

アレンがもう一度拳銃を取り出す。

「まずこの拳銃を説明します。この拳銃には弾は入っていません。弾が入っていない？でもさっき明らかに弾が飛んだら？」

シャインが疑うので、アレンがポイと拳銃を渡す。

「調べてみてください。」

シャインは言われた通り拳銃を調べ始めた。だが、どこにも弾は見当たらなかった。

「確かにないな。」

シャインがアレンに拳銃を返す。

「僕がこの拳銃に魔力を送ると、その魔力が弾に変わって発砲するんです。」

「じゃあ俺らが魔力を送っても使えるんじゃないか？」

スノウが言うが、アレンが首を振る。

「特定の魔力にしか反応しないんです。」

「ふん…」

「じゃあ、次は属性変化について。」

すると、アレンが持っている拳銃が少し赤く光った。

「この状態で弾を撃つと…」

アレンが持っていた1枚の白い紙を舞い上げらせ、それを撃ち抜いた。すると、白い紙が燃えて消し炭になった。

「なんで燃えたんだ？」

シャインが尋ねる。

「今のは火属性の弾です。僕が魔力といっしょに違う属性を送ると、

その送った属性になるんです。」

「へ〜」

エアルが納得する。

「じゃあ、最後はこのハンドガンで違う銃を使ってみましょう。」

「それよ、それだけ私も意味がわからなかったのよ。」

サナが興味を持つ。

「見たら大体わかりますよ。わかりやすいのは…マシンガンですかね。」

アレンがハンドガンに魔力を注ぐと、カチャカチャと音がした。だけど外見は何も変わっていない。

「これでマシンガンに変わりました。」

「どこがだ？」

シャインが首を傾げる。

「このまま引き金を引くと…」

アレンが空に向けて引き金を引いた。その瞬間、ダダダダタタ！！と何発も弾が発砲された。

「す、すげえ…ゲームで聞くマシンガンの音だ…」

スノウが驚く。

「今のようにハンドガンでマシンガンやスナイパーライフルのような違う銃になるんです。わかってくれましたか？」

「ええ。」

サナが頷く。その時、チャイムが鳴った。

「あつ、チャイムが鳴ってしまいましたね。皆さん戻りましょう。」

アレンが言い、全員教室に戻っていく。その時、

「あつ、シャイン君ちよつといいですか？」

最後に屋上を出ようとしたシャインをアレンが呼び止める。

「なんだ？」

シャインがアレンの前に立つ。

「確かシャイン君って閃風魔法が使えるんですよね？」

「ああ。」



「じゃあ能力解放ってしていますか？」

「ああ。それがどうした？」

「少し、なつてくれませんか？」

アレンの目が少し真剣になる。それを見たシャインはクッと構え、  
「はっ!!」

と、一気に解放した。その瞬間、髪が黄緑になり、左の瞳がゆらゆらと燃える。

「これでいいか？」

「はい。少しそのままにしといてください。」

アレンは能力解放したシャインをジッと見る。

「もういいですよ。」

数秒見てからアレンが言う。それを聞いたシャインは元に戻った。  
「何がしたかったんだ？」

シャインが尋ねる。

「あまり気にしないでください。」

アレンが微笑みながら答える。

「……………そうか。」

シャインは少し納得しない感じで屋上を後にした。

「やっぱりあの人…」

アレンがシャインの後ろ姿を見ながら呟いた。その時、ポケットで  
ブブブと携帯が震えた。気が付いたアレンは電話にでた。

「もしもし？」

「どう？学校生活には馴れた？」

電話から聞こえてきたのは大人の女性の声だった。

「まだ1日しか経ってないよ。」

アレンが訂正する。

「あはは、ごめんない。で、シャイン君だっけ？どうだったの？」

「悪い予感が当たった。」

「そつ…どうするの？」

「もう少し様子を見るよ。」

「分かったわ。頑張つてね。」

そう言つて女性は電話を切つた。

「一番悪い結果にはならないことを祈ろう。」

アレンが呟き、屋上を後にした。

## 21話 2学期の転校生（後書き）

エ「ねえレビイ、アレンを女装させるとヤバいと思わない？」

レ「思う！メイドとかしたらヤバい！」

エ「ねっ！ねっ！」

シ「なんか異様に盛り上がってんな…」

ス「女装させられるな。」

ア「えっ！？僕、男ですよ…」

ス「おっ！俺ら以外がここに出てきたのは眼鏡純以来だな。」

ア「イヤだな」

ヒ「で、次回は何ですか？」

エ「次回は高校のイベント、文化祭だよー！」

シ「模擬店でメイド喫茶でもやってアレンにメイド服着せるか。」

エ・レ「賛成！」

ア「ええ……！？」

ス「ま、次回を楽しみにしてくれ！」

## 22話 龍空祭の準備(1) (前書き)

ス「おいおい、どういうことだ！今回は文化祭とか前話で言っていたのに始まってねえじゃん。」

レ「書いていっていたら、準備だけで4ページ行っちゃって、急ぎよこの話ができたらしいわよ。」

シ「何やってんだよ…」

エ「じゃあ次回から龍空祭が始まるんだね？」

レ「そういうこと。」

サ「急ぎよのものだから中身はそれほどね。」

レ「こらサナ言わない！」

シ「まあ、とにかく見てくれ。」

## 22話 龍空祭の準備(1)

2学期が始まり少し経った龍空高校では、高校の定番大イベントが近付いていた。

「えーと、今日のHRは、『龍空祭』で何をするかを決めたいと思います。」

ナナリー先生が黒板に龍空祭と書いて話す。

「龍空祭？」

アレンが隣のシャインに尋ねる。

「ただの文化祭だよ。それをここでは龍空祭って言うんだ。」  
シャインが興味なさそうに答える。

「お祭ってことですか？」

「お前、文化祭知らないのか？」

「はい。家庭の事情により、小、中学校行ってなかったもんで。」

アレンがあははと笑いながら答える。

「そうだったの!？」

そこにエアルが割り込んできた。

「よく高校に入れたね。」

「頑張ったんですよ。まあ、元々頭はよかったんで。」

アレンが振り返りながら答える。

「何よその言い方……」

エアルが口を尖らしながら怒る。

「こらそこ！私語をしない！」

いつの間にか教卓に立っていたHR代表の女子がエアル達を怒る。

「では、今からこのクラスの出し物を決めたいと思います。何か案がある人いませんか？」

HR代表がクラスを見渡す。すると、よくクラスに1人はいる盛り

上げ役の男子が手を挙げた。

「はい、どうぞ。」

HR代表があてる。

「はい！女子達のセクシー写真を展示したら…」

「却下！！」

男子が元気いっぱい提案したが、女子から筆箱や椅子が投げつけられ、撃沈した。だが、この発言からいろんな意見が飛び交い始めた。

「展示系よりやっぱ模擬店したいよな。」

「メイド喫茶とか？」

「ベタだし2組の連中がするって噂だぞ。」

「じゃあ犬や猫と遊べるカフェとかは？」

「誰が犬や猫を集めんだよ。」

「でもやるからには派手がいいだろ。」

「やっぱりセクシーは外せない！」

ホントにいろんな意見が飛び交う。

「楽しそうなのだったら何でもいいよね？」

エアルがレビイに尋ねる。

「何でも…とはいかないよ…シャインは何がいいの？」

レビイが興味なさそうに座っているシャインに話をふる。

「メイド喫茶…犬や猫…派手…セクシー…」

シャインがぶつぶつと呟く。

「シャイン？」

レビイが首を傾げる。

「女子の許可があり、本気で稼ぐ気があるんだったら、1つ思い付いた。」

シャインがサラツと言う。

「どんなのどんなの？」

エアルが興味津々で聞く。

「『アニマル喫茶』。」

「アニマル喫茶？」

レビイとエアルが口を揃えて尋ねる。

「そつ。メイド喫茶とかは周りで言っている通りベタなものだ。ほぼ間違いなく被る。だけど稼ぎたいんならそういう系が一番だろ？」

「そうだけど…具体的に何やるの？」

レビイが聞く。

「やることはメイド喫茶とかと変わりはないが、服がメイド服じゃなくて犬や猫の格好するんだ。」

「コスプレってこと？」

エアルが聞く。

「ま、そんなことだ。」

「面白そう！それやろう！はい」

エアルが手を挙げた。

「はい、どうぞ。」

HR代表がエアルをあてる。

「シャイン、みんなにさっきの話して。」

「俺かよ…」

そう言いながらもシャインは席を立ち、さっきのアニマル喫茶のことを説明した。それを聞いたクラスの男子は2秒で賛成した。だが、やはり女子はそんなにのる気ではなかった。

「じゃあ、条件をつけよう。」

のる気じゃない女子達にシャインが条件を持ちかける。

「稼いだ金の60%が女子、40%が男子だ。」

「それだけじゃね…」

まだ女子達はのる気にならない。

「じゃあもう1つ付けよう。アレン、好きに使っていいぞ。」

「ええ……！？」

アレンがものすごく驚く。そんなこと無視され、条件を聞いた女子達が承諾した。

「よし！やるからにはジャンジャン稼ぐぞー！！」

「おおー！！！」

全員拳を挙げ、一致団結した。ただ1人を除いて、

「僕は男だよ……」

アレンの苦情は誰の耳にも入らなかった。

放課後になり、龍空祭のための準備が始まった。シャイン率いる男子組は椅子と机を前にしている教室の地べたで作業している。

「なんで僕が……」

アレンがまだ嘆いている。

「悪いなアレン、ああ言うしか女子達が納得してくれなかったんだ。」

紙の輪を繋げながらシャインが反省の色なしで謝る。

「はあ……」

アレンもテンションが上がらないまま紙の輪を繋げる。

「飽きてきたな……この作業……」

スノウも紙の輪を繋げながらため息をつく。

「仕方がないですよ。これを作れという命令がくだったんですから。」

「

こちららも紙の輪を繋げているヒューズがスノウに言う。

「そんなの奴隷じゃん……あー給料ぐらい出せー」

スノウがバタツと倒れながら文句を言う。

「はいはい後で何か買ってあげるから作業を続ける。」

教室に入ってきたエアルが注意する。

「マジか！約束だぞ！」

スノウが起き上がり、作業を再開した。

「ホントに昔から単純ね。」

せつせと輪を繋げるスノウを見ながらエアルが呟く。

「何か言ったかエアル？」

シャインが聞く。

「ううん。何でもない。」

エアルが笑って誤魔化した後、自分がここに來た目的を思い出した。



「あつ！そうそう、私アレン呼びに来たんだった。」

「僕ですか？」

アレンが自分を指しながら聞く。

「アレンの着る服決めるの。来て！」

アレンはエアルに腕を掴まれ、無理矢理連れていかれた。シャインやスノウはそれを手を振って見送った。

レビィ率いる女子組は被服室で自分達が着る服を作っていた。

「できた！」

1人の女子が縫った服を掲げて叫ぶ。その声に他の女子も集まった。その服はミニスカートでけっこう大胆な服にふかふかの毛が付いていた。

「かわいい！」

「犬ね！」

「誰が着る？」

女子達が話し合っているところに、

「みんな！アレン連れてきたよ！」

エアルがアレンを連れてきた。

「いた！着る人！」

アレンを見て女子全員がハモった。エアルはなんのことがさっぱりで首を傾げるが、アレンは犬の服に気が付き、嫌な予感しかしなかった。

数十分後：

「かわいい〜〜〜！」

また女子全員がハモる。

「は、恥ずかしい……」

アレンは嫌な予感通り、大胆犬服を着せられた。頭には犬耳を付けられた。

「すごくかわいいよアレン！」

レビィが褒める。

「こ、この服のスカート…短すぎない？」

アレンがミニスカートを押さえながら聞く。

「それがいいんだよ！セクシー＆エロって感じ！」

エアルが親指をグツ！と立てる。

「はあ…」

アレンは何を言っても無駄なことに気が付き、抵抗するのを諦めた。

「これで女子の客も来そうね。」

サナがアレンを見ながら言う。それを聞いたエアルが何かを思い付いた。

「そうだよ！私達だけがやっただって男子しか来なくて女子が来ないよ。」

「じゃあどうするの？」

レビイが尋ねると、エアルが不吉な笑みをして女子全員を集合させ、何かを話した。それを見ているアレンは、何かシャイン達に危険が迫っている感じがした。

その頃シャイン率いる男子組は地道な作業を終わらし、一休みしていた。

「疲れた〜」

シャインが窓の外を見ながら背伸びする。

「もう日が暮れそうですね。」ヒューズが空を見る。

「じゃあ今日は終わりだな。」

スノウが終〜了〜と他の男子に伝え、男子組の仕事が終了した。そろそろ男子達が帰る中、

「シャイン、お前家に帰るのか？」

スノウが尋ねる。

「いや、龍空祭が終わるまではお前の部屋に居させてもらっよ。」

「わかった。お前は地べたで寝ろよ。」

「えっ!？」

「いや、「こいつ何言っただ。」みたいな顔で見んな。」

スノウがツツコむ。

「まあ、仕方がない。」

シャインが諦める。

「当たり前だ。」

3人が帰ろうとした時、教室のドアがガラガラと開けられ、

「いた！シャインちよつと来て！」

レビイが現れた。その姿を見た3人は思わず鼻血が出そうになった。

「お、お前：その格好…」

シャインが顔を赤くしながら聞く。今のレビイの服装は、ふかふかの毛が付いているショートパンツに胸元がかなり大胆に開いている服で、模様は猫柄になっている。

「あつ！これ？かわいいでしょ？」

レビイがニヤンとポーズをする。

「恥ずかしくないのですか？」

ヒューズも顔を赤くしながらレビイに尋ねる。

「ん？別に？」

レビイが首を傾げながら答える。

「意外とレビイって羞恥心ないんだな。」

スノウがシャインに囁く。

「らしいな。」

シャインが同意する。

「そんなことより早く来て！」

レビイがシャインの手を掴み、被服室へ連れていく。それをスノウとヒューズは見送った。

「シャイン連れてきたよ。」

被服室に着くと、女子達がシャインを囲んだ。

「で、俺に何の用だ？」

シャインは怯まず尋ねる。

「あのね、考えたんだけど、私達だけがやったって男子しか来ない

でしょ？」

女子達の中からエアルが代表で話す。

「まあ、そうだが……」

何か企んでいる女子達を見て、シャインは少し後ずさる。

「だから、女子の客を呼ぶために……」

エアルが出したのは派手な服で、虎の柄になっていた。

「着て！」

虎柄の服を押し付ける。

「マ、マジか……」

シャインが断ろうとしたが、女子達の一斉攻撃により撃沈した。

数十分後……

「カッコいい！」

またも女子達がハモる。

「ちっ、何で俺が……」

シャインが呟く。その姿は人獣のようで、ちゃんと牙も耳も付いてある。

「俺料理担当だっただろ？」

「シャインはただのモデル。でも、人手が足りなくなったらお願いね。」

エアルが頼む。

「やだよ。」

シャインが断ると、エアルはシャインの肩をポンと持ち、「お願い。」

もう一度優しく頼む。だが顔は全く笑っていない。

「わ、わかった……」

シャインは顔がひきつりながら承諾した。

「ありがとシャイン。」

エアルは笑顔で礼を言う。

「みんなー、今日は終了。家や寮に帰ってー」

そこにナナリー先生が入ってきてみんなを帰らす。

シャインが制服に着替えていると、アレンがいないことに気が付いた。

「アレンは？」

「あれ？さっきまでいたんだけどな」

エアルが辺りを見渡す。

「どうしたの？」

そこに着替え終えたレビイが戻ってきた。

「レビイ、アレン知らないか？」

「アレンならさっき帰っていったよ。」

「そうか。」

「なんか用あったの？」

「いや、ただ気になっただけだ。」

シャインも着替え終え、3人は寮に戻っていった。

アレンはすぐに着替え、屋上で誰かに電話をしていた。

「あら珍しい、あなたから電話してくるなんて。」

電話の相手は前の大人の女性である。

「少し気になることを聞きたくてね。」

「『フォーグ』なら、龍空高校の近くで目撃情報が入っているわよ。」

「

「意外と早く動き始めたね。」

「ええ、あの人達の『計画』にはまだ早いと思うんだけど、気を付けてね。」

「

「うん。ありがとう。」

アレンが電話を切る。

（せめて龍空祭が終わるまで何もしないでくれよ…）

アレンは沈む太陽を見ながら願った。

## 22話 龍空祭の準備（1）（後書き）

ス「ホントに準備だけで終わったな。」

エ「でも私は楽しかったよ。」

レ「私も。」

シ「お前らは…俺らはずっと飾り作ってたただぞ。」

ヒ「腰が痛くなっただけです。」

エ「まあまあ、次回から龍空祭始まるんだから元気出して行こう！」

シ「そっぴゃあ、あの男子版のコスプレ、誰が着るか決まったのか？」

エ「シャインとスノウはほぼ決定。」

シ・ス「ふざけんな！」

エ「では次回の龍空祭、お楽しみに！」

シ・ス「無視かよ！」

## 23話 開催と事件発生(2) (前書き)

ア「少し気になったことがあるんですけど、皆さんって料理できるんですか？」

シ「だいたいなんでも作れるぞ。」

レ「私もママの手伝いとかしてるから作れるよ。」

ア「へーサナさんとヒューズ君は？」

サ「簡単のだったら。」

ヒ「そこそこです。」

ア「へースノウ君とエアルさんは？」

ス「俺はできるが……」

エ「私だってできるよ！」

レ「エアルは……ちよつと……」

エ「レビイ！」

ア「エアルさんってそんなになんですか……？」

エ「そこまでだよ！ただちよつと平均より下なだけ！」

シ「エアルは料理というより錬金術だな。」

レ・ス・ヒ・サ「同意。」

エ「全員で頷くな！」

ア「あははは……」

シ「じゃ、本編をどうぞ。」

## 23話 開催と事件発生(2)

準備も着実に進み、龍空祭当日を迎えた。龍空高校は文化祭一色になっていた。

「よし！なんとか間に合ったね！」  
ほぼ水着に近い衣装を身に纏っているエアルが飾り付けられた教室を眺める。

「何だよその格好…」

隣のスノウが横目でエアルを見る。

「へっへっかわいいでしょ？」

エアルがクルツと1回転する。

「寒くないのか？」

「接客する時以外はジャージ着るつもり。」

「ふっん…てかお前、何の動物だ？」

「豹！」

エアルがガオーポーズをとる。

「女豹め。」

スノウが毒づく。

「うるさい！」

エアルがスノウの尻を蹴る。

「いつ…てーな！この野郎！」

「あはははは！」

逃げるエアルをスノウが追いかける。

「あの2人って付き合ってるんですか？」

走り回っている2人を見ながら大胆犬服を着ているアレンが隣にいるシャインに尋ねる。

「さあな、仲がいいだけだろ？」



興味ゼロでシャインが答える。

「あの2人、学校とか違うけど幼いころからよく知ってる中らしいわよ。」

そこに、大胆猫服を着ているレビイが入ってきた。

「へゝ初耳だ。」

少し興味が出たシャイン。

「幼馴染みなんですね。」

アレンがニコツと笑う。

「ちよつと違うけど…そんな感じかな。」

「幼馴染み…か…」

シャインはバージェスやミリヤを思いながら呟く。

「あんた達、そろそろ始まるわよ。」

そこに猫柄のワンピースを着たサナが入ってきた。

「意外とノリノリだな。猫耳まで付けて。」

シャインがサナの姿を見てフツと笑う。

「う、うるさいわね！仕方がなくよ、仕方がなく！」

サナが恥ずかしそうに怒る。

「かわいいじゃん。」

シャインが冗談混じりで言う。サナは顔を真っ赤にしてプイッとどこかに行ってしまった。

「シャインはもう少し女心を分からなきゃね。」

アレンがポンと肩を叩く。

「ん？」

シャインがきょとんとする。その時、

ピンポンパンポーン

「ただいまから龍空祭を開催します！皆さん、大いに盛り上がりましょう！」

という放送が入り、龍空祭が開催された。

「よーし！みんな、頑張るぞー！」

エアルが拳を上げると、

「オーー!!」

みんなも拳を上げた。

「いらつしやいませ!」

「オムライス2つですね?」

「オレンジジュースお待たせしました!」

開催され30分ぐらい経って、アニマル喫茶はシャインの予想通り大繁盛した。

「いやーけっこう来たな。」

裏のキッチンから店を見てスノウが驚く。

「教室の前に列が出来てるよ。」

接客を終えたエアルが裏に入りながら言う。

「想像以上だな。」

シャインがオムライスを作りながら言う。

「てか、このキッチンどうなってんの?」

猫柄ワンピースのサナがシャインに尋ねる。

「ここ、魔法学園。」

オムライスを作りながら、サナの方にグツ!とする。

「つまり何でもありってことね…」

サナは呆れ、そこからキッチンについてはふれなくなった。

「オムライスできたぞ。」

シャインはオムライスを皿にのせる。そのオムライスをウサギ柄の服を着た女子が持っていた。

「交代だ。」

「おう。」

シャインとスノウがハイタッチをして料理係を交代する。

「じゃあシャインは接客頼むわよ。」

「へいへい。」

その時、

「なんだこの店は?」

不良6人組が列を無視して来客された。

「たく、面倒なのが来やがったな。」

シャインが舌打ちをする。

「私が行くわ。」

サナが不良達の接客に向かう。

「気を付けてね。」

エアルが心配そうに見送る。

「いらっしやいませ！」

いつものサナからは想像もできないテンションでニコツと笑う。

「うほー！可愛いー！」

「猫耳じゃん！」

不良達のテンションが上がる。

「ご注文は何ですか？」

サナが注文を聞く。

「それは…君だ。…みたいな！」

不良の1人がボケ、不良達が爆笑する。笑顔のままサナのおでこに

『？』が浮かび上がる。

「でもホントに君可愛いよね。ね、今から俺達と遊ばない？」

不良の1人がサナを誘う。

「え〜どうしようかな〜？」

サナがモジモジしながら焦らす。

「ね、お金払うから。」

「え〜じゃあ、ちよつとだけ…」

サナがそう答えると、不良達のテンションがマックスになり、その

ままサナは連れていかれた。

「ちよつ、ちよつと大丈夫なの？」

エアルが慌てるが、

「ま、大丈夫だろ。」

シャインは特に心配しなかった。

「すいませーん。」

お客に呼ばれ、

「はい、ただいま！シャインも手伝つて！」

そう言い残してエアルが慌てて接客に行く。

「へいへい。」

シャインはしぶしぶ人獣姿に着替え、接客に向かった。

ムフフな展開を期待してサナを連れいった不良6人組は、体育館の隅でサナにボコボコにされ痙攣<sup>けいれん</sup>していた。それをほってサナは模擬店が並んでいるグラウンドを歩いていた。

「あれ？サナじゃないですか。」

そこにみたらし団子を食べているヒューズが近付いてきた。

「ヒューズ…アニマル喫茶の方は？」

「私のシフトはまだ先です。」

「あっそ…」

ヒューズの方をチラッと確認程度に見てから、サナはある一定方向を見たままになる。

「やはり気がついていましたか。」

ヒューズも同じ方向を見る。

「あんた魔力察知できたの？」

「ずっと前から。」

「そう…」

「かなりいますね。」

「ええ。しかもけっこう近いわね。」

「何の集団でしょう？」

「さあ？別に気にしなくていいと思うけど…」

サナとヒューズは龍空高校の外から感じる魔力を気にしながらヒューズが持っていたみたらし団子を食べた。

この後、大きな事件が起きるなんてまだ誰も知らなかった。

龍空祭が始まって2、3時間経った。中庭で軽音部などの演奏なども始まり、まだまだ盛り上がっている。

「いらつしゃいませ！」

アニマル喫茶も今一番の繁盛中である。

「さ、さすがに疲れた……」

レビイが少し息を切らしながら裏に入ってきた。

「材料がなくなってきたぞ。」

焼きそばを作っているシマウマ柄の服を着た男子生徒が椅子で休んでいるシャインに尋ねる。

「確かまだ調理室に残ってたはずだ。」

「じゃあ私調理室に材料取りに行ってくるね。」

そう言つてエアルが教室から出ていった。

その時、事件が起きた。

「キヤーー！！」

教室の外からエアルの悲鳴が聞こえた。その後、他の生徒達のパニックの声も聞こえた。

「エアル！？」

スノウがフライパンを投げ捨て、教室を飛び出す。そこで見た光景は、武装した男がエアルに銃を向けていた。

「てめえ……！」

スノウは武装した男に走り出す。

「な、なんだキサマは！？」

男はシャインに気が付き銃を向ける。

「エアルから……離れろ！」

スノウは男の顔を思いっきり殴った。それにより男は気を失った。

「誰なんだこいつ？」

スノウが男を見下ろしていると、

「キサマ！」

同じく武装をした数人の男が銃をこちらに向け、今にも発砲しそうだった。

「しまっ…！」

スノウが振り向いた瞬間、男達はグラリと倒れた。倒れた男達の後ろには風砕牙を持ったシャインが立っていた。

「悪い、助かった。」

「気にすんな。」

シャインとスノウがハイタッチをする。次の瞬間、

「そこまでだ。」

また同じく武装した男数人が2人に銃を向ける。2人は素直に手を上げ、教室に戻された。

武装した男達は龍空高校を侵略し、さっきまでのお祭り騒ぎがお葬式ように静まり返った。アニマル喫茶ではお客、1 1の生徒ともども座らされ、手足を縛られている。

（くそ、こいつら何者なんだ？………そんなことより今はこの状態をどうにかしねえと…）

見張っている男に警戒しながら、シャインは使える物はないか体の後ろに縛られている手で探る。その時、何か鉄の棒みたいなものがあたった。

（これは…フォーク…）

とりあえずシャインはフォークを掴む。そして教室を徘徊している男を見て、自分の反対側にいる足を伸ばしたまま縛られているアレンを見て、何かを思い付いた。それをアレンに伝えるためにアイコンタクトをする。それに気が付いたアレンはシャインが持っているフォークを見る。シャインは目だけでアレンに作戦を伝える。アレンはそれを理解し、頷いた。

シャインはフォークの持つ方の先端近くを持ち、ヒュッ！と器用に教室の上空に投げた。投げられたフォークはくるくると回転し、男の肩近くに刺さった。

「がっ…！」

突然の出来事に男が両膝をつく。顔の位置が下になった瞬間、アレ

ンは男の顔に縛られてたまま蹴りを入れた。それにより男は気を失って倒れた。

「ふう…」

シャインが小さく深呼吸する。

「スゲーぜ2人とも。」

スノウが褒める。

「誰か縄切れる奴いないか？」

シャインが教室を見渡していると、

「切れたよ！」

レビイが切った縄を見せながら立った。

「でかした。俺の縄切ってくれ。」

シャインがレビイの方に縄を向ける。

「私の近くにナイフが落ちてたの。それで見つからないようにちよつとずつ切ってたの。はい！切れたよ。」

自分のことを説明しながらシャインの縄を切った。

「サンキュー」

シャインが立ち、風碎牙を手に取り、

「そのままいてるお前ら…」

シャインが全員の縄をぶった切った。

「ホントになんだこいつら？」

スノウが立ちながら尋ねる。

「ずっと高校の外に集団の魔力を感じていたが、まさか攻めて来るとは…」

いつの間にかレビイがナイトになっていた。

「なんで言わなかった？」

シャインが尋ねる。

「気にすることはないと思ったのだ。申し訳ない。」

ナイトがシャインに頭を下げる。

「まあ、もう事件が起きちゃったからな。気にすんな。」

シャインがナイトの頭をポンと叩き、ナイトが頭を上げる。

「とにかく、祭をめちやくちやにした野郎共をぶっ飛ばすぞ！」

「おう！」

シャイン、エアル、ナイト、スノウ、アレンが各々の武器を構え、反撃体勢に入った。

「さあ、絶滅魔法の使い手は誰だ？」

漆黒の服を身に纏い、長い白い髪により左目は隠れている男が屋上で風を受けながら静まり返ったグラウンドを見下ろす。



### 23話 開催と事件発生(2) (後書き)

シ「おいおい何か長編入りそうな感じじゃねえか。」

エ「楽しく終わらしてくれないんだ…」

レ「なんか作者がこういう話の終わらし方がわからないから、とりあえず事件を起こそうって思ったらしいわよ。」

サ「じゃあ止めればよかったのよ。」

レ「もう後戻り出来なくなったらしいわよ。」

ヒ「みきり発車ですね。」

レ「そういうこと。」

シ「作者は高校生だから投稿は少し遅いんだ。だからできるだけだけ早く投稿するけど気長に待ってほしい。頼むな。」

## 24話 フォーグ(3) (前書き)

エ「みんなー！ご飯できたよー！」

ス「お、お前が作ったのか…？」

エ「うん！」

レ「で、でも急にどうして…？」

エ「前話の前書きでみんな酷いこと言うから。」

シ「ふ〜ん…で、この料理はなんだ？」

エ「何って、オムライスだよ。」

ス・レ・シ「えっ…！？」

サ「オムライスっていうより…赤いスライムね。」

シ「どうやったらかんなに卵がぶにぶになるんだよ…」

エ「見た目はともかく、食べてみてよ！」

レ「じゃ、じゃあ…」

シ・サ・ス・レ「いただきます…」

パクッ！

モグモグモグ……………

バタッ！

ヒ「新たな毒薬が完成しましたね。」

エ「なんで〜〜〜！」

ス「で、では…本編をど…どうぞ……………ぐはっ……………」  
バタッ

## 24話 フォーグ(3)

「さて、前話ではカッコよく決めたが…実際どうする？」

シャインがスノウ達に尋ねる。

「強行突破だろ！」

スノウがガンと拳を合わせる。

「いや、奴らの目的が不明である以上、下手に動くのは危険だ。」  
ナイトが冷静に却下する。

「じゃあどうしよう？」

エアルがナイトに尋ねるが、ナイトもなかなか思い付かない。

「アレンはどうする？」

スノウがアレンに聞こうとしたが、アレンの姿がどこにもなかった。

「あいつ…どこ行っただ？」

スノウ達が教室を見渡すが、やはりどこにもいなかった。

「遠くで銃声が聞こえた。あのバカ、先走りやがったな。」

シャインが舌打ちしてから話を続ける。

「とにかく二手に分かれよう。俺とスノウ、ナイトとエアルだ。」

シャインの作戦に他の3人が頷いた。

「よし！行くぞ！」

そして作戦が決行された。

「何の騒ぎだ？」

屋上にいた漆黒の服を着た長い白い髪の方が1人の武装した男に聞く。

「それが、この高校に『SMC』が潜入していたらしく、その者がこちらに向かっているようです。」

「『SMC』？なぜ奴らが？」

右の眉がピクツと動く。

「それは今のところ不明です。」

「どんな奴だ？」

「えっと…緋色の髪をしている女です。」

それを聞いた白い髪の男はある1人が思い浮かんだ。

「そいつは男だ。」

「そ、そうなのですか!？」

「ああ。もう下がっていいぞ。」

「はっ!」

武装した男は屋上を後にした。

「アレンの野郎がこの高校に…」

白い髪の男が不思議に思う。

シャイン、スノウの男子組は廊下を忍び足で動いていた。そして角で警備をしている男を見つけて近くにあった教室に隠れた。

「どうする?」

スノウが囁く。

「なあスノウ、1つ思ったんだが…」

「何だよ?」

「コソコソ動くの…俺らに合ってるか?」

シャインがよからぬことを考えている笑みを浮かべる。スノウは少し考えてから、

「いや、合わねえ。」

と、こちらも笑みを浮かべる。

「行くぞ!」

「おう!」

2人は一斉に教室から出て、警備の男に低い体勢で走り出す。

「なんだキサマら!？」

男が銃を向ける。その瞬間、シャインは天井ギリギリまで飛び上がった。

「天を見れば、地がいる！」

スノウはシャインの方に気を取られた男の懷に一瞬に入り込み、延髄に一撃をいれた。男はその場で倒れた。

「キサマら！」

別のどこにいた男が騒ぎに気が付き、スノウに銃を向ける。

「地を見れば、天がいる！」

スノウに気を取られた男をシャインが刀で斬った。男は血を流しながら倒れた。

「名付けて……」

てんしやうめつれん

「『天地消滅連』！」

2人が決めポーズをとる。すると突然、

タラーラー タラーラー タラーラー タラーラー

どこぞのロッキーが走りそうな音楽が流れ始めた。

「誰だあいつ？」

2人の前に上半身裸のガツチリした体、黒人並みに黒くてスキンヘッドの男が現れた。テーピングされた右手にはラジオを持っており、そこから音楽が流れていた。

「HEY、ボーイ達。そこまでだ。」

クールに決めるが、音楽が大きすぎてシャインとスノウには全く聞こえなかった。それに気が付いた黒い男は音楽を切ってから、

「HEY、ボーイ達。そこまでだ。」

もう一度クールに決める。

「なんか変なのが出てきたな……」

スノウが苦笑いする。

「油断禁物だ。」

シャインは刀を構える。

「俺の名前は『ロイク』。会って突然だが、ボスの命令により、お前ら2人を拘束する。」

ロイクがゆらりとゆっくり動いて戦闘体勢に入る。

「来るぞ。」

シャインも戦闘体勢に入る。

「あいつラジオ持ったまま闘う気か？」

スノウが戦闘体勢に入りながら呟く。それを聞いたロイクはハッ！とラジオの存在を思い出し、ラジオを廊下の隅に置いて、何事もなかったように戦闘体勢に戻る。シャインとスノウは苦笑いするしかなかった。

「何だか向こうサイド騒がしくない？」

エアルが廊下を歩きながらナイトに尋ねる。

「あの2人を一緒にした時点で騒ぎが起きるなんて分かりきっていた。」

ナイトが平然と答える。

「まあ、こちらサイドは静かにボコってるけどね……」

エアルが振り返って、自分たちが歩いてきた廊下に倒れている武装した男達を見て苦笑いする。

「ん？」

突然ナイトが止まった。

「どうしたのレヴィィ……じゃなかったナイト？」

エアルもナイトの隣に止まる。

「今かなりの魔力を感じた。」

「そうなの？誰かな？」

「あっちの校舎の屋上から感じた。」

ナイトが屋上を指す。その方向をエアルが見る。

「行ってみよう。」

「うん。」

2人は確かめるために反対側の校舎に走った。そして渡り廊下にさしかかった時、またナイトが止まった。

「どうしたのナイ……」

その時、エアルは背筋がゾツとなった。

「な、何この感じ……？」

「……………奴だ…」

2人の反対側に現れたのは、下駄を履いており、江戸時代の町人な  
どが着ていそうな服を着た黒い髪に黒い瞳の男であった。その腰に  
は業物の刀がさしてあった。

「おやおや、これは可愛らしいお嬢さん達だ。」

男がナイトとエアルを見て微笑む。

「何者だ？」

ナイトは夜桜の刃先を向ける。

「俺か？俺は『カギスタ』。ピッチピチの23歳だ。」

笑顔のまま自己紹介する。

「私達に何のようだ？」

「あー、実は俺のボスがな、お前らを捕まえろって言うのよ。だか  
らさ…大人しく捕まってくれないかな？」

さっきまでの微笑みが消え、血に飢えた野獣の目になった。

「離れているエアル…」

ナイトが夜桜を構え、魔力を高めると、刀から黒いオーラが放たれ  
る。

「！なるほど、お前が絶滅魔法を使えたのか…」

カギスタがニヤリと笑い、

「見つける手間が省けた。」

腰から刀を抜き、構える。次の瞬間、カギスタとナイトの姿が見え  
なくなっただと思うと、渡り廊下の真ん中で刀同士がぶつかりあった。  
それにより衝撃波が発生し、周りにヒビが入った。

（す、すごい…）

エアルは啞然するしかなかった。

「何、今の魔力？」

男子寮の中にいた武装した男達を全員全滅させ、そこで作戦を考え  
ていたサナが寮から出て、ナイトとカギスタが戦っている方を見る。  
「かなりの力がぶつかってますね。」

ヒューズも一緒に出てきた。

「1人はレヴィ…じゃなくてナイトね。」

サナが冷静に分析を始める。

「戦っている奴の魔力を感じたことがないということは、敵ですね。」

ヒューズも分析を始める。

「あつちでも魔力を感じる。これは…シャインとスノウね。もう1人は分らない…」

「てことは、この魔力も敵ですね。」

「屋上にも1つ…まだ魔力を抑えていると思うけど、こんなに感じるなんて…」

「それに向かうであろう魔力が1つ…この魔力はアレンですね。」

2人が淡々と分析していると、

「あらすごい。魔力察知だけでそこまで分かるなんて。」

コッ、コッ、とヒールを鳴らしながら2人の前にスーツ姿で、普通の本より少し大きい本を持っている茶髪の女性が現れた。

「誰、あんた？」

サナが睨み付ける。

「私？私は『イルファ』。よろしくね。」

かけていた眼鏡をクイツと上げながら自己紹介する。

「私達に何かようですか？」

ヒューズが右手に弓を持つ。

「用は簡単、あなた達2人を捕まえるだけ。」

イルファが持っている本を開ける。

「あんた達の目的は何？」

サナが戦闘体勢に入りながら尋ねる。

「今回はただの偵察。」

「偵察？」

「そう。誰が絶滅魔法を使えるか、のね。」

「それと私達を捕まえるのは関係ないのでは？」



ヒューズも尋ねる。

「それは私も分からない。ボスの命令だから。私はただその命令に従うだけ。……もういいかしら？大人しく捕まって。」

イルファの周りに魔法陣が出現した。

「分かりました。て、言うと思った？」

サナの周りにも魔法陣が出現した。ヒューズは弓を構えた。

「さて、暴れている6人は奴ら3人に任せても大丈夫だろ。」

白い髪の男がサナ& amp; ヒューズVSイルファの戦闘を見下ろしながら呟く。すると、屋上の出入口の方が騒がしくなってきた。

男が出入口をジッと見ていると、数人の男達が何かに怯えながら走ってきた。

「た、助けてください！」

1人の男が白い髪の男に助けを求めた瞬間、ダンッ！ダンッ！と男の数だけ銃声が響いた。男達は倒れ、二度と動くことはなかった。倒れた男達の後ろには、緋色の髪をした男が白い髪の男にハンドガンに向けていた。

「久しぶりだな…アレン。」

「そうですね…『フォーク』。」

緋色髪のアレンと、白い髪のフォークがにらみ合う。

「なぜお前がここにいる？」

フォークがハンドガンに動じず、尋ねる。

「ちよつとした調査です。」

「へえ…」

「逆に聞きましょう。なぜあなたはここにいますか？あなた達の『計画』にはまだ早いはずです。」

アレンがハンドガンに向けたまま尋ねる。

「俺の計画には絶滅魔法の魔力が必要だ。だが、俺達は誰が絶滅魔法を使えるか知らないんだ。だから今日は絶滅魔法を使える人間を知りに着ただけだ。」

「だったらこんな騒ぎにすることはなかったと思います。」

「下手に何かされたら困るからな、大人しくして貰うつもりだったのだが、暴れてくれたバカどもがいやがって…」

フォーグが呆れる。

「撤退してくれますか？」

アレンが睨みながら聞く。

「それは無理な話だ。まだ誰か知らないからな。ま、教えてくれたら別の話だな。」

「……いいでしょう。」

アレンはちよつとためらったが、これ以上高校に被害が受けると、一般人にも危険が起きそうだったので承諾した。

アレンはハンドガンを腰に戻してから、シャインとレビィについて話した。

「閃風魔法のシャインに、夜叉魔法のレビィか…」

そう呟きながら、フォーグはおもむろに頭に指をあてた。

ある階の廊下でシャイン & スノウ VS ロイクの戦闘が行われていた。  
すいていきやく

「「水底脚」！！」

スノウが水属性の足払いを放つ。ロイクはそれをジャンプしてかわす。

「「閃風波」！！」

飛んだところにシャインが斬撃を放つ。だが、ロイクは天井を蹴つてまたかわした。斬撃により天井が崩れ、上の階が見える。

「おいおい、いいのか？」

空いた天井を見て笑いながら尋ねる。

「いいんだよ。」

シャインが答える。

（いや、ダメだろ…）

スノウが心の中でツッコむ。

その時、ロイクがピクツと反応し、頭に指をあて、頷き始めた。そして、

「了解しました。」

と、呟きながらシャインとスノウの方を向いた。

「休戦だボーイ達。」

「何でだ？」

シャインが刀を向ける。

「今ボスから命令がきて、ボーイ達を捕まえる必要がなくなったらいい。その代わり……」

ロイクがシャインを指す。

「ボーイをボスのところに連れてこいだとき。だから、一緒に来て貰おうか。」

それを聞いてシャインは刀を納め、

「いいだろう。」

と、承諾した。

「じゃあ来な、ボスは屋上にいる。」

そう言つてロイクは屋上へ歩き出した。シャインは素直に後に付いていつた。残されたスノウはとりあえず他の4人を探しにいつた。

渡り廊下で凄まじい戦いをしていたカギスタとナイト。その戦いはテレパシーによって中断された。

「はあ……はあ……はあ……」

ナイトが息を切らしながら待つ。

「了解しました。」

そう言つてカギスタは頭から指を離す。

「よかったなお嬢さん、捕まえる必要がなくなった。だが、一緒に来て貰うよ。」

「なぜだ？」

「うちのボスがお呼びなんだ。」

ナイトは少し考え、

「どうするサファイア？」

心の中にいるサファイアに尋ねる。

【行こ。何が目的か分かりそうだから。】

「わかった。」

ナイトが了解してから、

「付いていこう。」

と、承諾した。カギスタは下駄の音を鳴らしながら屋上に向かう。

その後ろをナイトは付いていった。

エアルがまだ理解できないでいると、

「エアル！」

スノウが近付いてきた。

「スノウ、どうなってるの？」

「説明は後、先にサナとヒューズを探すぞ。」

「え、あ、う、うん。」

2人はサナとヒューズを探しに走り出した。

屋上でフォークとアレンが待つていると、出入口からロイク、シ

ヤイン、カギスタ、ナイトが現れた。

「アレン！？」

シャインが驚く。

「僕がここにいる訳は後で話します。」

2人が話している間に、ロイクとカギスタがフォークの両サイドに立つ。すると、下から水柱が現れ、その上にイルファが立っており、水柱からジャンプして屋上に着地した。

「そちらさんは全員集合らしいな。」

シャインが敵意むき出しで言う。

「そっちもな。」

フォークが出入口の方を見つめているから、シャインが振り返ると、出入口からスノウ、エアル、サナ、ヒューズが入ってきた。

「俺は絶滅魔法を使える人間しか呼んでいないが？」

「水くさいな。俺らも交ぜてくれよ。」

スノウがニヤツと笑う。

「まあいいだろ。」

フォーグが一步前に出て、

「俺の名は『フォーグ・サイバスター』。『革命軍』のボスだ。」

と、自己紹介した。

## 24話 フォーグ(3) (後書き)

シ「なんだどんややこしくなってきたな。」

レ「作者も大変らしいわよ。」

シ「面白くしようとして仇となったな。」

眼鏡「読者の皆さんにお伝えします。もし、分かりにくい部分があるのであれば、感想などに書いてください。ちゃんとお答えします。」

「

シ「おつ、久しぶりに出てきたな。」

レ「確か今中間テストの1週間前だよね？」

眼鏡「はい。だから次の投稿はかなり遅れるかもしれません。」

シ「ま、しゃーないな。」

眼鏡「はい。」

レ「では、次回をお楽しみに。」

## 25話 創世計画(4) (前書き)

シ「あれ？えらく早く出来たんだな。」

レ「うん。説明だけだから早く出来たんだって。」

シ「ふゝん…勉強大丈夫なのかよ。」

レ「それはシャインだって言えないでしょ。」

シ「う…」

レ「今回は短いけど、重要な話です。」

シ「もう話すこともないので、早速本編をどうぞ。」

## 25話 創世計画（4）

「俺の名は『フォーク・サイバスター』。『革命軍』のボスだ。」  
と、自己紹介した。

「俺はシャイン・エメラルド。」

シャインも自己紹介する。

「私はレビイ・ナイト。」

ナイトが自己紹介した後、髪が紺色に戻り、

「そして私が本当のレビイ、レビイ・サファイアです。」

と、サファイアの方も自己紹介する。

「二重人格か？」

フォークが少し驚きながら尋ねる。

「そう思っというて下さい。」

レビイが流すように答える。

「単刀直入に聞きます。あなた達の目的は何ですか？」

レビイがフォーク達全員を見ながら尋ねる。

「我が計画のため。」

フォークが短く答える。

「計画……」

レビイが呟く。

「だがその計画もまだ先の話。今回はただ絶滅魔法を使える者がどのような人間かを見に來ただけだ。」

「その計画ってどんな計画だ？」

シャインが尋ねる。

「それはアレンも知っている。あいつから聞け。」

フォークがアレンを見る。シャインもアレンを見ると、アレンは下を向いて黙ったままだった。

「イルファ……」

フォークがイルファに命令を言うと、イルファは本を開いた。する



と、シャインとレビイの足下に魔法陣が出現した。

「てめえ！」

シャインが風砕牙を鞘から抜く。

「落ち着いて。あなた達のデータを取らして貰っているだけ。」

イルファがクスツと笑う。

数秒後、足下の魔法陣が消えた。

「完了です、ボス。」

イルファがフォークに伝える。

「今回はこれで失礼する。次は容赦なく捕まえる。」

フォーク達が帰ろうとするから、

「待てよ！帰らせねえぞ！」

シャインは刀を構え、フォークに走り出す。それを見たフォークは、手のひらを空に向けた。すると少し手のひらが光ったと思うと高校一面に霧が発生した。

「なに！？」

シャイン達は突然の出来事にパニックになる。

10分ぐらい経ち、ようやく霧がおさまった。その頃には、フォーク達も、武装した男達も全員いなくなっていた。

「結局何者だったんだあいつら？」

シャインがイライラしながら刀を納める。

「革命軍って言ってたような…」

レビイが話ながらアレンの方を見る。他の5人もアレンを見る。少し沈黙が流れてから、アレンは口を開いた。

「もう、隠す必要はないようなので、全部話したいと思います。」

アレンは自分が知っていることを話始めた。

「まずは僕の正体から話しましょう。僕は『ジックシークレット・magic・company』、『SMC』第一調査部隊隊長兼第三戦闘部隊隊長です。」

「SMC？」

全員がハモリながら首を傾げる。

「まあ、当然の反応ですね。普通に生きていれば聞かない名前ですからね。」

アレンが苦笑いする。

「S M Cというのは魔法が関連し、自衛隊ではどうしようもない事件を、世間に流れる前に解決する秘密組織です。自衛隊の派生みたいなものです。」

アレンが説明するが、みんなピンとはこない。

「まあ、大体分かったわ。」

サナが代表して頷く。

「じゃあ、僕のこととはこれまで、フォークの話をしましょう。」

次にアレンはフォークについて話始めた。

「フォークは元S M C第一戦闘部隊隊長だったんです。」

「そうなの!？」

エアルが驚き、アレンが頷く。

「だけど2年前に突然姿を消し、今は『革命軍』と名乗り、ある計画を執行しようとしています。」

「それだ、ずっと引っ掛かっていたんだ。あいつらの計画って何なんだ?」

シャインが尋ねる。

「『創世計画』。この世にいる魔法が使える者以外を殺す計画です。」

「ジェネシス 創世計画……」

シャインが呟く。

「つまり、魔法が使えない者を殺すつもりなのね。」

サナがアレンに尋ねる。アレンは頷くだけだった。

「でもどうやって?」

今度はレヴィが尋ねる。

「『ビッグバン』という兵器で、それを可能に出来るんです。」

「ビッグバン?」

レヴィが首を傾げる。

「ビッグバンですって…！」

その名を聞いてサナがピクツと反応する。

「知ってるのサナ？」

隣にいたエアルが気が付き尋ねる。

「『判断魔法』<sup>ジャッジ</sup>を発動できる兵器よ。確かもう世界のどこにもないはずよね？」

サナが話をアレンにふる。アレンは頷き、

「そうです。だけど奴らは今現在、そのビッグバンを開発しているんです。」

と、説明する。

「そのジャッジ魔法ってなんだ？」  
スノウがサナに尋ねる。

「絶滅魔法の1つで、その魔法を放った者が消したいと願ったものを消し去る魔法よ。」

「意味がわからん。」

シャインとスノウがハモる。

「もし、放った者が『この世から男がいなくなれ』と願っているとすると、この世界から男だけが消えてなくなるんです。」

「つまり、特定の者だけを判断して、この世から消せる魔法なの。」  
ヒューズとサナの説明により、シャインとスノウはとりあえず理解した。

「そんなもん開発してどうするんだ？」

シャインが尋ねる。

「分かんないの？ビッグバンに『この世から魔法が使えない者を消し去れ』と命令したら、この世から魔法が使えない者だけが消せるの。」

サナが答える。

「なるほど。その方が断然早いわけか。」  
シャインが納得する。

「これが奴らの計画の内容です。」

アレンが説明を終える。

「その兵器っていつできるの?」

レビイが心配しながらアレンに尋ねる。

「多分1、2年は先だと思っています。」

「じゃあすぐじゃないのね。」

レビイが一安心する。

「でもなんで絶滅魔法の魔力が必要なんだ?」

シャインも尋ねる。

「ビッグバンを動かすには膨大の魔力が必要です。普通の魔力ではどれだけあっても足りないんですけど、絶滅魔法の魔力であれば足りるらしいんです。」

「ふ〜ん…」

シャインが納得する。

「ビッグバンが完成したら2人を捕まえに来るでしょう。だから気を付けて下さい。」

アレンがシャインとレビイに忠告する。2人は素直に頷く。

説明が終わったぐらいに、

ピンポンパンポーン

「生徒の皆さんは慌てず、速やかに寮や家に戻ってください。教師の皆さんは速やかに職員室にお集まり下さい。」

という放送が入った。

「さて、なんかすごい話聞いちゃったところで、俺達も帰るか。」

そう言ってスノウが屋上を後にした。その後ろを付いていくようにエアル、サナ、ヒューズ、レビイも屋上を後にした。そしてアレンが出ようとした時、

「1つ聞いていいかアレン。」

シャインが呼び止めた。

「何ですか?」

アレンが振り返る。

「第一調査部隊隊長が、この高校に何を調べに来たんだ？」

シャインが尋ねるが、アレンは黙ったままである。

「ただの予想だが、前俺に能力解放を見せてくれて言ったのと関係があるんじゃないのか？」

アレンは黙ったままシャインに背を向け、

「時期が来れば話します。」

それだけ答え、屋上を後にした。

（どういう事だ？）

シャインは腑に落ちないまま屋上を後にしようとした時、ふと空を見上げ、仰天した。

「雲に…穴が…」

この日は曇っており、空の9割は雲だったのだが、高校の真上だけ雲がなくポツカリと穴が空いていた。

「異常気象か？」

シャインが空を見上げると、

「何してるのシャイン？」

レビィが出入口から呼ぶ。シャインはモヤモヤを2つ抱えたまま、屋上を後にした。

## 25話 創世計画(4) (後書き)

エ「なんかとんでもない事に首を突っ込んだかも…」  
ス「乗り掛かった船だ。諦めな。」

エ「うゝゝ」

サ「いつかは奴らとちゃんとぶつかるでしょうね。」

シ「ま、重い話はここまでだ。久しぶりに次回予告をしるというスタッフからの命令がきた。」

ヒ「では私が、次回は龍空祭の打ち上げの話です。」

レ「あれ？龍空祭って終わったの？」

ヒ「ネタバレですけど、龍空祭は後日もう一度されて、無事終わっ  
たらしいです。」

レ「へえゝ」

シ「じゃ、次回を楽しみにしときな。」

エ「ここだけの話、次回はレビィが大変になっちゃうよ。」

## 26話 打ち上げの悲劇（前書き）

シ「今回はゆるゆるの話だつてさ。」

ス「メインストーリーに関係ないってことか？」

シ「そうらしい。」

エ「だから気軽に見てくださいね。」

## 26話 打ち上げの悲劇

前話の後書きでヒューズが言った通り、龍空祭は後日に開催され、無事終了することが出来た。そして1 1では、龍空祭終了後に打ち上げをやるうという話になり、全員制服のまま、男子寮の食堂を使つて行われるのであつた。

いつもはあまり人のいない男子寮の食堂に集まっているのは1 1の生徒達であつた。テーブルの上には6人に1つの鉄板が置いてあつた。

「お肉だよー！」

数人の女子が肉が乗っている皿を持ってきた。それにより生徒達のテンションが上がる。

鉄板で肉でお分かりかと思いますが、今から焼き肉パーティーが始まるうとしている。みんなが好きで、大勢で食べれるものとは考えたとこ、満場一致で焼き肉になつたらしい。

「みんな持ったか？」

盛り上げ役の男子がジュースの入ったジョッキを持ちながら辺りを見渡す。そしてみんながジョッキを持っていることを確認してから、「じゃあみなのお疲れ様、カンパーイ！」

と、ジョッキを上げた。その後、

「カンパーイ！」

と、全員ジョッキを上げ、焼き肉パーティーが始まった。そしてこのパーティーの一番隅には、いつもの6人が座っていた。

「はあ、なんかちゃんと楽しめなかったな」

エアルが肉を焼きながらため息をつく。

「あんな事件があつたからね。」

反対の席に座っているレビイもため息をつく。



「結局生徒達にはどう伝えただ？」

レビイの左に座っているシャインが、レビイの右に座っているアレ  
ンに尋ねる。

「小さなテロリストが目的不明で攻めてきたことになっています。」

「かなり無茶のある説明だな。」

その時、シャインが何かがないのに気が付いた。

「仕方がないです。先生達もSMCや革命軍の存在を知りませんか  
ら。」

アレンが説明しながらシャインの方を見ると、

「スノウてめえ！俺の力ボチャ食ったろ！」

「ああ！？俺のエリアで焼いてるからだろ！」

と、シャインは反対に座っているスノウと睨み合っていた。

「聞いて…ない…」

アレンがガクツと肩を落とす。

ギヤーギヤーとスノウとシャインが言い争っていると、隣のレビイ  
とエアルがイライラし始め、

「うるさい！！」

と、レビイがシャインの、エアルがスノウの頭を持ち、鬼の形相で  
鉄板に顔を押し付けた。

「あつつつつちー！！！」

シャインとスノウが叫びながら跳びはね、食堂にあった水槽に顔を  
突っ込み冷やした。そして水槽から顔を上げ、

「何しやがんだてめえ！」

シャインとスノウがレビイとエアルに当たり前だが怒る。

「ケンカは良くないぞ。」

「みんな仲良く、だぞ。」

さっきの鬼の形相からは想像できないほど、可愛らしいウインクを  
して注意する。

「止め方にも限度があるぞ！」

スノウがまた怒る。

「人間に限度なんてない。あつたとしても、乗り越えていくものです。」

シャインの隣に座っていたヒューズが上品に肉を食べながら入ってきた。

「いや、どや顔で言われても全く今と関係ねえ名言だからそれ。」  
シャインがツツコむ。

2人は納得いかないままとりあえず席に戻った。その時、

「しゃー！盛り上がってきたとこで、カラオケ大会と行きましょうー！」

盛り上げ役の男子がマイクを片手に司会となる。

「さー！最初に歌いたい奴は誰だ！」

司会がみんなを見渡す。その時、はいはい！と元気よく手を上げた女子がいた。

「OK！トップバッターはエアルだー！」

なんとそれはエアルだった。

「レビイも行こー！」

「え〜〜〜〜！？」

エアルは無理矢理レビイを引っ張り、即席ステージに立った。

「おっ！レビイも参戦か。では2人は何を歌ってくれるんですか？」  
司会がエアルにマイクを向ける。

「じゃあ、みんなも盛り上がる『学園天国』を歌います！」

エアルが元気よく答える。

「では歌ってもらいましょう。エアル&レビイで、学園天国！」

次の瞬間、イントロが流れ出した。レビイは諦め、楽しむことにした。

エ&レビイ「アユレディ？」

皆「イエー！」

学園天国のあのノリで、みんながテンションが上がった。そして歌が終わった。

「トップバッター、ありがとうございます！さあ、続いてどんな行きましょう！」

そこから8曲ぐらいテンションの上がる歌が続き、みんなヘトヘトになったぐらいで、

「さて、みんながへばり始めたので、ここで休憩がてら誰かバラード歌いませんか？出来れば意外な人が。」

司会が見渡すが、みんなヘトヘトでなかなか手が上がらない。その時、エアルがパツとテーブルの隅を見て、

「サナ、歌おうよ！」

と、サナを誘う。

「私！？」

突然の指名に驚く。だけど、みんなはエアルの提案に拍手で賛成した。サナも断るに断りにくくなり、仕方がなくステージに立った。

「さて、サナは何を歌ってくれるんですか？」

「何って言われても……」

サナがうーん…と考える。

「確かサナのiPodに西野カナ入ってたよね？」

エアルが思い出す。

「な、なんで知ってんの……？」

「前にちよつとね、まあ、それは置いて、西野カナ歌ったら？」

「置いてちゃダメでしょ……え……じゃあ、『best friend』でいいわ。」

サナが決定したとこで、みんなが拍手をする。

「なあ、サナって上手いのか？」

シャインがエアルに尋ねる。

「どうだろう？サナはカラオケとか行かないから誰も分からないの。」

エアルが首を傾げる。その時、イントロが流れ、サナが歌い始めた。

「ありがとう 君がいてくれて ホント、良かったよ どんな、時だっていつも 笑っていられる」

その歌声は本物の西野カナと同じぐらいのキーで、聞いているシャイン達は驚きと唖然と感動が混ざった気持ちになる。そして、サナが歌い終わった時、拍手喝采となった。

「す、すごいサナ!」

エアルが褒める。

「みんなこんなものでしょ?」

「そんなことないよ!上手すぎるよ!」

エアルが褒めまくるので、

「そ、そうなの。」

サナが照れながらステージを下りた。ステージ裏のカラオケ機械担当の人間達は97点という点数を見てあんぐりしていた。

そこから1時間くらい経ち、焼き肉パーティーも終わりに近付いて来たとき、

「はい!みんな!チョコレートいっぱい買ってきたよー!」

数人の女子達がいろんな種類のチョコレートを買ってきたので、またみんなのテンションが上がる。みんながチョコレートを選んでいる時、レビイがハート型のチョコレートを見つけた。

（わあ〜可愛い〜）

レビイがそのチョコレートを1つパクツと食べた。

（なんか不思議な味。）

そう思いながらも、レビイはパクパクと食べ続けた。

「ん?何食ってんだレビイ?」

板チョコをくわえているシャインがレビイに尋ねる。

「ん〜これ〜?シャインも食べてみる〜?」

どこかのほ〜んとした話し方のレビイを不思議に思いながらも、

「じゃあ貰うわ。」

と、シャインがチョコを取ろうとした時、レビイがひょいとチョコを持ち上げ、取らせない。

「何すんだよ?」

シャインがムツとなる。レビイはそんなことお構い無しで、立ち上がり、

「チョコよりもさ〜もつと美味しいもの食べさしてあげる。」

と、言いながらフラフラと歩きながらシャインに近付いていく。

「もつと美味しいもの?」

シャインはレビイの行動に多少違和感を感じながらも尋ねる。そして、レビイは絡まるようにシャインに抱き付き、耳元に口を近付け、

「それは…わ・た・し。」

と、囁いた。シャインは顔を赤くしながらバツ!とレビイから遠ざかる。そんなシャインを見て、レビイはフフと笑う。

「レビイ…お前どうした?」

シャインが苦笑いしながらレビイを警戒する。その状況に気が付いたエアル達もレビイを注目する。

「私じゃ…嫌なの?」

レビイが悲しげな顔をしながらフラフラとシャインに近づく。

「い、いや、そうじゃねえ…そうじゃねえが…」

シャインはゆっくり後退りする。

「じゃあ…いいでしょう?」

と、言いながらレビイは着ていたブレザーを脱ぎ、リボンを取って脱ぎ始めた。

「ストップ!ストップだレビイ!」

シャインが照れながら叫ぶ。レビイはカッターシャツの第三ボタンまで取ったところでストップした。

「脱いじゃ…ダメなの?」

レビイがまた悲しげな顔で尋ねる。

「あ、あつたり前だ!」

シャインが照れながら怒る。

「あいつにはこういう場面似合わない。」

スノウが呆れる。

「どうしちゃったんだろ?」

エアルが心配する。

「これが原因ね。」

サナがさっきまでレビイが食べていたチョコレートを持つ。

「何でそれって分かるの？」

エアルが尋ねる。

「『ウイスキーボンボン』っていつて、チョコレートの中にお酒が入ってるの。」

「それってまさか…」

エアルが言う前にサナが頷く。

「そう。レビイは今酔っぱらっているの。」

「アルコールに極端に弱いんですね…」

ヒューズがレビイを見ながら呆れる。

「しかも、レビイは酔ったらものすごくエロくなっちゃう人間みた  
いね…」

サナがちよっぴり引く。

「シャインはそこで立ってるだけでいいよ…私が脱がしてあげ  
る。」

サナが解説してる間もレビイの暴走は止まらず、夜桜を抜いた。

「じっとしてて…」

甘い声を発しながら夜桜を構える。

「俺の肉まで脱がす気か！」

シャインは一目瞭然に食堂の出入口にダッシュした。だが、一瞬で  
レビイに回り込まれた。

「じっとして言っただじゃない。」

レビイがブーと頬を膨らませながら怒る。そして再度夜桜を構え、  
「無月！」

神速の横振りを放った。シャインはギリギリのところまで風碎牙で防  
いだ。だが、かなりの衝撃で、シャインは外へと吹っ飛ばされた。  
地面ギリギリで立て直して着地し、キッとレビイの方を見たが、姿  
がなかった。

「どこに…」

シャインが辺りを見渡す。その瞬間、自分の頭上に殺意を感じ、バツ！と見上げると、レビィが刃先をこちらに向けていた。

「月光鳥げっこうちょう！！」

レビィが急降下しながら突き攻撃を放つ。

「もう脱がす気ゼロか！」

そう叫びながら回避する。だが、着地したレビィは一瞬で地面を蹴り、回避したシャインに追い付いた。そしてもう脱がすためではなく、完全に殺す気のみで夜桜を構える。

（こ、殺される…）

シャインが死を覚悟した瞬間、ピタツと夜桜が止まった。そしてそのままレビィがパタツと倒れた。

「ん？」

シャインが倒れたレビィの顔を覗き込むと、スー、スーと気持ち良さそうに寝ていた。

「ものすごいタイミングで睡魔がきたようね…」

サナがシャインとレビィに近付く。エアルとスノウとヒューズも一緒である。

「たく…」

シャインが呆れながら風碎牙を鞘に納める。

「今後、レビィがアルコールを飲もうとした時は全力で死守するよ  
うに。」

サナの忠告にシャイン達は大きく頷いた。

## 26話 打ち上げの悲劇（後書き）

エ「レビィ、大丈夫？」

レ「うゝゝゝゝ頭が割れそう……」

シ「お前、何も覚えてないだろ？」

レ「うん。」

サ「とにかく、あんたは生涯絶対アルコールを摂取しないこと。」

レ「はい……」

ヒ「あんな騒ぎまたされたら困りますからね。」

レ「酔ってる私ってどんな感じだったの？」

シ「エ・ス・サ・ヒ」ものすごくエロかった。」

レ「うう………私のイメージが……」



## 27話 紫髪の少女(1) (前書き)

エ「どうしょ…」

レ「どうしたのエアル？」

エ「前書きで話すことがない…」

レ「なるほど…」

エ「ねえ、何話せばいいかな？」

レ「うゝん…何か話せばいいんじゃない？」

エ「解決してないじゃん…」

サ「何してんの？」

エ「あつ！サナ！ねえ、前書きで何話せばいいかな？」

サ「別になんでもいいんじゃない？」

エ「レビイと同じこと言わないでよ」

サ「でもこうやってグダグダ話している内にもう時間ないよ。」

エ「ホントに!？」

レ「では、本編をどうぞ！」

## 27話 紫髪の少女(1)

「はぁ…はぁ…はぁ…」

8、紫：2、黒の割合の髪を靡かせ、紫の瞳をし、黒いゴスロリを着た12歳ぐらいの女の子が、ビルとビルの間を走る。その後ろから武装した男数人が追いかけてくる。

(まだ追いかけてくる…)

後ろをチラチラ見ながら女の子が必死に逃げる。だが、逃げる方は行き止まりになっていた。

「あつ…!？」

女の子は壁を背に、男達を見る。

「さ、大人しくしてもらおうか。」

男の1人が銃を向けながら女の子に近付く。

「こ…来ないで…ください。」

女の子がビクビクしながら言う。次の瞬間、女の子の体から青い炎がついた。

「マズイ!『あれ』か!？」

男達が急いでその場から離れようとした。

だがすでに遅く、青い炎は男達を包み込んだ。男達は苦しみながら倒れ、動かなくなった。

「ま、またやつちゃった…」

女の子は動かなくなった男達一人一人に謝りながら走っていった。

レビイは二日酔いにより、今日学校を休んでいる。

「ごめんねママ…」

自分の部屋のベッドに寝ているレビイが、身の回りを整理しているフィリアに謝る。

「いいのよ、それより体調はどう?」

「頭が爆発しそう…」

レビイが頭を押さえながら答える。

「ちゃんと休むのよ。あつ！そうそう、さっきシャイン君がシュークリーム持ってきてくれたの。後で持ってくるね。」

「そのシャインは？」

「もう帰っちゃったわよ。」

「ふん…」

レビイが掛け布団を顔までかぶり、

（顔ぐらい見せてくれればいいのに…）  
そう思いながらちよつとムスツとした。

シュークリームを届けたシャインは特にすることもなく、ブラブラと町を歩いていた。

（さて、何しようかな…）

そんなことを考えながらカーブに差し掛かった瞬間、  
ドン！！

誰かとぶつかってしまった。

「いつて〜〜」

シャインが頭を押さえながら、ぶつかった相手を睨む。だが、相手を見てシャインは睨むのを止めた。

「女の子…」

それはなんと、あの黒いゴスロリを着た、紫髪の女の子だった。女の子はバツ！と立ち上がり、

「ご、ごめんなさい。」

シャインに謝って、急いで走っていった。

「おい！」

シャインが呼び止めたが、女の子は止まることはなかった。

「何なんだった…」

シャインが立ち上がり、ぼーっとしていると、後ろから武装した男

達が女の子を追いかけていった。

（！今の奴ら！革命軍！）

気が付いたシャインは女の子と武装男達を追いかけていった。

女の子は息を切らしながら逃げる方向には、またも行き止まりになつており、二回目の万事休すが訪れた。

「さあ、来てもらうぞ。」

1人の男が銃を向ける。

「いや…いや…」

女の子が怯えながら首を振る。

「無理矢理でも来てもらうぞ。」

リーダーの男が合図をし、他の男達が一斉に女の子に走り出す。女の子がもうダメだと思い、グッと目を閉じた。だが、男達が何もしてこないの、恐る恐る目を開けると、ムサイ男達が倒れており、その代わりに、若い男の背中が見えた。若い男は刀を握っており、体から黄緑のオーラを放ち、黄緑一色の髪を靡かしていた。気が付いていると思いますが、この男の正体はシャインである。

「あつ！…あなたは…」

女の子がさつきぶつかった人だと気が付いた。

「ちよつと待つてな。」

シャインは背を向けたまま女の子に言う。女の子は素直に頷いた。

「誰だキサマ！？」

男がシャインに銃を向ける。

「シャイン・エメラルドって言えば分かるだろ…革命軍！」

「き、キサマが…だと…！？」

「新技喰らうときな…」

シャインが刃先を向け、

「瞬刃波（しゅんじんは）！！」

突き攻撃を放った。すると、突きから放たれた衝撃波が、銃のように飛んで行き、男の右肩を貫いた。

「ぐっ…！」

それにより、男が銃を落とす。それと同時にぐらいにシャインは地面を蹴り、

「疾風斬…！」

男を切り捨てた。男は血を流しながら倒れ、動かなくなった。それを見てからシャインは刀を納め、能力解放から元に戻り、女の子に近付いた。

「大丈夫か？」

シャインに尋ねられ、女の子はうんと頷いた。その時、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

「ちっ、誰か通報しやがったな…ここにいたら面倒だ、場所変えるぞ。」

シャインはひよいと女の子をお姫様抱っこして、屋根に飛び乗り、そのまま屋根の上を移動した。

シャインと女の子は人がいない野原を見つけた。

「あっここでいいか。」

シャインは野原に着地し、女の子を下ろした。その時、女の子の顔が赤いのに気が付き、

「どうした？」

と、尋ねる。

「なんでも…ないです。」

下を向きながら首を振る。まあ、お姫様抱っこに照れたとは言にくいですね。

「そうか…まあいいや、本題に入る前に名前何て言うんだ？」

「……『サテラ・オパール』です。」

まだ少し警戒しながら答える。

「サテラか。俺はシャイン・エメラルドだ。よろしくな。」

「よろしく…お願いします。」

2人が握手をする。

「さてと、本題に入るか。なんで革命軍に追いかけてたんだ？」  
「革命…軍ですか？」

シャインの質問に、サテラが首を傾げる。  
「知らないのか？」

シャインが驚きながら尋ねる。その質問に、サテラは頷く。

（あいつらが何の目的もなく人を襲うなんて有り得ないはず…）

シャインが考えていると、サテラが何かを見つけ、

「あ、あの…」

シャインの裾をクンクンと引っ張る。

「ん？何だ？」

「誰かこっちに來ます…」

「何だと!？」

サテラが指す方向を見ながら、シャインが刀の柄を掴む。サテラはシャインの後ろに隠れた。すると、向こうからダダダダ！と誰かが走ってきて、そのままシャインに抱き付いた。それにより、シャインがバランスを崩して倒れてしまった。

「いつて〜」

シャインが目を開けると、目の前に銀色の瞳があった。

「久しぶりシャン！大会以來かな？」

「ミリア!？」

なんとそれは、青色のポニーテールをしたミリア・ガーネットだった。  
た。

「とにかく…下りろ！」

上に乗っかっているミリアを横にはね除けた。

「もう、久しぶりの再開なのに冷たい…でもそんなのが好き！」

また抱き付こうとしたミリアを、シャインはひょいと回避した。回避されたミリアがプ〜と頬を膨らませる。

その時、その様子をほえ〜と見ていたサテラの存在に気が付いた。

「かわいい〜あなた誰？」

ミリアがサテラの前に屈みながら尋ねる。

「サテラ・オパールです…」

少し怯えながら答える。

「サテラちゃんね、よろしくね。」

ミリアが微笑む。

「はい…」

ミリアが小さく微笑む。

「それで…シャンとどういう関係？」

微笑んだまま殺意を放つ。サテラがビクツ！となり、シャインの後ろに隠れる。

「怯えさせてどうすんだよ…」

シャインがミリアにツツコんでから、

「さつき会ったばかりだ。」

と、説明する。

「どうやって？」

「革命軍に追われてたのを助けたんだ。」

「革命軍？」

ミリアが首を傾げる。

「そうか、ミリアは知らなかったな。」

「何の話？」

「実は…」

と、シャインが話そうとした瞬間、和服を着た男達が刀を構えながら3人を囲むように現れた。

「何、こいつら…？」

ミリアがシャインに小さい声で尋ねる。

「話そうとした革命軍どもだ…」

シャインが刀を抜きながら答える。

「あれ？小さいお嬢ちゃんを捕まえるために来たんだが、いつかの閃風魔法を坊っちゃんじゃないの。」

下駄を鳴らしながら現れたのは、前にナイトと戦った力ギスタだった。

「お前は、フォーグの隣にいた…」

「カギスタだ。よろしゅう。今回は坊っちゃんじゃなくて、そこに  
いる小さいお嬢ちゃんに用があるんだ。」

「そうはいかねえよ。」

シャインが風碎牙を抜く。

「やれやれ、血の気が多いな。お前ら、狙いは小さいお嬢ちゃんだ  
けだ。行け！」

カギスタは部下達に命令をする。それにより、部下達が一斉にこち  
らに向かつてきた。

「やるぞミリア。」

シャインが能力解放し、髪が黄緑一色になって、左目が燃えた。そ  
れを見たカギスタが何かに気が付き、

「あのガキ…」

と、呟いた。

「サテラちゃん魔法使える？」

ミリアが戦闘体勢に入りながら尋ねる。

「一応使えますけど、コントロールが…」

サテラがしゅんとする。

「分かった。隠れていて。ちゃんと守ってあげるから。」

ミリアが大丈夫だよって微笑んだ。

「来るぞ！」

部下達が一斉に襲いかかってきた。

「閃風乱舞せんふうらんぶ！！」

「アクア・ガンー！！」

シャインが閃風波を、ミリアが水の銃弾を連続で放った。それによ  
り、約10人は倒れた。そこから2人は次々と部下達を倒していく。

「くそ、キリがねえ…」

シャインが斬りながら舌打ちする。

「シャン！少しの間援護して！」

「なにする気だ？」



「一掃する！」

そう言うとミリアの足下に大きな青色の魔法陣が現れ、唱え始めた。  
「青き壮大な海に宿りし神よ、我が意志に答え、我に力を！」  
「ウン  
デーネ」！！」

唱え終えた瞬間、ミリアを中心に十字の巨大な水柱が出現し、宣言  
通り部下達を一掃した。

「やるじゃねえか。」

シャインがフツと笑う。

「でしょ？」

ミリアがウインクで答える。その時、

「きゃあー！！」

サテラの叫びが聞こえ、2人がサテラの方を見た。すると、サテラ  
が巨体の男にかずかれていた。

「サテラ！」

シャインが助けに行こうとした瞬間、目の前を炎の玉が飛んでいっ  
た。

「なっ…！？」

シャインが飛んできた方向を見ると、そこには茶髪のスーツ姿の女  
性が立っていた。

「お前は…！」

シャインが思い出す。

（うわっ…スタイルいい…）

ミリアがムスツなる。

「イルファ、なんでお前が？」

カギスタが驚きながら尋ねる。

「あなたがなかなか帰ってこないから見に来てみれば、何この状況  
？」

眼鏡をクツと上げながら逆に尋ねる。

「ん…ちよつと邪魔が入っててね」

カギスタがシャインを見る。

「はあ、さつさとサテラを連れて帰るわよ。」

「あいよ。」

カギスタが消えたと思うと、一瞬でイルファの隣に立っていた。

（は、はええ…）

シャインが哑然とする。

「は、離してください。」

サテラがバタバタと暴れるが、12歳の力では巨体の男にはびくともしない。

「行くわよ。」

イルファ達が帰ろうとした時、サテラの体から青色の炎が付いた。

「うわっ!？」

巨体の男は青の炎に包まれ、苦しみ始めた。

「流石に…こりややべえな…」

カギスタが苦笑いする。

「一旦引くわよ。」

イルファとカギスタは巨体の男を置いて退却した。巨体の男はそのまま倒れ、動かなくなった。

「逃がさねえ！」

シャインが追いかけてようとしたのを、

「待つてシャーン！今はサテラちゃんの方が先！」

と、ミリアが止めた。

「そうだな。」

シャインが了解する。

「まずこの炎なに!？」

野原一面に広まっている青い炎を見ながら尋ねる。

「分からねえ、分からねえがサテラを止めれば消えるってことは分かる。」

シャインが炎の中心でダンゴ虫ように踞ってガタガタ震えているサテラを見ながら答える。

「ミリア、もう一度ウンディーネ出来ないか？」

「もう魔力が限界だから水神魔法は無理。だから普通の水魔法を当ててるんだけど消える気配がないの！」

ミリアが焦りながら答える。

シャインはフル回転で考え、ある決意をした。

「もうこれしかねえか…」

「シャイン…？」

「無理矢理突破する。」

「無理だよ！焼け死んじゃう！」

ミリアが必死に止めるが、シャインはミリアの頭をポンと叩き、

「大丈夫だ。」

と、安心させるように微笑んだ。それを見てミリアは頷いた。

「守護風陣しゅごふうじん！！」

シャインは体に黄緑のオーラを纏って、青い炎に突っ込んだ。そして、サテラにたどり着き、

「サテラ。」

と、名前を呼びながら優しく抱いた。サテラは突然のことにビクッとなり、炎の威力が増した。それにより守護風陣が破れかける。

「……っ！？大丈夫だサテラ…俺は敵じゃない…大丈夫だ…」

シャインが声をかけ続けていると、次第に炎の威力が弱くなっている、

「シャイン…さん…？」

と、サテラが呟いた。シャインは頷いて答えると、サテラが何か安心した顔をして、フツと気を失って倒れた。それと同時に、青い炎の海もボシュウ〜といって消えた。

「すごいシャイン！」

ミリアが喜びながらシャインの元に走ってきた。

「はあ…はあ…」

シャインはかなり魔力を消費したので息切れをしていた。

「まさかサテラがあんな魔法を使えるなんて…」

シャインがよろめきながら立ち上がる。そして辺りを見渡し、何か

違和感があるのに気が付いた。

「おいミリア、周り見てみる。」

「周り？」

ミリアも辺りを見渡す。そしてミリアも違和感に気が付いた。

「草が燃えてなくて……枯れてる……」

なんと周りに生えていた草花は、燃えて黒くなっただけではなく、枯れて茶色になっていた。

「そうだ、普通の炎なら燃えるはずなんだ。だけどサテラの青い炎は枯らしたんだ。」

「何者なの……サテラちゃんって？」

ミリアが気を失っているサテラを見ながら呟く。

「サナに聞いてみるか。」

シャインは人形を持つように気を失っているサテラをお姫様抱っこをする。

「どこにいるの？」

「学校の寮だ。行くぞ。」

シャインとミリアはサナに相談するため、龍空高校へ向かった。

## 27話 紫髪の少女(1) (後書き)

ス「おい、今回俺、前書きにも本編にも出てねえじゃねえか！」  
ヒ「私もです！」

シ「いや、サテラについて何か…」

ス「うるせえ！お前はいいよな！レビィやミリアや今回からの新キ  
ヤラ、サテラとか可愛い女が勝手に集まってきてよ！」

シ「エアルがいるだろ。」

ス「あいつは！…その…あれだ…！…どれだ…？」

シ「何が言いたいんだよ…」

ヒ「シャインやスノウはいいですよ。周りに女性がいて。私なんか

…」

シ「サナがいるだろ。」

ヒ「サナは関係ないです。」

シ「そうなんだ。」

ス「あー！俺もハーレムしたい！」

シ「作者に言え、作者に。」

ス「作者ー！」

ヒ「あつ、走っていった。」

シ「まあいいや、次回はサテラの正体が明らかになる。かも。」

ヒ「では、お楽しみ。」

## 28話 魂を喰らう炎(2) (前書き)

シ「最近思うのだが、どんどん内容がややこしくなってきたくないか？」

ス「それ、俺も思った。内容が複雑になって、学園ものじゃなくなってきたぞ。」

エ「いつそジャンルを『学園』から『ファンタジー』に変えればいいのにな。」

サ「出演している私達すら訳が分からないわ。」

ヒ「ちゃんと最終的にどうなるのか考えているんでしょうかね。」

レ「み、みんな言いたい放題ね……」

## 28話 魂を喰らう炎(2)

サナにサテラを調べてもらうため、サテラをおんぶしているシャインとミリアは龍空高校に歩いていった。その間にシャインはミリアに革命軍について話していた。

「じゃあ、その革命軍はこの世から魔法が使えない人間を消そうとしているのね？」

「大まかに説明するとな。」

「それで、それを可能にできる装置、ビッグバンを起動するには絶滅魔法の魔力が必要ってわけね？」

「そうだ。お前も絶滅魔法が使えるんだから、少しは警戒しとけよ。」

「

「うん。……バージェスにも言っとこうか？蛇帝と虎神近いし……」

ミリア少しためらったが聞いてみた。シャインはバージェスの名前を聞いて足を止め、少し考えてから、

「……一応頼む。あいつもいずれ巻き込まれる人間だからな。」

そう答えて、また歩き出した。

「分かった。」

一緒に止まっていたミリアも了解して歩き出した。

そこから数分歩くと、龍空高校が見えてきた。

「ここだ。」

シャインが正門の前で足を止める。

「私龍空高校に入るの初めて……ちよつとドキドキする。」

ミリアが中をキョロキョロ見ながらはしゃぐ。

2人は中に入り、女子寮に向かった。

「へえ〜キレイ〜うちよりキレイかも。」

中に入ってもキョロキョロしているミリアを、

「おい、あんまりウロウロするな。」

シャインが注意する。ミリアは素直に従い、シャインの隣を歩く。

そして、

「着いた。」

キレイな建物の前で止まった。

「キレイ。」

ミリアが見上げる。

「さて、ここからが問題だ。」

シャインの言葉に首を傾げながら、

「何が問題なの？」

と、尋ねる。

「男子は女子寮に、女子は男子寮に入ることは固く禁じられてんだ。これを犯し、教師に見つかった者は単位があげつないことになるらしい。だから、ミリアやサテラが入れても、俺は入れねえんだ。」

「簡単な言いやがって……」

シャインがはあとため息をつく。その時、ミリアは女子寮の食堂に男子がいるのを発見した。

「あれ？食堂は入っていいの？」

「ん？ああ、食堂は何故かいいんだ。理由は不明だが。」

「なんか適当ね……」

「校長がバカなんだ。」

シャインは校長をバカ呼ばわりしてから、

「さて、マジでどうするのかな？」

シャインがうーん…と考える。

「男子禁制の華園の前で何やってんのよ？」

2人が考えていると、突然声をかけられた。ビクツとなりながら振り返ると、何かの研究に使うであろう奇妙な薬品が入っている段ボールを抱えているサナが、半目でこちらを見ながら立っていた。

「サナ！ちようどいい。お前に少し頼みたいことがあるんだ。」

「私に？」

「こいつのこと、調べて欲しいんだ。」



シャインが背中中で気を失っているサテラを見せる。

「誰よその子？」

「説明は中ですから、どうかして俺を寮に入れてくれ。」

「別に寮に入らなくて大丈夫よ。」

「何だと？」

サナの答えを聞いて、シャインの眉がピクツと動いた。

「こっち来て。」

サナは寮の隅に向かっていった。シャインとミリアは首を傾げ、訳も分からないまま後を付いていった。

「ここよ。」

到着したのは、女子寮の隣にある小さな林の中であつた。

「ここに何があるんだよ？」

シャインが尋ねると、サナは段ボールを置いて、草をガサガサとけると、下から地下に入れそうなハッチが現れた。

「何、このハッチ？」

ミリアが尋ねる。

「私の研究室の入り口。」

サナがググッとハッチを開けながら答える。中には下に行ける階段が続いていた。

「さ、早く入って。この光景を教師達に見られたら怒られる。」

置いていた段ボールを再度持ち、サナは階段を下っていく。

「なんかわくわくしてきた。」

ミリアが目を輝かせながら階段を下っていった。

（無断で作ったなこいつ…）

シャインは呆れてから、ハッチを閉めて、階段を下っていった。

階段を一番下まで下りると、まあまあ広い部屋があつた。そこには研究に使ういろんな用具が置いてある。

「うわー、すごーい。」

ミリアが謎の液体がコポコポしている試験管を触ろうとすると、

「むやみに触ると死ぬわよ。」

と、サナが脅す。ミリアはビクツ！と手を引つ込めた。

「とりあえず、その背中の子を真ん中の台の上に寝かして。」段ボールを隅に置きながら、サナがシャインに指示する。シャインは言われた通り、サテラを部屋の真ん中にある台に寝かした。

「確かこの棚に……」

その間にサナは、難しそうな本が並んでいる本棚を探り、1冊の本を取り出してきた。

「さて、調べるわよ。」

サナはサテラが寝ている隣でその本を開けた。

「ああ。」

シャインが頷く。

「「データスキャン」。」

サナが唱えると、サテラの下に魔法陣が現れ、調べ始めた。

同じぐらいの時間、何処かにある基地の大きな部屋に、フォーク達は集結していた。

「お前がいて何故サテラを連れてこれなかった？」

王座に座っているフォークが前に立っているカギスタに尋ねる。

「すいません、閃風の坊っちゃんに邪魔されてしまつて。」

カギスタが面目無いと謝る。

「その代わり、いい情報もつて帰ってきましたよ。」

カギスタがニヤリと笑う。

「いい情報だど？」

「閃風の坊っちゃんと一緒にいた青色のポニーテールの嬢ちゃんが、<sup>ゴッドマジック</sup>神魔法、<sup>ゴッドマジック</sup>水神魔法が使えました。」

「神魔法だど？」

流石のフォークも驚いた。

「その女の名前は？」

その質問に、カギスタはピタツと黙り、汗を流す。

「そういうところが、お前のダメだとこだ。」

「はい…」

フォークに怒られ、カギスタがしゅんとなる。

「イルファ、その女のこと調べておけ。」

フォークが、王座の隣にいたイルファに命令すると、

「かしこまりました。」

イルファは頷いて、部屋を出ていった。

「！そうだボス、もうひとつ情報が…」

カギスタが何かを思い出す。

「なんだ？」

あまり聞く気のない顔をしながらフォークが一応尋ねる。

「あの閃風の坊っちゃん、『闇落ち』しかけてます。」

「闇落ちだと？」

フォークが聞く耳をたてた。

「確か閃風魔法が闇落ちすると、『目が燃えている』ようになるんですよね？」

「ああ。」

「閃風の坊っちゃん、能力解放した時、左目だけ燃えていました。」

「…なるほど、どれだけ正義の人間でも、心のどこかには闇があると言っことか…」

そう言いながらフォークは王座を立ち、

「監視はしておけ。暴走されたら面倒だ。」

そう命令を言い残して、部屋を出ていった。

「了解しました。」

カギスタはフォークの背中を見送った。

その頃、龍空高校に無断に作られた地下の研究室では、サテラの診断が終了しており、サナはサテラのデータを見ていた。

「この子凄いわね。12歳でこんな高い魔力を持っているなんて。」  
「そんなになのか?」

壁にもたれ掛かって、お茶をすすっているシャインが尋ねる。

「ええ。魔力だけ見ると、シャインやミリアより上よ。」

それを聞いて、シャインはブハツとお茶を吹いた。

「マジかよ……」

シャインが苦笑いする。

「それで、結局サテラの魔法ってどんな魔法なの?」

「この魔力の数値と、あんた達の証言を聞いて、1つの魔法にたどり着いたわ。」

サナが机に本を開けた。それをシャインとミリアは覗き込んだ。

「名前は『ブルーファントムマジック青幽鬼魔法』。別名:『魂を喰らう炎』よ。」

「魂を……」

「喰らう炎?」

シャインとミリアが一緒に首を傾げる。

「そう。サテラが放した青い炎に包まれたら、魂が抜かれ、焼かれ、死んでしまう。」

「そういや、青い炎に包まれたあの巨大の男、死んでたな。」

シャインが思い出した。

「でも、野原一面が枯れたのとなんか関係あるの?」

ミリアが尋ねる。

「草花だって生きてるんだから死ぬでしょ?草が死ぬってことは枯れるってこと。分かった?」

サナの答えを聞いて、ミリアは納得して頷いた。

「これも絶滅魔法なのか?」

「ええ。でも私はこの子の魔法より、この子の記憶が気になるわ。」

「記憶?」

「そう。この子、記憶が途中でなくなっているの。」

「記憶喪失ってこと?」

ミリアが聞き、サナがコックリと頷いた。

「仮説だけど、記憶がないせいで、魔法がコントロール出来ないんだと思うわ。」

「ますます分からないな…サテラっていう存在が…」

3人が寝ているサテラを見ていると、

「ん…ここは…？」

サテラが台の上で目を覚まし、ムクリと起き上がり、キョロキョロと周りを見渡す。

「おっ、やっと気が付いたか。」

シャインがサテラに近付く。いきなり話しかけられたサテラはビックツ！となるが、シャインと分かると、安心した顔になった。

「ちようどいいわ。本人に聞くのが一番だから、サテラ、今から少し質問に答えてちょうだい。」

サナがサテラに話しかけるが、サテラは首を傾げ、

「あの…どなた…ですか？」

と、サナに尋ねた。

「……そういえば初対面だったわね。」

サナがあゝ、と思い出した。

「とりあえず、今の状況を説明するな。」

シャインはサナの紹介と、サテラが気を失っている間の出来事を話した。

「……てな訳だ。大体分かったか？」

シャインが尋ねると、サテラはコクンと頷いた。

「サテラちゃん、ホントに記憶ないの？」

ミリアが心配する。

「……小さい時の記憶は、あやふやになっています。」

サテラが小さい声で答える。

「昔、強く頭を打ったとかない？」

サナが尋ねると、サテラがうん…と考え始める。そこから20分ぐらい経って、

「分からない…です。」

と、首を振った。

「え、えらく時間かけたわね…」

サナがげんなりする。

ブルーファントムマジック

「じゃあ、なんで青幽鬼魔法が使えるかも分からないの？」

ミリアが聞くと、サテラは申し訳なさそうに頷く。

「コントロールは出来ないが、魔法は発動してるってことは、何か条件が揃った時に発動するんだろ。サテラ、炎が発動した時の気持ちとか、場面とかは思い出せねえか？」

シャインが尋ねると、サテラはまたうーん…と考え始め、

「怖い気持ちでした。」

今度はすぐに答えた。

「なるほど。」

それを聞いてサナが閃いた。

「どうした？」

シャインがサナに尋ねる。

「怖い気持ち、つまり恐怖が頂点に達した時に、勝手に発動するよね。」

「なるほど。」

シャインとミリアとサテラがなるほどと頷いた。

「とりあえず、調査はこれで終了。あんた達早く帰って。」

サナが机に座って、手でシッシツとする。

「んだよ、もう追いやられるのかよ…」

シャインがブーブー言う。

「もう用は済んだでしょ？ここに居られたら研究の邪魔なの。」

サナは背中を向けたままである。

「まあいいか、ありがとなサナ。」

シャインはサテラを連れて、階段を上がっていった。ミリアも帰るために階段を上がるうとした時、

「ちよつと待つて。この際だからあんたに聞きたいことがあるの。」  
と、サナが振り返りながら呼び止めた。

「何？」

「あんだ、なんで私の正体が分かったの？」

一瞬ピリツと緊張が走ってから、ミリアは答えた。

「感じる魔力が違うの。」

「魔力が違う？でも魔力は人によって違うもの、それだけで分かったとは……」

「サナの言う通り、魔力は人によって違うもの、だから魔力の感じを覚えておくと、その人がどこにいるか、どれだけ強くなったなどが遠くにいても分かる。これを通称魔力察知と言う。だけど魔力なんて原点を見れば皆同じ源からできているもの。源だけ見れば誰が誰だか分からない。だけど、サナはその源自体が違うの。」

「そんなのどうやって分かったのよ？」

「私は魔力察知で源まで分かるぐらい長けているらしいわね。私も最近気が付いたけど。」

「おい、何してんだミリアー？」

2人が話しているところに、シャインの呼ぶ声が飛び込んできた。

「最後に私からも1つ質問。いつまでシャン達に黙っとくの？」

「……時が来れば。って言うておくわ。」

「おい！ミリアー！」

シャインの呼ぶ声が大きくなる。

「ゴメン！今行く！」

ミリアは返事をして、階段を上がる途中で立ち止まり、

「サナって敵？味方？」

と、尋ねると、

「1つつて言わなかった？」

と、サナに言われ、ミリアはそこから何も言わずに階段を上がっていった。1人になったサナは、再度サテラのデータを見て、

（このデータを見るからにして、サテラの記憶、『封印』されている。だけど、誰が何の目的に……？）

サナがペン回しをしながら考える。【サナって敵？味方？】

サナの脳裏にミリアの言葉がよぎる。

（敵か…味方か…か…できればまだ…味方でいたいかな…）

サナはそんなことを思ってから、研究を始めた。

外に出てきたシャインとミリアとサテラは太陽の光に目を細める。

「さてと、サテラちゃんをどうするのシャン？」

ミリアに尋ねられ、シャインが頭をかきながらサテラを見、

「このまま野放しってわけにはいかないしな」

と、困る。

「サテラ、お前はどうしたい？」

シャインがサテラに尋ねる。サテラはうん…と考えから、シャインの裾をキュツと持ち、

「シャインと居たいです。」

と言つて、シャインの顔を見上げながらニコツと笑った。

「そうか。」

シャインはニヤツと笑い返した。

「居たいってサテラちゃんどこに住むのよ？」

ミリアが尋ねる。

「俺の家。」

シャインが即答する。

「ええ！？い、いいのサテラちゃん！？」

サテラはコクンと頷いた。

「い、いいんならいつか…シャン！変なことしちゃダメだよ！」

「するかバカ。」

3人は笑い合いながら龍空高校を後にした。

シャイン達の中に、また新しい仲間が増えた。



## 28話 魂を喰らう炎(2) (後書き)

シ「前話からの新キャラ、サテラ・オパールです。」

サ「よ、よろしくお願いします。」

エ「本編より先に後書きで会っちゃっていいのかな？」

サ「いいんじゃない？」

レ「あれ？今サテラちゃん喋った？」

サ「わ、私まだ喋っていません。」

サ「私が喋ったの。」

レ「あ、サナが喋ったんだ。」

サ「そうよ。逆にどう間違えるのよ。声全然違うじゃない。」

ヒ「小説は活字ですからね。読者に声は聞こえません。だから誰が喋っているかはカツコの前の一文字で表しています。」

エ「あつ！『サナ』も『サテラ』も一文字目『サ』だから分からないのか！」

ヒ「そういうことです。」

ス「じゃあどっちかが表現を変えなきゃいけないな。」

シ「サナは二文字だからサナが変えればいいんじゃないか？」

サ「イヤ。」

シ「即答かよ……」

サ「あ、あの、私そんなに前書きにも後書きにもでないの、私を『サテ』で表したらいいんじゃないでしょうか？」

シ「いいのか？」

サテ「はい。」

エ「あつ、早速変わった。」

レ「ま、何はともあれ、次回をお楽しみに！」

ス「強引にしめたな……」

## 29話 ただの1日（シャイン編）（前書き）

シ「ん？今回は俺に1日密着だと？」

レ「そうらしいよ。」

シ「なんでまた突然…」

ス「繋ぎ話だ、繋ぎ話。」

シ「だらうな。」

エ「作者が次の長編を考えるためなんだって。」

シ「へえ〜じゃあ次は長編なんだな。」

エ「多分。」

レ「今回はシャインの1日に密着！では、見てください！」

## 29話 ただの1日（シャイン編）

いろいろと起こり過ぎたので、今回は何もない日常の1日を、シャイン中心で描いてみました。

住宅街に建っているマンション、『龍空たつぞらマンション』。その3階の奥の部屋、ある男が住んでいる。いや、最近1人女の子が増えたかな。

AM:7:00

「シャイン、起きてください。」

サテラは寝室の布団で寝ているシャインをユサユサと揺らす。

「ん？」

布団からもそつと起き上がり、頭の近くにある目覚まし時計を見て、

「まだ7時じゃねえか…」

布団の中にリターンした。そしてまた、

「シャイン、学校遅れますよ。」

サテラがユサユサと揺らす。

「オカンかお前は…」

シャインが観念して布団から出て立ち上がった。

「俺は基本7時30分に起きるからな。」

サテラに注意しながらキッチンに向かって、絶句した。

「お、お前…キッチンで何してた…？」

キッチンは辺り一面色んな材料が散乱していた。

「早起きしたので朝ごはん作ろうして…」

サテラが説明する。

「お前も料理じゃなくて錬金術か…」

シャインが大きいため息をして肩を落とす。

「す、すいません…」

サテラがしゅんとなつて謝る。

「飯は俺が作るから、お前はジツとしておけ。」

「はい…」

サテラがさらにしゅんとなる。

「「そよ風」。」

シャインがパチンと指を鳴らすと、ゴミが1つに集められ、黒いゴミ袋にシュートした。

「掃除終了。」

シャインは片付けられたキッチンに立ち、朝食の準備を始める。

「朝ごはん作ってやるからちよつと待ってろ。」

シャインは余っていた卵とベーコンを使って、ありきたりな目玉焼きを作り、リビングにある小さい机に置いて、自分も座った。前にはちよこんとサテラが座っている。

「いただきます。」

2人は手を合わせ、ベーシックの合図とともに朝食を食べた。

そして2人は完食してから、歯を磨いたり、掃除や皿洗いなどをしていると、登校する時間になった。シャインは急いで制服に着替え、玄関に向かう。

「じゃ、行ってくる。昼飯は適当にカップ麺でも作って食べとけ。」  
そう言つて、シャインは部屋を出ていった。サテラはシャインが出ていった玄関にフリフリと手を振って見送った。

AM: 8:30

「あつ！おはようシャイン！」

シャインが教室に入ると、明るい声が出迎えた。

「朝から元気だなエアル。」

「シャインが暗いんだよ。」

2人は話しながら自分達の席に向かう。席に着いたシャインは机の隣にカバンをドンと置き、そのまま流れるように席に座り、2秒で

夢の中に誘われた。

「いつもシャイン君は寝てますね…」

隣の席のアレンが寝ているシャインを見ながら苦笑いする。

「もう、いつも帰って何してるのかしら。」

左後ろに座っている、二日酔いから復活したレビィが呆れる。その時、チャイムが鳴り、皆が席に座り、ナナリー先生が教卓に立ち、  
「はい、じゃあSHR始めるわね。」

SHRを始めた。それでもシャインは起きる気配はなかった。

PM:12:50

昼休みになり、ようやく起きたシャインは、スノウと一緒に購買部へ昼食の調達に向かい、焼きそばパンを買ってきて、机に座りながら食べている。

「シャインってホントに焼きそばパン好きですね。」

上品に弁当を食べているヒューズが言う。

「この学校の焼きそばパンはなんか旨いんだ。」

ちよつと幸せな顔で答える。

「ねえシャイン。」

そこにサナが近付いてきた。

「何だよ？」

横目でサナを見ながら尋ねる。

「サテラ、どんな感じ？」

「サテラ？別に何も起きちゃいないよ。今はまだ、ただの12歳の少女だ。」

「そう。でも気を付けなさいよ。まだあの子、ブルーファントム青幽鬼をコントロールできてないんだから。」

「分かってら。」

「サテラ？サテラとは誰です？」

ヒューズが2人に尋ねる。

「あゝそっぴゃ話していなかったな。」

シャインが思い出す。

「またいつか紹介する。」

シャインが焼きそばパンを食べ終わる。

「そうですか。」

ヒューズも弁当を食べ終わり、カバンの中に戻した。

P M : 3 : 1 5

6時間目も終わり、生徒達が待つていた放課後になった。シャインは教科書などほとんど入っていないカバンを肩にかけて帰ろうとした時、

「ねえねえシャイン。今日の放課後空いてる？」

エアルが話しかけてきた。

「空いてたら何すんだ？」

面倒くさい顔して聞く。

「カラオケ行こ！」

「却下。」

即答で答える。

「ええ、レビイだつて来るよ？」

「レビイがいたら行くと思うな。」

シャインはエアルに背を向けたまま、ヒラヒラと手を振って廊下を歩いていった。

「シャイン何だつて？」

スノウとレビイがムスツとなっているエアルに近付く。

「行かないって。」

「仕方がない、他の奴誘うか。」

「うん。」

スノウとエアルが歩きですが、レビイが付いてきていないのに気が付き振り返る。

「どうしたのレビイ？」

エアルが尋ねる。

「いや、シャインってあまり遊ばないけど、帰って何しているのかわかって思っただけ。」

「なんだ？シャインのこと気になるのか？」

スノウが少し茶化しながら尋ねる。

「ち、違っよ！だってよく見たら、あいつの手や顔に傷が多いから……」

レビイが無意識に心配している顔をするので、エアルとスノウはどうする？と会議を開始した。そうして20秒後、会議は終了した。

「じゃあさ、カラオケ行くのやめて、シャインのこと尾行しよう！」  
エアルが会議で決まったことをレビイに報告する。

「び、尾行！？い、いいのかな？」

「意外とシャインでミステリアスなところが多いじゃない？私達も気になるし……ね？」

「うゝん……」

レビイはまだノル気じゃないが、

「おら、さっさと行かないと見失うぞ。」

スノウとエアルに無理矢理連れていかれた。だが、この作戦は角を曲がった瞬間に失敗となった。

「誰を尾行するって？」

壁にもたれ掛かり、腕組みをして待っていたのは、なんとシャインだった。

「げっ！？シャイン！」

スノウが驚いた。

「なんで分かったの？」

エアルも驚きながら尋ねる。

「声は周りの空気を振動させて伝わるものだ。俺はそれを聞き分けて、聞くことができるんだ。」

「でもけっこう遠いよ？」

と、レビイが後ろを見て尋ねる。教室から今の角まで約20メートルはあるだろう。

「これぐらいの距離なら可能だ。」

「すっげえ」

スノウが素直に感心する。

「とにかく、尾行なんてさせねえからな。もししたらぶつた斬る。」  
そう忠告して、シャインは帰っていった。3人は断念して、カラオケに向かった。

PM:3:40

シャインは別に寄り道もしないで、龍空マンションたつぞらに到着した。階段もエレベーターも使うことなく、ピョーンと3階までジャンプした。

「あら、お帰り。」

3階に着地したシャインに話しかけてきたのは、シャインの部屋の4つ隣のおばさんだった。おばさんやこのマンションに住んでいる人は、最初はシャインのジャンプに驚いていたが、今は当然の光景になっている。全く、慣れとは時に怖いものである。

「どうも。」

シャインはすれ違う時に軽く会釈した。そして自分の部屋を開けて、帰宅した。

「ただいま。」

部屋全体に響くぐらいの声で言うと、奥の部屋から、

「お帰りなさい。」

と、女の子の声が聞こえてきた。その部屋に入ると、テレビゲームをしているサテラがいた。

「Wiiの大乱闘してたのか。」

「はい、暇だったのでやってみようかと。いけませんでした?」

「いや、好きにしてくれ。どうやっても俺が学校に行ってる時、お前は暇だからな。」

シャインはネクタイを外し、制服から私服に着替える。

「操作方法よくわかったな。説明書なくしてないのに。」



「前シャインがやっているのを見て覚えました」

「へえ、お前記憶力いいんだな。」

「見たものとかは大体覚えています。」

「へえ、」

シャインが私服に着替え終え、そのままキッチンに向かい、冷蔵庫を開けて、ん？と何かに気が付く。

「あれ？食材がある。」

冷蔵庫の中には、朝なくなっただはずの食材がほぼ完璧に戻っていた。

「あつ！私を買ってきました。」

サテラがゲームを一時停止してキッチンの方に振り返る。

「スゲーな、ほとんど朝と変わりねえ。」

「何があつたか覚えてましたから。」

「マ、マジですげえ記憶力……」

だがこの時、シャインがふと思った。

「お前、お金どうした？」

食材を買うためにはお金を払わなければならない。だがシャインはサテラにお金を渡した記憶がない。

「私が元々持っていたんです。」

「へえ、これだけ買えるってことはかなり持ってたんだな。」

サテラが手で金額を教える。それを見たシャインがあんぐりとして、声が出なかった。

「ど、どうやってそんなに稼ぐんだ？」

「塵も積もれば山となる……です。」

サテラがニツコリ微笑む。

「あつそ……」

シャインは苦笑いしながら冷蔵庫を閉める。そしてそのまま玄関へと向かう。

「また修行に行くんですか？」

サテラは立ち上がり、テテとシャインに近付く。

「ああ。帰ってから夕食作るから待っていてくれ。」

「私も行つていいですか？」

「まだサテラには危険だ。もう少し青幽鬼をコントロール出来てからな。」

「……分かりました。」

サテラが少し寂しそうな顔をして頷く。シャインはそんなサテラを置いて出ようとしたが、ドアに手をかけた時にピタッと止まり、

「夕食、ハンバーグ作ってやる。」

と、慰める。

「本当ですか！」

サテラの顔が明るくなる。

「ああ。」

「約束ですよ！」

「分かったよ。」

シャインはサテラと約束してから、部屋を出て、屋根の上を飛び移りながら修行場に向かった。

PM:6:00

「ただいま。」

シャインが修行から帰ってきた。

「おかえりなさい。」

中から女の子の声が出迎えた。シャインは声がしたリビングに入ると、サテラがソファに座り、本を読んでいた。本といってもマンガである。

「夕食作るからちょっと待ってる。」

シャインはエプロンを着てハンバーグを作り始める。それをサテラはマンガを読みながら静かに待った。

約1時間経ったぐらいで、ホカホカのハンバーグが出来上がった。それをサラダと一緒にリビングの机に運んだ。

「うわゝ美味しそうです。」

サテラが箸を持ちながらルンルンと揺れる。

「さ、食べようぜ。」

シャインも座り、2人はベーシックの号令とともに食べ始めた。食べながらシャインはおもむろにテレビをつけると、「VS嵐」がしていた。ちなみに今日は木曜日である。

「あつ、嵐です。私はリーダーがいいです。」

「嵐か、閃風魔法で嵐って起こせんのかな？」

「あつ、でも櫻井君もいいです。」

「今度試してみるか。」

全く噛み合っていない会話は食べ終わるまで続いた。そして「ぐるナイ」が半分ぐらい過ぎたくらいでお風呂がわいた。

「私先に入りますね。」

「ああ。」

サテラはソファから立ってリビングを後にするとき、

「覗かないで下さいね。」

と、シャインに忠告する。

「誰が幼児の裸なんて見るかよ。」

その忠告をシャインが背を向けたまま流す。サテラはプーと頬を膨らませて怒るが、シャインは気にしなかった。

ぐるナイが終わるころに、かわいいピンクのパジャマを着たサテラがリビングに入ってきた。

「お先でした。」

「あいよ。」

返事はしたが、シャインは風呂に向かう感じはしなかった。

「あれ？入らないんですか？」

「あー、後でな。」

そう答えて、2人は「とんねるず」を鑑賞する。そして20分ぐらい経った時、ソファからボツツという音が聞こえてきた。ん？とシャインを見ると、サテラがスヤスヤとかわいらしい寝顔をして寝ていた。

「こうやって寝てたら、ただの女の子なのにな。」

そう呟きながら、シャインはサテラを起こさないようにそっと持ち上げ、サテラの部屋のベッドに寝かした。

「さて、夜の修行と行きますか。」

今の時刻はPM：9：35。シャインは夜の闇の中を走って、さつきと同じ修行場に向かった。

AM：1：00

服がボロボロになっているシャインが帰宅してきた。そのまま風呂に流れ込むように入り、10分ぐらいで出てきた。そしてジャージに着替え、自分の部屋の布団に潜り込み、夢の中に誘われた。

いつもこんな感じではないが、これがシャインの1日であった。

29話 ただの1日（シャイン編）（後書き）

レ「シャインの家って意外と大きいね。」

シ「そうか？リビング、風呂、トイレ、俺の部屋、サテラの部屋ぐらいだぞ？」

エ「よくサテラちゃんの部屋あったね。」

シ「元々は俺の部屋だ。俺は追い出されて、物置になっていた部屋の物を全部どけて部屋にしたんだ。」

ス「その物置にあった物はどうしたんだ？」

シ「全部売ってやった。」

ス「へえ、いくらぐらいになったんだ？」

シ「サテラが持ってた金より安かった。」

レ「サテラちゃん、どれだけ持ってたのよ……」

シ「車3台は買えるな。」

レ「すご……」

シ「さて、前書きで言った通り、次回から長編ストーリーに入るらしい。」

レ「話のメインは、エアルとスノウなんだって。」

シ「へえ、あの2人が。どんな話なんだろ？」

レ「さあ？私もそこまでは……」

シ「ま、次回を見てくれたら分かることだな。」

レ「そうだね。」

シ・レ「じゃあ、次回をお楽しみに！」

### 30話 王族の娘（1）（前書き）

眼鏡「いやゝ久々に自分の書いてきたものを見ると、矛盾したところを見つけてしまったので訂正しておきます。」

#### ・訂正1

シャインが住んでいる家が最初は『小さなアパート』だったんですけど、『龍空マンション』の方に変えてください

#### ・訂正2

シャインとバージェスが会ったのは物心ついた時となっておりますが、小学校で会ったことにしてください。

眼鏡「本当にすいません。設定はけっこう適当に作ってしまうのでこういうことが起きてしまうんです。今後はこんなことがないように注意したいと思いますので、『魔法学園』を応援してください。っている読者の皆さん、どうぞお願い致します。」

眼鏡「さて！今回から長編が始まります！私も頑張っていきますので、どうぞ見てください！」

### 30話 王族の娘(1)

12月半ば、期末テストも終了し、次の日から生徒達が待ち望んでいた冬休みになろうとしていた。だが、あんな事件が起こるなんて、誰も予想なんてしなかった。

終業式やHRは午前中に終わり、生徒達は明日からの冬休みをどうやって過ごすかの相談で持ちきりである。エアル、レビイ、サナもその中で一員で、寮のエアルの部屋で話し合っていた。

「ねえねえ、冬休みどこ行く？」

エアルがベッドに寝転びながら2人に尋ねる。

「エアル、遊ぶのもいいけど、勉強もしなきゃいけないよ。」  
地べたに座っているレビイが注意すると、

「大丈夫！ここに学年トップ2がいるから！」

と、エアルがグツ！と親指を立てる。

「はあ……」

レビイがもう言っても無駄だなと思い、ため息をついた。

「ねえ、サナはどこ行きたい？」

エアルがドアの壁にもたれ掛かって本を読んでいるサナに尋ねる。

「ん？私は行く気ないわよ。」

本に目をやったまま答える。

「え〜どうして？」

エアルがブーとなる。

「研究で忙しいから。」

「いいんじゃないちょっとくらい。」

エアルが必死に頼むので、サナはあとため息をついて、

「で、具体的にどこ行くとか決まってるの？」

一応話を聞くことにした。

「うーん…せっかくの休みだし、けっこう遠いところに行こう！」

エアルが元気よく拳を上げながら提案する。

「場所は？」

レヴィに尋ねられ、エアルがフリーズして動かなくなった。

「場所…決まってるのね？」

再度尋ねられ、エアルはエへへと笑う。

「まあ、場所は後で決めて、お菓子パーティといきましょう！」

エアルがいろんなお菓子を取り出し、冷蔵庫からジュースを取り出すとした時、

「あれ？ジュース全然ないや。」

ジュースが一本もないことに気が付いた。

「私、ちよつと購買で買ってくるね。」

エアルが財布を持って部屋を出ようとした時、

「今日購買開いてないわよ。」

と、サナが教える。

「えー、じゃあ学校の外に買ってくる。」

エアルはそう言って、部屋を後にした。

「で、なんでさっきから立ってるの？」

二人つきりになったのでレヴィが気になったことをサナに尋ねる。

「ん？あー、私あんまり人の部屋とかでリラックスしたくないの。」

「武士じゃあるまいし…」

「あと…」

「あと？」

「私、潔癖症。」

サナが部屋を見渡しながら答える。部屋はいろんなものが散乱しており、グチャグチャであった。

「あははは…掃除、しなきゃね…」

レヴィが苦笑いしながらエアルが帰ってくるまで掃除してあげることにした。

この買い出しが、事件の始まりになるなんて、誰も思わなかった。



シャイン、ヒューズ、スノウの男組は、スノウの部屋でモーハンをしていた。

「なあ、お前らつて冬休み何か予定ある？」

スノウがPSPの液晶を見ながら2人に尋ねる。

「特に私はないですよ。」

「別に俺もねえ。」

シャインとヒューズも液晶を見ながら答える。

「そうか。」

そこから沈黙が流れ、カチカチとPSPを押す音だけが響く。だが、この空気に耐えきれず、

「あーなんだこの空気！」

シャインが叫ぶ。

「この状況に飽きがきているようですね。」

ヒューズが冷静に分析する。

「じゃあ、外にでも出るか？」

スノウが提案すると、

「賛成。」

2人が口を揃えて答える。そして3人はPSPを置き、部屋を出ていった。

外に出ると、空は鉛色に染まっていた。

「雨降りそうだな。」

シャインが鉛色の空を仰ぎながら呟く。

「で、どこに行くんだよ？」

シャインが顔をスノウに向けて尋ねる。

「決まってるねえ。」

スノウがさらっと答える。

「どうしようかな」

スノウ達が悩んでいると、

「あつ！シャイン！」

女子寮の方からレビイがこちらに走ってきた。

「レビイ、お前居たのか。」

シャインが少し驚く。

「うん。シャインもね。」

2人が話していると、レビイの後ろから歩いてきたサナが、

「なに普通に話してんのよ？それどころじゃないでしょう。」

と、注意する。

「あつ！そうだった！ねえ、エアル見なかった？」

レビイが思い出し、一番聞きたいことを尋ねた。それを聞いて、スノウがピクツと反応する。

「エアル？いや、見てねえけど。」

シャインが首を振る。

「そつか…」

「おい、エアルに何かあつたのか？」

スノウが何か焦っている感じの顔をしながら尋ねる。

「買い出しに行ってから、もう20分ぐらい帰ってこないの。」

レビイが答えると、スノウがゾツとした顔になる。

「『1人』で行かしたのか？」

「う、うん。」

レビイがスノウの異変に気が付きながらも頷く。

「バカ野郎！！」

スノウはレビイを怒鳴ってから、学校の外へ走っていった。

「な、何！？」

レビイは走っていくスノウを見て、戸惑いを隠せない顔でいた。

「どうしたんでしょう？」

ヒューズが顎に手を添え、うーん…と考える。

「エアルが1人になっちゃいけないのか？」

流石のシャインも悩む。

「とにかく、あのスノウを見ると、ヤバいことが起こるって分かる

わ。」

サナがまとめる。

「とにかく、考えてても始まらねえ、追いかけるぞ！」

シャインが学校の外へスノウを追いかけにいった。その後ろを、あとの3人も付いていった。

エアルはみんなが自分を探しているなんて知るわけもなく、コンビニで買ったジュースが入った袋を持って、人がいない道路を歩きながら、龍空高校に戻っていた。

「もう、高校の周りに全然店ないじゃない。」

エアルが1人でプンプンと怒っていると、その熱を冷ますかのように、雨が降り始めた。

「うわゝ降ってきたよ。」

エアルが急いで帰ろうとした時、目の前に黒い車が5、6台止まり、道を塞いだ。

「な、何？」

エアルが警戒していると、車から黒いスーツを着た男達が下りてきた。そして真ん中の車から出てきた左胸にたくさんの勲章らしきものが付いている白いスーツを着ている男を見て、エアルは驚き、持っていた袋を落とした。

「やれやれ、手間をかけさせてくれる。」

ガードマンらしき男に傘を持たせる男は、エアルと同じ赤い瞳をしており、歳は40代後半ぐらいで適度な長さの茶髪であった。

「な、なんであなた様がここに……」

エアルがいきなり上品な話し方になりながら尋ねる。

「お前がここにすることは8月にこの国であった大会から知っている。」

（BOMから……）

エアルはBOMの時のことを思い出す。

「だが、お前の周りには面倒な奴らがいたから、なかなか決行に移れなかったのだ。ようやく決行に移れる。さあ、帰るぞ。一国の『国王』の『娘』が家出なんて前代未聞だからな。」

エアルは少し黙ってから、

「…私は、帰る気はありません!」

と、反対した。

「私は…!」

そのまま続けようとした時、

「話は国に帰ってからだ。」

と、白スーツの男が声で遮った。男が合図を出すと、ガードマン数人がエアルを囲み、そのまま取り押さえる。

「話を聞いてください『お父様』!」

エアルが叫ぶが、お父様は聞く耳すらもたず、自分が乗っていた車に戻る。エアルはガードマン達に連行のための車に連れていかれていく。

「放して!」

エアルが必死に抵抗していると、

ガシヤアアアアン!!

エアルを乗せるつもりだった車が、何者かが正拳によってスクラップされた。

「何事だ?」

お父様が事態に気が付き、再び車から下りる。

車を破壊した者はそのままエアルに向かってジャンプし、着地した瞬間、エアルを取り押さえていたガードマン達を殴り飛ばして、エアルを庇うように立つ。

「スノウ!」

それは、銀髪のスノウであった。無造作ヘアーは雨により勝手にストリートヘアーになっている。

「たく、面倒かけるなよな。」

スノウが背を向けたまま怒る。だかその言葉には何故か優しさを感じ

じる。

「ごめんね。」

エアルが素直に謝る。そして、2人にお父様が近付き、目の前で止まった。

「よう、久しぶりだな、『ヴァスタリガ王国』国王、『ライズ・ダイヤモンド』さん。」

スノウが睨み付ける。

「やはりお前だったか、『銀野良のスノウ』よ。」  
ライズは動じず睨み返す。

「おつ！いたぞ、あそこだ！」

スノウを追いかけていたシャイン達が現場より少し遠いところに到着した。

「どういう状況ですか？」

ヒューズが現場を見て首を傾げる。

「ただならぬ状況だということは分かるな。」

黒髪のナイトが言う。

「助けに行くぞ！」

シャインがダツ！と走り出した瞬間、

「待つて！」

サナが手をバツ！と出して止める。

「なんで止めんだ！」

シャインが怒る。

「あの白スーツの男、見たことあるわ。」

「そうなのか？何者なんだ？」「思い出せないけど、とりあえず様子を見ましよう。」

シャインはサナに従い、雨の中待つことにした。

「銀野良のスノウ…へっ、懐かしい字あさなだな。」  
スノウが鼻で笑う。

「お前、自分が何をしたのか分かっているんだろな？」

ライズが怒りをチラせながら尋ねる。

「うるせえ、『ヴァスタリガ』に引き込もってりゃよかったのに、他国の『エクノイア』まで追いかけてきやがって。娘大好きっ子ですかこの野郎？」

スノウは一步も引かず対抗する。

「やはりお前は…消えるべき人間だな。」

ライズがさつきと違う合図をすると、仮面を付けた黒いスーツを着た2人の男が現れた。その中の1人がスノウに目掛けて発砲してきた。スノウはそれをギリギリで回避した。

（あいつ今どうやって撃ちやがった？）

弾丸を回避しながらスノウが男を見るが、拳銃らしきものが見つからない。この間も男は立て続けに発砲してくる。それを回避しているとどんどんエアルから離れていく。

それ確認したもう1人の男がエアルを掴む。

「キャッ!？」

「しまった!エアル!」

スノウが気が付くが、弾丸により助けにいけない。

「さて、来てもらいますよ。」

男がエアルの耳元で囁いた時、何かに感ずき、エアルを離れた。次の瞬間、ガキン!と鉄と鉄がぶつかり合う音が響いた。

エアルを助けたのは、なんとシャインだった。だが、仮面の男はシャインが振り下ろした風砕牙を右腕の肘ちよい上で簡単に受け止めた。それにより、切れた服から人間の肌ではなく、何かの鱗が見えた。

「大層な体してんだな。」

「キサマも反逆者か？」

仮面で見えないが、睨んでいることは気迫で伝わった。

仮面の2人はシャイン、スノウから間合いを開け、並んだ。シャイン、スノウ、エアルも合流する。

「データスキャン中：反逆者の名前、スノウ・シルバー、シャイン・エメラルド。」

そう言いながら、スノウと対戦していた男が仮面を外した。青髪に、灰色の瞳の中には難しいそうな文字や数式が並んで動いている。

「シャイン：なるほど、キサマが噂の…」

もう1人の男も仮面を外した。緑髪に、鋭く睨む黄色の瞳。まるで獲物を狩る獣のようである。

「誰だお前ら？」

シャインが睨みながら尋ねる。

「あの2人はヴァスタリガ軍の特殊部隊よ。」

エアルが後ろから説明する。

「2人だけなのか？」

シャインが背を向けたまま尋ねる。

「ええ。2人は特別なことがないかぎり出動することはない。あの2人が出動すると1つ部隊がなくなると言われているわ。」

「マジかよ…」

シャインが苦笑いする。

「俺の名は『ナルバー』。」

黒髪の男が自己紹介する。

「そして俺の名は『ザウルス』。」

赤髪の男も自己紹介する。

「さて、命令はお前らを消せというものだから、消えてもらうぞ。」  
ザウルスがずっと戦闘体勢に入る。隣でナルバーも戦闘体勢に入る。

「たく、勝手に首突っ込みやがって。」

スノウが戦闘体勢に入りながらシャインに呆れる。

「ちゃんと事情を説明してくれよ。こいつらぶっ飛ばしてから。」  
シャインが風砕牙を構える。

「なめられたものだな…たかが高校生に！」

ザウルスの歯が鋭い牙に変わり、みるみる人の姿から離れていく。  
背中から優雅で迫力のある羽が生え、上半身の服が破けると、ゴッ

ゴツした赤茶色で鉄のように硬い鱗が現れた。そして尻から太くたくましい尻尾が生えた。その姿はまるで龍そのものであった。

「龍双牙りゅうそうが！！」

鋭い爪が交差しながらシャインを襲う。シャインが風砕牙で防御が、威力が強すぎ吹き飛ばされる。

「お返した！閃風双牙せんふうそうが！！」

体勢を直したシャインが、ザウルスに向かってバツテンに交差した閃風波が放たれる。それをまともに喰らったが、ザウルスの龍の鱗には傷すら付かない。

（なんちゅう鱗だ…）

シャインが驚いていると、ザウルスの強烈な蹴りを喰らった。

「がっ…！！！！」

意識が朦朧もろうとしながら吹き飛び、壁にぶつかって、うつ伏せに倒れた。

（なんて力だ…前まで戦ってきた奴らより断然強い…）

よろよろとしながら立ち上がる。

「俺の絶滅魔法、『動物魔法アニマルマジック、モデル：龍ドラゴン』に勝てると思うなよ。」

ザイロスが狩る獣の目で睨み付ける。

（これはマジでヤベエな…）

シャインは口から流れる血をグツと拭いて、ニヤリと笑うしかかった。

シャインVSザウルスの少し離れたところで、スノウVSナルバー

が繰り広げていた。

「フレイムナックル！！」

炎の拳がナルバーの顔をとらえた。だか、ナルバーはびくともせず、逆にスノウが怯む。

（痛つつつて…なんて硬さだ。）

スノウが殴った手をブンブンと振る。

「技を確認、分析中…」

ナルバーの目の奥がカチカチと音をたてながら分析する。



「こいつ、ホントに人間か？」

スノウが殴った拳と、今現在のナルバーの行動を見ながら呟く。

「分析完了。」

その言葉を聞いて、スノウが構える。次の瞬間、ナルバーの拳にボウツ！と火が付いた。

「何！？」

スノウが驚いたと同時に、ナルバーが懐に入り、

「フレイムナックル！！」

スノウの顔をとらえた。スノウは吹き飛び、地面に何回かバウンドをしてから転がり、壁ギリギリで停止した。

（お、俺の技だと……！？威力は何倍もありやがる……！）

スノウがよろめきながら立ち上がる。

そこからシャインとスノウはザウルスとナルバーに挑んだが、全て返り討ちにされ、もう虫の息にまで達していた。

「ハア……ハア……ハア……」

シャインが頭から血を流しながら、かすむ目をこじ開けて睨み付けるが、足から崩れ、雨で濡れた地面にベチャツと倒れた。スノウもシャインの倒れる。

「これでとどめだ。」

ザウルスが龍の爪をすう……と構えた瞬間、

「もう止めて……！！」

エアルが叫んだ。それにより、龍の爪がピタツと止まった。

「国に、戻りますから、もう……その2人を傷付けるは止めてください……」

涙目のエアルがライズに告げる。

「我々はライズ様に従うだけです。」

ザウルスがライズの命令を待つ。

「……いいだろう。そいつらは放っておけ。エアル、早く車に乗れ。」

そう言つてライズは自分が乗つてきた車に戻る。

「命拾ひしたな。」

ザウルスとナルバーは、倒れているシャインとスノウを見下してから、どこかに行つてしまった。エアルは2人を悲しげな顔をしながら見つめ、

（ゴメンね…）

心の中で2人に謝つてから、黒いリムジンに乗った。そして、数台の黒い車はヴァスタリガに向かって走つていった。

（エ、エアル…）

スノウが気を失う前に見たのは、後部座席に座っていたエアルの背中だった。

### 30話 王族の娘（1）（後書き）

眼鏡「また訂正あるのでしておきます。」

#### ・訂正3

BOM終了後の病院で、黒いスーツの男が携帯で話していた時、『社長』と呼んでおりましたが、すいません、無視してください。あの電話相手はライズなので国王ですね。

眼鏡「本当に、本当にすいません。」

眼鏡「さて！気を取り直して、前書きでも言った通り、今回から長編が始まります！舞台はなんと国が変わります！『エクノイア』や『ヴァスタリガ』が国の名前だと分かっておりますが、説明は次回したいと思います！では、次回をお楽しみにしてください！」

眼鏡「今回投稿が遅れてしまい申し訳ありません。1週間を目処に頑張りますので、待っててください。」

### 31話 4つの国(2) (前書き)

眼鏡「はい、今回は説明だけのお話です。題名から分かるように4つの国が出てきます。だけど、この長編には2つしか出てきません。あとの2つはいつになるか分かりませんが、追々出すつもりです。さて、前書きで話すところはそんなにないので、早速本編を見てくださいー!」

### 31話 4つの国(2)

レビイ、サナ、ヒューズは、ライズ様の車が見えなくなっ  
てから物影から出てきて、気を失っているシャインとスノウを病院に運んだ。

「んっ…ん…」

シャインが目を開けると、白い天井が見え、ふかふかのベッドに寝ていることが分かった。

(病院か…ここ…)

シャインがゆっくりと辺りを見渡す。すると、足下にキレイな紺色の髪が倒れていた。

「レビイ…?」

その言葉に紺色の髪がむくりと起き上がり、目をこすりながらシャインの方を見た。その顔は完全に寝起きの顔だった。

「!シャイン!よかった!気が付いたんだ!」

ガバツと立ったので、自分が座っていたパイプ椅子に引っかけ、そのまま後ろに倒れた。

シャインは苦笑いするしかなかった。

「いたたた…」

レビイが頭をさすりながら立ち上がる。

「何やってんだよ…」

「えへへ、それよりシャインの方は大丈夫?」

「まあ、身体中は痛いかなんとかな。」

2人が話していると、隣のベッドで、銀髪のスノウが目を開いた。

「あっ!スノウも気が付いたんだね!よかった!」

レビイが一安心した顔で喜ぶ。

「ホントにタフね、あんたら…」

ドアを開け、呆れながらサナが入ってきた。ヒューズも一緒である。

「なんか頭がぼーっとすんだけど。」

スノウが症状を訴える。

「まあ、3日も寝てたらそうなるでしょう。」

サナがさらっと言った一言に、シャインとスノウは耳を疑った。

「3日！？俺ら3日も寝てたのか！？」

スノウがガバツ！と上半身を起こす。

「ま、マジかよ……」

シャインも上半身を起こす。

「！そうだエアル！エアルはどこだ！」

スノウが怒鳴るように尋ねる。

「『ヴァスタリガ』の城でしょうね。」

サナが答えると、スノウがベッドから下り、よろよろとドアに歩き始めた。

「ちよつとスノウ！？」

レヴィが慌ててスノウを止めようとするが、スノウはレヴィを払いのける。

「そんな体で何するつもりよ？」

サナが腕組みをしたまま問いかける。

「エアルを……助けに行く。」

スノウは止まらずに答え、ドアに手をかけた時、

「無理ね。たとえば体が全快でも無理なのに、今なら尚更ね。」

「なんだと！？」

その言葉がスノウの感にさわり、ドアからよろよろとサナに近付き、胸ぐらを掴む。

「別に行きたきや止めないわ。でも、相手は不良でもチンピラでもない、国なのよ。闇雲に突進したって殺されるに決まってるわ。少し頭を使いなさいよ。」

胸ぐらを掴まれたままなのだが、全く怯まず、サナがスノウの手をはね除ける。

「しかもその国がよりによつての『格差国家』のヴァスタリガ。そう簡単にはいかないわ。」

サナが服を直しながら続ける。

「格差国家？」

ベッドの上のシャインが首を傾げる。

「はあ、現代社会で習つたでしょ。」

パイプ椅子に座っているレビイが呆れる。

「全然覚えておらん。」

シャインが真顔で答える。

「もう……まあ、読者も皆さんにも分かっていたから説明するわ。」

スノウをベッドの上に戻し、眼鏡をかけた教師風のレビイが、授業を始めた。

「まず、私達がいる大陸にある『4つの国』の名前くらいは知っているわよね？」

レビイがシャインを指すが、首を傾げる。レビイは再度呆れる。

「私たちがいる国、『平和国：エクノイア』、『自然国：シルフォーニ』、『科学国：グライトル』、そして今回の問題の国、『格差国：ヴァスタリガ』ですね。」

ヒューズが代わりに答える。

「そう、1つずつ説明すると、『平和国：エクノイア』は、その名の通り平和は国。大昔からほとんど戦争がない国だからそう呼ばれているの。」

レビイの説明に対してシャイン達が頷く。レビイは少し楽しくなりながら続ける。

「次は『自然国：シルフォーニ』。この国は人が住める土地があまりになく、国の約6割が大自然なの。だから観光スポットして有名ね。次は『科学国：グライトル』。名前から分かる通り、科学が発達し

た国よ。最新技術や医療などはほとんどこの国で作られているわ。

そして…」

レビイは一回間をおいてから続ける。

「『格差国：ヴァスタリガ』。この国は大昔から続く黒歴史が未だに残っているの。それが『格差身分』。これは国の中で4つの身分があり、自分より高い身分の人間には逆らってはいけないというもの。上から『王族』、『貴族』、『町人』、『奴隷』の順で身分が高いの。国民の半分、約50%は町人で、約30%が貴族、そして約10%ずつ王族と奴隷がいているの。町人が奴隷を使い、貴族が町人と奴隷を利用する、そして王族が貴族と町人と奴隷が支配している社会がヴァスタリガでは行われているの。少しは分かった？」レビイが説明を終え、シャインに尋ねると、シャインが分かっているのか分かっていないのか知らないが、首を縦に振った。

「読者の皆さんは分かっていただけでしょっうか？」

レビイがカメラ目線で読者に問いかける。シャイン達はそれを見事にスルーした。

「で、現王族がダイヤモンド財閥。その1人娘がエアルってことだ。」

スノウが付け足す。

「そうしたことだったのか。」

シャインがようやく理解した。

「てか、あの時ちよっとはお前ら加勢しろよ。」

スノウがサナに怒る。

「シャインが飛び出してすぐに思い出したの。あいつがヴァスタリガの国王だって。だから、加勢にいったら私達まで目をつけらるじやない。」

「ふん…」

スノウが理解する。その時、レビイがあっ、と何かに気が付いた。

「ねえ、こんな騒動、絶対高校に報告されるわよね？じゃあ、2人は退学にされちゃうのかな？」



レビイが心配した顔で尋ねる。

「あつ、その件に関しては大丈夫。」

「え？」

レビイが首を傾げた時、ドアがガラツと開き、キレイな緋色の髪をしたアレンが入ってきた。

「アレンじゃねえか。」

シャインが小さく驚いた。

「あつ！シャインもスノウの気が付いたんだね。」

男とは思えない可愛らしい笑みを2人に向けてから、サナに近付く。  
「どうだったアレン？」

サナの問いかけにアレンが手でOKを作って答える。

「はい。なんとか承諾してくれました。僕の素性はバレてしまいましたが…」

アレンがはあとため息をしながら報告する。

「何したの？」

レビイがアレンに尋ねる。

「SMCの力でこの騒動を高校に報告しないことにしてきたんです。」

「

へえ、どうやって？」

「3000万を裏で渡すことで交渉成立しました。」

アレンが言ってから5秒ぐらい沈黙が流れてから、シャインが口を開いた。

「それって…いいのか？」

「バレなきゃいいんです。」

アレンが不吉の笑みを浮かべる。

（こ、こいつが一番危ないかも…）

アレン以外全員の心がシンクロした。

そんな時、1人の紫髪の少女が病室に入ってきた。

「シャイン！」

少女は一直線にシャインに走って腕に優しく抱き付いた。

「サテラ。」

シャインはサテラの頭を優しく撫でながら、

「悪いな心配かけちゃって。」

と、謝る。サテラは2、3回首を横に振ってから微笑んだ。

「サテラちゃん、こんにちわ。」

レビイが挨拶すると、サテラがシャインの腕を離してからキレイにお辞儀をする。

「あれ？お前サテラのこと知ってんのか？」

シャインがサテラとレビイの顔を交互に見る。

「ええ。シャインが気を失っている時にお見舞いしに来たから。」

「ふ〜ん…」

「説明はサナに聞いたわ。」

「そうか。」

その時、コンコンとドアを叩く音が響いた。

「はい？」

レビイが代表で声をかける。すると、ガララとドアが開き、2人の担当になったいたって普通の医師が入ってきた。

「2人ともいますね。」

医師はシャインとスノウのベッドの前に立ち、2人の体について説明をし始めた。

「2人の体が完治するのはあと約1ヶ月ぐらいかかるから、それまで大人しくしてもらいますよ。」

「1ヶ月！？そんなに待ってられるかよ！」

スノウが怒鳴る。

「君達、あのヴァスタリガの特殊部隊にケンカ売ったんでしょ？それなのに1ヶ月で治るなんて奇跡に近いよ。」

「それでも1ヶ月は長すぎる！」

シャインも声を上げる。

「あのね、君達の高校に言わないことを約束したんだら、これくらい守ってね。」

「3000万貰えるくせに。」

スノウがボソツとギリギリ聞こえるぐらいに呟く。

「とにかく、完治するまで安静にしてもらうよ。」

医師は見事にスルーし、2人の現状をチェックして、持っているボードに手慣れに記入する。そして、

「安静にね!」

と、釘を刺してから出ていった。それを見届けてから、スノウがボソツとベッドに横になる。

「あー1ヶ月なんて待ってられるかよ!」

スノウがまだボヤク。

「同感だ、このままじゃ冬休みが終わっちゃう。」

シャインも賛成する。

「あの〜」

アレンがすくっと手を上げる。それに皆が注目する。

「何だよアレン?」

イライラのスノウが睨み付ける。アレンは少しビビってから全員に聞こえるように話す。

「2人に覚悟があれば、その傷簡単に治す方法があるんですけど…」

「なんだと!」

スノウが食い付く。シャインも聞く耳を立てる。

「SMCに『アクセルヒール』という装置があるんです。それはどんな傷も病も治せるものなんです。」

「アクセルヒール…」

窓近くに腕組みをしながら立っているサナが反応する。それにより、全員がサナに注目する。

「知っているんですか?」

スノウのベッドの隣のパイプ椅子に座っているヒューズが尋ねる。

「まあね、ただどあれって危険だから開発中止になった装置でしょ?なんでそれがSMCあるのよ?」

サナがアレンに尋ねると、また全員の視線がアレンに集まる。

「我が調査部隊が、ある工場を調査した時、アクセルヒールの設計図を見つけ、それを見ながら開発部隊が作り上げたんです。けどまだ誰も使用したことはありません。」

「でもそれっていわば治療装置でしょ？なんで危険なの？」

レビイが尋ねる。

「早く治せる分、体に異常な激痛がはしるんです。その激痛によって死人が多数出てしまったので開発中止になったんです。」

「そ、そんなものをやらせようとしたの！？」

レビイがアレンに怒る。

「だから、2人の覚悟があればってことになるんです。」

ここで全員の視線がシャインとスノウに変わる。スノウは悩んだすえ、いや、もとからそのつもりだろうけど、

「やるぞ、そのアクセルヒール。」

と、言い切った。

「ちよつとスノウ！さっきの聞いた？死ぬ可能性があるのよ！？」  
レビイが必死に止めようとする。

「お前もそのつもりだろ？」

スノウがニヤリと笑いながら隣のベッドのシャインに尋ねる。

「当たり前だ。」

シャインが笑い返す。

「シャインまで！」

「悪いなレビイ。俺はスノウみたいに昔からエアルを知ってる訳じやねえ。だけどな…『大切な仲間』を連れてからて、黙って見届けるほど、お人好しじゃねえんだよ。」

シャインのまつすぐな目に、レビイは止めるのを諦め、

「分かった。でも、死なないでよ…」

と、賛同したが、その顔はすごく心配していた。

「一応皆さんの意見を聞きましょう。」

アレンがサナ達に問いかける。

「2人がいいとあれば。」

ヒューズが賛同する。

「私には関係ないし、好きにどうぞ。」

サナが適当だが賛同する。

「頑張ってください。」

サテラがシャインの手を握る。賛同するという意味だろう。

「全員いいそうですね。：ハッキリ言って保証は出来ないよ。」

アレンが真剣な顔でシャインとスノウを見る。2人は大きく頷いた。

「では案内します。SMCへ。」

### 31話 4つの国(2) (後書き)

眼鏡「いや」思い付いたこと全部取り込んでしまったら、予定していたストーリーからどんどん離れていつています…シャインとスノウがこんなに重症にする気はなかったんですけどね。最終的どう終わらせるか、自分が心配してきました…」

眼鏡「さて、書いている本人も理解が難しくなってきました。説明が不十分かもしれないので、感想などに質問を書いてくださればお答えします。では、次回は予定になかった話ですけど頑張っていきたいと思います！楽しみにしてください！」

眼鏡「あつ、今期末テストの1週間前に入ってしまったので、次の投稿はかなり遅れるかもしれないので、気長に待っていてください。」

### 32話 SMC(3)(前書き)

眼鏡「ふーなんとか1週間で出来上がりました。テスト真っ最中なので大変です…」

眼鏡「ここでまたも訂正です。すいません…多くて…」

・訂正

ザウルスザウの髪の毛は緑色です。赤色と言っている場所があったので訂正しておきます。

眼鏡「ちゃんと確認しているんですけどね…すいません。」

眼鏡「さて！今回の話は予定になかったんですけど一生懸命頑張りました！どうぞ見てください！」

### 32話 SMC(3)

深夜、ある暗い病室で、シャインとスノウがベッドの上で、作戦開始時間になるのを待っていた。そして時計が午後11時を指した時、7階のはずの窓がガラツと開き、ロープを結びつけたヒューズとアレンが入ってきた。

「さ、急ぎましょう。」

ヒューズがスノウを、アレンがシャインを背負って、ロープを結びつけ、ひらりと窓から飛び降りた。自衛隊のごとくきれいに下まで下りると、サナ、レビィ、サテラが待っていた。ヒューズとアレンはロープを外し、シャインは車椅子に乘せられた。スノウはギリギリ歩けるのだが、シャインは足へのダメージが大きく、歩けることができないのだ。

「別に窓から出なくてもよかったんじゃないか…?」

スノウが下りてきた窓を見ながら苦笑いする。

「あんた達を普通に連れていくためにはナースステーションの前を通らなきゃいけないの。そしたら止められるに決まってるでしょ。だから、バレずに外に出る方法は、窓から出る、その選択肢しかなかったの。」

サナが説明する。

「なるほど。」

スノウが納得する。

「行きますよ。」

アレンを先頭に病院を後にした。

深夜の暗闇に紛れながら、シャイン達はアレンの案内のもと、人が全くいない住宅街を移動していた。

「なあ、こんなところにSMCの入口があんのか?」



車椅子に乗っているシャインが辺りを見渡しながらアレンに尋ねる。  
「ゴメン、分からないんだ。」

アレンが背を向けたまま申し訳ないと謝る。

「分からない？どこに入口があるか知らないの？」

車椅子を押しているレヴィが尋ねる。

「はい。S M Cの入口は世界にいろんなところにあるんです。この辺りは『B 2エリア』と呼ばれていますが、僕はこのエリアのことあまり知らないのどこに入口があるか知らないんです。」

「入口って何カ所あるんですか？」

アレンの隣を歩いているヒューズが尋ねる。

「1つのエリアに1つあります。」

「じゃあ、今私達はどこに向かっているのよ？」

車椅子の隣を歩いているサナが尋ねる。

「これを頼りに移動中です。」

アレンが持っていた1枚のカードを見せる。

「何よこれ？」

サナがカードを受け取り、ジロジロと見る。そこにはアレンの顔が貼っていたり、バーコードなどが書いてあった。

「僕のS M Cの証明カードです。そのカードの左下にある小さいコンパスのようなものが指す方向に入口があるんです。」

確かに矢印は自分達が歩いている方向を指していた。その時、矢印が赤く光り始めた。

「なんか反応してるわよ。」

サナがアレンにカードを返す。

「この先そうですね。」

アレンは立ち止まり、矢印が指す方向を見る。他の全員も同じ方向を見る。そこは細い路地で、奥は行き止まりになっていた。

「ホントにここなのか？」

路地を歩きながらスノウが怪しむ。

「入口は大体変なところにあるんだ。僕が前に見た入口は公園のトイ

レの後ろだったよ。」

アレンが苦笑いする。

そして、全員が一番奥の行き止まりに到着した。その時には、矢印の反応も強くなっており、ここだということが確信できる。

「で、どうやって開けるんだ？」

シャインが尋ねる。

「こうするの。」

アレンが持つているペタツと壁に、ではなく下のコンクリートの地面にあてた。

（あ、壁じゃないんだ…）

アレン以外の全員の心がシンクロした。そんなことは知らないアレンは何かパスワードみたいなことを呟くと、路地の幅いっぱい、2、3人が乗れるくらいの光のサークルが現れた。

「さ、行きましょう。」

アレンは手慣れたようにサークルの上に立つと、SMCにワープされ、全員の前から消えた。残されたシャイン達は別に驚くこともなく、シャイン&レビィ、ヒューズ&スノウ、サナ&サテラの順にサークルの上に乗れり、SMCへワープした。

ワープした先は、まさしく秘密基地といった感じだった。アレン達が通路を歩いてみると、すれ違う人が全員、

「アレンさん、お久しぶりです。」

「お疲れ様です。」

と、挨拶していく。

「そういえばお前、調査部隊隊長だったな。」

シャインが思い出す。

「うん。正式には第一調査部隊隊長兼第三戦闘部隊隊長だよ。」

アレンが訂正する。

「みんな…私達を見えています…」

周りの視線に少し怖がつているサテラがサナに引つ付く。

「一般人が絶対に入れないところに一般人がいるからね。怪しんでるんでしょ？」

サナがサテラの頭を少し撫でながら尋ねる。

「その通りです。」

アレンが素直に認める。

「ねえ、気になったんだけど、このSMCって一体何処にあるの？」  
車椅子を押しながらレビイが尋ねる。

「異次元の世界に建てられています。BOMの会場と似たようなものだと思ってください。」

アレンが丁寧に答える。

そんな話をしていると、1つの部屋の前にたどり着いた。ドアが自動で開き、アレンが中に入る。そのあとに続いてシャイン達も中に入った。中は広く、白で統一されており、ガラスの壁で個々に区切られていて、その中にはいろいろな装置が置いてあり、それを開発者達が操作して大型の物から小型の物までいろんな物を作っている。  
「すっげー」

シャインとスノウがピュアに感動する。

「なんて大きいんでしょう。」

ヒューズも感心する。

「こんな工場が入るなんて…SMCってどれだけ大きいのよ…」  
流石のサナも驚くしかなかった。

「ここは開発部隊の開発工場です。主に武器などが作られています。」

「  
アレンがガイドしながら中を歩く。

（ヴァスタリガの技術に似てるわね…あそこは格差問題が大きく出て、なかなか目立たないけど、かなり機械技術とかに発展してる…ヴァスタリガから教わったと考えるのが一番でしょうね…）

サナが周りを見ながら推理する。

「で、私達はどこに向かっているんですか？」

レビイと車椅子を押すのをバトンタッチしたヒューズが尋ねる。

「ちよつと人を探しているんだ。」

キヨロキヨロと周りを探していると、アレン達にスーツの上から白衣を着た20代前半ぐらいの女性が近付いてきた。

「あら？アレンじゃない。あなたがこんなところにいるなんて珍しいわね。」

女性はアレンを見るなり少し驚いてクスツと笑った。その声は前にアレンが電話で話していた女性と同じだった。

「やつと見つけたよ『姉さん』。」

アレンの言葉に他の全員が、

「姉さん！？」

と、一斉に驚いた。

「その反応からして私の存在は話していないようね。」

女性が尋ねると、アレンは素直に頷いた。

「ここじゃなんだから、私の部屋に行きましょう。」

女性は自分の案内をする。シャイン達はとりあえず付いていくことにした。

シャイン達は開発工場を出て、女性の部屋に移動した。中に入ると、黒と白で統一された大人びた部屋だった。

「私は開発部隊指揮官『イスラ・ルビー』よ。よろしくね。」

アレンの姉と証明できそうなキレイな緋色のロングヘアー、凜としたピンクの瞳、そしてモデルのような完璧なスタイル。そしてFはかたい豊満な胸。男性人は釘付けになるが、女性人はあと肩を落とす。

「あなたはシャイン・エメラルド君ね。」

笑顔でシャインを見る。

「なんで知ってたんだ？」

「あなたの噂はいろいろ聞いているから。」

「そうか。」

シャインが納得する。

「で、あなた達はここに何しに来たの？」

「それは…」

アレンが代表して説明する。

「……と、いうわけ。」

「アクセルヒール…見た目から見ても、使うのはあなた達2人ね？」

イスラが包帯を巻いているスノウと車椅子に乗っているシャインを指す。

「そうだ。」

シャインが頷く。

「…覚悟はおわり？」

「覚悟がなきゃここに来ねえ。」

シャインがキツと睨む。そのまっすぐの目にイスラは返す言葉が見つからなかった。そして、はあとため息をしてから、

「…いいわ。だけど、責任は一切取らないわよ？」

と、アクセルヒールを使うのを許可した。

「ありがてえ。」

シャインが小さく頭を下げる。

「付いてきて。」

イスラの案内のもと、アクセルヒールが置いてある部屋に向かった。

アクセルヒールとは、カプセル型で、部屋の中に2つ置いてあった。

「じゃあ、私とシャイン君とスノウ君以外はそこで待ってて。」

イスラに言われた通り、レヴィ達は部屋の中が見えるガラスの前で待つことにした。

「2人とも、アクセルヒールに入って。」

言われた通り、スノウはカプセル型のアクセルヒールの中に入った。だが、シャインは足が動かないので1人では入れない。それに気が

付いたイスラが手を貸してようやく中に入れた。その時に豊満な胸がシャインに当たっていたことを、スノウはうらやましく思った。

「ねえ、今考えるとアクセルヒールってどうやって治すの？」ガラスの前で待っているサナがアレンに尋ねる。

「人間が持つている『自然治癒力』を極限まで高めて、自分自身が病や傷を治すんです。」

「なるほど。その時に激痛が走るのね。」

サナが納得する。

その時、イスラが装置を起動させる。

「死ぬなよ。」

シャインがスノウを見てニヤツ笑う。

「お前もな。」

スノウが笑い返す。

「始めるわよ。」

イスラがスタートのスイッチを押した。その瞬間、シャインとスノウの体に激痛が走った。

「うわあああああ！！！！」

2人の悲鳴が響き渡る。

「シャイン！スノウ！」

レヴィがガラス越しに叫ぶ。だが、レヴィ達はただ待つしか出来なかった。

「堪えて、あと2分……」

イスラがメーターを見ながら呟く。

「うわあああああ！！！！」

2人の悲鳴は終わるまで続いた。

そして2分経ち、カプセルの蓋が開いた。中で2人はぐったりとしている。イスラがメーターを見て成功だと判断し、ガラスの向こうのレヴィ達に手でオーケーをつくり、成功したと知らせた。レヴィとサテラは手を掴み合ったまま跳び跳ねて喜んだ。アレン、ヒュ

「ズ、サナも一安心の顔をする。その時、イスラが部屋から出てきた。

「明日には2人も気が付くと思うから、あなた達も今日はゆっくり休んで。」

そう言つてイスラは何処かに行つてしまった。

「ありがとうございますイスラさん。」

レビイが代表して頭を下げる。イスラは振り返らず手をヒラヒラして答えた。

その夜、客室でサテラ、レビイが一緒のベッドで安心したようにぐっすりと寝ている。隣の客室ではヒューズも寝ている。アレンは自分の部屋があり、そこで寝ている。いや、まだアレンは起きていた。だが、どの部屋にもサナの姿がなかった。

「アレン、少しいいかしら？」

アレンの部屋に入ってきたのは、アレンの姉、イスラだった。

「姉さん、どうしたのこんな時間に？」

「あのシャイン君つて子、あなたが『闇落ち』する可能性があるつて調べていた子よね？」

「…そうだよ。」

「で、今はどんな感じなの？」

「まだこれといった事は起きていない。能力解放のさいに左目が燃えているようになるだけだから、まだなりかけて感じかな。」

「でもあの子には悪の心なんてなさそうよ？」

「それは僕も分かつている。闇落ちは『心の悪』に反応して起こるもの、シャインにはないと思う。けどもう1つ闇落ちしてしまう方法があるんだ。」

「どんな？」

「『身内』に、闇落ちをしてしまった者がいれば、たとえ心に悪がなくてもそれを引き継いでしまつて、なつてしまふ可能性があるつて調べて分かつたんだ。」

「じゃあ、シャイン君の身内の中に闇落ちした人物がいるってこと？」

「…うん。」

「一体誰の？」

「それは……」

この時、この会話を盗み聞きしていた人物がいた。それは、サナだった。

（へえ、シャインが闇落ちしかけているのは知っていたけど、まさか血筋で闇落ちするなんて知らなかったな。しかも『あいつ』血を引いているですって…とんだ大物の息子だったのね、シャインの奴…）

サナは2人にバレないように部屋に戻った。

「まさか、『あいつ』に息子がいたなんて…しかもそれがシャイン君だなんて…シャイン君自身は知っているの？」

イスラが尋ねる。

「分からない。聞きづらいし…」

アレンが首を振ってから、下を向く。

「…そうね、ゴメンねこんな時間に。お休みなさい。」

「ううん。お休みなさい。」

イスラが部屋を後にした。アレンはそれを見届けてから、ベッドに入り眠りについた。



### 32話 SMC(3)(後書き)

眼鏡「ぶっちゃけ、今回はけっこう走り書きしてしまったんで話が自分でもよく分からないんですよ…とりあえず、今回の目的はシヤインとスノウを治すのと、SMCに入るため話だと思ってください。」

眼鏡「さて、次回からいよいよ舞台はエクノイアを離れ、ヴァスタリガになります！この長編はいつまで続くが分かりませんが、応援よろしく願います。では、次回を楽しみにしてて下さい！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9268t/>

---

～ 魔法学園 ～

2011年12月7日23時30分発行